

## 目次

序章 本論文の研究方法与研究目的	1
第一節 問題提起と研究目的	1
第二節 研究対象の選定の理由	8
第三節 研究方法と論文の構成	10
第一章 国外国内の研究者による研究	14
第一節 国外の研究者による研究	15
一 モンゴル国の研究	16
二 ロシア（旧ソ連）の研究	23
三 ドイツの研究	25
四 日本の研究	26
五 ハンガリーの研究	31
六 イギリスの研究	33
七 アメリカの研究	34
八 韓国の研究	35
九 フランスの研究	36
第二節 中国国内の研究者による研究	38
一 1949年から1965年の研究	38
二 1966年から1976年の研究	40
三 1977年から2000年の研究	42
四 2001年から2020年の研究	43
小結	44
第二章 ホーリンウリゲルの概念と構成要素	48
第一節 研究者による諸観点の成立	48
一 ベンスンウリゲル	48
二 ホーリンウリゲル	51
三 ホールチンウリゲル	53

第二節	ホーリンウリゲルの構成要素—伴奏楽器・説唱脚本・吟遊詩人—	61
一	伴奏楽器ホールの変遷	61
二	説唱脚本ウリゲルの変化	74
三	吟遊詩人・ホールチの出現と役割	81
	小結	85
第三章	ホーリンウリゲルの淵源と形成過程	87
第一節	ホーリンウリゲルの淵源	87
一	12世紀から13世紀の起源説	87
二	16世紀末期から17世紀初期の起源説	89
三	17世紀末期から18世紀初期の起源説	92
四	18世紀中期から末期の起源説	93
五	19世紀中期の起源説	94
六	12世紀から13世紀に淵源を持つと考える理由	95
第二節	ホーリンウリゲルの形成過程	102
一	モンゴル英雄叙事詩の誕生と変容	103
二	マングスインウリゲルの形成と発展	106
三	ヤバガンウリゲルの登場とその役割	110
四	ベンスンウリゲルからホーリンウリゲルへの転換期	112
	小結	115
第四章	ホーリンウリゲルの成立と伝播	117
第一節	ホーリンウリゲルの成立地域	117
一	フフホト地区における成立説	118
二	ジャルート旗地区における成立説	119
三	モンゴルジン旗地区における成立説	120
第二節	ホーリンウリゲル成立の歴史背景と文化要素	123
一	清代ジョソト盟の社会背景とモンゴルジン旗の実態	123
二	瑞應寺の建立と寺院音楽の役割	126
三	マングスチとホールチの共存時期	130
第三節	ホーリンウリゲルの伝播状況	133
一	ホーリンウリゲルの中興の祖と名著『興唐五伝』の作者	134

二、ダンスンニマ・ホールチの生涯とホーリンウリゲルの足跡 .....	151
三  ホーリンウリゲルの流派形成と分布状況 .....	159
小結 .....	163
第五章  ホーリンウリゲルの繁栄と衰退 .....	165
第一節  ホーリンウリゲルの繁栄とその状況 .....	166
一  ウリゲルインゲルの設立とその役割 .....	166
二  ホールチと視聴者の増加 .....	171
三  モンゴル劇の形成とその影響力 .....	174
四  説唱脚本の変化とその衰退 .....	177
第二節  ホーリンウリゲルの衰退とその実態 .....	180
一  社会環境の変化と娯楽生活の多様化 .....	181
二  モンゴル語の消失による伝統文化の消滅危機 .....	184
三  ホールチの減少と若き後継者の不足 .....	187
四  演唱時間の減少と説唱内容の変化 .....	191
小結 .....	193
第六章  ホーリンウリゲルの現状と変容 .....	194
第一節  中国における非物質文化遺産制度の確立 .....	195
一  非物質文化遺産 .....	195
二  非物質文化遺産法 .....	196
三  国家伝承人の権利と義務 .....	199
第二節  非物質文化遺産としてのホーリンウリゲル芸術 .....	202
一  ホーリンウリゲルの認定と国家伝承人の実態 .....	202
二  伝統的な「師伝継承の方法」の変容状況 .....	206
三  新たな「学校継承の方法」の設立とその課題 .....	209
第三節  ホーリンウリゲルを持続的に発展させるための提言 .....	213
一  後継者育成の重要性 .....	214
二  教材開発の必要性 .....	218
三  説唱脚本のデータベース化の緊急性 .....	221
小結 .....	224
終章  総括 .....	226

資料編 インタビュー調査の具体的な内容 .....	231
第一節 第1回の調査内容 .....	231
一 ホールチに対するインタビュー .....	233
二 四胡制作者に対するインタビュー .....	247
三 視聴者に対するインタビュー .....	251
第二節 第2回の調査内容 .....	256
一 エンケテグス、ダンスンニマ、『興唐五伝』に関するインタビュー .....	257
二 新たな「学校継承の方法」に関するインタビュー .....	266
第三節 第3回の調査内容 .....	271
一 非物質文化遺産に関わるホーリンウリゲルについてインタビュー .....	272
モンゴル語版の調査内容 .....	277
参考文献 .....	326
日本語文献 .....	326
中国語文献 .....	327
モンゴル語文献 .....	332
その他言語の文献 .....	334

## 序章 本論文の研究方法与研究目的

### 第一節 問題提起と研究目的

本論文の分析対象となるホーリンウリゲル<sup>1</sup>は、モンゴル民族に特有の伝統的な芸能であり、吟遊詩人のホールチ<sup>2</sup>（語り手）が、擦弦楽器である低音のドリボンウタストホール<sup>3</sup>を自ら弾いて、モンゴル語で多種多様な長編の英雄叙事詩や歴史小説を語る上演形式を指す。主に半遊牧と半農耕の経営方式で生活している東部モンゴル地区に分布し、この芸能の担い手であるホールチたちが語り継ぐことによって、口頭で継承されてきた脚本が現代までに継承され、その歌声はモンゴル人の中で代々伝えられ、愛されてきた。

特に、モンゴル族の新年である「ツァーガンサル」<sup>4</sup>（查干薩日）になると、ある家族では、親戚と友人たちが集まって、お年寄りに「ジリンバヤル」<sup>5</sup>（日本語で、誕生日パーティーという意味を持つ）を行って、その人の心身の健康や長寿を祈ることが、東部モンゴル地区に集住するモンゴル族の伝統行事として継承されてきた。この「ジリンバヤル」が開催される当日（昔は前日の場合が多かった）には、その地域や近隣の地域で有名なホールチと民間の歌手を招き寄せ、モンゴル民謡や祝福の言葉、賛歌、ホーリ

---

<sup>1</sup> 現在の学术界でモンゴル語の「*ᠬᠣᠷᠢᠨ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ*」という言葉については、日本語のカタカナで「ホーリン・ウリゲル」「ホウーリン・ウリゲル」「フーリン・ウリゲル」などの異なる形で表記され、漢字では「胡仁・烏力格爾」「胡尔沁説書」「胡仁烏力格爾」などの表記がある。本稿では、モンゴル語の発音に従って、「ホーリンウリゲル」と統一して表記する。

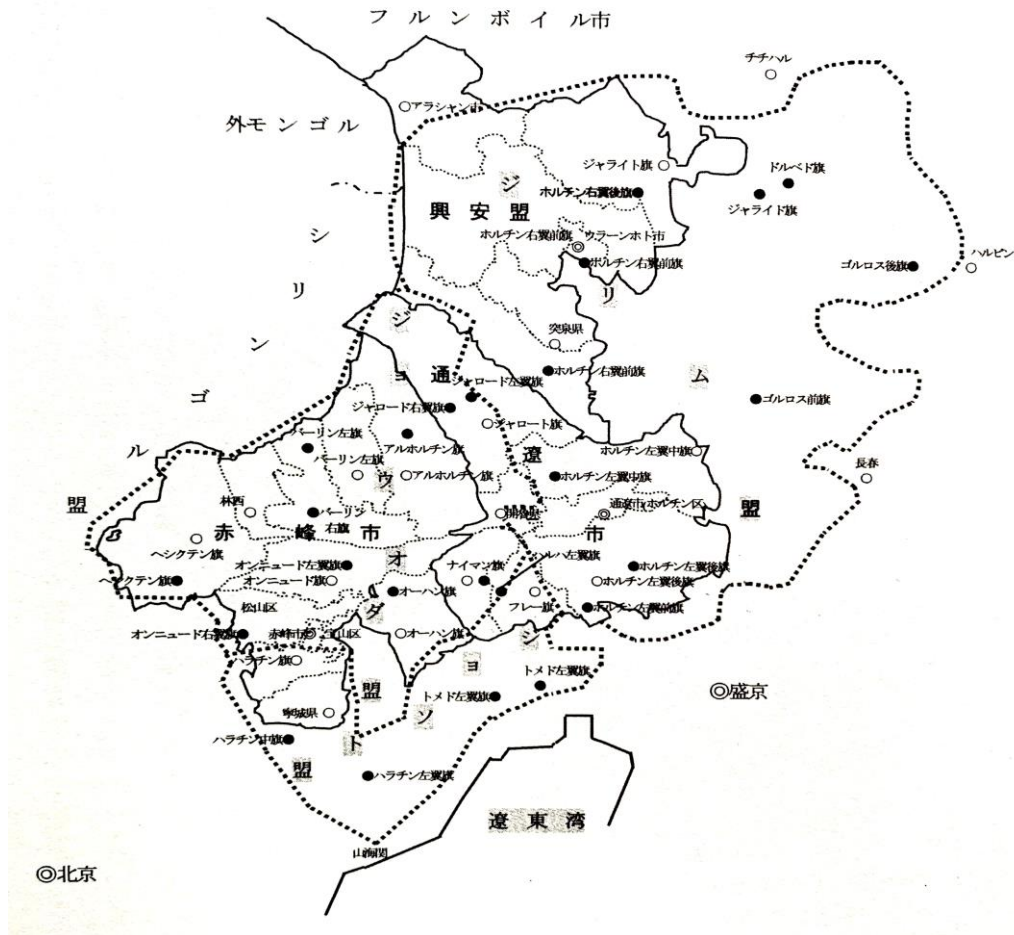
<sup>2</sup> 現在の学界においては、モンゴル語の「*ᠬᠣᠷᠢᠴᠢ*」という言葉は、漢語で「胡尔齐」「胡尔沁説書芸人」「胡尔奇」「胡尔沁」などの異なる形で表記されているが、本稿では、モンゴル語の発音に従って、「ホールチ」と統一して表記する。

<sup>3</sup> 現在の学界では、モンゴル語の「*ᠳᠢᠷᠢᠪᠣᠨ ᠤᠲᠤᠰᠤᠲᠤ ᠬᠣᠷᠢᠯ*」という言葉は、漢語表記の「四胡」「四弦琴」が頻繁に使われているが、実は、昔のホールチは「*ᠳᠢᠷᠢᠪᠣᠨ ᠤᠲᠤᠰᠤᠲᠤ ᠬᠣᠷᠢᠯ*」と呼ぶのが当然であった。現在の呼び方は20世紀の中後期に成立した。本稿では、現代の呼び方を採用して、カタカナで「ドリボンウタストホール」と統一して表記する。

<sup>4</sup> モンゴル人の言う「*ᠴᠠᠭᠠᠨ ᠰᠠᠷᠢᠯ*」（ツァーガンサル）は、モンゴル族の伝統行事として重要視され、日本語で表現すると、「白い月」、あるいは、「旧正月」という意味合いを持つが、実際には日程が固定せず、その年によって日が異なる場合がある。

<sup>5</sup> モンゴル族の伝統行事である「*ᠵᠢᠷᠢᠨ ᠪᠠᠶᠠᠯ*」（ジリンバヤル）は、原則として13歳、25歳、37歳、49歳、61歳、73歳、85歳、97歳、109歳になった人々に対して宴会を行って、祝福と長寿の心情を伝えることであるが、13歳と25歳はまだ若いので、一般の家庭では大きな宴会をしない。

ンウリゲルなどの演目を上演してもらうことが、東部モンゴル地区<sup>6</sup>に集住しているモンゴル族の人々の重要で必要不可欠な儀礼として続けられてきた。



【図1】清代および現代の内モンゴル東部の地図

<sup>6</sup> 歴史史料や文献に記載されている「東部モンゴル地区」という概念は、原則としてももとのジョソト(卓索圖)盟、ジョーオダ(昭烏達)盟、ジリム(哲里木)盟、ヒンガン(興安)盟、シリングル(錫林郭勒)盟などの地区を指しているが、本稿で言う「東部モンゴル地区」とは、文化的・地理的の概念であり、主にホーリンウリゲルという説唱芸能が広く伝播された地区、即ち現在の内モンゴル自治区東部の盟市・旗県である通遼市、赤峰市、フルンボイル(呼倫貝爾)市、興安盟および内モンゴル自治区に隣接する遼寧省の阜新モンゴル族自治県、吉林省の前ゴルロス(郭爾羅斯)モンゴル族自治県、黒龍江省のドルボド(杜爾伯特)モンゴル族自治県など広大な地域を指す。

<sup>7</sup> モンゴル研究所編著『アジア地域文化学叢書Ⅷ 近現代内モンゴル東部の変容』(日本語版)(雄山閣、2007年)に載る「清朝および現代内モンゴル東部図」(吉田順一作成)から引用した。本地図に示されている「……………」は清代の内モンゴル東部の範囲とそれを構成するジリム盟、ジョーオダ(ジョウオダ)盟、ジョソト盟の範囲を示し、「——」は現在の内モンゴル東部の範囲とそれを構成する盟、市の範囲を示し、「……………」は内モンゴルを構成する旗と県の範囲を示す。「●」はかつての旗の名称と所在場所を示し、「○」「◎」は現在の旗、県、市の名称と所在場所を示す。



モンゴルジン旗（地区）では、モンゴル族の子どもが自民族の母語で読み書きする能力が下がっている。そこで貴方（我が子）は就学前教育専攻を選んで、モンゴルジン旗にいるモンゴル族の子どもがなぜ母語を忘れているのかという原因を探り出してほしい。その原因を知ることができれば、その問題を解決でき、貴方（我が子）もホーリンウリゲルが継承できるはずである」というアドバイスを出してくれた。

そこで筆者は、両親からの意見および専攻の将来性などの要素を考慮した上で、就学前教育専攻を選び、モンゴルジン旗（地区）でモンゴル語が消失しつつある問題とモンゴル族の子どもが母語を話さなくなっている原因を明らかにすることを研究課題として、モンゴルジン旗にある二つのモンゴル族幼稚園（阜蒙県モンゴル族幼稚園と阜新市モンゴル族幼稚園）で働く教師を対象にインタビュー調査を実施し、収集したデータを文字化して卒業論文「モンゴル族幼稚園におけるカリキュラム設置に関する一考察—モンゴル族伝統文化の選択を中心に—」<sup>8</sup>を執筆して、2012年に卒業した。

その後、モンゴル語と漢語で授業を行う幼稚園およびしょうがい児教育センターで、中クラスと大クラスの副担当、体育と音楽教師として2年間働いたほか、同時にしょうがい児の行動力および知力を回復させる感覚統合<sup>9</sup>訓練師としての仕事をし、子どもの教育および幼稚園教師の生活を体験しつつ、子育ておよびしょうがい児を介護する経験を蓄積してきた。

2014年に、家族からの支援を受けて日本の創価大学に留学し、1年後に創価大学の特別履修課程を修了して、創価大学大学院文学研究科教育学専攻に進学できた。そこで修士課程においては、それまでの経験と調査を活かして、「中国モンゴル族地域における就学前双語教育の研究—モンゴルジン地域を事例として—」<sup>10</sup>を主な研究テーマにし、中国のモンゴル族幼稚園で働いている双語教師（モンゴル族の場合はモンゴル語と漢語）

---

<sup>8</sup> 蒙古貞夫（漢名：楊陽）「蒙古族幼稚園課程設置的研究—以蒙古族傳統文化的選擇為中心—」（漢語版）、遼寧師範大学、2012年7月。

<sup>9</sup> 感覚統合とは、生活の中で様々な感覚器官を通じ、絶えず身体に入ってくる複数の感覚（五感・固有受容覚・前庭覚など）を正しく分類・整理し、取り入れる脳の機能のことである。この機能により、その場その時に応じた感覚調整や集中が可能になり、周囲の状況の把握とそれをふまえた行動（自分の身体の把握・道具の使用、人とコミュニケーションなど）ができるようになる。

<sup>10</sup> 蒙古貞夫（漢名：楊陽）「中国モンゴル族地域における就学前双語教育の研究—蒙古貞地域を事例として—」（日本語版）、創価大学、2017年3月。





ンケテグス（恩赫特古斯）<sup>13</sup>・ラマ僧は、瑞應寺のジサ（廟倉）<sup>14</sup>でディブ<sup>15</sup>（管理職）の仕事をしたことがあった。彼はモンゴル文の著作、ウリゲルの本を多量に読み、ホール（擦弦楽器）を持ってウリゲルを語り始めると、何か月続けても終わらないし、言語の豊さおよび説唱力もかなり高いレベルに達していた）と記録していた。

それゆえ、上述した『五伝』に関する記述内容を比較すると、唐代故事を描写した『五伝』の作者はエンケテグス（恩赫特古ス）でありながら、ホールという楽器を持ってウリゲルを語るエンケテグス・ホールチが、自分で創作した『五伝』の小説を説唱脚本に改編することは難しい課題ではなく、もともとモンゴル文で創作された『五伝』の小説を、ダンスニマ（丹森尼瑪）・ホールチはもう一度モンゴル文に翻訳する必要はないと考えられるからである。

また、斉艶艶氏の書いた修士論文「蒙古貞伝統音楽及其叙事民歌研究」<sup>16</sup>（日本語訳：蒙古貞伝統音楽と叙事民歌に関する研究）には、筆者の父について、「楊鉄龍、蒙古族、1956年出生于遼寧省阜新蒙古族自治县（清代土默特右旗、蒙古貞旗）沙拉鎮哈巴氣村。他初中畢業後在家務農、開始學習胡尔沁說書、師承系譜是：道義（1861～1920）—扎那（1875～1944）—齊憲宝（1928～2004）—楊鉄龍（1965～）」（日本語訳：楊鉄龍、モンゴル族、1965年に遼寧省阜新モンゴル族自治（清代トウメット（土默特）右旗、蒙古貞旗）沙拉鎮哈巴氣村で生まれた。彼は中学校を卒業した後、家で農業に従事していたが、その時からホーリンウリゲルを学び始め、師承系譜は、道義（1861～1920）—扎那（1875～1944）—齊憲宝（1928～2004）—楊鉄龍（1965～）である）と記述している。

上述した内容では、父である楊鉄龍・ホールチの出身地と師承系譜などの生涯がやや詳しく紹介されているようであるが、事実とはまったく合わず、完全に間違っ

---

<sup>13</sup> 人名の「ᠡᠨᠬᠡᠲᠦᠭᠤᠰᠤ」については、漢語で「恩克特古斯」「恩和特古斯」など異なる形で表記されているが、本稿では、モンゴル語の発音に従って「エンケテグス」（恩赫特古ス）と統一して表記する。

<sup>14</sup> モンゴル語の「ᠵᠢᠰᠠ」という言葉には、モンゴル寺院の中で設置された「財産管理機関」のことを指し、日本語の「廟倉」という言葉とほぼ同じ意味になる。

<sup>15</sup> モンゴル語の「ᠳᠢᠪᠤ」という言葉は、モンゴル寺院の中で設置された管理職で、「管理層のラマ僧」のことを指し、日本語の「事務管理業務の責任者」とほぼ同じ意味になる。

<sup>16</sup> 斉艶艶「蒙古貞传统音乐及其叙事民歌研究」（漢語版）、内蒙古師範大学、2012年、11頁。

って記述している内容を参考にし、引用している現象があるので、本論文では、斉艶艶氏が記述した内容を検討しながら楊鉄龍・ホールチの「正確な情報」（生涯に関する資料）を提供したい。

第一に、楊鉄龍・ホールチの出身地については、上述の論文では「清代トウメット（土黙特）右旗」と記述しているが、実は、清朝時代のジョソト盟には「トウメット（土黙特）右旗」と「トウメット（土黙特）左旗」の二つの行政機関が設置され、その中の「右旗」は現在の喀左モンゴル族自治県を指し、「左旗」はモンゴルジン（蒙古貞）旗、即ち現在の阜新モンゴル族自治県を指す。筆者の父は「ジョソト盟・トウメット（土黙特）左旗、即ちモンゴルジン（蒙古貞）旗、現在の遼寧省・阜新モンゴル族自治県」で生まれている。

第二に、楊鉄龍・ホールチが実際に生まれた村落については、上述の論文では「沙拉鎮哈巴氣村」（シラオソ・バラガソ・ハバチラ・アイラ）と記述しているが、実は「ᠰᠢᠷᠠ ᠬᠠᠪᠠᠭᠢ ᠬᠠᠪᠠᠴᠢᠷᠠ ᠠᠶᠢᠷᠠ」（沙拉鎮哈巴氣村）という村は、阜新モンゴル族自治県の沙拉鎮に所属し、阜新モンゴル族自治の東北部 15 キロメートルの所に位置する。ここは楊鉄龍・ホールチが生まれた地ではなく、結婚した後に移住した住所である。実際に生まれた村落は、阜新モンゴル族自治県の佛寺鎮に所属し、阜新モンゴル族自治の西南部 28 キロメートルの所に位置し、現地のモンゴル人たちはモンゴル語で「ᠭᠡᠭᠡᠩᠰᠤᠮᠤ ᠪᠠᠷᠠᠭᠠᠰᠤ ᠷᠠᠮᠢᠶᠢᠨᠭᠣᠷᠤ ᠠᠶᠢᠷᠠ ᠷᠣᠰᠳᠠᠪᠠ ᠲᠤᠰᠤᠬᠤᠨ」（ゲゲンスム・バラガソ・ラミインゴル・アイラ・ロスダバ・トソホウン、漢語で佛寺鎮喇嘛溝村路頭大巴屯）と呼ぶ。ここが楊鉄龍・ホールチが生まれた村落である。

第三に、楊鉄龍・ホールチの生涯については、上述の論文では「彼は中学校を卒業した後、家で農業に従事していたが、その時からホーリンウリゲルを学び始めた」と記述している。楊鉄龍・ホールチは高校を卒業した後、ホールチとしてあちこちでホーリンウリゲルを上演していたが、農業には従事していなかった。そして、「中学校を卒業した後」にホーリンウリゲルを学び始めたのではなく、9歳からホーリンウリゲルの技法を学んで、高校卒業する前にはかなり熟練したホールチになっていた。

第四に、楊鉄龍・ホールチの師承系譜については、上述の論文では「楊鉄龍は斉憲宝からホーリンウリゲルを学んだ」と書いてあるが、楊鉄龍・ホールチは斉憲宝からホーリンウリゲルを学ばず、有名なホールチであった自分の父楊・瑪哈巴斯尔からホーリン

ウリゲルの語り方およびドリボンウタストホールの弾き方を学んだ。

このように、ホーリンウリゲルに関する先行研究を熟読すると、上述したような基本的な誤りが多くある研究の現状に驚き、800年以上の歴史を持つホーリンウリゲル芸術の将来性を憂慮し始めた。それゆえに、修士課程を修了した後、必ず博士課程に進学して、これまで舞台に出演し、双語教育と幼稚園の教師としての経験し、修士論文において明確にした蒙漢（モンゴル語と漢語）双語や就学前教育の研究成果をもとに、さらに日本で学んだ民俗学と文化人類学に関する知識を活かして、ホーリンウリゲルの継承者でありながらも、研究者として史料・資料を正確に読み解き、インタビュー調査を重ねることにした。

そこで本論文では、これまでの先行研究で間違った記述や曖昧だった記述を整理・修正・補充することはもちろん、同時にモンゴル語、漢語、日本語の史料・資料を使って、「モンゴル民族の伝統芸能：ホーリンウリゲルの変容研究」をテーマにして、モンゴル民族の伝統芸能であるホーリンウリゲルの歴史と現状を「変容」という視点から分析して行きたいと考えた。

## 第二節 研究対象の選定の理由

モンゴル民族には、低音のドリボンウタストホール（四胡）という擦弦楽器を使って語るホーリンウリゲル以外に、トブシュリ（托布秀尔）という撥弦楽器を使って語るトーリ（モンゴル英雄叙事詩）、チョール（潮尔）を使って語るマングスインウリゲル（蟒古斯因烏力格尔）と、説唱芸人は楽器を使わずに口だけで一定的なリズムに合わせて語るヤバガンウリゲル（雅巴干烏力格尔）などの伝統芸能（説唱芸術）を持っている。それでは、本論文でなぜ「ホーリンウリゲル」を研究対象にして、こうした「モンゴル英雄叙事詩」「マングスインウリゲル」「ヤバガンウリゲル」などの伝統芸能を対象外にしたのかと言うと、以下のような五つの理由がある。

第一に、ホーリンウリゲルはモンゴル民族の伝統芸能を代表する点がある。ホーリンウリゲルがモンゴル人に愛される説唱芸術になったこと背景には、ホールチたちが説唱する様々な脚本（内容）と密接な関係がある。ホーリンウリゲルの上演形式は、上述した他の伝統芸能とよく似ていて、語り手が伴奏楽器を自ら弾いてモンゴル語でウリゲル

を語るが、ホーリンウリゲルの曲牌と詞牌には、モンゴル英雄叙事詩、マングスインウリゲル、ヤバガンウリゲル、ベンスンウリゲルなどの伝統芸能で使われる曲牌と詞牌を全て包含しているので、他の伝統芸能の聴衆は次第に減って、歴史の舞台から離れてしまった。それゆえ、モンゴル人としては、多種多様なモンゴルの文化を一身に背負っているホーリンウリゲルという伝統的な芸能を継承・保護・伝播する義務があると考えている。

第二に、ホーリンウリゲルは家族の文化として継承すべき点がある。筆者がホーリンウリゲルを家族で継承する家系の5代目として生まれたことは、前述の「問題提起と研究目的」で細かく記述したので、贅言しないが、ここでは伝統文化を家族で継承することの重要性について述べたい。筆者の家族の中で初めてホーリンウリゲルを学んだのは、第1代のヤン・エンケバト（楊・恩和巴圖）であり、それ以降、第2代のヤン・ブフ（楊・布赫）が第1代のヤン・エンケバトから学んだように、第3代のヤン・マハバスル（楊・瑪哈巴斯尔）、第4代のヤンテェルン（楊鉄龍、モンゴル名：アラタンル（阿刺坦魯））、第5代のヤンヤン（楊陽、モンゴル名：モンゴルジンフー（蒙古貞夫）、筆者）と筆者の妹・ヤンイン（楊螢、モンゴル名：ゴワ（高娃））は、すべて前の代の家族から学んできた。したがって、ホーリンウリゲルは家族の文化として継承すべきだと考えている。

第三に、ホーリンウリゲルは絶滅危機に瀕している点がある。ホーリンウリゲルはモンゴル人の唯一無二の娯楽活動と精神的な支柱として重要視されてきた。しかしながら、21世紀のグローバル社会に至って以来、現代的な情報媒介および科学技術が発展し、モンゴル人の娯楽の手段も年々多様化してきた。そのため、東部モンゴル地区に集住するモンゴル人は、以前のようにわざわざホールチの語るウリゲルを聴こうという人は激減し、ホーリンウリゲルの歴史的な地位も次第に衰退し、絶滅する危機に瀕してきた。そこで筆者は、伝承者としてホーリンウリゲルを継承しながら、さらに研究者としても衰退の原因を探り出し、モンゴル民族の伝統文化を次世代に継承させる方法を作り上げたいと考えている。

第四に、ホーリンウリゲルの基礎研究に多くの問題が存在する点がある。筆者はこれまでのホーリンウリゲルの研究史を整理するなかで、ホーリンウリゲルはなぜジョソト

(卓索圖)盟・トウメット(土默特)左旗で成立し、ほかのモンゴル地域で成立しなかったのかという原因に関してあまり記述されてこなかったことに気が付いた。それゆえ、現地調査によって収集した史料・資料およびインタビュー調査によって収集したデータを使って、これまでの先行研究で未解決の中興の祖と脚本『興唐五伝』の作者の不足点を補充し、ホーリンウリゲルの成立地域であるジョソト(卓索圖)盟・トウメット(土默特)左旗の社会環境および当該地区で成立した原因について分析したい。

第五に、ホーリンウリゲルを内側から解説できる点がある。多くの先行研究でホーリンウリゲルは、伝統芸能としての娯楽性がなにより重要であるという観点が提示されている。しかし、その内情をはっきり認識しているホールチは、ホーリンウリゲルの娯楽性より、その教育性が最も重要ではないかと考えている。なぜ娯楽性でなく、教育性なのかと言うと、ホーリンウリゲルの脚本の中には、モンゴル人が代々継承してきた古典文学の教育的な箴言や諺が数多くに含まれ、ホールチがホーリンウリゲルの脚本を語る際には、その脚本の娯楽性を保ちつつも、責任感を持ってその内容を聴衆に伝える義務がある。それゆえ、ホールチの立場に立つと、娯楽性は伝統芸能のホーリンウリゲルにおいては極めて小さな役割にすぎず、民族文化を人々に教えていく教育性こそが最も重要ではないかと考えている。

### 第三節 研究方法と論文の構成

筆者はホーリンウリゲルの先行研究に存在する問題点を明確にし、さらに本論文の課題である「変容」の状況を全面的に掌握するため、内モンゴル自治区のジャルーツ(扎魯特)旗、遼寧省の阜新モンゴル族自治県、吉林省の前ゴルロス(郭爾羅斯)モンゴル族自治県、黒龍江省のドルボト(杜尔伯特)モンゴル族自治県などの地域に行き、現地で有名なホールチとホーリンウリゲルの視聴者を対象にインタビュー調査を実施し、ホーリンウリゲルに関する資料を集めた。それによって、ホーリンウリゲルの東部モンゴル地区での現状が把握できたので、以下、インタビュー調査の概要および方法を述べたい。

2018年8月25日から9月15日にかけて、中国遼寧省の西北部に位置している阜新モンゴル族自治県(モンゴルジン旗地区)、内モンゴル自治区のジャルーツ(扎魯特)

旗、吉林省の前ゴルロス（郭爾羅斯）モンゴル族自治県に行き、ホールチ 5 名（国家級伝承人 3 名、民間芸人 2 名）、擦弦楽器であるドリボンウタストホルの制作者 3 名（省級伝承人 2 名、市級伝承人 1 名）、年齢が異なるホーリンウリゲルの視聴者 7 名（全員楽器が弾け、かつ短いホルボーとモンゴル民謡を語ることができる人）、合計 15 名を対象に、第 1 回のインタビュー調査を実施した。

第 2 回のインタビュー調査は、2019 年 8 月 26 日から 9 月 18 日にかけて、第 1 回のインタビュー調査の続きとして、もう一度阜新モンゴル族自治県に行き、ホールチ 1 名（国家級伝承人）、モンゴルジン・ジャンウィリとホリム（蒙古貞風俗・婚礼伝承人 1 名（省級）、地方・地域の文化遺産を掘り出し・整理している民俗研究家 4 名（政府の退職者）、長編章回体歴史小説『興唐五伝』を漢語で翻訳した作家 1 名、阜新高等専科学校教授 1 名）、合計 8 名を対象に実施した。さらに、国家級非物質文化遺産ホーリンウリゲルの項目が沙拉モンゴル族学校に導入された後の現状を把握するため、その学校の校長先生、担任の先生、主任、助手教師 4 名を対象にインタビュー調査を実施した。

2020 年は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受け、帰国して現地調査することが不可能となってしまったので、上半期にこれまでの調査で得られた結果をまとめるとともに、文献調査に重点を移して成果をまとめることにした。後半期には、ホーリンウリゲルの継承と保護に関する状況を詳しく把握した上で、本論文をまとめようと考え、9 月 17 日から 25 日にかけて、中国 IT 企業「騰迅会社」が開発した「微信」（WeChat）を使用して、遼寧省の阜新モンゴル族自治県の伝承人 1 名、内モンゴル自治区・ホルチン左翼中旗のホールチ 1 名、吉林省の前ゴルロスモンゴル族自治県の伝承人 1 名、黒龍江省の民間芸人 1 名と政府の職員 1 名、合計 5 名を対象に、第 3 回のインタビュー調査を実施した。

上述のインタビュー調査を通して、モンゴル民族の伝統芸能であるホーリンウリゲルは、中国政府が非物質文化遺産という制度を導入することによって、2006 年に国家級非物質文化遺産項目に認定された事実を把握した。そして、これまでのホーリンウリゲル研究では曖昧だったエンケテグス（恩赫特古斯）・ホールチ、ダンスンニマ（丹森尼瑪）・ホールチ、ホーリンウリゲル脚本『興唐五伝』の作者を論証できる一次資料を収集・入手できたので、以下のように各章をまとめた。

序章では、ホーリンウリゲルを変容という視点から分析する問題意識について紹介した上で、本論文の研究目的を示し、研究対象をホーリンウリゲルに選定した理由と研究方法および本論文の構成を紹介した。

第一章では、これまでのホーリンウリゲルに関する研究を国外と国内に分けて紹介・分析した。まず、国外のホーリンウリゲルについては、モンゴル語・漢語・日本語で書かれた資料を使って、モンゴル国・ロシア・ドイツ・日本・ハンガリー・イギリス・アメリカ・韓国・フランス9ヶ国の研究者によるホーリンウリゲルの評価と研究状況を整理・分析した。次に、国内のホーリンウリゲルの研究を1949年から1965年、1966年から1976年、1977年から2000年、2001年から2020年の4期に分類して、各時期のホーリンウリゲルの研究状況を整理・分析した。

第二章では、近年の研究において、吟遊詩人のホールチが低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語でウリゲルを語る上演形式は、最初のベンスンウリゲルからホーリンウリゲル、また、ホーリンウリゲルからホールチンウリゲルと定義されたことがあった。そこで、上記の三つの概念の由来および出典について紹介した。その上で、文献調査および現地調査によって収集した史料・資料およびデータを活かして、ホールチ（語り手）が使用する伴奏楽器ホールの発生・構成・使い方・演奏技法ならびに、ホールチが語るウリゲル（英雄叙事詩と歴史小説）の具体的な内容、さらにこの芸能を継承するために貢献した事跡を述べた。

第三章では、これまでの先行研究によって形成された五つの起源説の具体的な内容を整理した上で、これまでの研究ではあまり使用されてこなかった史料を用いて、ホーリンウリゲルという説唱芸術につながる芸能の淵源が12世紀から13世紀にあることを論証した。また、その上で、ホーリンウリゲルの成立までには、モンゴル英雄叙事詩の誕生と変容、マングスインウリゲルの形成と発展、ヤバガンウリゲルの登場とその役割、ベンスンウリゲルからホーリンウリゲルへの転換という四つの時期を設定して、ホーリンウリゲルという伝統芸能が成立するまでの経緯と、その過程での変容について述べた。

第四章では、ホーリンウリゲルの研究史を振り返り、この伝統芸能の成立について、研究者や民間における発言の影響を受けて、フフホトの成立説とジャルト旗の成立説があることが確認できた。しかし、文献資料・郷土資料・内部資料を使って、ホーリン



ウリゲルという伝統芸能が清朝期のジョソト（卓索圖）盟・トウメット（土默特）左旗、即ちモンゴルジン旗、現在の遼寧省の阜新モンゴル族自治県で成立したことに賛成する理由を述べた。続いて、ジョソト盟・トウメット左旗の社会背景および文化要素を紹介しつつ、東北地区で最大のチベット仏教寺院である瑞應寺が建てられた経緯と果たした役割について検討した。最後に、第2回のインタビュー調査の結果を活かして、ホーリンウリゲルの研究で長年にわたって解決されなかった元祖と脚本『興唐五伝』の作者に関する諸問題を解決した。

第五章では、まず、中華人民共和国が建国した後、モンゴル族を含む各少数民族に対して様々な優遇政策を作り上げることによって、ホールチたちが演唱する主な会場とされる「ウリゲルインゲル」が広大な東部モンゴル地区で相次いで設立され、ホールチの団体も拡大し、視聴者も歴史上になかった数までに増加した。特に、ホーリンウリゲルという伝統芸能の影響を受け、モンゴル劇が形成されたことに象徴されるように、ホーリンウリゲルが最も繁栄する時期を迎えた史実を紹介した。次に、ホーリンウリゲルという伝統芸能は、グローバル化社会の変遷および都市化が促進するなど様々な要素の影響で次第に衰退する様子が見られ、ホールチの数が激減して、若き後継者を足りないという状況に陥ってしまった。さらに、ホールチが演唱する時間も減少し、説唱の内容も時代の変化によって変えなければならない時期を迎えた実態について論じた。

第六章では、中国政府は国際情勢を観察し、2003年に「非物質文化遺産」という伝統文化を発展させる制度が導入されたことによって、もともとは民間芸能であったモンゴル族のホーリンウリゲルは、2006年に中国の「第一批国家級非物質文化遺産名録」に登録されたことを紹介した。その上で、中国政府は各民族が代々継承してきた伝統文化を保護・継承するため、2011年に「非物質文化遺産法」という法律法規を作り上げ、ホーリンウリゲルが初めて学校教育に導入されたことを紹介しながら現存する問題と改善されている点について紹介した。最後の部分では、ホーリンウリゲルという伝統芸能を次世代に継承させるために、現時点で解決・改善しなければならない点について提案した。



そこで本章では、20世紀の末期から研究し始めたモンゴル国、ロシア（旧ソ連）・ドイツ・日本・ハンガリー・イギリス・アメリカ・韓国・フランスなど国々の研究者によるホーリンウリゲル研究を「国外」とし、中華人民共和国が正式に建国された1949年から着手し始めた中国の研究者によるホーリンウリゲル研究を「国内」として、この期間（1929～2020年）における、各国の研究者によるホーリンウリゲルに関する研究を収集・整理・分析したい。

### 第一節 国外の研究者による研究

ホーリンウリゲルに関する国外の研究としては、モンゴル国の有名な作家・学者であるボ・リーチン（博・仁欽）氏<sup>19</sup>が1927年から1929年にかけて、ロブサアン・ホールチ<sup>20</sup>（ᠪᠣᠰᠠᠭᠠᠨ ᠬᠣᠷᠯᠴᠢ）を対象に2年間の調査を実施した後、1929年にホールチの語った脚本を整理して、『西の国を治めたボディ・メルゲン・ハーン』（ᠪᠣᠳᠢ ᠮᠡᠷᠭᠡᠨ ᠬᠠᠭᠠᠨ ᠤ ᠶ᠋ᠢᠨ ᠤᠯᠤᠰ）という学術報告書を作成した。そのときを研究の始まりと見ると、現在までに91年の歳月を過ごしてきたことになる。

この91年の間に、ホーリンウリゲルの研究は、モンゴル国からロシア・ハンガリー・ドイツ・日本・イギリス・アメリカ・韓国・フランス、中国などの国々に拡大し、多くの研究者に注目されるようになってきた。しかし、外国の研究者は東部モンゴル地区の

---

<sup>19</sup> ボ・リーチン（博・仁欽）は、1905年にモンゴル国の恰克図布尔薩萊地区に生まれ、7歳からモンゴル語を勉強し、9歳からロシア語を学び始めた。1922年に中学校を卒業した後、旧ソ連邦国にあるレニングラード東方言語学院に留学し、1956年にハンガリーで博士号の学位を取得した。母語モンゴル語以外に、ロシア語・ドイツ語・英語・フランス語・チェコ語・ポーランド語などの言語に精通し、有名な小説家・作家・学者・大文豪・モンゴル新文学の先駆者として、世界各国のモンゴル人に広く知られている。とりわけ、ホーリンウリゲルを最初に研究した学者として、モンゴルの文学界とホーリンウリゲの研究界で高く評価されている。

<sup>20</sup> ウリジン・ロブサアン・ホールチ（ᠤᠷᠢᠵᠢᠨ ᠪᠣᠰᠠᠭᠠᠨ ᠬᠣᠷᠯᠴᠢ）は、1885年に内モンゴル自治区・バルグ（ᠪᠠᠷᠭᠦ）地区の北部に生まれ、ホールチであった父の影響を受けて、子どもの頃からモンゴルの説唱芸術であるホルボー（ᠬᠣᠷᠪᠣ）とホーリンウリゲルを学んだ。その後、内モンゴル自治区からモンゴル国に移住し、ホーリンウリゲルを語る吟遊詩人として生計を維持していた。しかし、1929年になると、彼の語りは封建的な伝統を不当に温存するものとして、極左主義者たちに非難された。ボ・リーチン氏の推薦によって、一時ブリヤート人民共和国に行き身を潜めたことがあるが、しばらくしてからモンゴル国に戻ってきた。彼はホルボーと詩歌を創作することが上手で、アルタイ賛歌や聖山の賛歌や英雄叙事詩を語ることができた。1923年にウラン・ウデ（烏蘭烏德）で開催された「国際口頭文学大会」に参加したことがある。上述したロブサアン・ホールチの生涯に関する資料を執筆するため、田中克彦「リンチン博士のモンゴル伝承研究」（日本語版）、『民族学研究』第27巻3号、1963年、604頁および ᠪᠣᠰᠠᠭᠠᠨ ᠬᠣᠷᠯᠴᠢ ᠤ ᠶ᠋ᠢᠨ ᠤᠯᠤᠰ、2002年、38頁を参照した。

実態を把握しがたいことがあったため、それらの研究には不確定な要素が多く含まれている。

## 一 モンゴル国の研究

ホーリンウリゲルに関する研究は、モンゴル国のボ・リーンチン氏が1927年から1929年にかけて調査を実施した後、1929年にホールチの語った脚本を整理して、『西の国を治めたボディ・メルゲン・ハーン』という学術報告書をまとめたが、2年間でロブサアン・ホールチの記憶に残されているベンスンウリゲルを採録したのではなく、モンゴル民謡民歌・ホルボー・ホーリンウリゲル・英雄叙事詩などのすべてのレパートリーを採録した。

その後、ボ・リーンチン氏は『西の国を治めたボディ・メルゲン・ハーン』というホーリンウリゲル脚本を分析した際、漢語をそのままモンゴル語で発音する言葉が多かったため、この脚本をモンゴル語で「ベンスンウリゲル」(ᠪᠡᠨᠰᠢᠩᠤᠷᠢᠭᠡᠯ)と呼び、それが独特のジャンルをなすものとなったと言う。それゆえに、18世紀の南モンゴルで「ベンスンウリゲル」と言えば、中国の長編演義小説である『西遊記』『三国志演義』『今古奇観』などの小説類の影響のもとに生じたものだとして認定されるようになった<sup>21</sup>。

1959年に、ボ・リーンチン氏は、モンゴル国の首都・ウランバートルで開催された「第一回国際モンゴル学大会」において、ホーリンウリゲルに関わる「モンゴル民間文学に含まれているベンスンウリゲルというジャンル」<sup>22</sup> (ᠪᠡᠨᠰᠢᠩᠤᠷᠢᠭᠡᠯ ᠤᠯᠤᠰᠤ ᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ ᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ ᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ ᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ ᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ ᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ) という学術報告書をまとめた。その報告書で、ロブサアン・ホールチの語った脚本を対象にして、多視点からベンスンウリゲルを説唱する時に使われる曲調およびベンスンウリゲルの芸術的な特徴を分析した。その上で、「漢族の書面文学、即ち、歴史演義故事がモンゴル地区で「口頭で継承されている」現象を発見した一方で、この「口頭で継承する」という伝播方法は、書面文学で継承する方法より美しい」と述べたので、当

<sup>21</sup> 田中克彦「リンチン博士のモンゴル伝承研究」(日本語版)、『民族学研究』第27巻3号、1963年、第603-605頁。

<sup>22</sup> STUDIA MONGOLICA INSTITUTI LINGVAE ET LITTERARUM COMITETI SCIENTIARUM ET E-DUCATIONIS ALTAE REIPUBLICAE POPULI MONGOLI ЖАҢП денсен-у-улигер(キリルモンゴル語版) в Монгол бсомфолбклоре Ринчен(уланбатор)。





語」<sup>33</sup> (ᠰᠡᠬᠡ ᠰᠤᠮᠤᠨ ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ) ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ ᠠᠨᠤ ᠰᠤᠮᠤᠨ ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ)、「兎・綿羊・狼の物語」<sup>34</sup> (ᠠᠮᠤᠨ ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ ᠠᠨᠤ ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ) などが収録されている。

とりわけ、ホーリンウリゲルの研究界において、長い間に論争点となっている「アラガソン・ホールチの伝説」については、発生した時期、主要な人物と主人公との関係、アラガソンという人が国師からホールチという名称を頂いた経緯、アラガソン・ホールチがチンギス・ハーンを賛美した韻文、この伝記全体のストーリーがはっきりと説明され、ホーリンウリゲルの起源はチンギス・ハーンの生きていた時代に遡れるという、最も重要で貴重な証拠を提供した点で大きな意義があった。

また、ツェ・ダムディンスレン氏は、本書で、東部モンゴル地区で有名なパジェ・ホールチ (ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ) の語った漢族の演義小説「宋朝のハウイトウン山の文書—22 卷、即ち、『水滸伝』の第 22 卷」について詳しく分析した上で、「ホーリンウリゲルのベンスンウリゲルは形式上に言えば、『モンゴル秘史』<sup>35</sup>の韻文・詩歌・叙述する形式と共通しており、ウリゲルチとホールチは民間文化の戯曲・音楽の代わりの役割を果たしていた」と判断し、最新の研究成果を提供した。

このようにホーリンウリゲル研究の継承として、ツェ・ダムディンスレン氏が出現した。その後、ダ・ツェレンソデナム (ᠳᠠᠰᠡᠷᠢᠨᠰᠣᠳᠡᠨᠠᠮ) 氏、エ・テムンジリガル (ᠡᠲᠡᠮᠦᠨᠵᠢᠷᠢᠭᠠᠯ) 氏、ドジョーギーン・ツェデェブ氏など多くの研究者がホーリンウリゲルに注目し、研究が進められてきた。

これらの研究者の中でダ・ツェレンソデナム (ᠳᠠᠰᠡᠷᠢᠨᠰᠣᠳᠡᠨᠠᠮ) 氏は、学部時代からホーリンウリゲルに関する史料・資料を収集する作業を開始し、手元にあったデータを整理して、当時の内モンゴル大草原で活躍していたモーヒイン・ホールチ (ᠮᠣᠬᠢᠢᠨ ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ) の創作した『フレルバートル』 (ᠫᠢᠷᠢᠯᠪᠠᠳᠤᠷᠠᠯ) という物語を書籍にまとめて、1961 年にキリルモンゴル文字で出版した。この著作の序言で、モーヒイン・ホールチの生涯の事績や説唱の特徴などの基本情報を詳しく述べ、同時に『フレルバートル』という物語を語る際に使

---

<sup>33</sup> 同上、ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ ᠠᠨᠤ 1892—1900 ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ ..

<sup>34</sup> 同上、ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ ᠠᠨᠤ 1901—1904 ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ ..

<sup>35</sup> 史書である『モンゴル秘史』には、英雄叙事詩のような文体で書かれたため、文中に多量の韻文・叙事詩・詩歌が記載されているので、ホーリンウリゲルの古代書目としてホールチたちが語ってきた。





この論文では、ホーリンウリゲルを語る時に使うべき楽器・胡琴およびホーリンウリゲルの古代書目・叙事詩との関係について検討したが、これはホーリンウリゲルの研究により良い研究成果を挙げることになった。

これまでに 20 世紀にホーリンウリゲルを研究したモンゴル国出身のボ・リーンチン氏、ツェ・ダムディンスレン氏、ダ・ツェレンソデナム氏、エ・テムンジリガル氏の研究状況や研究成果を紹介してきた。こうした研究者たちが、当時の厳しい社会環境の中で研究を行ったことを考えると、その精神は尊敬に値する。しかしながら、ホーリンウリゲルの研究は 1984 年<sup>40</sup>以降になって停止したわけではなく、21 世紀のグローバル化においても今日までに続いてきた。

2015 年 10 月 16 日から 17 日にかけて、北京にある中央民族大学で「第一回国際ホーリンウリゲル学術研討会」（首届胡仁烏力格尔国際学術研討会）が開催された。モンゴル国・文化芸術大学学長のドジョーギーン・ツェデェブ (Dojooiin Tsedev) 氏、モンゴル国科学院・言語文化研究の研究者バイガリサイハン (百嘎力賽罕) 氏、モンゴル国科学院研究員セ・モンケサイハン (色・孟和賽罕) 氏、モンゴル国国立大学のガラバヤラ (嘎拉巴雅尔) 氏等が大会に参加した。その研究動向を紹介したい。

ドジョーギーン・ツェデェブ氏は、「ボインニムヘがいかにかして音楽の伴奏をもとに詩歌のホルボーを歌うのかということに対する私見」（論宝音尼木和如何在音乐伴奏下演唱诗歌好来宝之我見）という論文を発表した。本論文において、ツェデェブ氏はボインニムヘ芸人を事例にして、彼が音楽の伴奏もとでモンゴルの詩歌ホルボーを歌う新しい表現形式を紹介し、モンゴルで伝統芸能や伝統文化は時代の変遷に伴ってかなり変容しているという現状を述べた。

バイガリサイハン氏は、「ホーリンウリゲル『金馬伝』における芸術描写の伝承と創新の研究」（胡仁烏力格尔〈金馬传〉的芸術描述的伝承和創新研究）をテーマにして、キリルモンゴル語で書かれた研究論文を発表した。本論文では、バリン（巴林）地区で活躍しているダムリン・ホールチ（達木林・胡尔沁）の語った『金馬伝』というホーリン

---

<sup>40</sup> 1984 年以降に開催された「ホーリンウリゲル国際シンポジウム」の多くは、中国国内の中央民族大学、内蒙古大学、内蒙古師範大学などの大学と研究機関で行われたので、当該時期に配布された漢語版の資料を参考したので、本稿では漢語表記を使った。

ウリゲル脚本を芸術描写の視点から分析し、『金馬伝』の中に含まれている漢文化の要素および漢文化の影響を受けた諸要素を掘り出して、最後にこの脚本を継承する方法を検討しつつ、グローバル化社会において昔の『金馬伝』を革新しながら次世代に継承させる方法を探究している。

モンケサイハン氏は、「ホーリンウリゲルの言語と語彙について」（浅議胡仁烏力格爾言語と語彙）をテーマにして、ウスフボイン（烏斯夫宝音）・ホールチの語ったホーリンウリゲルを事例に、彼のホーリンウリゲルを説明する芸術的な特徴を分析し、ホールチがホーリンウリゲルを語る際に言語を選択・使用する方法を述べた。

ガラバヤラ氏は、「漢文『水滸伝』の第3回とパジェ・ホールの説唱するホーリンウリゲル『魯智深の故事』のキャラクターイメージとの比較研究」（漢文〈水滸伝〉第三回与琵琶胡尔齐説唱的胡仁烏力格爾〈魯智深的故事〉人物形象对比研究）を書いて大会に参加した。本論文では、漢族の文学がいかにモンゴル文学に影響したのか、蒙漢民族の文学がいかに融合したのかという二つの視点から、漢文の『水滸伝』の第3回とパジェ・ホールの説唱するホーリンウリゲル『魯智深の故事』のキャラクターイメージに関する分析を行い、『水滸伝』と『魯智深の故事』の相違点を探り出した。

2019年8月30日の中国『民族重報』<sup>41</sup>（民族重報）という新聞の記事によると、2019年8月28日から29日にかけて、中国・中央民族大学で・中国少数民族言語文学学院・蒙古言語文学系と内モンゴル自治区・通遼市人民政府が共同に主催して、通遼市文化旅行広電局と内モンゴル民族大学が後援した「ホーリンウリゲル国際学術研討会」（胡仁烏力格爾国際学術研討会）が通遼市で開催された。その国際学術研討会において、モンゴル国文化芸術大学元学長・ウランバートル大学名誉教授のドジョーギーン・ツェデェブ氏、モンゴル国国立大学教授・モンゴル国文化芸術大学名誉教授のセ・ドラム（森・杜拉姆）氏、モンゴル国科学院・言語文化研究院院長のビリグテェ（畢勒古泰）氏の3人が、特別の来賓としてホーリンウリゲル国際学術研討会の開幕式で挨拶し、説得力のある研究論文を発表した。

ドジョーギーン・ツェデェブ氏の「胡琴伴奏による民間文学の発展ブーム」、セ・ド

---

<sup>41</sup> 『民族重報』(漢語版)、2019年8月30日、記者民族画報のインゲ(鷹鶴)、本記事編集者のワンジンリ(王京莉)。

ラム氏の「クーロン（庫倫）のホーリンウリゲルとホルボー」をはじめとして、モンゴル国文化芸術大学のレ・エルドンチムゲ（勒・額尔敦其木格）氏、モンゴル国文化芸術大学・舞台芸術学院院長のシ・エルドンチチゲ（席・額尔敦其其格）氏、モンゴル国国立大学・人文学院モンゴル文学専攻主任のガン・ナンディンビリゲ（剛・南丁畢力格）氏、モンゴル国科学院の研究者オ・シンバヤル氏、モンゴル国科学院研究員・モンケサイハン（孟和賽罕）氏等が研究論文を発表し、中国国内のホーリンウリゲルの研究者と共に、「ホールチの流派・風格、ホーリンウリゲルの写本、ホーリンウリゲル芸術、蒙漢文学との関係、ホーリンウリゲルの保護と継承」などの課題について検討した。

## 二 ロシア（旧ソ連）の研究

ロシアの研究者によるモンゴル史料・資料の収集作業は、1689年9月7日、当時の清朝政府とロシア政府の代表がロシア連邦・ザバイカリエ地方にあるネルチンスクで「ネルチンスク条約」を締結してから始まった。18世紀の初期には、ロシア政府は調査団体を派遣し、各モンゴル地区に沿って多くの文献や化石を収集し、ロシアの科学院に運び入れたが、これらの史料・資料はロシア政府がモンゴルに関して収集した初めての資料と言える。その後19世紀に入って、ロシア政府は相次いで旅行家・探検家・研究者を派遣し、彼らは現地調査によってモンゴルの言語文字・歴史文化・風俗習慣に関する、古い写本・手書きのモンゴル小説などの史料・資料を収集し、レニングラードなどの都市や地域にある図書館に保存した。

ア・ルデニヤ（A・Pydheb）氏とナ・ポッペー（N・Poppe）氏は、1931年に各々の著作『東部モンゴル発音の使用』と『ソロン・ヘエレの使用』で、初めてモンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルに関する内容を入れ込んで紹介し、出版した。この二つの作品は、ロシアで初めてホーリンウリゲルの研究を開いた著作として高く評価され、それ以降の研究者が参考すべき資料となった。

ロシアの音楽家パ・マ・ベルリンスリー氏は、1933年にモンゴル国のボ・リーンチン氏の影響を受け、ロブサアン・ホールチが生前に使った50種ぐらいの曲調を楽譜化して記録し、さらに、これらの資料をもとにして、『モンゴルの歌手・楽団員—ウリジ・ロブサアン・ホールチ—』という著作を書き、この著作において、この50種ぐらいの



ル地区に行われている英雄叙事詩には、多言語・多文化による社会環境によって、漢文化を主とするチベット文化、満州文化、モンゴル文化の影響を受けたことが具体的に分かると強調した。

1988年10月、バ・ラ・リフティン（李福清）氏は、ドイツで開催された「第六回中央アジアに関する国際シンポジウム」<sup>46</sup>に参加して、ホーリンウリゲルに頻繁に出現する「将軍が征戦する」という場面について詳しく分析し、新たな視点と成果を提供した。彼の多くの研究は、上海・南京・北京・モスクワ・台湾で出版され、中国の漢学研究およびモンゴル文学とホーリンウリゲルの研究に貴重な資料を提供し、ロシア・中国・モンゴル3カ国の文化交流に大きく貢献した。

### 三 ドイツの研究

ドイツのモンゴル学研究は、東方学研究に含まれる新しい学科として登場し、時間的に考えると、他国より少し遅れた時期に始まった。しかし、ドイツの研究者は、ボン大学にある中央アジア研究所および全国各地の学術機関や図書館で所存している脚本と写本を使って、モンゴル民族の歴史、伝統芸能のホーリンウリゲル、伝統音楽に対する研究を行い、多くの研究成果をあげた。特に、万難を克服して、ドイツモンゴル研究の基礎を打ち立てたエルデマン（埃尔德曼）氏は、1837年に「カルムイク・ジャンガル」（卡尔梅克江格尔）という論文を発表して以来、ワルター・ハイシヒ氏のようなモンゴル研究者が相次いで現れた。

1972年、ワルター・ハイシヒ氏は「モンゴル本子新故事」<sup>47</sup>という論文を執筆し、ローマの『東方研究』という学術雑誌に掲載した。その論文では、内モンゴルから収集したモンゴル語のベンスンウリゲルを分析して、西方のモンゴル学研究に最新の研究成果を提供した。また、同じ年、彼は「1968年～1974年間にモンゴル人民共和国の民間文学紀」という論文を発表し、さらに、英語で書いた『モンゴル新ホルボー芸術』<sup>48</sup>という著作を出版し、モンゴル民族の古代英雄叙事詩、伝統芸能のホーリンウリゲル、民

---

<sup>46</sup> 同上。

<sup>47</sup> 海西希「蒙古本子新故事」（漢語版）、東方研究、1972年。

<sup>48</sup> 海西希『蒙古新好来宝芸術』（漢語版）、羅馬、1972年。

間文学に対して詳細な分析を行い、世界中のモンゴル学研究に大きく貢献した。

1984年、ワルター・ハイシヒ氏は、フルニケハエ（仏如尼克派提）という研究者と共に中国・内モンゴル自治区のフフホト（呼和浩特）やシリント（錫林郭勒）などの地区に行き、その地区に活躍するドルジ（道尔吉）などのホールチを対象に調査を行い、ホールチの生年月日、芸歴、説唱の風格のような基本情報を収集した。そして、それらの収集資料を使って、ヨーロッパに伝播している様々な伝統芸能との比較研究を行って、テレビやラジオを通して多くの人々に紹介した。

1986年9月、ワルター・ハイシヒ氏、フルニケハエ氏、ニマ氏3人を主とする調査団は、内モンゴル自治区のフルンボイル盟とジリム盟に入り、ダワリンチン・ホールチ、バイソ・ホールチ、セレン・ホールチ、バダマ・ホールチなど現地で活躍していた説唱者を中心に調査を実施した。そして、セレン・ホールチの語った二部のマングスインウリゲルを整理・文字化して、『アラタン・ガラバ・ハーン』という著作を出版し、ダワリンチン・ホールチから「第十五代唐朝故事」、バイソ・ホールチから周朝の物語「ダシエングアン」、中原唐王朝の歴史や文化を描写する物語<sup>49</sup>「クシズワン」（苦喜伝）の一部およびこれらの物語を語るときに使っていた何十種もの曲調を収集した。

その後、ワルター・ハイシヒ氏は、ダワリンチン・ホールチから収集した「第十五代唐朝故事」を整理して、著作として出版する一方で、序言に書いた前3章の内容を「ダワリンチン・ホールチの説唱故事の研究」<sup>50</sup>という論文にまとめて、『モンゴル学研究』というモンゴル語で編集している学術雑誌に掲載した。その論文の最初で、ダワリンチン・ホールチの基本情報を紹介したうえで、ダワリンチンの語った故事の第1段落から第15段落まで分析し、最後にモンゴル語版の「第十五代唐朝故事」をチベット語版、漢語版、ヨーロッパ版の説唱書目と比較し、分析を行った。

#### 四 日本の研究

日本人研究者がモンゴル（蒙古）に対する研究を開始した時期は、19世紀の末期から

---

<sup>49</sup> モンゴル語の「ᠬᠤᠰᠢᠵᠠᠨ」とは、ラマ僧で文豪のエンケテグス（恩赫特古斯）氏の創作した『興唐五伝』というシリーズ作品の第一伝であるが、漢語では『苦喜伝』と表記する。

<sup>50</sup> 海西希「達瓦仁欽胡尔齐的说唱故事的研究」（漢語版）、『蒙古研究』第3期、1991年。

20世紀の初期に辿ることができる。とりわけ、1900年前後の時期には、無数の日本人旅行家・探検者・研究者が、日本軍や民間組織の支持・庇護を受けながら、満蒙や蒙地に対する実態調査を開始し、モンゴルの歴史・地理・習慣・生活に関する一次資料を多量に収集した<sup>51</sup>。

そして、現地調査によって収集した一次資料を文字化して、報告書・旅行記・蒙古記録書・研究書にまとめて国家に提出するか、あるいは、ある研究機関に保存したので、日本各地の研究機関や図書館に保存されているモンゴルに関する史料が多いだけでなく、種類も多種多様で、質量も世界で屈指の規模に及ぶと言われている。これらの史料・資料を収集・調査することによって、那珂通世・田中萃一郎・江上波夫・小林高四郎・梅棹忠夫・長尾雅人・岡田英弘・杉山正明・宮脇淳子・小長谷有紀・二木博史・田中克彦・温品廉三・松崎陽・佐藤紀子・小沢重男・蓮見治雄・中見立夫などの大勢の研究者が育成された。

1973年4月5日、日本モンゴル学会の元会長・岩村忍氏と藤枝晃氏が編集した『モンゴル研究文献目録（1900—1972）』<sup>52</sup>という著作が出版されたが、この目録には、阿部文雄氏の「大正新修大蔵経勘同目録中の漢蔵対照に就て」（『現代仏教』11、1929年11月）という論文を先頭に、モンゴル語・日本語・漢語・英語で書かれたモンゴルに関する著作・論文が多量に記載され、特に1900年から1972年まで72年間のモンゴル研究成果を総括・紹介したことは大きな意義があった。

この著作に藤波一郎氏の「蒙古高原の歌」（『観光東亜』・蒙疆特輯号、1938年12月）、古木俊夫氏の「老蒙古人の話」（『満州行政』7-1、1940年1月）、後藤富男氏の「包頭物語」（『改造』19-13、1937年11月）、滝遼一氏の「蒙古の音楽について」（『蒙古学』2、1938年1月）と「蒙古音楽と其楽器」（『東洋音楽研究』1-2、1938年）、高橋義三郎氏の「伝説と史実—元時代の伝説について—」（『関西大学文学論集』3-3、1953年）、武田忠一郎氏の「蒙古の唄—曲譜と解説」（『東洋音楽研究』9、1951年）、田中克彦氏の「ブリヤート口承文芸ゲセル物語にあらわれた二つの文化層」（『民

---

<sup>51</sup> 娜仁格日勒編著『国立民族学博物館調査報告 130 梅棹忠夫の内モンゴル調査を検証する』（日本語版）、人間文化研究機構国立民族学博物館、2015年11月。

<sup>52</sup> 岩村忍・藤枝晃共編『モンゴル研究文献目録』（日本語版）、日本モンゴル学会、1973年。

族学研究』29-3、1964年)などモンゴルの英雄叙事詩・伝統音楽・口承文芸に関わる内容が記載されていた。

また、1976年に田中克彦氏は、「モンゴル英雄叙事詩のイデオロギー(アジアの歌謡)〈特集〉」<sup>53</sup>という一文を発表した後、ドジョーギーン・ツェデブ氏の著作を岡田和行氏が訳した「モンゴル口承文芸と書写文学における魔法と前兆について:モンゴル英雄叙事詩と『モンゴル秘史』の関係の問題について」<sup>54</sup>(1993年)、藤井麻湖氏の「アルタイ賛歌研究—モンゴル英雄叙事詩の語り手からの聞き取りを中心に—」<sup>55</sup>(2002年)、荻原眞子氏の「英雄叙事詩における靈魂:モンゴル英雄叙事詩『ゲセル・ハーン物語』について」(2018年)などモンゴルの英雄叙事詩およびホーリンウリゲル脚本に関する研究が相次いで発表された。

これらの研究者の中で、本格的にホーリンウリゲルを対象に研究したのが蓮見治雄氏である。彼は『チンギス・ハーン伝説—モンゴル口承文芸—』<sup>56</sup>という著作で、「ホーリン・ウリゲルという語り物もある。これは内モンゴル東部のジェリム盟、ジョーオダ盟、シリンゴル盟、ホロンバイルなどの盟(行政単位の一つ)で、現在も盛んに語られており、発展途上にあるといってもよい。これはホール、つまり四胡、二胡、馬頭琴などの楽器の伴奏による物語の意で、私が入手した資料を整理してみると、一四一編の詞と曲からなっており、次に示す項目ごとに、詞も曲も異なっている」と説明する。その前には、ホーリンウリゲルを解説する研究はなかったと推察される。

そして、この著作では、ホーリンウリゲル以外のことにも触れた。1985年3月に、来日した内モンゴル自治区の歌舞団にドルジリンチンと呼ばれる英雄叙事詩の語り手がいたこと、英雄叙事詩を語る際に芸人たちが、よく使っているモリン・ホール(馬頭琴)とドリボンウタストホール(四胡)、モンゴルの説唱芸術であるホルボー、祝詞、賛歌、

---

<sup>53</sup> 田中克彦「モンゴル英雄叙事詩のイデオロギー(アジアの歌謡)〈特集〉」(日本語版)、田中朝日アジアレビュー・7(2)、1976年、128-133頁。

<sup>54</sup> ドジョーギーン・ツェデブ著、岡田和行訳「モンゴル口承文芸と書写文学における魔法と前兆について:モンゴル英雄叙事詩と『モンゴル秘史』の関係の問題について」(日本語版)、『東京外国語大学論集』(47)、1993年、89-108頁。

<sup>55</sup> 藤井麻湖「アルタイ賛歌研究—モンゴル英雄叙事詩の語り手からの聞き取りを中心に—」(日本語版)、『言語文化学会論集』(18)、2002年、281-312頁。

<sup>56</sup> 蓮見治雄『チンギス・ハーン伝説—モンゴル口承文芸—』(日本語版)、角川書店、1993年。



ベンスンウリゲル、ウリゲルト・ドー、英雄叙事詩などのジャンルも記載されていた。


これまで日本人研究者によるモンゴル英雄叙事詩やホーリンウリゲルに関する研究成果を紹介してきたが、次に、日本に留学して大学や研究機関を卒業した外国人研究者や現在も在籍している外国人研究者によるホーリンウリゲルの研究成果を紹介したい。


2003年12月に、ボージンガン（包金剛）氏は「内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究—ホールチとホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドー」<sup>57</sup>をテーマにして、博士論文を東京外国語大学に提出し、学位を取得した。この論文は5章で構成されているが、序論で先行研究を検討した後、研究の目的や意義、ホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドー、ホールチの四つの言葉の意味などを説明・分析・考察している。第1章では、ホールチの出現するプロセス、社会的地位、活躍の場などについて論じた。第2章では、ホーリン・ウリゲルの概念、起源、発生した地域と当該地域において発生・発展した要因、英雄叙事詩を凌駕した要因およびその発展史などを述べた。第3章では、ホルボーの概念・種類とホルボーの文化的な背景およびホルボーとホールチとの関係などについて述べた。第4章では、ウリゲルト・ドーの概念、社会的・文化的背景、ウリゲルト・ドーとホールチとの関係などについて叙述した。第5章では、この3種類の口承文芸が東部地区の現代文学に与えた影響について論じた。最後に、ホーリン・ウリゲルは18世紀末頃にジョソト盟のトメット<sup>58</sup>旗で発生し、ホールチが出現したのに伴って、東部地区でホルボーという口承文芸が発生し、ホールチはウリゲルチ、ホルボーチ、歌手、演奏家、作家などであったという結論を出した。

2016年3月、ハウホウカイ（包宝海）氏は「中国内モンゴルにおける集合的記憶—モンゴル民族の英雄ガーダー・メイレン<sup>59</sup>（嘎達梅林）を事例として—」<sup>60</sup>をテーマにして、

---

<sup>57</sup> 包金剛「内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究—ホールチとホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドー」（日本語版）、東京外国語大学、2003年。

<sup>58</sup> モンゴル語の「」は、日本語のカタカナで「トメット」「トومت」「トウムド」などの形が異なる表記があるが、本論文では「トウメット」と統一して表記する。

<sup>59</sup> 英雄の「」（1892～1931）は、1929年末から1931年代初頭まで、内モンゴルのホルチン地域で、漢人農民による過度な農地開墾に反対して武装蜂起を起こし、1931年2月12日（旧暦）に熱河省派遣の李守信の部隊によって鎮圧され、戦死した実在の人物である。

<sup>60</sup> 包宝海「中国内モンゴルにおける集合的記憶—モンゴル民族の英雄ガーダー・メイレンを事例として—」（日本語版）、東京外国語大学、2016年。

モンゴル民族の英雄とされてきたガーダー・メイレンについて考察した。その論文は、序論、第1章の集合的記憶について、第2章の歴史叙述としての「ガーダー・メイレン蜂起」、第3章の「記憶の場」としてのガーダー・メイレン、第4章の内モンゴルにおけるガーダー・メイレンの記憶の形成とその変遷、第5章の草の根社会におけるガーダー・メイレンの記憶と語りで構成されている。とりわけ、第4章の内モンゴルにおけるガーダー・メイレンの記憶の形成とその変遷において、東部モンゴル地区に広く伝播しているウリゲルト・ドー「ガーダー・メイレン」がテキスト化されている事情、「ガーダー・メイレン」の事跡が民間芸能者のホールチの改編・加筆によって、ウリゲルト・ドーとして歌われ、ホーリン・ウリゲルとして語り直されている事情などを紹介した。

2016年、バイリ（白利）氏は「モンゴル族におけるホーリン・ウリゲルの保護と伝承—阜新モンゴル族自治州を事例として—」というテーマで、文献研究はもちろん、現地調査を行って、多量の一次資料を収集・分析して、修士論文を完成し、学位を取得した。彼の修士論文<sup>61</sup>は、序章、第1章のホーリン・ウリゲルの歴史、第2章のホーリン・ウリゲルの伝承方法、第3章のホーリン・ウリゲルの伝承人と伝承系譜、第4章のホーリン・ウリゲルの伝承と保護の現状、伝承危機で構成されている。最後に、現地で保護・継承されている状況に合わせて、保護と継承の方面を提案した。

その論文の主要な内容を説明すると、彼は中国・遼寧省にある阜新モンゴル族自治州のホーリン・ウリゲルを事例にし、当該地域で有名な楊鉄龍・ホールチとナムジラ・ホールチを対象にインタビュー調査を行って、阜新モンゴル族自治州のホーリン・ウリゲルが保護・伝承されている実態について考察した。とりわけ、第3章のホーリン・ウリゲルの伝承人と伝承系譜において、筆者が日本で継承している状況および筆者の父・楊鉄龍・ホールチが地元の阜新モンゴル族自治州で継承活動を行っている状況について述べた。

2017年3月、バトル（巴特尔）氏は「東部モンゴル族の説唱芸術胡仁・烏力格尔の動

---

<sup>61</sup> 白利「モンゴル族におけるホーリン・ウリゲルの保護と伝承—阜新モンゴル族自治州を事例として—」（日本語版）、神奈川大学、2016年。また、白利は修士論文をまとめて、「ホーリン・ウリゲルの保護と伝承：阜新モンゴル族自治州を事例として（特集・民俗音楽の保存と継承）」（日本語版）の題で、『比較民俗研究』第31期、97-124頁に発表した。

熊研究：「科尔沁」地域を中心に」<sup>62</sup>という題目で、文献資料や現地資料を収集・整理・分析して、博士論文を作成した。彼は博士論文の緒論において、文献や史料の記載によると、モンゴル族の起源は少なくとも 1200 年以上の歴史があり、無文字と有文字に分かれると強調し、ホーリンウリゲルのような説唱芸術は長期の無文字期においても「口伝心授」の方式で継承されてきたと言う。また、多くの学者がホーリンウリゲルは 200 年から 300 年ほどの発展史しかないという観点に対して異論を挙げ、ホーリンウリゲルはさらに長い歴史を持つと述べている。第 1 章では、胡仁・烏力格尔説唱芸術の構成要素である胡琴、烏力格尔、胡尔奇の名称と発展の歴史を踏まえ、多くの研究者の考えるホーリンウリゲル発展の源流は英雄史詩の内容形式である蟒古斯烏力格尔にあることを述べた。第 2 章では、ホーリンウリゲルの誕生した時期について、先行研究による 12～13 世紀の起源説、16～17 世紀の起源説、18 世紀中期の起源説、19 世紀の起源説を分析した。第 3 章では、叁布拉諾日布氏が編集した『蒙古胡尔奇三百人』という著作をもとにして、ホーリンウリゲルの伝承方法、ホールチの流派や特徴などについて述べた。第 4 章では、長年にわたって何度もインタビューを行った白乙拉・ホールチと顧如・ホールチの調査を整理・分析した。そして、白乙拉・ホールチから長年にわたって大切に保管されていたホーリンウリゲル書目『薛仁貴征東』を手に入れ、附属資料として博士論文で公開した。第 5 章では、実例を示し、ホーリンウリゲルの説唱芸術は今日まで伝承されてきた民族伝統文化の重要な表現形式であるということを述べた。

## 五 ハンガリーの研究

日本人研究者・島村一平氏は、ハンガリーのエトヴェシュ・ローランド大学モンゴル・内陸アジア学部に所属していたヒルタラン・アーグネシュ氏の書いた「ハンガリーにおけるモンゴル研究の始まり：セントカトルナのガーボル・バーリントのカルムイク人およびハルハ人に関するフィールド調査（1871 年・1873 年）」<sup>63</sup>という論文を日本語に翻

---

<sup>62</sup> 巴特尔「東部モンゴル族の説唱芸術胡仁・烏力格尔の動態研究：「科尔沁」地域を中心に」（日本語版）、一橋大学、2017 年。

<sup>63</sup> 島村一平「ハンガリーにおけるモンゴル研究の始まり：セントカトルナのガーボル・バーリントのカルムイク人およびハルハ人に関するフィールド調査（1871 年・1873 年）」（日本語版）、『日本モンゴル学会紀要(Bulletin of JAMS)』第 47 号、2017 年、79-91 頁。

訳し、ハンガリーの研究者によるモンゴル研究はセントカトルナのガーボル・バーリント (Gábor Bálint of Szentkatolna) から始められたと記している。

セントカトルナのバーリント氏は、1844年3月13日、セントカトルナ、すなわちトランシルヴァニアのケーズディヴァーシャーヘイ (現在のルーマニアのトゥルグ・セクイエスクの近く) に生まれ、1913年5月26日、トランシルヴァニアのテメシュヴァール (現在のティミショアラ) で亡くなった。彼は比類なき言語学の才能をもっており、彼にとってお手本だった学者・アレクサンダー・チョーマ・ド・ケーレス (Alexander Csoma de Kőrös) (1784~1842、ハンガリー語ではケーレシ・チョマ・シャンドル Kőrösi Csoma Sándor) の夢を実現しようと望んだ。そして出来る限り多くの言語をマスターしたいと考えた。さらに、彼の出身民族であるマジヤール系のセケル人 (Szekels) (ハンガリー語ではセーケイ人 Székely) の起源の地を探るために多くの文化に通暁したいと思った。彼は子供のころから熱心に勉強をしていたが、大学生になるとウイーン (のちにはブタペシュトで) で法学や人文学などを学んだ。成長するにつれて彼の関心は東洋の言語へと向かい、調査対象となるエスニック集団のところでフィールドワークをするべく準備をはじめた<sup>64</sup>。

バーリント氏は、1871年にはキリスト教化されたタタール人の言語、1871年から1872年にはカルムイクモンゴル人が使っているモンゴル語の標準語、1873年には西ハルハ方言のコーパスを集積したほか、カルムイク語の発音を正確に記録してテキスト化するため、民謡の記録をはじめ、さらに難しい統語構造を持つ民謡の記録へと進んだと言う。また、彼はカルムイク中学校の生徒、医学校の学生、小学校の生徒たちの語った民謡・民謡によってカルムイク語の発音を記録し、特にカルムイクとハルハに関する民族誌学・民俗学・宗教学的な資料としてのテキスト・コーパスの事業は高く評価され、ハンガリーにおけるモンゴル民族の言語・歴史・民謡・民謡を研究する第一人者として有名になった<sup>65</sup>。

1959年に、ハンガリーでモンゴル学研究と突厥学の研究者として知られているカラ・

---

<sup>64</sup> 同上、島村一平の論文、80-81頁。

<sup>65</sup> 同上、島村一平の論文、85-88頁。

ジョジ（カラ・乔治）氏<sup>66</sup>は、中国の内モンゴル自治区を訪ねて、蒙地に広く伝播しているモンゴル民族の英雄叙事詩、ホーリンウリゲルの物語に関する一次資料を多く収集して、ハンガリーに帰国した。

1967年、カラ・ジョジ氏は内モンゴルの民間芸人から収集したデータを整理・分析・文字化した。そして、モンゴル民族の英雄叙事詩と説唱芸術に関する研究成果について、より慎重な分析を行った後、博士論文にして提出し、学位を取得した<sup>67</sup>。

1970年、カラ・ジョジ氏は手元にあったモンゴル英雄叙事詩と説唱芸術に関する研究史料をまとめて、『モンゴル説唱人の詩歌』という著作を出版した。本書では、言語・文学・詩歌・口承文芸の視点から有名なパジェ・ホールチの語ったモンゴル英雄叙事詩、ホーリンウリゲル、ホルボー（好来宝）、詩歌、民謡・民歌に対して細かく分析を行った。また、その後、彼は相次いで『モンゴル語で書かれたゲセル・ハーン伝記の古代写本の一段落』と『チャハル民歌八首』という2冊の著作を出版した<sup>68</sup>。

## 六 イギリスの研究

イギリスのモンゴル学研究の開始時期は19世紀60年代から70年代に遡ることができると、ナスンバヤル（Nasunbayar）氏の「イギリスモンゴル学研究概要」<sup>69</sup>（英国蒙古学研究簡介）という論文は説明し、さらにHenry Hoyle Howorth（霍渥斯）氏の書いた『モンゴル史』（4巻5冊）というシリーズ作品の出版を里程標としてイギリスの研究者によるモンゴル学研究は開始された。

第二次世界大戦が終わった後、イギリスのモンゴル学研究は新たな時代を迎え、オーウェン・ラティモア（Owen Lattimore）氏を主とするモンゴル学の研究者は、イギリスのリーズ大学、ロンドン大学、ケンブリッジ大学にモンゴル学専攻やモンゴル語専攻を設立し、主にモンゴルの歴史・言語・文字などを学生に教えていたが、その中のC・Cronas（C・克羅納斯）氏は、モンゴルの英雄叙事詩や長編歴史小説に興味を持ち、『インジ

---

<sup>66</sup> 清格尔泰「匈牙利的阿尔泰学和蒙古学研究」（漢語版）、『蒙古史料和情報』第3期、1986年10月、48—49頁。

<sup>67</sup> 同上、清格尔泰の論文。

<sup>68</sup> 同上、清格尔泰の論文。

<sup>69</sup> 納森巴雅爾「英国蒙古学研究簡介」（漢語版）、『蒙古学情報』第4期、1996年、46—48頁。

『ヤナシの一層楼—19世紀により漢化されたモンゴル小説—』（尹湛納希的一层楼—一部19世紀漢化蒙古小説—）を題目に修士の学位論文を完成した。

## 七 アメリカの研究

アメリカ合衆国<sup>70</sup>では、学生にモンゴル語を教え、モンゴル学研究が開始された時期は、20世紀30年代のことである。これ以前にアメリカでモンゴル学研究に興味を持つ人がいなかったわけではないが、モンゴルの歴史・文化などに興味を持つようになっても各地に分散していて、人数も極めて少なかった<sup>71</sup>。

しかし、少数というのはまったくいないという意味ではなく、その中では、アメリカのモンゴル学研究を開拓したと言える Jeremiah Curtin 氏が、『南シベリア行き：モンゴル人および宗教信奉と神話伝説』<sup>72</sup>という著作を著した。これは、Jeremiah Curtin 氏がモンゴル語版の『ゲセル・ハーン伝記』から何部かを選出して紹介した内容およびブリヤート・モンゴルの民間故事を翻訳した内容が半分以上を占めていた。この著作は、初めて英文でモンゴル英雄叙事詩の『ゲセル・ハーン伝記』やモンゴルの口頭文学を紹介した出版物として、モンゴル学研究の世界で重要な位置を占めている。

Jeremiah Curtin 氏以外に、アントワヌ・モスタールト氏と John Gombojab Hangin（約翰・貢布扎布・杭錦）氏は、長年にわたってモンゴルの歴史・言語・文字・伝統音楽・民間文学、そしてホーリンウリゲルの書目に関する研究をし、英文の資料を数多く提供した。

アントワヌ・モスタールト（田清波）氏は、ベルギー出身で、伝道師としてオルドス（鄂尔多斯）地区に長い間住んでいたときに、オルドス・モンゴル人の歴史・言語・文字・民間故事などに関する資料を収集し、1941年から1944年にかけて、『オルドス方言辞書』と『オルドス民間故事』の2冊の著作を北京で出版した<sup>73</sup>。

John Gombojab Hangin（約翰・貢布扎布・杭錦）氏は、1921年4月1日に内モンゴル

---

<sup>70</sup> 貢布扎布編集、海日罕訳「美国蒙古学研究簡介」（漢語版）、『蒙古学資料と情報』第2期、1988年7月、42-47頁。

<sup>71</sup> 同上、貢布扎布の論文、第42頁。

<sup>72</sup> 同上、貢布扎布の論文、第42頁。

<sup>73</sup> 同上、貢布扎布の論文、第44頁。

自治区の太仆寺左旗に生まれた。1937年に日本人が運営している Good Neighbour Institute 学校を経て、北海道帝国大学に派遣された。1941年に大学を卒業して、張家口に戻って教師になった。1948年に有名なモンゴル学研究者オーウェン・ラティモア (Owen Lattimore) 氏の推薦によってアメリカに移住し、モンゴルの歴史と文化に関する研究を開始し、モンゴル長編歴史小説『青史演義研究』<sup>74</sup> (ホーリンウリゲの書目でもある) という著作を出版し、著者のインジャナシの基本的な情報を解説し、小説の内容やストーリーを深く分析した。

## 八 韓国の研究

韓国の研究者によるモンゴル学研究が始められた時期は、20世紀50年代になる。韓国の研究者はモンゴル語の研究から研究活動を開始したが、80年代までは、韓国で三大モンゴル学研究の著作と言われているモンゴル語の研究に関わる『Monghaksamso』(蒙学三書)、『Mongonogoldae』(蒙古語老乞大)、『Chophaesamso』(捷解蒙古語)にどまっていた<sup>75</sup>。

しかし、90年代に韓国がモンゴル国と中国に外交関係を結んでから後、研究者は以前のモンゴル語の研究を重視しながらも、モンゴル国と中国の研究者と頻りに学術交流を行って意見を交換してきた。近年の韓国のモンゴル研究者は、モンゴル政権の元朝と高麗の歴史・戦争史、モンゴルの軍事、史書の『蒙古源流』、『モンゴル秘史』、『チンギス・ハーン伝記』、モンゴルの民謡・民歌、民間故事、説唱芸術、ホーリンウリゲの書目など、多視野・多領域・多視点で研究するようになってきている<sup>76</sup>。

韓国の研究者によるモンゴル学研究の成果を総括した「近幾十年以来の韓国学者によるモンゴル学研究成果索引」<sup>77</sup> (近幾十年來韓国学者的蒙古学研究成果索引) という論文の記載によると、韓国では、1968年に「Cha, Sang-won: “ Literature Criticism of

---

<sup>74</sup> 同上、貢布扎布の論文、第46頁。

<sup>75</sup> 成百仁 (Seong Baeg In) 編集、穆仁 (Mu ren) 訳「韓国的蒙古語研究」(漢語版)、『蒙古学情報』第3期、2001年9月、28—29頁。

<sup>76</sup> この段落は、成百仁の「韓国のモンゴル語研究」と南相互の「近何十年以来の韓国学者によるモンゴル学研究成果索引」を参考にしてまとめた。

<sup>77</sup> 南相互 (Nam Sang geung) 編集、瞿大風 (内蒙古大学図書館) 訳「近幾十年來韓国学者的蒙古学研究成果索引」(漢語版)、『モンゴル学情報』第3期、2000年9月、53—64頁。

the Chin and the Yuan Period” Chungkuk hakpo8, 1968.」(金元时期的文学批評《中国学報》、第8卷、1968年)という論文が発表されて以来、モンゴル学研究は韓国の研究者に注目され、多くの研究成果をあげてきたと書かれている。

これらの研究者が行ったモンゴルの民間伝説・口頭文学・説唱芸術としては、「Park Won-kil, 朴元吉: “The Comparative Study of Oral Myth in Khalkha-gol and Creation Myth of Chumong Nation-Centered on Mongol Names” Joint Korea-Mongol Expedition, vol. 1, 1992.」<sup>78</sup>(喀尔喀河地区的口頭伝説与朱夢国建国伝説的比較研究專論蒙古人的名前、《韓国蒙古連合考察》、第1巻、1992年)という論文を筆頭に、モンゴル民族の説唱芸術とその書目や伝説・伝記が注目され、次第にハルハモンゴルおよび内モンゴル自治区に存在している説唱芸術を研究するようになった。

そして、上述したモンゴルの説唱芸術に関する論文以外に、「“The Making of Sui-hu-chuan and Sung-Yuan Society” Journal of Chinese Language and literature, 24, 1994.」<sup>79</sup>(《水滸伝》的創作与宋元社会、《中国言語文化会刊》、第24巻、1994年)、朴相圭氏<sup>80</sup>の「モンゴル民謡の概要と性格研究」(蒙古民謡概要与性格研究)、「韓国・モンゴルの愛情民謡」(韓国・蒙古愛情民謡、1982年)、著作『モンゴル民謡研究』(蒙古民謡研究)(開文社、1983年)などの研究成果が挙げられる。

## 九 フランスの研究

フランスのモンゴル学研究者と言えば、すぐに思い出すのは Paul Pelliot (伯希和) 氏である。彼は 1878 年から 1945 年間に生きていた中世期のアジア言語を研究して、多くの研究業績を残した天才的な研究者であり、彼がフランスのモンゴル学研究を開始したと言われている<sup>81</sup>。

1955 年、G・J・MIXAI-LOV 氏は、『モンゴル文学史』(Ocerk isto-rii sovremennpj

---

<sup>78</sup> 同上、南相互の論文、第 60 頁。

<sup>79</sup> 同上、南相互の論文、第 62 頁。

<sup>80</sup> 崔起鎬(Choi kee ho) 編集、朴永光(中央民族大学文学芸術研究所) 訳「韓国的蒙古学研究概要」(漢語版)、『蒙古学情報』第 2 期、2000 年 6 月、49-52 頁。

<sup>81</sup> 鄂法欄(Frangols Aubin) 編集、耿昇(中国社会科学院歴史所) 訳「法国蒙古学研究」(漢語版)、『蒙古学情報』第 1 期、1998 年 3 月、26-43 頁。



mongoljskoj literatury, Moskva (1955 年) という著作で、有名なロブサアン・ホールチがホール(楽器)を弾きながら英雄叙事詩を語っていたときの様子を紹介した。フランス語で書かれた序文には、吟遊詩人であるロブサアン・ホールチが革命の嵐を生き抜いた生涯を通して、そこに英雄叙事詩を見たと言っている<sup>82</sup>。

しかし、20 世紀 70 年代までのフランスのモンゴル学研究は、主にモンゴルの歴史と言語を中心に限られた範囲で行われた。本格的なモンゴル学研究は、1968 年に Roberte Hamayou (阿瑪咏) 氏がフランスの東方言語と文明研究学院に、初めて現代モンゴル語を教学するカリキュラムを設置したことに始まる。その時からフランスでモンゴル学のフランス学派が次第に台頭し、研究者は以前のモンゴル史とモンゴル語の研究をもとにして、さらにモンゴル・シャーマニズム、民族学、文化人類学、口頭文学、民間故事、説唱芸術などの領域を研究しはじめた<sup>83</sup>。

1970 年に、Roberte Hamayou (阿瑪咏) 氏の努力によって、フランスのモンゴル学研究の中心となる「モンゴル研究センター」が創設され、モンゴル学研究者が急増し、研究活動が盛んになった。1978 年、Roberte Hamayou 氏は「モンゴル研究センター」を「モンゴルとシベリア研究センター」に改称し、モンゴルの各部族の関係・継承系譜や民族学研究的基盤を樹立し、モンゴル・シャーマニズムと英雄叙事詩が世界中に伝播することを促進し、「獵人・シャーマン・説唱芸人：三種の説唱人研究」「ブリヤート神話と民族起源の研究」「モンゴル民間音楽：ラワシ・ワカシの磁気テープ」「何首のブリヤート民謡」などの論文を発表した<sup>84</sup>。

アイワン氏は、1983 年に「内モンゴルの詞話作品<本子故事>研究」という論文を『モンゴルとシベリア研究』という研究誌に掲載した。この論文では、胡琴の伴奏で物語を語るパジェ・ホールチの語った『水滸伝』を収録し、内モンゴルの東部地区に位置しているパジェ・ホールチの出身地であるジリム盟・ジャルート旗の情報と北京版『水

---

<sup>82</sup> 田中克彦「リンチン博士のモンゴル伝承研究」(日本語版)、『民族学研究』第 27 卷 3 号、1963 年、603-605 頁。

<sup>83</sup> 鄂法欄 (Frangols Aubin) 編集、耿昇 (中国社会科学院歴史所) 訳「法国蒙古学研究」(漢語版)、『蒙古学情報』第 1 期、1998 年 3 月、37 頁。

<sup>84</sup> 同上、鄂法欄の論文、41 頁。

濟伝』を紹介・分析した<sup>85</sup>。

## 第二節 中国国内の研究者による研究

中国国内のホーリンウリゲル研究は、中華人民共和国が正式に建国された1949年に着手され、1955年10月25日にホジェ（皓傑）氏とチェンミン（錢民）氏が、『内モンゴル日報』に「内モンゴルの民間芸術家・パジェ」<sup>86</sup>（内蒙古民間芸術家・琶傑）という文章を発表したことに象徴されるようにして始まった。それゆえに、国内のホーリンウリゲル研究が着手された1949年から計算すると、2020年までに71年の研究史を持つことになる。

しかし、周知のように、中国では1966年5月から1976年10年までに「無産階級文化大革命」が発動され、漢族を含む55少数民族の民衆・文化・生活などのすべての面で被害を受けたので、1949年から1965年までに蓄積したホーリンウリゲル研究の業績は償却されてしまった。そのため、中国国内のホーリンウリゲル研究は、実際には、61年の研究史にすぎないと言っても過言ではないことになる。

そこで、これまで出された論文と各出版社からの出版物を整理した上で、国内の研究者によるホーリンウリゲルの研究を1949年から1965年、1966年から1976年、1977年から2000年、2001年から2020年の四つの段階に分けてまとめていきたい。

### 一 1949年から1965年の研究

1949年10月1日、中国共産党の指導者と国家の元首は、北京市に集まって国家的な式典「開国大典」（建国式典）を行ったが、それから社会主義の中華人民共和国、即ち、新中国が正式に成立した。建国初期の新中国では、社会全体の環境は安定し、民衆の生活や各民族の文化や芸術も復興した。

1952年6月12日、国家教育部は「全国口頭教育学校1952年の夏休み期間に新入生

---

<sup>85</sup> 同上、鄂法欄の論文、37頁。

<sup>86</sup> パジェ（琶傑）・ホールチの本名は、パガパザバ(ᠯᠠᠭᠠᠯᠠᠯᠠ)と称されている。彼は著名な民間の歌手、ホールチ、ゲセルの吟遊詩人、英雄叙事詩の説唱芸芸術家であり、1902年に内モンゴル自治区のジャールト(扎魯特)旗に生まれ、1962年4月7日に北京で逝去した。代表作は、「格斯尔伝記」、「格力布爾召贊」「駿馬贊」「婚礼贊」「故郷贊」などがある。

を募集する規定について」（关于全国高等教育学校一九五二年暑假招收新生的規定）という文書を公布し、「教育部によって特別に批准された学校以外に、すべての学校が全国に統一した試験に参加する」という政策を採用した。それ以来、中国では「大学入試験制度」<sup>87</sup>（高考制度）が正式に確立され、それから各種の研究が開始した。

1955年の11月、ジャチ（嘉其）氏はホジェ（皓傑）氏とチェンミン（銭民）氏の研究を続けて、「民間芸術家・モーヒイン（毛依罕）」<sup>88</sup>（民間演唱家・毛依罕<sup>89</sup>）をテーマにして、『内モンゴル文芸』（内蒙古文芸）という雑誌の第11期に研究論文を発表した。それ以来、ホーリンウリゲルという伝統芸能に関連するホールチの研究、伝承系譜の研究、ホーリンウリゲルの流派の研究、民間芸人の語った書目の研究などが次々に発表されるようになった。

1956年1月14日、リジャシイン（李家興）氏の「草原にいる吟遊詩人・モーヒイン（毛依罕）」<sup>90</sup>（草原上の説唱詩人・毛依罕）という論文が、有名な『光明日報』に掲載された。また、同じく1956年に、著名な詩人・ザアンケジャ（蔵克家）氏は、モーヒイン（毛依罕）・ホールチの実家に行って調査を実施し、その資料を文字化して、「内モンゴル草原にいる吟遊詩人」<sup>91</sup>（内蒙古草原上の説唱詩人）という論文を『新観察』という雑誌に発表した。上記の2編は、有名なモーヒイン・ホールチを対象にして、彼の生涯、家庭状況、説唱特徴、伝承系譜、語ることのできる書目などの情報を紹介した。

そして、上記のホーリンウリゲル研究者の影響を受け、ナ・アサラット（那・阿薩日拉図）氏、モ・トゥモン（莫・托門）氏、チョウトナリン（朝克図那仁）氏、ブリグデェ（布日古徳）氏、エ・バダラハ（額・巴達拉胡）氏、クイゼン（奎曾）氏、トウヨウ（陶陽）氏、トウモン（托門）氏、リンチンガワ（仁欽嘎瓦）氏、エリドントウゲト（額

---

<sup>87</sup> 中国の大学入試験制度は、建国された後の1952年に実施され、「文化大革命」に時期に停止されてしまい、そして「文化大革命」が中止されたことによって1977年に回復した。

<sup>88</sup> 全福「胡仁烏力格爾研究述評」（漢語版）、『内モンゴル大学学報（哲学社会科学版）』第45巻第4期、2013年7月、33頁。

<sup>89</sup> モーヒイン（毛依罕）・ホールチは、1906年にジョーオダ盟に生まれた。1913年にジャールト旗に移住し定住し、1979年2月12日に病気で亡くなった。

<sup>90</sup> 朝克図「国内学者対胡仁烏力格爾的研究狀況」（漢語版）、『黒龍江民族総刊』第5期、2003年、105頁。

<sup>91</sup> 同上、朝克図の論文、105頁。

尔敦陶克濤) 氏、ウ・ボイン (烏・宝音) 氏、シゲ (西格) 氏、チョウトバヤル (朝克  
図巴雅尔) 氏とジャマン (賈漫) 氏などの研究者もホーリンウリゲルに注目して研究し  
はじめた。

## 二 1966年から1976年の研究

1966年5月に、「無産階級文化大革命」の運動が勃発し、漢族自身の文化だけではなく、モンゴル族の文化も激しく攻撃を受け、全国の各地域・各民族を席卷した。それゆえに、その時にちょうど創設されたホーリンウリゲル研究のグループは解散しなければならない状態になり、モンゴル族の伝統文化や民間文化は重大な損失を受けることになった。とりわけ、ホーリンウリゲルの研究に密接な関係があるモンゴル族の伝統文化と伝統音楽、ホーリンウリゲルの語り手であるホールチ、各モンゴル族の地域に創設されていたホーリンウリゲルのウリゲルインゲル (説書館) などは厳しい状態に陥った<sup>92</sup>。

第一に、上記の1949年から1965年の間に、ホーリンウリゲルの研究は詩人や研究者の推進によって一時的に盛んになっていた。しかし、「無産階級文化大革命」の運動が勃発したことにより、もともとホーリンウリゲルの研究に尽力していた研究者・知識人・文化人は、「反動分子」「反無産階級革命の分子」などという批判を受け、それ以前に発表されたホーリンウリゲルに関する論文は「無産階級の思想」に反するものとしてすべて焼かれることになった。

第二に、政府は建国初期に「伝統文化を改造し、選択的に保留する」という文化政策を実施していたが、「文化大革命」の運動が勃発して以来、以前の文化政策をすべて廃棄し、全般的に否定するという逆方向に転じた。この中では、ホールチは「破四旧」と「立新四」というスローガンの影響によって、「牛鬼蛇神」「懐旧者」「叛国者」「反動のホールチ」として批判されることになった。それゆえ、このような条件のもとで少数のホールチが極左の内容に語るものを変えて説唱を続けていたが、多くのホールチは以前のように民間でホーリンウリゲルを披露するという活動はすべて禁止され、無数の

---

<sup>92</sup> この部分の内容を執筆するため、楊玉成『胡尔齐: 科尔沁地方伝統中的説唱芸人及其音楽』(漢語版)、上海音楽学院出版社、2007年を参照した。

本子故事と胡琴も没収・破棄されたと言う。例えば、ニマ（尼瑪）の『言語名匠』<sup>93</sup>という著作では、「東部モンゴル地区で有名な布林バヤリル（布仁巴雅爾）・ホールチは、無産階級分子に何度も非難されて、両眼とも失明してしまった」と記述されているが、このような事例は枚挙にいとまがないほど多かった。

第三に、建国初期から創設された「民間文化を発展させる体制」はすべて停止され、モンゴル族の各地域に建てられた「ホーリンウリゲルの説書館」（ウリゲルインゲル）は撤廃や改革され、文化に関わる仕事に従事していた人々は停職される状況になった。例えば、ヤンサンダン（楊山丹）氏の「魯北説書館について論じる」<sup>94</sup>（試述魯北説書館）の記載によると、1957年8月に内モンゴル自治区・ジャルト旗（扎魯特旗）で創設された「魯北説書館」は「文化大革命」運動によって撤廃され、説書館に所属しているホールチは「反逆者」「内人党」として批判された。

第四に、「文化大革命」の運動が勃発したことによって、ホールチが民間の集落や説書館に行きホーリンウリゲルを上演することが不可能となってしまう、ホーリンウリゲルの継承活動は断絶した。この間、年寄りのホールチは弟子を受け入れることができず、ホーリンウリゲルが「師伝」によって継承されるという方法は阻止された。

第五に、「文化大革命」が開始した1966年5月から1976年10月までに、多数の民間芸人・知識人・文化人・ホールチが亡くなったため、彼らの持っていたモンゴル語、チベット語、漢語、満州語の知識およびホールチの持っていた伝統的な技法や技術が次第に消えてしまった。また、多数のホールチが自身で胡琴や本子故事を燃やしてしまったため、英雄叙事詩、マンガスインウリゲル、ベンスンウリゲル、ホーリンウリゲルの古代書目などの資料が消滅した。

要するに、「文化大革命」が行われた10年間に、ホーリンウリゲルという伝統芸能および語り手のホールチは政治運動に巻き込まれ、ホールチの自由が奪われて、激しい批判を受けた。それゆえに、「文化大革命」の影響はそれが行われた10年間だけではなく、20世紀の後半に至っても強い影響を受けたため、ホーリンウリゲルというモン

<sup>93</sup> Нима «Өгөөс 9 тэрэг эрхэмтэй» (モンゴル語版)・1997 он・105 хуудас

<sup>94</sup> 楊山丹「試述魯北説書館」(漢語版)、『大衆文芸』第16期、2014年8月、262頁。

ゴル族の説唱芸術は全面的に衰退する道に入ってしまった。

### 三 1977年から2000年の研究

1977年に「文化大革命」が終わると、まず、国家教育部によって10年間停止された「大学入試試験」の制度が復活した。続いて、1978年12月18日から22日にかけて、中国共産党の歴史上最も重要な「中国共産党・第十一次中央委員会・第三次全体会議」が北京で開催された。この全国大会において、「文化大革命」の指導工作で失った点を批判し、「経済回復を中心に発展させる」という国家戦略を決定し、全国の各地域で生活している各民族の文化などの事業は正常な軌道に乗せられた。

1978年5月17日、ホーリンウリゲル研究者のツァーガンバルソ（查干巴日蘇）氏とエルデニバトゥル（額尔德尼巴特尔）氏が共同で書いた文章「ホーリンウリゲルの新生」<sup>95</sup>（胡仁烏力格爾之新生）は、『フルンボイル日報』（呼倫貝爾日報）で発表された。この文章では、ホーリンウリゲルという伝統芸能がどんなものなのかを紹介したうえで、「文化大革命」で破壊されたホーリンウリゲルを復活させることを展望した。これは、「文化大革命」が終わった後、ホーリンウリゲルに関して書かれた初めての文章であり、ホーリンウリゲルの継承に対して特別な意義があった。

1978年、「文化大革命」の影響で10年間停止していたバヤナ（巴雅納）氏の研究が再開され、「ホーリンウリゲルの革新動向を論じる」<sup>96</sup>（論胡仁烏力格爾的革新趨勢）という文章を発表し、それから伝統芸能ホーリンウリゲルを革新する方法を述べ、ホーリンウリゲルの研究活動を立ち直らせた。それ以降、テェ・ガダソ（特・嘎達蘇）氏、ウンゲンソワ（文根蘇娃）氏、バ・アラタンバガン（巴・阿拉坦巴根）氏、ウ・ソグラ（烏・蘇古拉）氏、ウ・シンバヤル（吳・新巴雅爾）氏、ロスル（勞斯爾）氏、ナムハン（那木漢）氏などの研究者がホーリンウリゲルに注目し、研究論文が相次いで発表されるようになった。

その中でナムハン（那木漢）氏は、初めて「胡尔沁説書」という言葉を使って、内部

---

<sup>95</sup> 朝克図「国内学者对胡仁烏力格爾的研究狀況」（漢語版）、『黒龍江民族総刊』第5期、2003年、106頁。

<sup>96</sup> 巴雅納「論胡仁烏力格爾的革新趨勢」（漢語版）、『内モンゴル日報』第3期、1978年。

資料を用いた論文を発表し、モンゴルジン旗地域に特有の文化要素を詳しく紹介した。その後、モンゴルジン旗（阜新モンゴル族自治県）の政府機関・民間組織・説唱芸人・学術研究者の間にも「胡尔沁説書」という言葉が浸透し、この言葉を使って公文書を配布したり、文章を書いたり、論文を発表したりするようになった。

#### 四 2001年から2020年の研究

2000年10月、中共中央15回全国大会が北京で開催され、本大会で「中共中央〈十五〉企画の提言について」（中共中央关于〈十五〉規劃的建議）という政策が通過した。この企画書では、「文化産業の政策を改善する、文化市場の建設と管理を強化する、文化産業の発展に関する事業を促進させる」ことが国家〈十五〉企画の重点として提示された。それゆえに、2000年から「文化産業」という言葉が初めて「全国〈十五〉企画綱領」に導入され、国家を代表する正式な文化政策が実施されることが決定された。

また、同年には、前述したナムハン（那木漢）氏の跡継ぎとして、リチンソン（李青松）氏も「胡尔沁説書」という用語を使って、漢語で「胡尔沁説書」という著作を書き、現在の学术界で吟遊詩人のホールチが低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語でウリゲルを語る上演形式を「胡尔沁説書」と呼び、研究論文に発表されるようになった。

2001年12月11日、中華人民共和国が加盟国として世界貿易機関（World Trade Organization）に加入して以来、中国の文化産業は最も大きな局面に直面し、発展する貴重な機会を得た。そして同年、中国の昆曲（地方戯曲）、古琴（お琴）、新疆ウイグルのムカム（大曲）、モンゴル族のオルディンドー（長調歌曲）は、ユネスコ執行委員会による傑作宣言が出された。

2004年、中国政府はユネスコと「無形文化遺産保護条約」を締結し、全国の各地域に住む56民族を対象に、先祖から代々に継承してきた「伝統文化」を掘り出し、「非物質文化遺産」として保護する政策を実施しはじめた。そこで国務院は、2005年、全国の31省、自治区、直轄市、香港（ホンコン）、澳門（マカオ）から殺到した1300件以上の申請書を整理し、「第一批国家非物質文化遺産項目リスト」を作成して選定する作業を行った。

2006年5月20日、国務院の厳格な審査を通過した518件が「中華人民共和国・第一次非物質文化遺産」の項目として公布され、内モンゴル自治区のジャルート（扎魯特）旗とホルチン右翼中旗、吉林省の前ゴルロス（郭爾羅斯）モンゴル族自治県、遼寧省の阜新モンゴル族自治県3省4地域が共同に申請した「モンゴル族ウリゲル（蒙古族烏力格尔）」（276-V40番）も登録され、同時に「国家級非物質文化遺産名録」にも収録された。これによって、2000年前後の時期にはあまり研究者から注目されなかった「モンゴル族ウリゲル」だが、国家級非物質文化遺産に選定された2006年から徐々に研究が増加し、近年は各大学や研究機関の博士課程や修士課程に所属している研究者によって、国内の「モンゴル族ウリゲル」の研究が盛んになってきている。

## 小結

この章では、モンゴル語・漢語・日本語などの言語で書かれ、翻訳・記述・記録された史料・資料を使って、これまでのモンゴル国・ロシア・ドイツ・日本・ハンガリー・イギリス・アメリカ・韓国・フランス・中国10カ国の研究者によるホーリンウリゲルの研究を総括し、1929年から2020年まで91年間の「ホーリンウリゲル研究史」の再構成を試みた。

前述したように、ホーリンウリゲルに関する研究は、モンゴル国で始まった初期に、研究者が「ベンスンウリゲル」（本森烏力格尔）と定義したので、その後長い間、ホーリンウリゲルを研究する各国の研究者も、モンゴル国の研究をモデルにして研究を進めてきた。

しかし、時代の変遷およびホーリンウリゲルに関する研究が深化することによって、20世紀の50年代末期と60年代の初期において、ホーリンウリゲルの本拠地と称されている東部モンゴル地区では、吟遊詩人のホールチが低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語でウリゲルを語る上演形式を「ベンスンウリゲル」（本森烏力格尔）と定義することは不適切であるという観点が出された。そして、「ホーリンウリゲル」（胡仁烏力格尔）や「ホールチンウリゲル」（胡尔沁説書）のように定義するのが最も適切であるという観点がでて、現在まで三つの定義が使われている状況にある。

また、上述した10カ国のホーリンウリゲルに関する研究をまとめると、国外と国外



の研究は一様で、先にホーリンウリゲルの語り手であるホールチの生涯の状況・説唱の風格・説唱の脚本などの情報を収集することから始まったことが考えられる。そして、様々な文化圏に所属する研究者の研究が深化することによって、次第に文学の観点からホールチの語る脚本を分析する研究者が増えてきた傾向が観察できる。国外のホーリンウリゲルの研究が多くの業績を残し、それは、その後始まる国内の研究者が参考にすべき研究の成果および基礎的な理論を提供した点で大きな意義があった。

国外と国内の研究状況を比べると、国外の研究者は、政治・経済・地域文化など様々な条件が限られていて、ずっと昔に分析された内容を繰り返している傾向が見られ、新たな研究成果があまり生み出されていず、ホーリンウリゲルの研究は停滞気味であるというのが現状である。国内の研究は、始まった時期が国外より遅れていたことは事実であるが、ホーリンウリゲルの本拠地およびより近い所にいるなど有利の条件があるため、前人が研究した内容をしっかり整理・分析した上で、その中からまだ解決していない領域や分野に対して研究を進めることができ、次第に新たな研究成果を提供している。現在の研究状況は、主客転倒して国内の研究に集中するようになってきたといえる。

しかしながら、国内のホーリンウリゲル研究では、現存の現地史料・郷土資料・内部資料に関する収集・整理・掘り出す作業が十分に実施されていない状態であり、一部の研究者が論を進めている現象が見られるので、すでに書かれている専門的な著作や研究論文の信憑性が非常に高いとはいいがたい。

例えば、ホーリンウリゲル研究の一部となるベンスンウリゲル（本森烏力格尔）の研究者・バイイウリウン（白玉栄）氏は、投稿論文の「蒙古本子故事『五伝』写作文化背景」<sup>97</sup>（モンゴル本森烏力格尔『五伝』の創作文化背景）で、長編章回体歴史小説『興唐五伝』の作者について、「学者从 20 世紀 80 年代開始研究、部分学者認為『五伝』作者是「蒙古貞葛根廟」喇嘛恩和特古斯、此結論根拠民間説法、并無其他傍証、也需要更進一步的考証。（日本語訳：学者は 20 世紀 80 年代から研究し始め、一部の学者が『五伝』の作者は「モンゴルジンゲゲンスム」（蒙古貞葛根廟）のラマ僧・エンケテグス（恩

---

<sup>97</sup> 白玉栄「蒙古本子故事『五伝』写作文化背景」（漢語版）、内蒙古民族大学学报（社会科学版）、第 43 卷・第 2 期、2017 年、72 頁。

赫特古斯)と考えているが、この結論は民間で流行している言い方で、別の傍証がなかったもので、さらに論証する必要がある)」と記述している。

それゆえに、上述した内容によると、白玉栄氏の投稿論文が出版される 2017 年までに長編章回体歴史小説『興唐五伝』に関する研究では、小説『興唐五伝』の作者はエンケテグス(恩赫特古斯)である史実を論証できていないことになり、以前の研究者の論証した内容も民間で流行しているに過ぎず、実際に論文として発表された証拠はなかったと理解しても良いだろうと考えている。

しかし、筆者はモンゴルジン旗(阜新モンゴル族自治州)に行つて、長編章回体歴史小説『興唐五伝』の作者に関する史料・資料を収集する時に、蒙古語文工作事務局の職員であったリュウウンシャン(劉文祥)氏から内部資料である「関于蒙古族名著『興唐五伝』及其作者的采訪調査」<sup>98</sup>を見ることができた。この内部資料に書かれている内容によると、劉文祥氏は白玉栄氏の論文が発表される 32 年前の 1986 年に、仕事以外の余暇の時間を利用して、長編章回体歴史小説『五伝』の内容および作者に関する史料・資料を収集・整理・分析を行っていた。

その上で、当時 80 歳前後だった瑞應寺のラマ僧退職者・ヤェシ(叶喜)<sup>99</sup>、サンジヤ(賽音吉雅)<sup>100</sup>、バト(巴圖)<sup>101</sup>、ホバト(胡巴圖)<sup>102</sup>などの 30 名、元蒙古語文工作事務局の職員・有名な民俗家であったグウジェンイ(郭振義)(当時 80 歳)、佛寺鎮解放村村民のボインヌグル(宝音努尔)、ブバ(布巴)、ウボサン(吳宝山)などの老人、合計 50 人以上の人を対象に聞き取り調査を実施して、小説『興唐五伝』の作者はエンケテグス(恩赫特古斯)であるという史実を論証した前例があるので、白玉栄氏の記述は

---

<sup>98</sup> 本内部資料(論文)の具体的な内容については、資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第 2 回の調査内容・協力者 5 番」を参照されたい。また、この本内部資料については、1986 年 7 月 24 日に、「内蒙古師範大学学報」の主編・教授であるボインバト(宝音巴圖)氏が、小説『五伝』の作者を明確するため阜新モンゴル族自治州に来て、劉文祥氏と意見を交換する時に、「劉さんの論文は、事例正確・比較可靠」と評価してくれたと書かれてある。これによると、劉文祥氏の論文『関于蒙古族名著『興唐五伝』及其作者的采訪調査』は、教授が阜新モンゴル族自治州に来る前に、すでに別の学術誌で発表されたことが知られるはずである。

<sup>99</sup> 当時、佛寺ラマ僧は老人ホームの院長であった。

<sup>100</sup> 当時、佛寺ラマ僧は老人ホームの主任であった。

<sup>101</sup> 元瑞應寺のラマ僧・佛寺鎮佛寺村の住民であった。

<sup>102</sup> 元瑞應寺のラマ僧・佛寺鎮八道嶺村九家子屯住民であった。

先行研究に関する検討が不足だったと判断することができる。

そこで筆者は、本論文でホーリンウリゲルの「変容史」を研究することを通して、これまでの先行研究において解決しなかったエンケテグス（恩赫特古斯）・ホールチおよびダンスニマ（丹森尼瑪）・ホールチなどの基礎的な課題を中心に論じ、さらにグローバル時代においてホーリンウリゲルという伝統芸能が直面している絶滅の問題と、中国の国家級非物質文化遺産名録に登録されて以降の現状およびホーリンウリゲルの伝承と保護に存在する課題を解明して、ホーリンウリゲルの基礎研究により正確・精緻な理論にしたいと考えた。

## 第二章 ホーリンウリゲルの概念と構成要素

本章では、第一節の「研究者による諸観点の成立」と第二節の「ホーリンウリゲルの構成要素—伴奏楽器・説唱脚本・吟遊詩人—」を設け、これまで研究者の提唱によって成立された三つの概念の形成経緯および由来について整理・分析した上で、さらに、ホーリンウリゲルという伝統芸能が構成される場合に必要不可欠な「三要素」となる伴奏楽器のホール（胡尔）、説唱脚本のウリゲル（烏力格尔）、吟遊詩人のホールチ（胡尔沁）について、それぞれ整理・分析・論証の作業を行う。

### 第一節 研究者による諸観点の成立

近年のホーリンウリゲル研究では、ボ・リーチン氏の提言した「ベンスンウリゲル」という概念を支持し、さらに、新たな視点から解説している研究者が少なくない一方で、「ホールチンウリゲル」という概念にも支持しながら研究を進めている研究者も次第に増加する傾向がある。しかしながら、本論文では、総合的に考慮した上で、研究者の中で最も頻繁に使われている「 $\text{ᠬᠣᠷᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠢᠭᠡᠷ}$ 」を採用し、日本語のカタカナで「ホーリンウリゲル」と表記することにした。

#### 一 ベンスンウリゲル

第一章の内容を振り返ると、1959年以前のモンゴル社会および学術研究界では、現在、我々が呼び出している「ホーリンウリゲル」という概念・言葉がまったくなかった事実を知ることができる。その一方で、初めて吟遊詩人のホールチが伴奏楽器である低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語で説唱脚本のウリゲルを語る上演形式を「ベンスンウリゲル」と定義した研究者は、モンゴル国の有名な作家・学者であるボ・リーチン氏であった史実も知ることができる。

ボ・リーチン氏は、1959年にモンゴル国の首都・ウランバートルで開催された「第一回国際モンゴル学大会」<sup>103</sup>において、初めて「モンゴル族の民間文学におけるベンスンウリゲル」を題に、「ベンスンウリゲル」に関する研究報告書を読み上げ、正式に「ベ

---

<sup>103</sup> 全福「胡仁烏力格尔研究述評」（漢語版）、『内蒙古大学学报（哲学社会科学版）』第45卷第4期、2013年、31-32頁。

「ベンスンウリゲル」という学術観点・概念を発表した。それゆえ、それ以降の長い間、モンゴル国の研究者だけでなく、ロシア・ドイツ・日本・ハンガリー・イギリス・アメリカ・韓国・フランス・中国などの各国の研究者も、ボ・リーンチン氏の影響を受けて、吟遊詩人のホールチが伴奏楽器である低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語で説唱脚本のウリゲルを語る上演形式を「ベンスンウリゲル」と呼ぶようになった。

例えば、モンゴル国の研究者の中では、ボ・リーンチン氏の以降、研究者のツェ・ダムディンスレン、ダ・ツェレンソデナム、エ・テムンジリガル、ロシアの漢学者であるバ・ラ・リフティンとモンゴル学研究者であるサ・ヨ・ネケリュウトフ、ドイツのモンゴル学研究者のワルター・ハイシヒなどの各氏は、モンゴル語に翻訳された「ベンスンウリゲル」（説唱脚本）を対象にして研究した。また、近年の「ベンスンウリゲル」に関する研究の状況を紹介しますと、各民族大学に所属している修士課程と博士課程の学生および各研究機関に所属している研究員が主力となってきた。

上述したように、「ベンスンウリゲル」という言葉は、学術界で専門用語として使用されるようになった経緯を紹介してきたが、特に注意すべき点だと考えていることが一つある。それは、「ベンスンウリゲル」という名称は、ボ・リーンチン氏が自分の学術観点を出すためにわざわざ作った言葉ではなく、東部モンゴル地区の民間ですでに使われていた慣用語であり、その言葉がボ・リーンチン氏の提唱によって初めて概念化され、学術界で専門用語として使われるようになったわけである。

とりわけ、漢文古典小説を指す「ベンスンウリゲル」は、主にジョソト（卓索圖）盟、ジョーオダ（昭烏達）盟、ジリム（哲里木）盟、フルンボイル（呼倫貝爾）盟、シリシ（錫林郭勒）盟、ヒンガン（興安）盟などの東部モンゴル地区を中心に分布しているので、モンゴル国のボ・リーンチン氏には「ベンスンウリゲル」という言葉を使う条件が満たされていない。しかし、ボ・リーンチン氏は、東部モンゴル地区からモンゴル国に移住したロブサアン・ホールチの語った「ベンスンウリゲル」を録音・文字化した経験があるので、東部モンゴル地区の事情に非常に詳しいロブサアン・ホールチから「ベンスンウリゲル」に関する情報を得た上で、この言葉を概念化したことはあり得ると考えられる。

それゆえ、ベンスンウリゲルはモンゴル語に翻訳された漢文古典小説を指すように、この言葉の由来も漢語の「本子」（ベンス）という言葉の借用し、さらに、モンゴル語の「ウリゲル」と合わせて形成された。そして、モンゴル語で言う「ᠪᠡᠩᠰᠢᠨᠤᠷᠢᠭᠡᠯᠢ」<sup>104</sup>（ベンスンウリゲル）という言葉の詳細を解説すると、漢語の「ベンス」（本子）には、ノート、書物、冊子などの意味があり、モンゴル語の「ウリゲル」（烏力格尔）は故事という意味合いがあったので、漢語「本子」の発音を捩ったモンゴル語の「本森」をモンゴル語の「烏力格尔」と合わせると、現在のような「ベンスンウリゲル」（本森烏力格尔）となり、明清の時代にモンゴル語に翻訳された漢文古典小説を指すことになる。

そして、東部モンゴル地区では、説唱芸人の説唱形式によって、ベンスンウリゲルチ<sup>105</sup>という語り手は、伴奏楽器を使わない状態で、本森（本子）に記録している内容を一字一句で説唱する方式、伴奏楽器である低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、「本森」（ベンス）に書かれている内容を語る方式、伴奏楽器を使わない状態で「本森」の内容を王侯貴族や非識字者に朗読してあげる方式の三つがある。この中で伴奏楽器を使わない状態で説唱と朗読する方式は、現在はほとんど消えてしまったが、低音のドリボンウタストホールを弾きながら語る方式は、ホーリンウリゲルの一部として東部モンゴル地区の広い範囲で伝播し、「ベンスンウリゲル」の朗読書目と説唱脚本は三つの大きな種類と 300 部以上の書目で語り継がれている。

この三つの種類の一番は、モンゴル民族に特有の英雄叙事詩、民間故事、神話伝説、長編歴史小説、長編叙事民歌である。例えば、『江格尔汗』『格斯尔汗』『成吉思汗伝記』『蒙古秘史』『満都海斯琴』などの伝統的な書目である。二番は、モンゴル語に翻訳された漢文古典小説である。例えば、呉承恩の『西遊記』、蒲松齡の『聊斎志異』、羅貫中の『三国演義』、施耐庵の『水滸伝』、曹雪芹の『紅樓夢』などの翻訳文学作品である。三番は、故事の主人公の名前と兵器は漢族のものであるが、登場人物の性格と容貌はモ

---

<sup>104</sup> モンゴル語の「ᠪᠡᠩᠰᠢᠨᠤᠷᠢᠭᠡᠯᠢ」という言葉については、日本語でもともとモンゴル語の発音に従って、カタカナで「ベンスンウリゲル」と表記しているが、漢語では「本森烏力格尔」、「本子故事」などの形が異なる表記がある。本稿では、日本語のカタカナ表記「ベンスンウリゲル」に統一して記述する。

<sup>105</sup> ここで言う「ベンスンウリゲルチ」（本森烏力格尔沁）とは、前述したマングスインウリゲル（蟒古斯因烏力格尔）とホーリンウリゲル（胡仁烏力格尔）の語り手と一様で、「ベンスンウリゲル」を語るほかには、英雄叙事詩、民間故事、長編歴史小説も語られる才能がある説唱芸人を指している。

ンゴル化された創作文学の作品である。例えば、前述したエンケテグス（恩赫特古斯）の創作した『興唐五伝』は、このジャンルの代表作となる。

## 二 ホーリンウリゲル

現存の文献資料によると、大昔、東部モンゴル地区に集住するモンゴル人は、吟遊詩人のホールチが伴奏楽器である低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語で説唱脚本のウリゲルを語る上演形式を「ᠬᠣᠷᠢᠨᠤᠯᠢᠭᠡᠷ」(ホーリンウリゲル)と呼ばず、「ᠤᠯᠢᠭᠡᠷ ᠬᠣᠷᠢᠨ」(ウリゲルを語る)と言い、視聴者の場合は、ホールチが低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語で様々なウリゲルを語ることを「ᠤᠯᠢᠭᠡᠷ ᠬᠣᠷᠢᠨ」(ウリゲルを聴く)と言い続けてきた事実が分かる。

例えば、筆者が第1回のインタビュー調査を実施する時に、調査協力者5番<sup>106</sup>から「私は9歳から父の指導を受け、伝統楽器ドリボンウタストホールの弾き方と技法、説唱芸術のホルボー（好来宝）と短編・中編・長編ウリゲルの語り方と表演方法などの知識を学んだ。その後にしばらくして、父が親戚や友達からお金を借りて、19元（人民元）を使って当時人気があった「紅灯ラジオ機」（紅灯牌收音機）を買ってくれた。それゆえ、私はその貴重な「ラジオ機」を使って、哲里木盟の蒙古語ラジオ局、阜新蒙古語ラジオ局、フルンボイル（呼倫貝爾）の蒙古語ラジオ局で放送する「ウリゲル」の番組を聴いたが、そのときは毎日、各ラジオ局の司会者から「今回の番組では、〇〇（人名）ホールチの語った〇〇（説唱脚本の名称）のウリゲルを放送する」という固定化した前口上で番組を開始していた」という情報を得た。

また、クイゼン（奎曾）氏の書いた「蒙古族民間芸人琵琶的生平与創作」<sup>107</sup>という投稿論文において、「1956年に内モンゴル自治区の首府・フフホトで最初の「蒙語説書庁」（モンゴル語説書庁）が建設され、有名なホールチ・パジェ（琵琶）とモーヒイン（毛依罕）を首府に招待し説書してもらっていた」という記述もあったので、少なくとも1956年までに東部モンゴル地区では「ホーリンウリゲル」という呼び方がまったく

---

<sup>106</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・ホールチ5番」を参照されたい。

<sup>107</sup> 奎曾「蒙古族民間芸人琵琶的生平与創作」（漢語版）、『中国民族』第21期、1964年、43頁。

なかった事実を確認できた。

それでは、現在の学术界で、吟遊詩人のホールチが伴奏楽器である低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語で説唱脚本のウリゲルを語る上演形式を「ホーリンウリゲル」と使い始めたのはいつなのかと言うと、研究者のナ・バダラフ（納・巴達拉胡）氏は、1962年5月27日に『内モンゴル日報』で発表された「ᠰᠢᠯᠡᠨᠢ ᠤᠯᠢᠭᠡᠷ ᠠᠨᠤ ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ」<sup>108</sup>（ホーリンウリゲルに関してパジエの語ったこと）という論文が注目されるべきであると考えている。本論文では、ナ・バダラフ氏が研究者の中で率先して、初めて「ᠰᠢᠯᠡᠨᠢ ᠤᠯᠢᠭᠡᠷ」（ホーリンウリゲル）という言葉を使って論文を発表したので、現在の学术界で使用されている「ホーリンウリゲル」という言葉は、研究者のナ・バダラフ氏がこの論文を発表した1962年から始まったと言えると考えられる。

そして、ナ・バダラフ氏の後、バヤナ（巴雅納）氏が論文「ᠰᠢᠯᠡᠨᠢ ᠤᠯᠢᠭᠡᠷ ᠬᠡᠮᠡ ᠰᠢᠯᠡᠨᠢ ᠤᠯᠢᠭᠡᠷ」<sup>109</sup>（1963年）、ウ・ボインヘシゲ（呉・宝音賀西格）氏が論文「ᠰᠢᠯᠡᠨᠢ ᠤᠯᠢᠭᠡᠷ ᠨᠠᠭᠤᠯᠠᠭᠤ ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ」<sup>110</sup>（1963年）でもすべて「ホーリンウリゲル」という言葉を使うようになってきたので、「ホーリンウリゲル」という言葉が学術的な専門用語として正式に使用された時期は20世紀の60年代であったという結論を導いてもよいと考えられる。

しかし、ここで注意すべき点は、前述の論文では、すべてモンゴル語の「ᠰᠢᠯᠡᠨᠢ ᠤᠯᠢᠭᠡᠷ」（ホーリンウリゲル）」という表記を使って論文を発表し、漢語で音訳して表記する「胡仁烏力格尔」はまったく使えなかったことがある。それでは、漢語で「胡仁烏力格尔」と表記・使用する習慣が何時から形成されたのかと言うと、20世紀の80年代の末期から90年代の前期に発表された論文が挙げられる。例えば、1989年に内部資料として出版されたサンプルノルブ（参布拉諾日布）氏の『蒙古胡尔齐三百人』という著作では、既に「胡仁烏力格尔」という言葉を使って「胡仁烏力格尔概観」（ホーリンウリゲルの概観）という文章を書いている。

しかしながら、近年のホーリンウリゲルに関する専門的な著作および投稿論文では、

108 ᠰᠢᠯᠡᠨᠢ ᠤᠯᠢᠭᠡᠷ ᠠᠨᠤ ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ（モンゴル語版）、ᠰᠢᠯᠡᠨᠢ ᠤᠯᠢᠭᠡᠷ ᠠᠨᠤ ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ、1962年5月27日

109 ᠰᠢᠯᠡᠨᠢ ᠤᠯᠢᠭᠡᠷ ᠬᠡᠮᠡ ᠰᠢᠯᠡᠨᠢ ᠤᠯᠢᠭᠡᠷ（モンゴル版）、ᠰᠢᠯᠡᠨᠢ ᠤᠯᠢᠭᠡᠷ ᠬᠡᠮᠡ、1963年2月2日

110 ᠰᠢᠯᠡᠨᠢ ᠤᠯᠢᠭᠡᠷ ᠨᠠᠭᠤᠯᠠᠭᠤ ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ（モンゴル版）、ᠨᠠᠭᠤᠯᠠᠭᠤ、1963年10月



学術的な専門用語として使う「 $\text{ᠬᠣᠷᠢᠨ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ}$ 」(ホーリンウリゲル)という言葉を表記する際に、わざわざ「・」を入れて「ホーリン・ウリゲル」「フーリン・ウリゲル」「胡仁・烏力格尔」などと表記される現象がかなり増えている。しかし、筆者は一種の伝統芸能を表現する専門用語にわざわざ「・」を入れて表記することは適切できないと考えている。以下、その理由を述べたい。

一つは、モンゴル語で「 $\text{ᠬᠣᠷᠢᠨ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ}$ 」(ホーリンウリゲル)と呼ばれ、表記されているこの言葉は、専門用語として吟遊詩人のホールチが低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語でウリゲルを語る上演形式を指しているのもので、モンゴル語の「 $\text{ᠬᠣᠷᠢᠨ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ}$ 」と「 $\text{ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ}$ 」の間に「・」を入れると、確かに上述した「ホーリン・ウリゲル」「フーリン・ウリゲル」「胡仁・烏力格尔」のような形になる。しかしながら、このように「・」を入れると、二つの言葉のように感じられるほか、専門用語としての意味がまったく変わってしまうからである。

もう一つは、モンゴル語の「 $\text{ᠬᠣᠷᠢᠨ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ}$ 」(ホーリンウリゲル)という言葉を分解すると、名詞の「 $\text{ᠬᠣᠷᠢᠨ}$ 」(ホール)、格助詞の「 $\text{ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ}$ 」(ウン)、名詞の「 $\text{ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ}$ 」(ウリゲル)の三つに分けられるが、名詞の「 $\text{ᠬᠣᠷᠢᠨ}$ 」は、モンゴル民族に有するすべての楽器を指す総称であり、格助詞の「 $\text{ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ}$ 」は、特に意味を持たないが、名詞と名詞を繋ぐ時に使われ、残りの名詞「 $\text{ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ}$ 」は、モンゴル民族に有するすべての物語・昔話・民間小説を指す総称の意味を持っているので、一種の伝統芸能を現す名称とする「 $\text{ᠬᠣᠷᠢᠨ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ}$ 」(ホーリンウリゲル)の間に「・」入れると、モンゴル語の文法を違反(この「・」を入れると「 $\text{ᠬᠣᠷᠢᠨ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ}$ 」となる)していることになるので、本論文では、もともとのモンゴル語の発音に従って、「 $\text{ᠬᠣᠷᠢᠨ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ}$ 」(ホーリンウリゲル)という表記を採用する。

### 三 ホールチンウリゲル

現在の学界では、吟遊詩人のホールチが伴奏楽器である低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語で説唱脚本のウリゲルを語る上演形式を「ベンスンウリゲル」や「ホーリンウリゲル」と定義している以外に、研究者の専攻や意志によって、この上演形式を「 $\text{ᠬᠣᠷᠢᠨ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ}$ 」(ホールチンウリゲル)と定義している人も少なくない。そして、現存の内部資料によると、初めてモンゴル語の発音に従って、漢語で「胡尔沁

説書」<sup>111</sup>（ホールチンウリゲル）という表記が登場したのは、内部資料であるナムハン（那木漢）氏の書いた「蒙古真的文化簡介」<sup>112</sup>（蒙古真文化の概要）という文章であった事実が分かる。

その後、漢語で「胡尔沁説書」と「胡尔沁説書（芸人）」と表記されるこの表現は、ジャンフシェン（項福生）氏主編の『阜新モンゴル族自治県民族誌』<sup>113</sup>、スチンモンヘイ（色琴恩孟和）氏主編の「胡尔・胡尔沁・胡尔沁説書」<sup>114</sup>、ソウリシェン（蘇立賢）・ズウボウジェン（朱宝珍）両氏の共編した『阜新モンゴル族自治県県誌』<sup>115</sup>、リチンソン（李青松）氏の著した『胡尔沁説書』<sup>116</sup>、チァンデェフ（常德福）・トウジイ（陶志）両氏の共編した『阜新モンゴル族自治県蒙古族教育簡史』<sup>117</sup>などがある。専門的な著作・博士修士論文・投稿論文・新聞記事・雑誌でも、「胡尔沁説書」という言葉を専門用語として使い続けている状況が把握できる。

また、前述した「ベンスンウリゲル」と「ホーリンウリゲル」と同様に、「ホールチンウリゲル」（胡尔沁説書）という概念も、ある研究者の提唱によって形成されたのではなく、大昔からモンゴルジン旗（地域）で慣用語としてすでに民衆の間で使われていたことがある。例えば、筆者は第1回のインタビュー調査を実施する時に、調査協力者4番<sup>118</sup>から「モンゴルジン旗（地域）では、低音のドリボンウタストホールを弾きながらウリゲルを語る上演形式について、昔から「ホールチンウリゲル」と呼び出し、伴奏楽器を使わずに、ウリゲルを語る上演形式を「ベンスンウリゲル」や「ヤバガンウリゲル」と呼ぶ習慣がある」という情報が得られている。

---

111 現在の学術研究界では、モンゴル語の「*ᠬᠣᠷᠢᠴᠢᠨᠤᠷᠢᠭᠡᠯ*」という言葉について、主に漢語で書く投稿論文で「胡尔沁説書」と「胡尔沁説書（芸人）」と表記して使われている。

112 中国人民政治協商会議・遼寧省阜新市委員会・文史資料研究委員会編『阜新文史資料・少数民族資料撰輯・第一輯（内部発行）』（漢語版）、阜新モンゴル族自治県機関印刷工場、1986年、119頁。

113 項福生主編『阜新蒙古族自治県民族誌』（漢語版）、遼寧民族出版社、1991年。

114 *ᠬᠣᠷᠢᠴᠢᠨᠤᠷᠢᠭᠡᠯ*（モンゴル語版）、*ᠬᠣᠷᠢᠴᠢᠨᠤᠷᠢᠭᠡᠯ*・1992年/8月1日発行。

115 蘇立賢・朱宝珍主編『阜新蒙古族自治県県誌』（漢語版）、遼寧民族出版社、1998年。

116 李青松『胡尔沁説書』（漢語版）、遼寧民族出版社、2000年。

117 常德福・陶志主編『阜新蒙古族自治県蒙古族教育簡史』（漢語版）、遼寧民族出版社、2007年。

118 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・ホールチ4番」を参照されたい。

現在の学术界では、吟遊詩人のホールチが低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語でウリゲルを語る上演形式について、最初からの「ベンスンウリゲル」と定義することから「ホーリンウリゲル」と定義して使われるようになり、さらにその後「ホールチンウリゲル」とも広く使われている実状について記述したので、ここで贅言しない。ここでは、各国の研究者による「ホーリンウリゲル」の定義を整理・検討した上で、辞書を調べて「ホーリンウリゲル」という言葉を分析して行きたい。最後には、ホーリンウリゲルを内部から観察するという視点から「ホーリンウリゲル」に対する定義を示したい。

これまでホーリンウリゲルに関する定義をまとめると、研究者の専攻および視点によって異なっている実情が把握できるほか、主に日本語や漢語やモンゴル語などの言語で書かれたものがよく見られる。そこで本論文では、上述した日本語・漢語・モンゴル語で書かれた代表的な解説文を提供しながら分析を行いたい。

日本語で書かれた解説文は、日本人研究者の蓮見治雄氏が自分の著作である『チンギス・ハーンの伝説—モンゴル口承文芸—』<sup>119</sup>において、「ホーリン・ウリゲルという語り物もある。これは内モンゴル東部のジェリム盟、ジョーオダ盟、シリングル盟、ホロンバイルなどの盟（行政単位の一つ）で、現在も盛んに語られており、発展途上にあるといってもよい。これはホール、つまり四胡、二胡、馬頭琴などの楽器の伴奏による物語の意で、私が入手した資料を整理してみると、一四一編の詞と曲からなっており、次に示す項目ごとに、詞も曲も異なっている」と説明した。

これ以外に、日本の各大学に留学し、博士過程や修士課程を経て学位の取得した研究者によるホーリンウリゲルの解説文もよく見られている。ボージンガン（包金剛）氏は博士論文「内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究—ホールチとホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドー」の序論では、「モンゴル民族の伝統芸能「ホーリン・ウリゲル」の「ホーリン」という言葉は、「ホール」という言葉に由来している。「ホール」とは、胡弓という意味で、「ホーリン」とは「胡弓の」という意味である。また「ウリゲル」は、「物語」を持っている。即ち、「ホーリン・ウリゲル」とは、胡弓の伴奏で語る

---

<sup>119</sup> 蓮見治雄『チンギス・ハーンの伝説—モンゴル口承文芸—』（日本語版）、角川書店、1993年、114頁。

物語を指している」<sup>120</sup>と説明した。

バトル（巴特尔）氏は、博士論文「東部モンゴル族の説唱芸術胡仁・烏力格尔の動態研究：「科尔沁」地域を中心に」<sup>121</sup>で、「胡仁・烏力格尔（HUGURUNULIGUR）」はモンゴル語で、その意味は胡琴物語である。モンゴル語の「胡仁」は「西納干・胡尔」（SINAGANHUGUR）の俗称である。「胡仁」は「胡尔」を指し、「胡尔」は「胡琴」のことである。これが胡仁・烏力格尔の由来である。つまり「胡仁・烏力格尔」が指すものは、胡琴の伴奏がある説唱故事ということになる。それはまたモンゴル語の「説書」の俗称でもある」と解説している。

バイリ（白利）氏は、修士論文「モンゴル族におけるホーリン・ウリゲルの保護と伝承—阜新モンゴル族自治州を事例として—」<sup>122</sup>で、「伝統芸能の「ホーリン・ウリゲル」とは戦争で活躍する英雄及び兵士と遊牧民達の感動的な物語の粗筋を述べるウリゲルを、ホールチが四弦のホールで伴奏しながら語り歌うものである。また、多くの曲があり、モンゴル族の芸術の一つである」と記述している。

漢語で書かれたホーリンウリゲルの解説文は、主に学位論文および投稿論文に出現しており、省略して簡単に解説した場合が多く見られる。陸雯氏は修士論文「蒙郭勒津地区胡仁・烏力格尔研究」<sup>123</sup>において、「胡仁・烏力格尔中胡仁是指胡琴的意思、与烏力格尔連在一起則是指芸人用四胡伴奏説唱故事、是一種集説・唱・奏・表演為一体的綜合芸術形式」（日本語訳：ホーリンウリゲルという言葉の中にあるホーリンとは、胡琴の意味を持っており、さらにウリゲルという言葉と連結すると芸人が四胡の伴奏で故事を語ることを指し、説明・歌唱・演奏・表演が一身上に集まった総合的な芸術形式を指す）と解説していた。

---

<sup>120</sup> 包金剛「内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究—ホールチとホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドー」（日本語版）、東京外国語大学、2003年、1頁。

<sup>121</sup> 巴特尔「東部モンゴル族の説唱芸術胡仁・烏力格尔の動態研究：「科尔沁」地域を中心に」（日本語版）、一橋大学、2017年、11頁。

<sup>122</sup> 白利「モンゴル族におけるホーリン・ウリゲルの保護と伝承—阜新モンゴル族自治州を事例として—」（日本語版）、神奈川大学、2016年、1頁。

<sup>123</sup> 陸雯「蒙郭勒津地区胡仁・烏力格尔研究」（漢語版）、瀋陽音楽学院、2015年、6頁。



また、筆者は漢語とモンゴル語で書かれた解説文をまとめる時に、近年（国内）のホーリンウリゲルを研究対象にした博士論文や修士論文や投稿論文では、ホーリンウリゲルという言葉の定義する際に、ほぼ上述した漢語およびモンゴル語の解説文をそのまま引用・参照して論を進めており、研究者自身が「ホーリンウリゲル」という言葉を全面的に考慮した上で解説した文章は少なくなっている現状を発見した。

それゆえに、「ホーリンウリゲル」の概念をより正確に説明するため、近世と中世に書かれた史書や近現代に編集された辞書を調べてみたが、残念なことには、「ホーリンウリゲル」という名称は説明されていなかった。しかし、「ᠬᠣᠷᠠᠯ / ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ」（ホーリンウリゲル）という名称を名詞の「ᠬᠣᠷᠠᠯ」（ホール）と「ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ」（ウリゲル）、属格語尾の「ᠤ」（ウン）の三つに分解してみると、『ᠮᠣᠩᠭᠣᠯ ᠤᠯᠤᠰ / ᠬᠣᠷᠠᠯ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ』（蒙漢辞書）では、「ホール」<sup>126</sup>は（名）〈音〉胡琴（名詞、音楽用語「胡琴」）、「ウリゲル」<sup>127</sup>は（名）①〈文〉故事；②〈曲艺〉書（名詞、①文学「故事」；「芸能」書）を指していた。

また、日本語版の『日本国語大辞典』と『国語辞典』（第九版）でも「胡琴」と「胡弓」、「物語」と「故事」については、以下のように説明している。

【胡琴】<sup>128</sup>「名」（胡人の弦楽器の意から）①唐代にける、楽器、「琵琶（びわ）」の異称。教訓抄一八「琵琶 胡琴（コキム）」・歌舞品目一三「胡琴、教訓抄、琵琶、一名、胡琴と、兼名苑に、本出、於、胡と、それより得た称なるべし」。②胡弓（こきゅう）の中国での称。二胡（にこ）、提琴などがある。随筆・金曾木「元史楽志に云ふ、胡琴の制は火不思の如し、卷頭龍首二弦あり、弓を用てこれを振す、其弓の弦は馬尾を以てすると云ふ、是なん胡弓のはじめなるべし」・蘇軾一戴道士得四字代作詩「心知二鹿鳴三一不、及二胡琴四一」。③中国の奚琴（けいきん）に似た二弦の擦弦楽器。馬尾の弓でこすって奏する。

【鼓弓・胡弓】<sup>129</sup>三味線に似て、それよりも小さい東洋の弦楽器。馬の尾の毛を用い

126 ᠬᠣᠷᠠᠯᠤᠯᠤᠰᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ / ᠬᠣᠷᠠᠯ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ (モンゴル語と漢語双語版)・ᠬᠣᠷᠠᠯ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ (ᠬᠣᠷᠠᠯ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ / ᠬᠣᠷᠠᠯ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ) 1975 年、424 頁。

127 同上、ᠬᠣᠷᠠᠯᠤᠯᠤᠰᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ / ᠬᠣᠷᠠᠯ ᠤᠷᠢᠭᠡᠯ (モンゴル語と漢語双語版)・203 頁。

128 『日本国語大辞典・第八巻』（日本語版）、小学館、1967年3月、687頁。

129 松村明・山口明徳・和田利政編『国語辞典（第九版）』（日本語版）、旺文社、1998年、461頁。

た弓でこすって演奏する。

【物語】<sup>130</sup>①昔から語り伝えられている話。②『文』主として平安時代から鎌倉時代にかけて作られた、作者の見聞や想像をもとにしている人物や事件について叙述した散文作品。③何かを話すこと。また、その内容。

【故事】<sup>131</sup>①昔にあった事柄。②昔から伝わっているいわれのある事柄。また、それについての語句。」

これらの辞書の記載によると、「ホーリンウリゲル」の「ホール」は、楽器の「胡琴・胡弓」を指しており、後ろに属格語尾の「ウン」を接続すると「ホーリン」となり、「胡琴の・胡弓の」という意味を持つようになる。また、「ホーリン」の後ろに書面文学や口頭文学の作品のことを指す「ウリゲル」（物語・故事）を接続すると、学術用語の「ホーリンウリゲル」となる。即ち、多くの研究者が理解している「胡弓の伴奏で語る物語」と「胡琴の伴奏がある説唱故事」となる。

しかし、上記の解説文を深く分析してみると、前述したようにこれらの解説は、「ホーリンウリゲル」という言葉を字面から理解したに過ぎない。なぜかという、モンゴルでいう「ホール」という楽器は、すべての弦楽器を対象とする総称なので、ここで指す「ホール」（胡弓・胡琴）が具体的にモンゴル民族に特有の「ドリボンウタストホール」（四弦琴）、「チョール」（潮尔）、「トブシュリ」（托布秀尔）などの楽器を指すのか、あるいは、日本の「胡弓」を指すのかが曖昧である。それゆえに、「胡弓の伴奏で語る物語」と「胡琴の伴奏がある説唱故事」は「ホーリンウリゲル」のことを指すのではなく、「トーリ」（モンゴル英雄叙事詩）、「マングスインウリゲル」（蟒古斯因烏力格尔）、「ヤバガンウリゲル」（雅巴干烏力格尔）などの説唱芸術を指していると理解しても間違っていないという意味になってしまう。

また、世界中にあるどんな民族が有している伝統芸能でも、ただ伴奏する「楽器」と語る「書目」が揃ったとしても、実際にその「楽器」を使って「書目」の内容を語る芸人がいなければ、「楽器」と「書目」は飾り物、即ち、死んだ物に過ぎないので、まだ

---

<sup>130</sup> 同上、『国語辞典』、1341 頁。

<sup>131</sup> 同上、『国語辞典』、471 頁。

伝統芸能とは言えない。同じ道理であるが、「ホーリンウリゲル」の場合は、伴奏楽器の「ホール」と長編の英雄叙事詩と歴史小説の「説唱脚本」が揃ったとしても、語り手の「ホールチ」がその「ホール」を弾きながら「説唱脚本」の具体的な内容、即ち脚本に登場する人物像や戦争の場面を聴衆や民衆に伝えなければ、「ホール」と「説唱脚本」は飾り物、即ち、死んだ物に過ぎないので、ホーリンウリゲルとは言えない。

とりわけ、ここで説明すべき点としては、次の第二節に紹介する「ホーリンウリゲルの構成要素」と密接な関係がある。周知のように、ホーリンウリゲルの基本的な構成要素は、吟遊詩人のホールチ、伴奏楽器のホール、説唱脚本のウリゲルの三つが包括されることであるが、吟遊詩人のホールチが伴奏楽器を持って何らかの形で上演する形式をすべて「ホーリンウリゲル」とは言い難い。例えば、筆者は第1回のインタビュー調査を実施する時に、調査協力者5番<sup>132</sup>は、「昔にホールを持って何らかの内容を語る民間芸人が多くいたが、それらの人の得意の演目が異なるので、民謡民歌を歌う芸人を「民間の歌手」と呼び、韻文体で創作された短編・中編・偶に長編の作品を語る芸人を「ホルボーチン」および「ウリゲルトドーチン」と呼んで、それぞれの呼び方があることを強調していたが、上記の民謡民歌・ホルボー・ウリゲルトドーをすべて歌えるや語られる上で、長編の英雄叙事詩や歴史小説を主として語る芸人を「ウリゲルチン」と呼んでいた、ホーリンウリゲルは長編の脚本でなければいけない、ホールチ言える人も、長編のウリゲルを語られなければ、ホールチと言えず、民間の歌手・ホルボーチン・ウリゲルトドーチンと呼んだ方がより適切だ」と語った。

そこで筆者は、上述した先行研究および条件を考えた上で、ホーリンウリゲルと言えるのは、「吟遊詩人の「ホールチ」(語り手)が、自らモンゴル民族に特有の伝統楽器である「低音のドリボンウタストホール」(四胡と四弦琴)を弾いて、モンゴルの民謡民歌とホルボー(好来宝)およびウリゲルトドー(叙事民歌)が語れるようになった上で、モンゴル文字で創作および翻訳された長編(モンゴル族と漢族両方の作品が含まれている)の口頭文学と書面文学を選び取って芸術的に構想・加工して、さらに低音のドリボンウタストホールが持つ様々な技法(主に弓を引っ張り、弦を指ではじく、弓で共鳴箱

---

<sup>132</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・ホールチ5番」を参照されたい。




を敲くなど)を駆使しながら、説唱する脚本・底本の内容と粗筋をモノローグ(独白)および説と唱(ホールチの芸術風格や流派によって説(ハナシ)や唱(ウタウ)する重点が異なる)などの方法を通して、聞き手の聴衆たちに完全な状態で伝える総合的な上演形式を指している、と定義したい。


## 第二節 ホーリンウリゲルの構成要素—伴奏楽器・説唱脚本・吟遊詩人—

モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルに対して、伴奏楽器のホールと説唱脚本のウリゲルおよび吟遊詩人のホールチは、この芸能を構成する最も基本的で重要な要素となる。しかし、これまでホーリンウリゲルの構成要素を記述した文章では、伴奏楽器のホールはどんな時代に四つ弦を持つようになったのか、説唱脚本のウリゲルはどのように変化してきたのか、吟遊詩人のホールチはどんな時代で登場したのか、など一連のことははっきり記述されていなかった。そこで本節では、「伴奏楽器ホールの変遷」「説唱脚本ウリゲルの変化」「吟遊詩人のホールチ出現」を通して、ホーリンウリゲルの構成要素について述べて行きたい。

### 一 伴奏楽器ホールの変遷

モンゴル民族には、形状と弦数が異なる様々な楽器があり、モンゴル語で統一してすべてが「」(ホール)と呼ばれ、漢語では「胡尔」および「胡琴」と表記されている。これらの撥弦楽器や擦弦楽器は、弾き語る説唱芸術の発展に伴って、次第にモンゴルの宮廷と民間で幅広く使われるようになり、さらに多数の民間芸人の継承と伝播によって、現在までに継承・使用されてきた。

#### (1) ホールの発生

モンゴルの芸人によく使われている「ホール」に関する研究は、長年にわたって国内外の研究者によってなされてきたが、掘り起こされた史料が不足していて、現在まで研究者の意見は一致していない。しかし、現有のモンゴル文と漢文で書かれた史料をもとにすると、モンゴル語の「」(ホール)、即ち、「胡尔」(モンゴル語の発音に従って漢語で表記した)は、漢語表記の「胡琴」とともに唐代に発生した「奚琴」が元祖の楽器であることが確認できる。モンゴル語で言う「ホール」(胡尔)という言葉は、モ

ンゴル人が使っているすべての「楽器」を指す総称であったことも明らかになる。

例えば、唐代末期の音楽家・段安節の『楽府雜録』<sup>133</sup>（紀元 894 年前後に製本）には、「文宗朝有内人郑中丞、善胡琴、内库二琵琶、号大小忽雷」（文宗の時代に家内に鄭中丞がいて、胡琴が得意であり、内庫には琵琶もあり、大忽雷と小忽雷と呼んだ）という記載があった。これはモンゴル語で言う「ホール」という楽器が初めて漢文資料に出現した文献であると多くのモンゴル族の研究者に認められている。それに拠ると、唐代の「胡尔」と「胡琴」という 2 種の楽器はすべて撥弦楽器のことを指すが、その内容は曖昧で、「胡尔」の材料、形状、弦数、音域、音声などの詳しい情報は得られない。

宋代の統治者は、唐代の宮廷の音楽と楽器をそのまま継承したので、「胡尔」は宋代にも依然として撥弦楽器を指していたが、ただ馬の尻尾の毛を使って制作された「馬尾胡琴」に関する記録が発見され、チュウゴクナン形と筒形の共鳴箱を持つ弓弦楽器を展開させる幕を開けたと言っていい。北宋中期の政治家・科学者・詩人・文学家・学者の瀋括（1031～1095）は、神宗皇帝（1068～1085）が在位していたときに朝廷で官僚として重用されていた。宋軍の督軍として西夏軍の侵犯を防御しているときに、宋軍兵士の士気を高めるために 10 曲の凱歌を創作して兵士たちに歌わせたこと思い出し、巨大な作品『夢溪筆談』<sup>134</sup>に収録した。10 曲の第 3 曲には、「马尾胡琴随汉车、曲声犹自怨单于、弯弓莫射云中雁、归雁如今不寄书」（日本語訳：漢車の後ろには胡琴を持つ捕虜が従い、琴声は彼らの首領单于に怨恨があるようで、弓を持つ将士は雲中の雁を矢で射ず、故郷にいる親戚は帰雁の伝える情報を貰えない）とあった。

この記載では、遊牧民族と関係がある「馬尾胡琴」「单于」などの字句が見られるが、詩文の前後の意味と瀋括の政治的な立場を考慮すると、彼が宋軍の督軍として西夏国<sup>135</sup>に遠征する前に、西夏国の芸人は馬の尻尾の毛で作られた「馬尾胡琴」を弾いていたことが明確になった。

また、北方遊牧民の首領「单于」のことを指す字句があったが、これについて詩文の

---

<sup>133</sup> 段安節「唐代」『楽府雜録』（漢語版）、商務印書館、1936 年、26 頁。

<sup>134</sup> 瀋括「北宋」『夢溪筆談・第 5 卷』（漢語版）、岳麓書社、2002 年、32 頁。

<sup>135</sup> 紀元 11 世紀から 13 世紀にかけて、タングート(党項)族・李元昊の奮闘によって築いた国家であり、中国の西北部、寧夏、甘肅、オールドス(鄂爾多斯)、陝西の諸地域を領有した。

意味を踏まえて考えると、西夏軍の中に「馬尾胡琴」が弾ける従軍楽士がいたことが考えられる。それゆえに、潘括はこの詩文で、西夏国に到着して見た情景について、多くの比喻の表現手法を使いながら誇張して記述した可能性が高い。宋の時代、あるいは、同時代の西夏国では、「馬尾胡琴」が広い範囲で使われていたと考えることができる。

元代に書かれた史書『元朝秘史』<sup>136</sup>には、「公元 1209 年、成吉思汗迫使西夏（1038～1227）求和后、元太祖初年、用河西高智跃之言、征用西夏旧乐」（日本語訳：紀元 1209 年に、チンギス・ハーンの圧力によって、西夏王が和議を求めなければならない状況となったときに、河西高智躍の言行で、西夏の旧楽を採用した）という記録があった。この記載は、チンギス・ハーンが西夏の旧楽を採用したことを示しているので、西夏人が得意とした「馬尾胡琴」もその旧楽に入っていると推測できる。「馬尾胡琴」がモンゴルハーン国に持ち込まれたという推測が成立するとすれば、「馬尾胡琴」は早くても西夏が建国される 1038 年より前、遅くても建国された後に西夏の国内および周辺地域で広く使われていたことが確認できる。さらに、チンギス・ハーンの時代に「ホール」（胡尔）という楽器をモンゴル人が使用していたことが確認できる。

有名な学者・音楽家の楊蔭瀏氏は、『中国古代音楽史稿』<sup>137</sup>で、「有一种用马尾拉着演奏的拉弦乐器、称为<马尾胡琴>、看来在公元十一世纪时、在西北边区流行已久」（日本語訳：ある種の馬の尻尾の毛で作られた弓を使って演奏する擦弦楽器があったが、それは「馬尾胡琴」と呼ばれ、紀元 11 世紀には既に西北の辺境地区でかなり流行していた）という記述があった。この記述では、「馬尾胡琴」が流行していた時間は 11 世紀、地域は西北の辺境地区、種類は拉弦楽器と明記している。「馬尾胡琴」は 11 世紀の西夏国およびさらに前の時代に既に発生し、チンギス・ハーンが西夏国を征服した後、モンゴルハーン国とモンゴル地区に持ち込まれ、短期間でモンゴルの宮廷楽士と民間芸人に受容されたと考えることができそうである。

傍証として挙げられるのは、17 世紀にチンギス・ハーンの子孫であるロブサンダンジン（羅卜藏丹津）の創作した『モンゴル黄金史』<sup>138</sup>（チンギス・ハーンの挽歌）であ

---

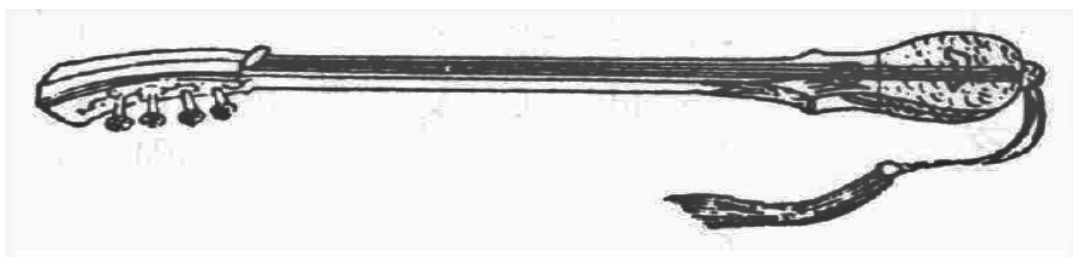
<sup>136</sup> 宋濂等撰「明代」『元史・礼楽志・第 71 卷』（漢語版）、中華書局、1976 年、1772 頁。

<sup>137</sup> 楊蔭瀏『中国古代音楽史稿・上冊』（漢語版）、人民音楽出版社、1981 年、372 頁。

<sup>138</sup> 柯沁夫「胡琴源流辨析」（漢語版）、『内蒙古大学学报』第 31 卷第 6 期、1999 年、72 頁。

る。彼はこの著作で、「你那神遇的忽兰合敦、你的胡兀尔与潮兀尔的旋律」（日本語訳：貴方（チンギス・ハーン）と不思議な縁があったホラン（忽蘭）・ハトン（合敦）、貴方（チンギス・ハーン）のホールとチョールの旋律）と記載しているので、チンギス・ハーンの宮廷には「胡尔」と「潮尔」が既にあったと推測される。

元代の話題に戻ると、「胡尔」に関して、『元史・礼楽志』には、「胡琴、火不思、制如琵琶、直颈、无品、有小槽、圆腹如半瓶榼、以皮为面、四弦絃、同一孤柱」<sup>139</sup>（日本語訳：ホーブスー、琵琶のように制作し、首が縦、小さい桶があり、丸胴が瓶の半分の形状、皮で組み、四つ弦、ひとつの柱がある）という記載があった。



【図2】皇朝礼器図式・燕饗番部合樂火不思・第9巻・樂器2・418頁



【図3】現在のドリボンウタストホール・筆者の私物

古代でも、現代でも、楽器を区別するときには、共鳴箱の形状および弦数によって判断することができるので、文中に指摘されているホーブスーの形状を持つ楽器は、弦が4本で、丸胴が瓶の半分のようであるとする、図2のチュウゴクナシ形の楽器は、現在のモンゴル人楽士および説唱芸人が使っている「ドリボンウタストホール」（図3）の形状にかなり似ている。図2は図3の原形であり、図2は時代の変化に伴って図3の形に固定したものであったとも考えられる。

明代では、元代の宮廷で流行っていた音楽や楽器を享受し、さらに明人楽士の改造に

<sup>139</sup> 宋濂等撰「明代」『元史・礼楽志 第68巻』（漢語版）、中華書局、1976年、1703頁。

よって、楽器に「上駒」を設置しはじめ、弦楽器の音色を大きく改善した。例えば、1522年（明朝・嘉靖元年）に、尤子求が描いた図4の『麟堂秋宴図』<sup>140</sup>には、宮廷で行った宴会で、宮廷の楽士が立ちながら「二弦」の楽器を演奏している場面があった。



【図4】明代の尤子求作・麟堂秋宴図・上駒がある楽器

この絵画には、身長があまり高くなく、髪の毛が長く、立って上演している宮廷楽士がいるが、この楽士が持っている楽器の共鳴箱は円筒状で、弦は2本、糸巻は2本、棹の真ん中にはっきり見られる上駒を縛り、琴頭は龍の形状を持ち、大きな弧度で曲がっていることが見られるので、明代には「二弦」のような弦楽器が大きく発展する時期を迎え、さらに宮廷楽士の改造によって、「上駒」を設置して音色を改善したことが分かる。

1368年に、元朝・第14代のトゴン・テムル・ハーン（1333～1370）は、モンゴルの貴族および一部の軍隊を連れて、祖先の地であるモンゴル高原に撤退して、明朝政権と対峙する「北元」の政権を立ち上げた。そのときに、前に元朝で使っていた宮廷音楽をそのままモンゴル高原に持ち帰ったことについては、清代に書かれた史書によって知ることができる。

例えば、モンゴル語で書かれた『蒙古族文学簡史』<sup>141</sup>には、「在阿拉坦汗的帐殿里、有宫廷乐师在演奏音乐、其中一人手持弦乐器、另一人手持敲击乐器」（日本語訳：アルタン・ハーンの宮殿で宮廷楽士が音楽を演奏しているが、その中の1人は弦楽器を持ち、

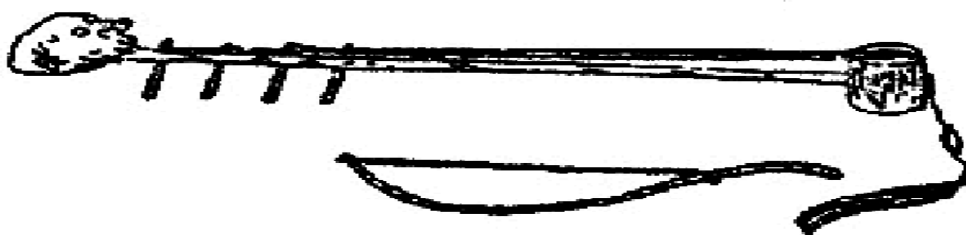
<sup>140</sup> 中国音楽文物大系編纂部『中国音楽文物大系・北京巻』（漢語版）、大象出版社、1996年。

<sup>141</sup> 齊木道吉『蒙古族文学簡史』（漢語版）、内蒙古人民出版社、1981年。

もう1人は打楽器を持っている)という記載があった。この記載では、アルタン・ハーンの宮殿には弦楽器を演奏する宮廷楽士がいたことになるので、前述した内容を振り返ってみると、ここで言う「弦楽器」は、モンゴル民族のホーブスー(火布思)、トブシュリ(托布秀尔)、チョール(潮尔)、ドリボンウタストホール(四弦琴)の一種を指していると考えることができる。

清代の文献をもとにすると、清の統治者は北元のモンゴル音楽を採用したことが知られる。例えば、史書『清会典』<sup>142</sup>には、「1632年(天聰6年)、清太宗皇帝平定察哈尔部、获其乐、列为燕乐、是曰蒙古乐曲」(日本語訳:1632年(天聰6年)、清の太宗皇帝はモンゴルのチャハル部を平定する時に、楽を獲得し、燕楽に組み込んで、モンゴル楽曲と呼んだ)という記録があった。この記載から見ると、清代の宮廷音楽では、モンゴル高原の地で樹立された北元の宮廷で使用されていた音楽と楽器を引き継いだことが確認できる。

清代に、満州の貴族は北元の文化を享受して、その習慣に合うように改造したので、モンゴル民族の「胡尔」という楽器を「提琴」と呼んでいたことが史書の『大清会典図』の記載で確認できる。この『大清会典図』では、「提琴」について、「琴杆竹制、木制圓筒形琴筒、蒙蛇皮、张弦四根、轆在后部、头有龙头装饰」<sup>143</sup>(日本語訳:提琴は、棹が竹で制作され、木で作られた円筒形の胴に蛇の皮を被せ、4本の弦があつて、糸巻は後ろにあり、琴頭は龍で飾られている)と記載されていた。



【図5】大清会典図・提琴の臨写図

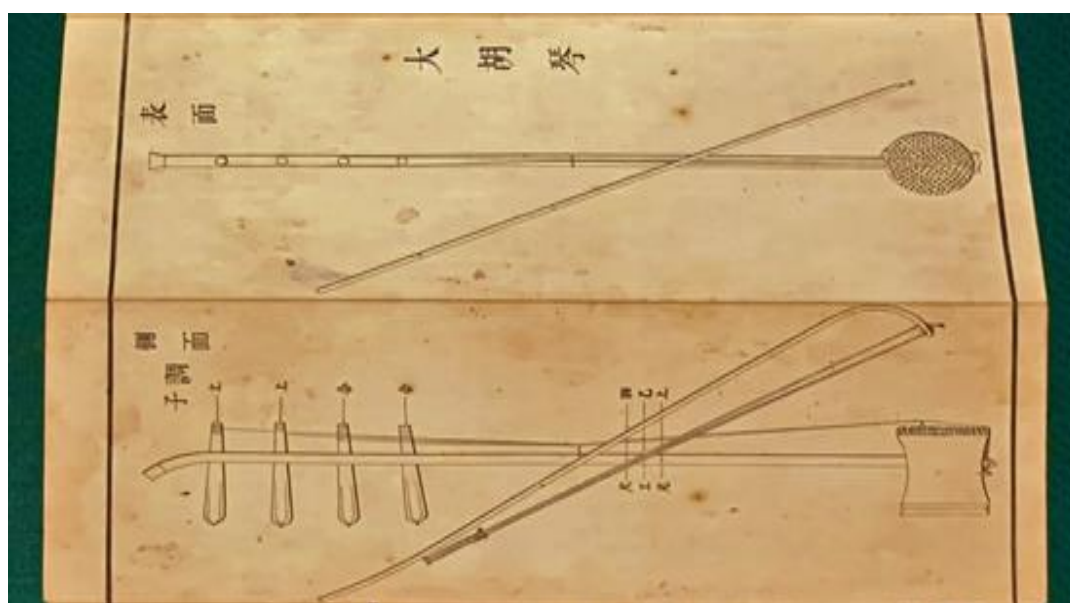
この図5で示されている提琴の臨写図は、図3に示した現代のドリボンウタストホールと比較すると、清代の提琴の形状は現代の「胡尔」とよく似ていることは分かるが、

<sup>142</sup> 宋濂等撰「明代」『元史 礼楽志』、中華書局、1976年。

<sup>143</sup> 柯沁夫「胡琴源流辨析」(漢語版)、『内蒙古大学学报』第31卷・第6期、1999年、74頁。

現代の「胡尔」と全く同じとは言えない。その理由は、周知のように、『大清会典図』は、清の穆宗・同治皇帝（1862～1875）の治世中に提案され、1886年（清の徳宗・光緒帝12年）に編纂・出版されたものであるからだ。

しかし、同時代の日本、即ち、1880年（明治13年）、大日本東京府士族・国領釜四武郎が臨写した『大清楽譜<sup>144</sup>』（日本語版）では、「胡尔」のことを「大胡琴」と称し、側面と正面の構成図を明晰に臨写している。



【図6】『大清楽譜』大胡琴・臨写図

それゆえに、図6の記録と臨写図によると、「胡尔」の形状は、遅くとも1880年（光緒帝6年）、あるいは、光緒帝（1875～1908）より前の同治（1862～1874）と咸豊（1851～1861）、さらに道光（1821～1850）と嘉慶（1796～1820）の年間に形が定まった可能性が全くないとは言えない。仮に筆者の推測が成立するとすれば、モンゴル民族の伝統楽器「胡尔」は、清代の初期から中期に既に現在の形状になっていたことになる。この結果は、本節の冒頭に記述した「モンゴル民族の「ホール」（胡尔）は、民間芸人の使用および弾き語る説唱芸術の発展に伴って、次第にモンゴルの宮廷と民間で幅広く使われるようになり、さらに多数の民間芸人の継承と伝播によって、現在までに継承し使用されてきた」という観点を論証することになると言えよう。

<sup>144</sup> 大日本東京府士族・国領釜四武郎「明治」・製図『大清楽譜』（日本語版）、東京・川流齋梓、1880年12月、友人の坂田氏が秘蔵している。

## (2) ホールの構成

現在、モンゴル民族に特有の伝統楽器ホール（胡尔）は、中国の内モンゴル、遼寧、吉林、黒龍江を主とする東部モンゴル地区を中心に、新疆・山西・陝西・河北・河南などの地区にも分布し、様々な宴会・演劇・演出の場で広く使用されている。そして、グローバル社会の変化に伴って、「胡尔」の形状・材料・制作工芸はただ変化しているのではなく、「胡尔」という言葉の意味も次第に具体化し、一般的にはホールチの使っている「ドリボンウタストホール」（四胡）を指すようになっている。

筆者は、モンゴルの「胡尔」、即ち、ドリボンウタストホール（四胡）が変容している現状を把握するため、中国非物質文化遺産網・中国非物質文化遺産数字博物館のホームページでキーワード「四胡」<sup>145</sup>を入れて検索した。その結果として、2006年の第一批国家級非物質文化遺産項目が公布されるときに、内モンゴル自治区・通遼市民族歌舞団が申請した「蒙古族四胡音楽」（伝統音楽・新增項目）が認定されたことが見つかる。2008年には、第二批国家級非物質文化遺産項目が公布されるときに、吉林省・前ゴルロス（郭爾羅斯）モンゴル族自治県・草原文化館および黒龍江省・ドルボド（杜爾伯特）モンゴル族自治県が申請した「蒙古族四胡音楽」が「伝統音楽・拡張項目」として認定され、さらに2014年には、第四批国家級非物質文化遺産項目が公布されるときに、内モンゴル自治区ホルチン（科尔沁）右翼中旗・文化館が申請した「蒙古族四胡音楽」も「伝統音楽・拡張項目」として新たに認定されたという情報も得ることができた。

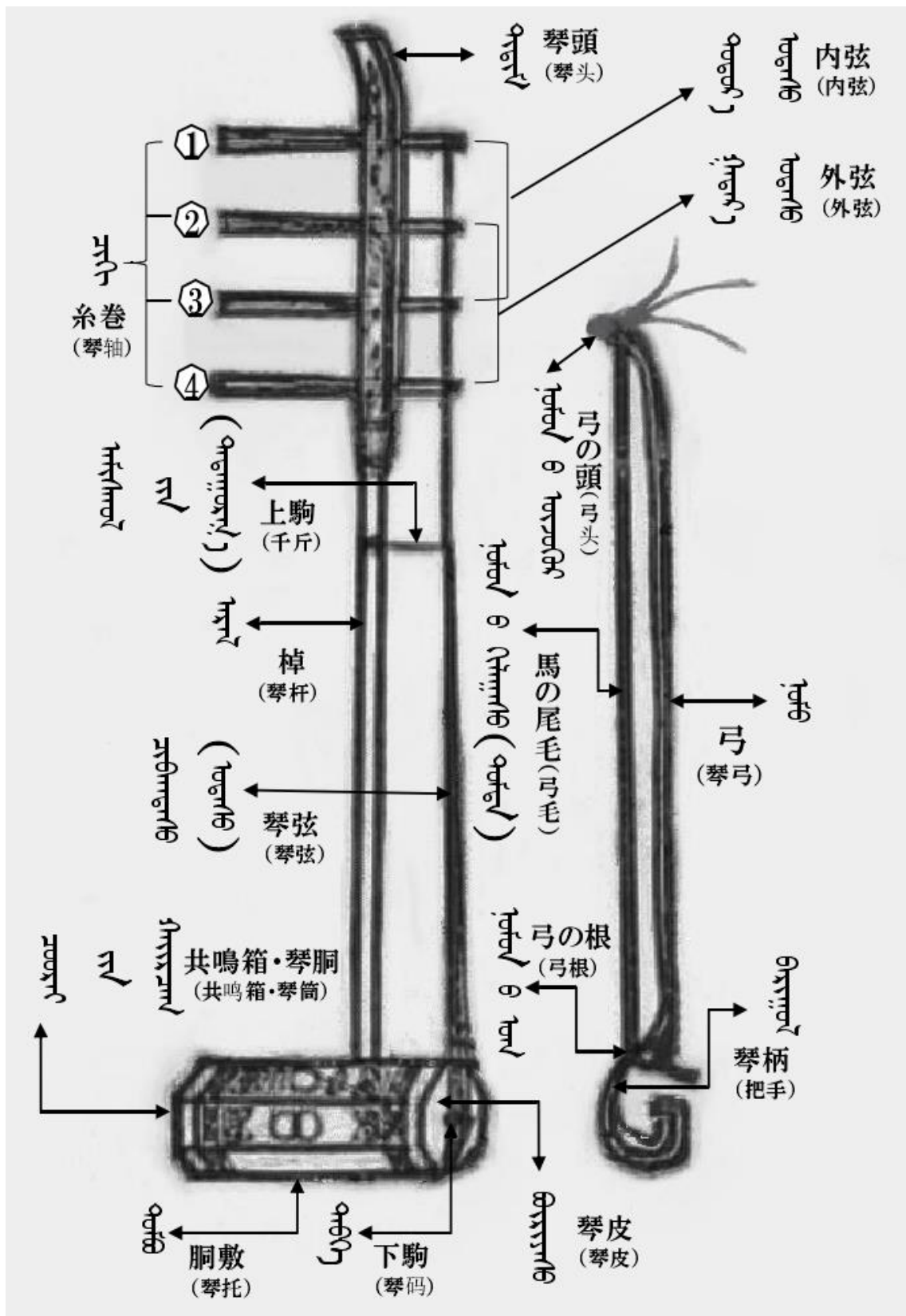
また、「蒙古族四胡音楽」が国家級非物質文化遺産項目に認定されたことによって、このドリボンウタストホール（四胡）を制作する伝統工芸も同時に保護されるようになった。そこで、筆者は第1回のインタビュー調査を実施する時に、省級レベルの技法を持つ3名の「四胡制作工芸の伝承人」<sup>146</sup>がドリボンウタストホール（四胡）の制作工程・制作技法を教えてくれたので、以下にその詳細的な構成図を作成して紹介しておきたい。

---

<sup>145</sup> 中国非物質文化遺産網・中国非物質文化遺産数字博物館のホームページ・検査時間：2020年5月12日、夜23:24 (<http://www.ihchina.cn/project.html#target1>)。

<sup>146</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・制作者6番・7番・8番」を参照されたい。





【図7】ドリボンウタストホール（四胡）構成図（筆者作成）

上記の図7に表示した構成図によると、現代のモンゴル芸人が演奏・使用しているドリボンウタストホール（四胡）は、図6の『大清楽譜』に臨写されている「大胡琴」という楽器の構成と同じであるが、共鳴箱の形状が「円筒状」（図6）から「八角形」（図7）に改められ、共鳴箱の下にあった胴敷の材料が「皮」（図6）から「木材」（図7）に替えられている。従って、モンゴル人の職人と琴師等の伝統技法は、非常に良く継承されていることが知られる。

そして、図7の構成図を見ると、ドリボンウタストホール（四胡）は、琴頭・糸巻・琴弦・上駒・棹・共鳴箱・琴皮・下駒・胴敷・弓などの部分で構成されていることが確認できる。以下、各部位の名称について解説する。

### ◎ドリボンウタストホール（四胡）

モンゴル語で言う「ドリボンウタストホール」は、モンゴル芸人であるホールチと演奏者が使っている四つの弦を持つ擦弦楽器を指し、その名称は唐代の「奚琴」に由来するが、各時代の改革により忽雷・馬尾胡琴・忽兀兒・提琴・大胡琴・ドリボンチゲェタエホール（都日奔其格泰胡尔）・胡兀兒・喉勒・胡琴などの名称に変えられたことがあり、近現代になって、現在の名称で呼ぶようになった。漢語では、四胡・四弦・四弦琴・四股弦とも呼ばれている。

### ◎各部位の名称と解説

ホール（胡尔）の制作工芸・技法・手法は、長い歴史の中で専門職人の改革を伴いながら今日まで継承されてきた。しかし、各地域の社会環境や地域文化の影響を受け、職人たちの制作する琴の形状・技法・工芸および使用する道具・機械も微妙に異なることがある。そこで、内モンゴル自治区級の「四胡制作工芸の伝承人」（第1回の調査協力者8番）<sup>147</sup>が制作した図3の四胡を基準にして、上下の順で各部位の名称を解説する。

**琴頭**：伝統的な琴頭は、棹の一部として同じ材質で作られ、飾り物を付ける物と付けない物があった。しかし、近年では、木材や職人の技法の相違によって、一般的に棹と同じ材質で作られている。かしら（頭）の部分を斜めに1.5 cmで切り、反対面に、長さ7.5 cmの三角形の木（棹と同じ材料）を貼って、台形のように制作するようになってい

---

<sup>147</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・制作者8番」を参照されたい。

る。

**糸巻**：四胡の糸巻は、図7に示したように、上から下の順に①、②、③、④の4本あり、①と③は内弦である1弦と3弦を調整し、②と④は2弦と4弦を調整する。そして低音の四胡（図3）を例とすると、4本の糸巻は21.5 cmにすることが標準で、棹に挿入されている部分は細くする作業を行う必要がある。

**琴弦**：以前に絹織物と羊皮で作られたガット弦は、低音と中音の四胡に使われていたが、20世紀50年代から60年代に至り、演奏家・琴師・職人の孫良<sup>148</sup>（1910～1997）は、低音と中音の四胡をもとにして、最も小さな高音の四胡を制作した。その時から次第に鋼と銀で作られたスチール弦と銀弦を使うようになり、さらに近年では弦の上に付けて音調を調整する微調整の方法も発明されたので、昔より便利になってきた。

**上駒**：昔は絹織物と羊皮で作られたガット線で巻き付けられていたが、近年では様々な材料で作られた線と縄を巻き付けている。筆者の経験によると、上駒の材質によって音色は微妙に異なる可能性が高いので、毛織物で作られた線と縄を使った方が良いと思われる。

**棹**：主に紫檀・黒檀・紅木・花梨木のような、密度が高い木材で作られる。昔の四胡は棹・糸巻・琴頭・共鳴箱が同じ材質で作られることが多かったが、近年は民間人の使用率が高まっている影響があり、密度の高い木材の供給が不足しているので、職人は木材をきちんと使うため、棹を五つに分けて制作するようになっている。例えば、図3を見ると、棹の高さ97.5 cm（共鳴箱に挿入されている部分を除く）、琴頭と糸巻が挿入される部分が41.5 cm、上駒の部分が13 cm、共鳴箱の上の部分が13 cm、真ん中にある木材の長さは30 cmである。

**共鳴箱**：一般的に棹・糸巻・琴頭と同じ材質（紫檀・黒檀・紅木・花梨木）で作られるが、近年は昔のような円筒状の共鳴箱を持つ四胡はあまり見られず、すべて八つの木の板（図3）で組み立て、動物の図案とモンゴル文字が彫刻されている。

---

<sup>148</sup> 孫良、原籍ジョソト盟（卓索図盟）・トゥメット左旗、即ち、モンゴルジン旗、現在遼寧省・阜新モンゴル族自治県・ジョソ・バラガソ（招東溝郷）のウヘティンホル（烏和日吐因好茹）、原姓・呉で、タブナン（塔布囊）氏族の後代、有名なドリボンウタストホルの演奏家、高音四胡の押す、引っ張る、弾くなどの演奏技法を改善した偉大な人物である。

**琴皮**：現在は主に蟒蛇皮で作られているが、昔は牛皮と鹿皮も使われていた。琴皮の材質によって楽器の音色はまったく異なるので、できる限り3年から5年置いた蛇皮で作った方が良いとされている。

**下駒**：近年は主に牛や羊の骨で作られた駒が使われているが、実は、最も適した材質は虫が食って2年から5年置いたモロコシの筭で作られたものを使うと、牛と羊の骨で作られた下駒よりきれいな音が出せる。また、下駒の大きさによって、四胡の音色も異なるので、四胡ごとに最も適した下駒を作って使用した方が良い。

**弓**：以前は竹で作られていたが、近年は密度が高い合成樹脂で作られることが多い。弓の毛に最も適した材質は馬の尻尾の毛であるが、近年は合成樹脂で作られた物もかなり使われるようになった。弓の柄で微調整することができるので、弓の緩さを自由に調整できるように改革された。

**胴敷**：図3（現代）と図6（古代）に示したように、古代に作られた（琴の）共鳴箱の下には動物の皮を使って琴弦を固定していたが、現代作られている（琴の）共鳴箱の下には密度が高い木材を使って琴弦を固定していて、これは職人が改革した産物であった。

**種類**<sup>149</sup>：現在は低音・中音・高音の三つの種類があり、棹の高さで区分される。図3に示した低音の四胡を例に説明すると、琴頭から胴敷までの高さは113 cm、胴敷の長さは22 cm、広さは7 cm、厚さは3 cm、共鳴箱の長さは23 cm、広さは13.5 cm、下駒の大きさは3 cm、糸巻の長さは22.5 cm、弓の長さは81 cmとなる。

中音の四胡は、低音より低く見えるが、琴頭から胴敷までは108 cm、胴敷の長さは20 cm、広さは6.5 cm、厚さは2.5 cm、共鳴箱の長さは21 cm、広さは13 cm、下駒は2.5 cm、糸巻の長さは20.5 cmとなる。

高音の四胡は、形状から見ると中音より小さく、低音の半分よりは少し大きい、音は低音と中音の何倍も高いことが特徴であり、琴頭から胴敷までは82 cm、胴敷の長さは13.5 cm、広さは6 cm、厚さは2.5 cm、共鳴箱の長さは13.5 cm、広さは8 cm、下駒の大きさは2 cm、糸巻の長さは17.5 cmとなる。

---

<sup>149</sup> 図3に表したドリボンウタストホール（四胡）は筆者が自分で使っている楽器であり、中音と高音に関するデータも手元にある楽器を基準にして文字化した。

### (3) ホールの使い方と演奏技法

モンゴル民族の「ホール」(四胡)は、その種類によって使い方と演奏技法が異なるが、低音の四胡は、主にホーリンウリゲル(胡仁烏力格尔)、ホルボー(好来宝)、ウリゲルトドー(叙事民歌)、アラディンドー(民謡民歌)を語り・歌うときに、ホールチと民間の歌手が使う。中音の四胡は、主に演奏者が自ら四胡を弾いて独奏し、モリン・ホール(馬頭琴)、モンゴル三弦、ホーブスー(火布思)などの楽器と合奏したり、歌は上手いが、四胡が弾けない民間の歌手に伴奏したりするときに使う。高音の四胡は、演奏者が独奏する場合が多いので、舞台での座り方、楽器の持ち方、弦の押し方には、低音と中音の楽器と比べて微妙な違いが生まれる。とりわけ、別の楽器や楽団と合奏・重奏・二重奏するときには、楽器の音色や音の高低の正確さが厳しく要求される。

演奏技法の上で説明する必要があるのは、通常、「ホール」(四胡)の音高(内外弦の高さ)を準五度(1弦と3弦、2弦と4弦の間)で設定し、2本の弓の毛が1弦と2弦、あるいは、3弦と4弦の間に(2弦と3弦の間が空いている状態)差し込んで弾くということである。ホーリンウリゲルを語る場合は、ホールチが自分の喉の高さと広さに合わせ、各曲牌(底本・書目)の内容や情景によって自由に音高を設定して、8度の音域内で弾き語ることになる。「ホール」は弦楽器であり、その音域はピアノのように決まっているわけではないので、低音区・中音区・高音区・極高音区などの声域は区別し難く、耳での聞き取る能力が高く要求されている。

「ホール」(四胡)の演奏技法には、上述した分弓・連弓・頓弓・連頓弓・跳弓・振弓・顫音・滑音・快速全弓・撥奏・転調などがあり、ホールチ<sup>150</sup>(第1回の調査協力者5番)はこれらの技法と技巧を使って、説唱する小説や故事に登場する人物像、戦争状態などの情景を誇張して聴衆に伝える。以下、各技法の使い方について解説する。

#### ◎各技法の使い方

**分弓**：1音1弓、即ち、ひとつの音階を弾くために、弓を1回引っ張ることである。

**連弓**：数音1弓、即ち、弓を1回引っ張ると無数の音階を弾くことである。

**頓弓**：1音1弓、即ち、分弓と同じ発音原理であるが、音が比較的短い音のこと。

---

<sup>150</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・ホールチ5番」を参照されたい。



ガンウリゲルチ(語り手)が楽器を使わずに口だけで一定的なリズムに合わせて語る「ヤバガンウリゲル」(雅巴干烏力格尔)などの説唱表演の形式も指していることが確認できる。

ホーリンウリゲルの場合、ホールチがどのような脚本・書目を語るのかという点、その脚本・書目が創作された時代背景を考慮すると古代と現代に分けられ、文学の方面から見ると英雄叙事詩(史詩)と歴史小説の二つの種類に分けられる。また、さらに詳しく分類すると、英雄叙事詩は、内容によって、『ジャンガル・ハーン伝説』(江格尔)と『ゲセル・ハーン伝説』(格斯尔)のような長編の脚本・書目が残され、歴史小説にも「編訳」と「創作」した脚本・書目、即ち、ベンスンウリゲル(本森烏力格尔)が多く残されている。特に中華人民共和国が建国されて以来、偉大なる建国の指導者、社会発展のために貢献した人物、美人美拳を題材に創作された新時代のウリゲルの脚本・書目が次第に増えている傾向がある。

### (1) 英雄叙事詩

モンゴル民族には、韻文体で創作されて、今日まで口承してきた英雄叙事詩が多く残されているが、世界で有名になったのは、『ジャンガル・ハーン伝説』(江格尔)と『ゲセル・ハーン伝説』(格斯尔)である。これらの英雄叙事詩は、各時代で無数の「ジャンガルチ」(江格尔沁)と「ゲセルチ」(格斯尔沁)の加工・補充によって、短編のものが中編となり、中編のものが長編となって、文章が長くなり、内容も豊富になったので、長い歴史の中で現在のような長編の英雄叙事詩となったといえることができる。

また、時代の変遷と社会環境の変化によって、上記の英雄叙事詩も各モンゴル地区に存在している文化要素の影響を受け、次第に新たな説唱芸術の形式が形成されている。例えば、東部モンゴル地区には、「マングスインウリゲル」(蟒古斯烏力格尔)という説唱形式があり、主に語り手のマングスチ(蟒古斯沁)がチョール(潮尔)あるいはホール(胡尔)を使って、妖怪変化が主人公に鎮圧される物語を説唱する。この「マングスインウリゲル」の正体は、「トーリ」(英雄叙事詩)であり、ただ東部モンゴル地区にある特定の文化によって、その上演形式ばかりでなく、具体的な内容や物語の展開は微妙に異なる。

前の話に戻ると、モンゴル語で言う「ジャンガル」は、「勇者」と「能力のある人」を意味し、英雄叙事詩の名称でありながら、物語の主人公、部落の首領、ハーン（可汗<sup>153</sup>）でもある。しかし、この長編の英雄叙事詩である『ジャンガル・ハーン伝説』（江格尔）は、古代からモンゴル部族の一員であるオイラト（衛拉特）人の民間芸人、即ち、ジャンガルチ（江格尔沁）、あるいは、ホールチ（胡尔沁）の口伝によって今日まで継承されてきた。『ジャンガル・ハーン伝説』（江格尔）の発生した時期について、研究者の意見は異なっていて、現時点では12世紀末期の氏族部落の時期、あるいは、13世紀の奴隷社会の時期に形成されたという説が有力となっている。

英雄叙事詩『ジャンガル・ハーン伝説』（江格尔）の概要<sup>154</sup>は、2歳になったばかりの頃、主人公の江格尔は、マングス（蟒古斯）、即ち、悪魔・魔物・妖魔に父母が殺されて孤児となる。3歳から阿蘭扎という駿馬にまたがって敵を退治する。5歳のときに大力士に捕らえられるが、大力士は江格尔がいずれは世界を征服すると恐れて殺そうとするが、その子・洪古ルが同い年の江格尔を常に助け、義兄弟となる。7歳になると立て続けに7つの国を討ち、その勇名がとどろく。それ以降も42のハーン（可汗）の領土を征服して、宝木巴に連名国を建てる。江格尔の留守中に7層の地下にとらえられた洪古ルを救出しに向かい、たった3月の赤子と死闘となるも、赤子の胸に針穴ほどの光を見つけて宝剣で刺し殺し、洪古ルの屍を見つけて蘇らせる。そして、宝木巴国のハーンに推挙される。

この英雄叙事詩の『ジャンガル・ハーン伝説』（江格尔）を分析すると、この物語には、モンゴル民族の歴史・社会・人文と密接な関係がある民謡民歌・詩歌詩文・韻文体の諺・伝説伝記・民間故事・古典音楽・祝詞賛歌などの民間文学・民間芸術に内容が多く含まれていることが知られる。その主要な内容、故事の脈絡、戦争の場面などを見ると、当該時期の社会環境、人々の心理、民俗習慣、文化要素、韻文体の詩歌、諺の発展などの情報が得られる。最も重要なことは、モンゴル民族が文字を持たなかった時期に、『ジャンガル・ハーン伝説』（江格尔）のような英雄叙事詩、韻文体の詩文詩歌、諺、

---

<sup>153</sup> モンゴル語の「ᠬᠠᠭᠢᠨ」は、漢語で「可汗」と表記されており、統治者の「皇帝」という言葉と同意。

<sup>154</sup> 福田晃・荻原眞子編『英雄叙事詩—アイヌ・日本からユーラシアへ—』（日本語版）、三弥井書店、2018年、222頁。



民謡民歌などの芸術形式は、民間芸人・ジャンガルチ（江格尔沁）の口伝によって継承され、ジャンガルチ（江格尔沁）の語りによって英雄の人物像が形成されたので、そのようにして、モンゴル民族の「英雄崇拜」という民族性は代々継承されてきたと考えられる。

もう一つの長編の英雄叙事詩は『ゲセル・ハーン伝説』（格斯尔）であり、上記の『ジャンガル・ハーン伝説』（江格尔）と『モンゴル秘史』（蒙古秘史）と合わせて、モンゴル民族の「三大英雄叙事詩」と称されている。そして、モンゴル民族の『ゲセル・ハーン伝説』（格斯尔）については、同源異流で、名称も少し異なるチベット民族の『ゲサル』（格薩尔）の英雄叙事詩も残されていて、モンゴル民族の『ゲセル・ハーン伝説』（格斯尔）は、チベット民族の『ゲサル』（格薩尔）がモンゴル地区に流入して、モンゴルの民間芸人の改編・加筆によって、独特な英雄叙事詩となったという説が有力である。現存のテキストの中では、清朝・1716年（康熙帝55年）到北京で作られた版本が古いと認識されている。

モンゴル民族の英雄叙事詩『ゲセル・ハーン伝説』（格斯尔）は、モンゴル人が生活している各地域に広く伝播・流行しているので、当該地区で『ゲセル・ハーン伝説』（格斯尔）に興味を持っている人がその語り方を学ぶことによって無数の「ゲセルチ」（格斯尔沁）が育成され、英雄叙事詩の継承と伝播に大きく貢献してきた。ここで言う「ゲセルチ」（格斯尔沁）は、上記の『ジャンガル・ハーン伝説』を語るジャンガルチ（江格尔沁）と同意で、英雄叙事詩を語る芸人のことを指すが、「ゲセルチ」の場合は、チョール<sup>155</sup>（潮尔）という弓弦楽器を自ら弾いて英雄叙事詩を語る点で異なる。

英雄叙事詩『ゲセル・ハーン伝説』（格斯尔）は、上記の『ジャンガル・ハーン伝説』（江格尔）と同様で、『ゲセル』は題目でありながら、英雄の主人公の名称でもあり、すべて主人公の英雄が自分の故郷を保護するために、マングス（蟒古斯）、即ち、悪魔・魔物・妖魔と戦闘して勝った後、故郷の民衆に安定した社会環境を作り上げるというス

---

<sup>155</sup> モンゴル語で「潮尔」と呼ばれ、日本語のカタカナで「チョール」と表記されているのは、モンゴル民族に特有の伝統的な弓弦楽器で、主に桑樹・ニレ樹・紅木・花梨木を材質にして作られ、共鳴箱に馬皮・羊皮・仔牛皮・蟒蛇皮をかぶせる時が多く、琴弦は基本的に二本となるが、一本で馬の尻尾の毛が57本～60本まで必要で、琴頭にマトル（古代トーテムの一種）・龍頭・鳥頭・獅子頭を彫刻して飾ることが普通となっており、棹は上下50cm～60cmとなっている。

トリーとなっている。特に、『ゲセル・ハーン伝説』の場合は、天宮の皇帝である玉皇大帝の次男・ゲセル（格斯尔）が世間に降誕して、マングス（悪魔）のために苦労している民衆を苦難から助け出すということを主要な内容にして語っている。

また、英雄叙事詩の『ゲセル・ハーン伝説』には、韻文体の詩文詩歌、諺、民謡民歌のような芸術形式が多くあるばかりでなく、神話伝説、民間俗語、祝福の言葉も多く含まれ、語り手の「ゲセルチ」は比喻・擬人法・誇張などの表現手法を駆使して、『ゲセル・ハーン伝説』に登場する戦争の場面、英雄の諸像、主人公の心理などを聴衆に伝えている。その結果、『ゲセル・ハーン伝説』という物語には、多種多様な芸術要素が含まれることになった。

モンゴルの英雄叙事詩には、上記の『ジャンガル・ハーン伝説』と『ゲセル・ハーン伝説』のような長編の物語だけでなく、中編と短編の物語も多く残されていて、「ジャンガルチ」「ゲセルチ」「ホールチ」の説唱によって、各モンゴル地区で継承されている。特に、ホーリンウリゲルが流行っている東部モンゴル地区には、ホールチの説唱によって語り続けられている短編の英雄叙事詩『アルタンゲレルト・ハーンの勇士アブルグチョロン』と中長編の英雄叙事詩『傑出の英雄アリヤフー』などのテキストが残されている。

## (2) 歴史小説

満州人が中原地区を統一して清国を建立して以来、モンゴルの各地は安定した社会環境に戻ったので、モンゴル文化も発展する時期を迎え、モンゴルの文人がモンゴル文で漢族の歴史小説を大量に翻訳・改編・創作する事業が始まった。この時期には、モンゴル文と漢文の書ける文人が漢族の歴史小説をモンゴル文に翻訳・改編するだけでなく、モンゴル寺院で働くラマ僧の文人が漢族の章回体小説の書き方を参考にして、モンゴル独特の長編の歴史小説を創作することもあった。

具体的な例を挙げると、近代のモンゴル文学史上で翻訳家・評論家として名が知られているハスボ（ハス宝）<sup>156</sup>は、漢族の古典文学の名作である『紅樓夢』を手本として、

---

<sup>156</sup> ハス宝(生年月日不明)、モンゴル人、清朝嘉慶と道光の年間に活躍していた有名な小説翻訳家・文学批評家であり、原籍は清著時期のジョント盟・トウメット左旗で、成人になってからジョーオダ盟などの東部モンゴル地区で活躍していた。

多く漢文文献と『紅樓夢』<sup>157</sup>のテキストを比較したうえで、モンゴル文で『新訳紅樓夢』を出版した<sup>158</sup>。清朝・乾清門の護衛・アラナ<sup>159</sup>（阿喇納）は、1721年（康熙帝60年）に漢族の古典名作である『西遊記』をモンゴル文に翻訳した。傑出の作家・文学家・詩人・大学者であるインジャンナシ<sup>160</sup>（尹湛納希）は、父が未完成に終わった『ホウゲ・ソドゥリ』（青史演義）を完成したばかりでなく、自ら『一層楼』『泣紅亭』『紅運涙』などの小説を創作した。

このように翻訳・改編・創作された文学作品が多く残されているが、ホーリンウリゲルの成立と発展に大きく役割を果たしたのは、瑞應寺のラマ僧の文人でありながら有名なホールチでもあったエンケテグス（恩赫特古斯）の創作した『興唐五伝』という作品であった。この『興唐五伝』<sup>161</sup>はモンゴル語で書かれ、総字数は212万字に及ぶ巨大な作品となっている。第1部の『苦喜伝』、第2部の『全家福』、第3部の『殤妖伝』、第4部の『契僻伝』、第5部の『羌胡伝』（上部・下部）で構成され、その続編として『寒風伝』（第6部と言える）も残されている。

この小説の正式の名称は『ᠮᠠᠨᠳᠤᠭᠰᠠᠨ ᠲᠠᠭᠠᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠶᠢᠨ ᠲᠠᠪᠤᠨ ᠵᠤᠠᠨ ᠨᠡ ᠤᠷᠢᠭᠢᠯ ᠤ』（モンゴル語で「マンドゥグサン・タアン・ウルス・イン・タボン・ズウアン・ネ・ウリゲル」と呼び、漢語で『興唐五伝』と表記する）であるが、民間では『唐書五伝』および『五伝』と呼ばれてきたほか、第1部の『苦喜伝』が残りの4部（5冊）より民衆に知られていて、それも有名なホーリンウリゲルの脚本・書目として広く伝播している。

---

<sup>157</sup> 古典小説の『紅樓夢』は、18世紀中頃（清朝中期・乾隆帝の時代）に書かれた中国長篇章回式白話小説。原本の前80回はなお残っており、完本は114回に達しなかったと推定される。今流通している前80回が曹雪芹の原文、後40回は高鶚の続作といわれている。『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』と並べて「中国四大名著」と位置づけられ、『紅樓夢』はその筆頭であり、現代中国でも紅樓夢賞・世界華文長編小説賞という文学賞が存在する。

<sup>158</sup> 呼和浩特史蒙古語文歴史学会編『蒙古史論文撰集』（漢語版）、呼和浩特史蒙古語文歴史学会編印、1983年、516-518頁。

<sup>159</sup> 李青松『胡尔沁説書』（漢語版）、遼寧民族出版社、2000年、26頁。

<sup>160</sup> 尹湛納希（1837～1892）、幼名：ハスチョロー、漢名：宝瑛、字は潤亭、ジョント盟・トゥメット右旗、即ち現在中国・遼寧省の北票県の人で、自らの陳述によるとチンギス・ハーンの第28代目の子孫になる。

<sup>161</sup> 楊陽（モンゴル名：蒙古貞夫）「ホーリンウリゲルの中興の祖と名著『興唐五伝』の作者—エンケテグス（恩赫特古斯）を中心に—」（日本語版）、『東京学芸大学大学院・連合学校教育学研究科・学校教育学研究論集』第40号、2019年、33頁。

『苦喜伝』<sup>162</sup>は『五伝』の第1部として、その巻頭で、物語の時代背景を以下のように紹介していた。隋朝の皇帝・隋煬帝は自分の父親である隋文帝・楊堅を殺して隋朝の政権を支配して以来、全国の徴税を増加し、官僚が民衆を圧迫する現象が次第に増え、隋朝の各地で隋煬帝の政権に反対する声が日々に高まってきた。それゆえに、もともとの隋朝で正義の代表であった李淵は、塗炭の苦しみに巻き込まれた民衆を救い出すため、隋朝各地の正義軍が集まって酒色に溺れて、なんの見境もない隋煬帝を討伐し、隋朝の政権を転覆した。

李淵は、隋の帝室楊氏と同じく武川鎮軍閥の出身で、北魏（鮮卑）・北周（鮮卑）以来の八柱国・十二將軍と称される鮮卑系の貴族であった。隋の帝室と同じく貴族であった李淵は、隋煬帝の反乱を鎮圧したことに伴い、民衆の意と天命に順応して国号を「唐」に命名し、新しい唐朝の政権を作り上げて開元した。

李淵には長男・李建成、次男・李世民（唐太宗）、第三子・李玄霸（李元霸）、第四子・李元吉の4人の息子がいたが、次男の李世民は中国古代の堯帝と舜帝の人徳を修養し、唐高祖・李淵を補佐して天下を得た。唐の高祖・李淵が逝去した後、次男の李世民が皇位に就き、年号を「貞観」と命名した。同時に、唐の太宗・李世民は仁政を施して民衆の徴税を削減し、唐朝の民衆に安穏な暮らしを送らせたので、全国各地で安泰の光景が現われ、このような状態は200年以上維持され、後世の人々はその長い間安定した時期を「貞観之治」と呼んだ。

そして、唐太宗・李世民が逝去した後、李氏の子孫である李子暉が皇位に就いたのを手掛かりに『苦喜伝』を始め、エンケテグスの創作した英雄たちが次々に登場する。まず、皇居の下僕である鶯雛が西宮・符賢妃を主とする奸臣の脅迫で、東宮・張貴妃の生んだ太子を陰で交換した。さらに、東宮・張貴妃は西宮・符賢妃の誣告により、炎熊皇帝・李子暉から張貴妃の名誉を取り下げ、庶民に貶めることによって、張貴妃の生活は大きく変化し、悲惨な人生が始まった。

東宮・張貴妃の悲劇と比較できるのは、西宮・符賢妃の喜劇である。西宮・符賢妃は

---

<sup>162</sup> 蒙古貞夫「ホーリンウリゲルの脚本・興唐五伝に関する一考察」（日本語版）、研究代表者・石井正己『令和元年度広域科学教科教育学研究経費成果報告書 北海道・東北および沖縄・九州を視野に入れた歴史認識の構築と教材開発に関する戦略的研究』、東京学芸大学、2020年3月。

炎熊皇帝・李子暉に美人局を設計して、炎熊皇帝の寵愛と信頼を受け、毎日衣食に困らない生活していた。しかし、栄耀栄華の生活でも符賢妃は満足できず、皇帝を暗殺し、皇后を加害して唐朝の政権を支配し、自分で皇帝になるという大きな陰謀を抱いた。炎熊皇帝・李子暉はずっと西宮・符賢妃の設計した美人局に囲い込まれ、朝廷の事情を一切問わない状態に巻き込まれてしまった。

そこで、符賢妃に仕える奸臣たちは、今が唐朝の政権を転覆する機会であると思い、皇帝の聖旨を偽造して、まず、忠義の功臣を加害する。次には、内部の符厚と外部の東遼王の力を合わせて、美色に惑溺して朝政を管理しない炎熊皇帝を暗殺するという一連の計画を立て、唐朝の政権を完全に転覆しようとする陰謀が始まった。最終編には、奸臣符氏と反軍の東遼王が鎮圧され、『苦喜伝』は喜劇で終了する。

### 三 吟遊詩人・ホールチの出現と役割

モンゴル語の「ᠬᠣᠷᠯᠴᠢ」（ホールチ）という言葉について、ホーリンウリゲルの概念を解説するとき、字面上に表示されているように、楽器を指す「ᠬᠣᠷᠯ」（ホール）の後ろに「ᠴᠢ」（チ）という接尾語を付けたので、ある専門の職を務める「～の者」「～の人」のことを指すようになった。

また、「ホール」の後ろに「チン」という接尾語を付けても、上記の「ホールチ」と同意で、複数の「～の者」「～の人」を指す意味となる。例えば、近現代に至ってからモンゴル族の民間では、ホーリンウリゲルを語る人を「ホールチ」と呼ぶ以外に、ホルボー（好来宝）を語る人を「ホルボーチ」（好来宝齐）、「ホルボーチン」（好来宝沁）と呼び、チャールを弾きながら古代の『ゲセル・ハーン伝説』の物語を語る人を「ゲセルチ」（格斯尔沁）と呼び、『ジャンガル・ハーン伝説』の物語を語る人を「ジャンガルチ」（江格尔沁）と呼んでいる。

モンゴルの説唱芸人「ホールチ」がどんな時代に出現し、長い歴史の中でどのような役割を果たしてきたのかという問いに関しては、12世紀から13世紀に書かれた史書や文献でその史実が確認できる。例えば、紀元1252年あるいは1253年のモンゴルハーン国の時代に、ペルシア（波斯）人のアラーウッディン・アターマリク・ジュヴァイニー

(阿老丁・阿塔蔑力克・志費尼)<sup>163</sup>は、イルハン朝のアルグン・ハーン<sup>164</sup>(阿魯渾汗)とともにモンゴルハーン国の首都・カラコルム<sup>165</sup>(哈刺和林)を訪問する際に、そこにいるモンゴルの友人を説得して、『世界征服者の歴史』<sup>166</sup>(『世界征服者史』)という著作を書き始めた。そこにはチンギス・ハーン(成吉思汗)からフレグ・ハーン<sup>167</sup>(旭烈兀)までのモンゴル史が記録されているが、その中に、モンゴル貴族が宴会を行っている様子や芸人が歌を披露している状況など多く書かれている。

この本の記録によって、チンギス・ハーン(1162~1227)の時代からフレグ・ハーン(1218~1265)までのモンゴル社会に、ホールを弾きながら物語を語っていた「説唱芸人」「故事人」「火日赤」が既に活躍していたという情報が得られる。勿論、アラーウッディン・アターマリク・ジュヴァイニーの記録した「説唱芸人」「故事人」「火日赤」は、必ずしも現在のドリボンウタストホールを弾きながらウリゲル(物語)を語っているホールチであるとは断言できない。しかし、モンゴル人の宴会で演目や故事を披露する人は説唱芸人のホールチ以外には、そのような機会を得ることはできないと考え、12世紀から13世紀の時期にホーリンウリゲルの淵源が既に存在したと言えるだろう。

また、14世紀に、ペルシアの政治家・史学家のラシードウッディーン<sup>168</sup>(1247~1318)は、モンゴルハーン国・イルハン朝のカザン・ハーン<sup>169</sup>(合贊汗)の命令を受け、『史集』を書き始めた。しかし、残念なことには『史集』の作業が半分以上にならないときに、

---

<sup>163</sup> アラーウッディン・アターマリク・ジュヴァイニー(1226~1283)、漢語で「阿老丁・阿塔蔑力克・志費尼」と表記する。彼は13世紀後期にモンゴル帝国・イルハン朝に仕えた政治家・歴史家である。

<sup>164</sup> アルグン・ハーン(1258?~1291)、漢語で「阿魯渾汗」と表記するが、モンゴル帝国・イルハン朝の第4代君主(在位:1284~1291)。

<sup>165</sup> 1235年に、モンゴルハーン国の第2代オゴデイ・ハーン(窩闊台)の指示で建てられたモンゴル独特な都であり、当時の世界の中心都市でもあった。

<sup>166</sup> 志費尼「イラン」、何高済訳、翁独建校正『世界征服者の歴史』(漢語版)、内蒙古人民出版社、1980年5月。

<sup>167</sup> フレグ・ハーン(1218~1265)、漢語で「旭烈兀汗」と表記するが、モンゴル帝国・イルハン朝(フレグ・ウルス)の創始者(在位:1260~1265)。

<sup>168</sup> 拉施特(Rashid al-Din al-Afshar)の書いた『史集』は、第1巻・第1分冊、第1巻・第2分冊、第2巻、第3巻の4部で構成され、主にモンゴルの征服史、当時のモンゴルとヨーロッパ諸国の政治、経済、文化に関する内容が書かれている。

<sup>169</sup> カザン・ハーン(1271~1304)、漢語で「合贊汗」と表記する。モンゴルハーン国・イルハン朝の第7代君主、第4代君主アルグン・ハーンの長子である。

カザン・ハーンは急逝してしまった。その後にイルハン朝のオルジェイトゥ・ハーン<sup>170</sup>（完者都汗）の許可と支持を受けながら『史集』の執筆は続けられた。この『史集』はモンゴルの歴史と文化を記録しただけでなく、当時のヨーロッパ諸国の状況もかなり細かく書かれているので、未曾有の世界通史として高く評価され、当時のアジアとヨーロッパの歴史を知る百科事典だと言われている。

『史集』を通覧すると、第2篇・【列国伝五】・成吉思汗 [五]（从他出征乞台的羊年初期到虎年未止・1211～1218）には、「花刺子模-沙的巡哨部队衔接报告说，蒙古军已经来到了这些地区附近。算端遂去追击他们。据某些蒙古讲故事的人说，这是成吉思汗指派速别台把阿秃儿和弘吉剌惕部的脱忽察儿率领下去攻打忽都的军队」<sup>171</sup>（日本語訳：ホラズム国<sup>172</sup>の巡回偵察部隊が情報を得て、モンゴル軍が既にこれらの地域に来た。スータンは彼らを追撃に行った。モンゴルの物語を語る人の話によると、これはチンギス・ハーンがスブタイ大将を派遣して、アトルとコンギラト部族のトルツァルが軍隊を統率して、クトックの軍隊を攻撃に行った）と記載されている。

上述の内容によると、ホラズム国、チンギス・ハーン、大将のスブタイなどの国名や人名が既にモンゴルの歴史に出現しているという史実がある。それゆえに、文中に「モンゴルの故事を語っている人」（蒙古讲故事的人）と記録されているということは、チンギス・ハーンが生きていた12世紀から13世紀に、モンゴルハーン国とモンゴルに占領された地域に「物語・故事を語っていた説唱芸人」が存在していたことが証明できる。

語り手の「ホールチ」は、現代に書かれた史書や文献によると、12世紀から13世紀の記録によりさらに具体化されている。例えば、『欽定元史語解』<sup>173</sup>には、「浩尔齐、吹口琴人也」（日本語訳：浩尔齐、口琴を吹く人である）のように記録されているが、「浩尔齐」の「浩尔」は楽器の「口琴」を指し、「齐」は前に説明した接尾語の「チ」

---

<sup>170</sup> オルジェイトゥ・ハーン(1304～1316)、漢語で「完者都汗」と表記する。第4代君主アルゲン・ハーンの第3子で、第7代カザン・ハーンの弟である。

<sup>171</sup> 拉施特「イラン」、余大均・周建奇訳『史集』(漢語版)、商務印書館、1997年、第1巻・第2分冊、261頁。

<sup>172</sup> ホラズム(ウズベク語: Xorazm)は中央アジア西部に位置する歴史的地域。漢字で「花刺子模」と表記する。

<sup>173</sup> 佚名「清代」『欽定元史語解・官職門 第8巻』(漢語版)、江蘇書局、1875年。

で、ある専門の職を務める「～の者」「～の人」を指すので、「浩尔齐」はウリゲルを語る説唱芸人のことではなく、口腔内の空気を使って共鳴させて音を出す撥弦楽器、あるいは、口簧と胡笳のような吹奏楽器を吹く専門の芸人を指すことが分かる。

ここで特に説明する必要があるのは、昔、モンゴルの芸人等が使用していた撥弦楽器・吹奏楽器・擦弦楽器はすべて「ホール」（胡尔）と呼ばれていたことであり、「ホールチ」は擦弦楽器の「ホール」以外に、吹奏楽器を吹かなかったという記録はないので、「浩尔齐」は「ホールチ」を指す可能性が高いと考えられる。例えば、張勁盛氏の「試論蒙古族潮尔類樂器的文化涵与特征—樂器樂視域下对蒙古族弓弦樂器分類的再思考—<sup>174</sup>」という論文には、「清代の文献『御制五体清文監』によると、アルタイ地区で生活しているモンゴル人の中に、「ホール」と「チョール」の二つの言葉は楽器を指す以外に、三つの穴を持つ吹奏楽器も「チョール」と呼び、さらに当時の「チョール」も「ホール」の大家族に含まれ、内モンゴル自治区のチョール楽器の传承人・布林（布林）にインタビュー調査すると、布林は昔の人は実は「モリン・ホール」（馬頭琴）を「ホール」と呼んでいたが、正式に「モリン・ホール」と呼び始めたのは近年のことである」と説明している。

それゆえ、上記の記述によると、元代と清代の文献に記録されている「浩尔齐が吹いている口琴と胡笳」とは、モンゴル人の中に広範囲で流行されている「モドン・チョール」（冒頓潮尔）、即ち、吹奏者が喉を活用してホーミーのような低音の音を出し、さらに吹奏する楽器に合わせて発声する他声部の音楽を指すことが明確になったと言えよう。

また、ホーリンウリゲルの形成過程によると、チョール（潮尔）を使ってマングスインウリゲル（蟒古斯因烏力格尔）を語る上演形式は、時代の変遷によって、次第に民衆の娯楽生活を満たさなくなったので、多数の「マングスチ」（蟒古斯沁）は「ホールチ」となり、ホーリンウリゲルとマングスインウリゲルの両方を語るようになった。これによると、ある時期には「ホールチ」＝「マングスチ」で、二重の性格を持つ歴史があったので、この「浩尔齐」は吹奏楽器を吹く「マングスチ」でありながら「ホールチ」で

---

<sup>174</sup> 張勁盛「試論蒙古族潮尔類樂器的文化涵与特征—樂器樂視域下对蒙古族弓弦樂器分類的再思考—」（漢語版）、『内蒙古芸術』第1期、2014年、85頁。



もあったと推測することができる。

説唱芸人の「ホールチ」は、元代には「虎兒赤」と称され、モンゴル貴族や皇居に住む人々を保護する「ケシク軍」（怯薛軍）に所属しており、身分の高い貴族やその親戚のために楽器を演奏し、音楽を楽しませる仕事を務めていた。そのことについて、史書『元史<sup>175</sup>』には、「其怯薛执事之名：奏乐者，曰虎尔赤」（日本語訳：ケシクの管理者の名は、演奏者、虎兒赤）という記録があった。

そこで、上述したすべての記述によると、説唱芸人のことを指す「ホールチ」という言葉は、チンギス・ハーンの時代に発生して以来、その呼び方と表記方法は「忽兒臣」「虎兒赤」「浩兒赤」「虎林赤」「忽兒赤」「火兒赤」「火日赤」「胡尔斉」「胡尔奇」「胡尔沁」に変えられてきたと推測される。

## 小結

第二章では、まず、これまでの研究で吟遊詩人のホールチが、低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語でウリゲルを語る上演形式を「ベンスンウリゲル」「ホーリンウリゲル」「ホールチンウリゲル」と定義されている理由および使用されている状況を中心に紹介した上で、本論文で「ホーリンウリゲル」という表記を採用する理由、ホールチとしての筆者自ら「ホーリンウリゲル」という言葉に関する理解と定義した文章を提供した。

次に、現存のモンゴル語と漢語の史料および日本人の友人が提供してくれた日本語の郷土史料を使って、伴奏楽器のホールが唐代に発生してから宋・元・明代を経て、満州政権の清代にその形状がほとんど形成された経緯を論証し、さらに筆者の手元にあった楽器を手本として、清代に形が整えられたドリボンウタストホールの構成図を作り、各部位の作り方とそれぞれの作用と役割を解説し、ホーリンウリゲルを語る際によく使われている演奏技法を重点的に述べた。

また、説唱脚本のウリゲルと吟遊詩人のホールチについて、上述したモンゴル語と漢語で書かれた史料を活かして、それぞれの具体的な内容を紹介した。特に説唱脚本のウ

---

<sup>175</sup> 宋濂等撰「明代」『元史・第99巻・第47志・兵2』（漢語版）、中華書局、1976年、2524頁。

リゲルに関しては、英雄叙事詩と歴史小説に分類した上で、ホーリンウリゲルの古代脚本である『ジャンガル』と『ゲセル』の変化とあらすじを紹介した。吟遊詩人のホールチでは、これまでの史書で記録されている「説唱芸人」「蒙古故事人」「虎児赤」などの記述を参考に、12世紀から13世紀にホールチという専門職を務めていた民間芸人が既に活躍していた史実を論証した。

### 第三章 ホーリンウリゲルの淵源と形成過程

ホーリンウリゲルの起源に関しては、一部の研究者がチンギス・ハーンの時代にホルを弾きながら当時の様子と状況に応じてウリゲルを語る「アラガソン」（阿日嘎聡）という「ホールチ」が活躍していたので、口述史の視点から分析すると、ホーリンウリゲルは 800 年以上の歴史を持つと認識している。また、一部の研究者は、各歴史時代の政治制度と社会環境を考慮したうえで、ホーリンウリゲルはチンギス・ハーンの時代に発生したのではなく、明代や清代で形成したと認識している。長年にわたって、研究者のホーリンウリゲルの起源に対する意見は一致していないというのが現状である。

そこで本章では、現存の史書と文献の中で記録されていた「説書人」「蒙古故事人」「胡琴芸人」「虎児赤」に関する内容をもとにして、先行研究で述べられていた五つの起源説の内容を整理・解説・考察する。また、ホーリンウリゲルが形成された過程を分析することを通して、時代の変遷および視聴者の好感度によって、説唱芸人の説唱方法および使用する伴奏楽器が次第に変化した状況を紹介し、アラガソン・ホールチが当該時期に使用していた「ホール」の指向性を明らかにしたい。

#### 第一節 ホーリンウリゲルの淵源

ホーリンウリゲルの起源について、研究者の意見はかなり異なっていて、現在はバヤナ（巴雅納）氏を主とする 12 世紀から 13 世紀の起源説、チン・タナ（秦塔娜）氏とテェ・タリバ（特・塔日巴）氏を主とする 16 世紀末期から 17 世紀初期の起源説、チョコトウ（朝克図）氏を主とする 17 世紀末期から 18 世紀初期の起源説、ア・バダラフー氏とボージンガン（包金剛）氏を主とする 18 世紀中期から末期の起源説、ツァーガンバラス氏とエリディンバトル氏を主とする 19 世紀中期、即ち、清朝政権が確立されて以来の起源説という五つの起源説がある。

##### 一 12 世紀から 13 世紀の起源説

1189 年に、モンゴル部族連合の長はテムジンの駐屯地に集まって、才徳兼備なテムジンがヒヤン（乞顔部）部族の「ハーン」（可汗）として即位し、「テムジン・ハーン」

(鉄木真汗) という称号を得た<sup>176</sup>。しかし、テムジン・ハーンが即位したことは、モンゴル系部族の内部および敵部族の首領からの不満を買い、テムジン・ハーンを討伐する連合軍が間もなく編成された。このような状況のもとで、テムジン・ハーンは自らの軍隊を率いて、反撃する連合軍および敵部族と長年にわたって戦った。最終的に、テムジン・ハーンはモンゴル部族の大敵であるタタル部族やジャダラン（札答蘭）部族などの部族に勝った<sup>177</sup>。

1206年、モンゴル貴族や各部族の首領たちは、オノン川（鄂嫩河）の源に集会して、モンゴルの伝統的な「クリルタイ大会」（忽里勒台）を行った。この大会が行われたことによって、テムジンは「チンギス・ハーン」という称号を捧げられ、遊牧民族の国家である「大モンゴルハーン国」を創立した<sup>178</sup>。その時からモンゴル社会は一時的に安定し、モンゴル民族の言語・文化・芸術などが発展する時期を迎え、口頭で継承するホーリンウリゲルの芸術はこの時期にすでに演じられていたと言う。

ホーリンウリゲルの起源に関する研究論文として、バヤナ（巴雅納）氏の「浅談胡仁烏力格尔と胡尔奇」<sup>179</sup>、アラタンルバガナ（阿拉坦巴根）氏の「浅谈胡仁烏力格尔の起源と発展」<sup>180</sup>、アラムス（阿里木蘇）氏の「关于胡仁烏力格尔」<sup>181</sup>、バ・アラタンルバガナ（巴・阿拉坦巴根）氏の「祖国文芸百花园的一支鲜花——介绍蒙古族民间文芸烏力格尔一」<sup>182</sup>、リンチンドルジ（仁钦道尔吉）氏の「胡仁烏力格尔初探」<sup>183</sup>、ボージョ（宝柱）氏の「试论胡仁烏力格尔」<sup>184</sup>、ナリス（納日蘇）氏の「浅谈蒙古贞胡仁烏力格尔」

---

176 大島立子『モンゴルの征服王朝』（日本語版）、大東出版社、1992年5月、16頁。

177 岡田英弘『チンギス・ハーンとその子孫』（日本語版）、ビジネス社、2016年1月、60-75頁。

178 大島立子『モンゴルの征服王朝』（日本語版）、大東出版社、1992年5月、16-17頁。

179 Өгөлж, «Хүннүүн ач тугааг өмч / Хүннүүн ач тугааг өмч / Хүннүүн ач тугааг өмч» (モンゴル語版)・Хүннүүн ач тугааг өмч / Хүннүүн ач тугааг өмч, 1963 он / 2-дугаар / 2-р тал ..

180 Өгөлж, «Хүннүүн ач тугааг өмч / Хүннүүн ач тугааг өмч / Хүннүүн ач тугааг өмч» (モンゴル語版)・Хүннүүн ач тугааг өмч / Хүннүүн ач тугааг өмч, 1978 он / 11-дугаар / 3-р тал ..

181 Өгөлж, «Хүннүүн ач тугааг өмч / Хүннүүн ач тугааг өмч» (モンゴル語版)・Хүннүүн ач тугааг өмч / Хүннүүн ач тугааг өмч, 1981 он / 5-дугаар / 26-р тал ..

182 Өгөлж, «Хүннүүн ач тугааг өмч / Хүннүүн ач тугааг өмч / Хүннүүн ач тугааг өмч» (モンゴル語版)・Хүннүүн ач тугааг өмч / Хүннүүн ач тугааг өмч, 1979 он / 2-дугаар / 27-р тал ..

183 Өгөлж, «Хүннүүн ач тугааг өмч / Хүннүүн ач тугааг өмч» (モンゴル語版)・Хүннүүн ач тугааг өмч / Хүннүүн ач тугааг өмч, 1991 он / 3-дугаар / Өгөлж ..

184 Өгөлж, «Хүннүүн ач тугааг өмч / Хүннүүн ач тугааг өмч» (モンゴル語版)・Хүннүүн ач тугааг өмч / Хүннүүн ач тугааг өмч, 1981 он / 1-дугаар / Өгөлж, 1982 он / 4-дугаар / Өгөлж ..



は、北元のモンゴル政権を取って、その国を三十五年間ずっと統治した。この間に、アルタン・ハーンがオイラトを圧倒し、チベットにまで及んだ。シナ（明朝）に対しては、北元のハーンたちはこれまで明朝を承認せず、戦争状態が続いてきたが、アルタン・ハーンは一五七一年、明朝の隆慶帝と平和条約を結び、国境沿いに定期市を開いて必需品の貿易をおこなうことと、モンゴルの領主たちに明朝が補助金を支給することを認めさせた<sup>188</sup>と記述している。

北元政権と明朝政権が共存しながらも戦争を継続していく中で、モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルは、どのような状態だったのだろうか。これについてはチン・タナ（秦・塔娜）氏とテェ・タリバ（特・塔日巴）氏の共著「関于旧蒙古説書の起源及其他」<sup>189</sup>という研究論文が挙げられるので、以下にその具体的な内容を示す。

第一に、現在のホーリンウリゲルという説唱芸術は、チョール（潮尔）という楽器を伴奏しながら英雄叙事詩を語るマングスインウリゲルの影響を受けて発展したと解説している。第二に、時代の変遷に伴ってマングスインウリゲルという説唱芸術は衰退し、聴衆が急に減少してしまったが、ちょうどこの時期にホーリンウリゲルという新しい説唱芸術が登場してきて、マングスインウリゲルに取って代わった。第三には、史料『蒙古史略』<sup>190</sup>の第3章には、「モンゴルの人民は余暇の時間があると、特定の場所に集まって胡笳（胡沙笛）を吹き、琵琶を弾き、歌を歌い、舞踊を踊り、民間楽曲や娯楽活動等が非常に賑やかで、更には歴史題材の故事を語る説唱芸術が日常的な娯楽活動となっていた」という明朝の人による記録があるので、ホーリンウリゲルという芸能は、北元のアルタン・ハーン（阿拉坦汗）や明朝の神宗皇帝・朱翊鈞の万暦年間、あるいは、その後期に形成されたと強調している。第四に、1856年から1930年間に生きていたモンゴルジン（蒙古貞）旗出身のバダラホ（巴達日呼）・ホールチは、本論文の著者であるテェ・タリバ（特・塔日巴）の曾祖父であったが、著者の記憶によって曾祖父・バダ

---

<sup>188</sup> 岡田英弘『チンギス・ハーンとその子孫』（日本語版）、ビジネス社、2016年1月、298頁。

<sup>189</sup> 秦塔娜、特・塔日巴「関于旧蒙古説書の起源及其他」（漢語版）、『民族文学研究』第2期、1999年、35-37頁。

<sup>190</sup> 内蒙古語文歴史研究所「蒙古族史略」編集組（征求意见稿）『蒙古族史略』（漢語版）、内蒙古人民出版社、1973年12月、53頁。

ラホは年とってもモンゴルジン旗のモンゴル族の村落を回ってホーリンウリゲル説唱していた。それゆえに、両氏は上述したことを根拠にして、ホーリンウリゲルは 16 世紀末期から 17 世紀初期の間に発生したという結論を導いた。

ホーリンウリゲル研究者・サンプルノルブ（参布拉諾日布）氏は、「史詩・好来宝・胡仁烏力格尔」<sup>191</sup>、「廣播電台中播放的胡仁烏力格尔」<sup>192</sup>、「本子故事与胡仁烏力格尔研究」<sup>193</sup>の研究論文で、「ホーリンウリゲルというモンゴル民族の伝統的な口承文芸は、既に清朝・康熙帝八年（1669）あるいは十四年（1675）の時期にジョソト（卓索図）盟・モンゴルジン（蒙古貞）旗の民間で演じられていた」と記述し、300 年前のモンゴルジン旗にホーリンウリゲルという説唱芸術が存在していたので、17 世紀に発生したという見方を出した。

ウ・シンバイヤル（呉・新巴雅尔）氏は、「關於胡仁烏力格尔的起源問題」<sup>194</sup>という研究論文において、まず、1986 年までホーリンウリゲルの起源を考察した研究論文について検討した。次に、事例を挙げながら元朝の時期からモンゴルの文人が漢族の史書や歴史小説を翻訳する習慣が形成したことを説明した。第三には、明朝と北元の両政権は、長い間対立することが事実であったとしても、政治・経済・文化の上でまったく交流がなかったと言いつづけたため、その時代にも互いに影響を与えていたと認識した。第四には、清朝政権に至って以来、満州の指導者たちは次第に漢文化を受容して漢化されたため、モンゴルの文人による漢文化の受容および漢文書籍をモンゴル文に翻訳する事業が盛んになったと多くの事例を挙げて論証した。それゆえ、上記のことを根拠として、ホーリンウリゲルという説唱芸術は清朝より前の時期に発生したと推測するしかないという結論を出した。

ボインヘシゲ（宝音賀希格）氏とテェグスバイヤル（特古氏巴雅尔）氏は、『蒙古口頭

---

191 『蒙古口頭』(《蒙古口頭》)・(モンゴル語版)・(北京)民族出版社、1997 年 1 月 1 日発行、200 頁。

192 『蒙古口頭』(《蒙古口頭》)・(モンゴル語版)・(北京)民族出版社、1998 年 1 月 1 日発行、200 頁。

193 『蒙古口頭』(《蒙古口頭》)・(モンゴル語版)・(北京)民族出版社、1999 年 1 月 1 日発行、200 頁。

194 『蒙古口頭』(《蒙古口頭》)・(モンゴル語版)・(北京)民族出版社、1986 年 3 月 1 日発行、200 頁。

文学研究』<sup>195</sup>で、「明朝、北元、清朝期の漢文が、モンゴル文に翻訳されたことについて、様々な視点から分析を行った上で、ずっと吟遊詩人であるホールチの説唱によって、口で伝えながら心で悟らせるという「口伝」の方法で現在までに継承してきたホーリンウリゲルは、清朝の中期あるいはそれより前の時期に発生した」という見方をしている。

### 三 17世紀末期から18世紀初期の起源説

この時期の清朝は政治と社会が安定し、各民族の文化が交流する時期を迎えたが、特に漢文の歴史書籍、伝記伝説、歴史小説、章回体の小説などの文学作品が広くモンゴル文に翻訳され、モンゴル人に漢族の歴史・文化を伝えた。例えば、世界各国に広く伝播している漢族の演義小説である『封神演義』『三国演義』『水滸伝』などの漢書は、17世紀末期から18世紀初期の時期、既にモンゴル文に翻訳され、民間や民衆の中に伝播していた。

それゆえに、チョコトウ（朝克図）氏は、『胡仁烏力格尔研究』<sup>196</sup>で、まず、2002年までの国内外のホーリンウリゲル研究者による著作や論文を整理して分析を行った。次に、それまでの国内の研究者による四つの起源説を要約して分析し、ホーリンウリゲルは12世紀から13世紀、16世紀末期から17世紀初期、18世紀の中期、19世紀の中期に起源する可能性は低いと断言し、上記の四つの起源説が成立しない理由を述べた。第三に、ホーリンウリゲルの発祥地として多くの研究者に認定されているモンゴルジン旗を対象に、当該地域のモンゴル族の村落に住んでいる民間芸人や小説家などの人にフィールド調査を実施したと述べ、さらにそれらの協力者から貰ったモンゴルジン旗のホーリンウリゲルに関する一次資料をもとに、清朝期のジョソト盟・トゥメット左旗、即ち、モンゴルジン旗の歴史、当時の社会環境、無数のホールチが育成されたことを紹介した。最後に、清朝期に多くの漢文書籍や歴史小説がモンゴル文に翻訳されたため、ホーリンウリゲルは17世紀の末期から18世紀初期に発生したという見解を示した。

---

195 哈那斯・阿拉木斯《蒙古文の漢文訳》（モンゴル語版）・蒙古学研究所編『蒙古学』、1990年、385頁。

196 朝克图《胡仁乌力格尔研究》（モンゴル語版）・蒙古学研究所編『蒙古学』、2002年、58頁。



#### 四 18世紀中期から末期の起源説

18世紀には、清朝の乾隆帝が満州政権を手に握っていた時期である。この時期には、清朝の「蒙地開墾」という政策によって、漢人の東部モンゴル地区への入植が激しくなったため、清朝政府は長年にわたって実施していた「禁止令」を変えて、漢人を蒙地に入れるようにした。特に18世紀の中期から約30年を経た18世紀の後半期には、早くから漢人の入植が進んだジョソト盟やジョーオダ盟南部において漢式の農耕がかなり広がり、その影響で牧地の狭隘化などの状況が生じた<sup>197</sup>。

このような社会環境のもとで、蒙漢両族の文化は従来になかったような接触・交流の時期を迎えた。その中で「蒙漢文学」と「蒙漢書籍の翻訳」が一時的に盛んになり、ホーリンウリゲルの形成にもかなり影響を与えた。それゆえに、ホーリンウリゲル研究者のア・バダラフ（阿・巴達日呼）氏は、「琶傑胡尔齐談胡仁烏力格尔」<sup>198</sup>という研究論文を書いて、パジェ（琶傑）・ホールチの生涯、説唱の風格、伝承系譜の関係、ホーリンウリゲルの起源などを紹介した。

モンゴル国の研究者デェ・ツェレンソデナム（達・策仁蘇徳那木）氏は、学部時代からホーリンウリゲルに関する史料・資料を収集する作業を開始し、手元にあったデータを整理して、当時の内モンゴル大草原で活躍していたモーヒイン（毛依罕）・ホールチの創作した『フレルバートル』（胡日勒巴特尔）という物語を書籍にまとめて分析した。加えて、1968年には、「漢文小説在蒙古地区的伝播」<sup>199</sup>という論文で、ホーリンウリゲルの内容形式、伝播範囲、継承状況について分析を行い、ホーリンウリゲルという伝統芸能は現在までに200年あるいは300年の歴史を持つという結論を出した。

それ以降も、チムディンドルジ（斉木徳道尔吉）氏の「浅談蒙古族説唱芸術的産生和發展」<sup>200</sup>、ニマ（尼瑪）氏の「試論胡仁烏力格尔」<sup>201</sup>と「關於東蒙蟒古斯因烏力格尔」

---

197 モンゴル研究所編『近現代内モンゴル東部の変容』（日本語版）、雄山閣、2007年3月。

198 阿・巴达日呼《蒙地开垦与蒙汉文化交流》（蒙古語版）、《蒙地开垦与蒙汉文化交流》、1962年5月27日。

199 达·策仁苏德那木《汉文小说在蒙古地区的传播》（蒙古語版）、《汉文小说在蒙古地区的传播》、1968年2月。

200 齐木德道尔吉《蒙古族说唱艺术的产生和发展》（蒙古語版）、《蒙古族说唱艺术的产生和发展》、1980年1月。

201 尼玛《试论胡仁乌力格尔》（蒙古語版）、《试论胡仁乌力格尔》、1980年11月11日。

202、ボージンガン（包金剛）氏の「胡仁好来宝的起源」<sup>203</sup>と「胡仁烏力格爾の起源」<sup>204</sup>、  
ホージンシアン（胡金山）氏の「蒙古人的傳統文芸胡仁烏力格爾」<sup>205</sup>、ホーゲジホ（呼  
格吉胡）氏の「蒙古民間的胡仁烏力格爾」<sup>206</sup>といった研究論文が発表された。これらの  
研究によると、ホーリンウリゲルは18世紀中期から末期に発生したと認識している。

特に説明する必要があるのは、ボージンガン氏は上述した2編の論文をもとにして、  
2013年に「内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究—ホールチとホーリン・ウリゲ  
ル、ホルボー、ウリゲルト・ドー」<sup>207</sup>という博士論文を書いた。その論文で、「2003年  
までホーリンウリゲルの起源について検討したことがある先行研究を整理・分析した後、  
ホーリンウリゲルは18世紀末期に発生したと考える」という結論を導いた。

## 五 19世紀中期の起源説

周知のように、19世紀の中国では、日清戦争が勃発したために、清朝の内部に「維新  
派」と「保守派」の二つの勢力が形成され、当時の清朝政府が実施していた政策を改革  
するかどうかについて互いに激しく抗争していた。それゆえ、清朝の内部で闘争が絶え  
ない時期に、工業革命によって先進的な技術を導入した西方の列強は、腐敗と保守に満  
ちた満州政権に対してアヘン戦争を発動し、貴族から民衆まですべてが巻き込まれてし  
まい、かつての民族融合と繁栄の情景は消失し、清朝政権は内憂外患の状況に陥ってし  
まった。

このような社会環境にあつて、説唱芸術のホーリンウリゲルにはどのような変化があ  
つたのかという問いを持って、ホーリンウリゲルの起源に関わる先行研究を検討してい  
くと、ボルジギン・ハスシウグイ（孛兒只斤・哈斯西貴）氏の「關於蒙古族胡仁烏力格

---

202 蒙語《蒙語》(蒙語版)・蒙語《蒙語》(蒙語版)・蒙語《蒙語》(蒙語版)・蒙語《蒙語》(蒙語版)・1988年4月4日

203 蒙語《蒙語》(蒙語版)・蒙語《蒙語》(蒙語版)・蒙語《蒙語》(蒙語版)・1988年6月6日

204 蒙語《蒙語》(蒙語版)・蒙語《蒙語》(蒙語版)・蒙語《蒙語》(蒙語版)・2000年4月4日

205 蒙語《蒙語》(蒙語版)・蒙語《蒙語》(蒙語版)・蒙語《蒙語》(蒙語版)・1993年10月16日

206 蒙語《蒙語》(蒙語版)・蒙語《蒙語》(蒙語版)・1998年12月12日

207 包金剛「内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究—ホールチとホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドー」(日本語版)、東京外国語大学、2003年。

尔及音楽之探究」<sup>208</sup>、ツァーガンバラス（查干巴拉斯）氏とエリディンバトル（額日德尼巴特尔）氏の「胡仁烏力格爾的新生命力」<sup>209</sup>、チェジガワ（却吉嘎瓦）氏の「關於胡尔及胡尔齐」<sup>210</sup>といった研究論文が浮かび上がってきた。

これらの研究者は、ホーリンウリゲルの起源に関する意見はかなり異なっているが、一部の研究者は、「これまでに掘り出された史書や書き出した史料の中に、元祖ホールチと称されているダンスンニマ（丹森尼瑪）・ホールチは、1836年に生まれて1889年に逝去したので、ホーリンウリゲルは19世紀の中期あるいはそれよりもっと後の時期に発生した」と考え、別の一部の研究者は、「ホーリンウリゲルはモンゴル民族英雄叙事詩および好来宝をもとにして、長い歴史の中で他の民族の優秀な文化要素を吸収して形成された独特な説唱芸術であるが、現在までに長くても150年の歴史を持つに過ぎない」という結論を出した。

## 六 12世紀から13世紀に淵源を持つと考える理由

現在の学術研究界では、モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルの起源について、上述したような五つの観点があるが、研究者が長年にわたって考証してきた五つの起源説を「起源」ではなく、「変容」という動的な視点で再考すると、12世紀から13世紀にこの芸能の淵源を見ることができ、やがてホーリンウリゲルが成立し、繁栄を経て衰退し、現在のようになると包括的に考えることができるのではないかと考えた。以下、その理由を述べていきたい。

第一は、チン・タナ（秦・塔娜）氏とテェ・タリバ（特・塔日巴）氏は、著者のテェ・タリバ（特・塔日巴）氏が自分の曾祖父であるバダラホ・ホールチ（1856～1930）は、年とってもモンゴルジン（蒙古貞）旗のモンゴル族の村落を回ってホーリンウリゲル説唱していたことを根拠にして、ホーリンウリゲルは16世紀末期から17世紀初期の間に発生したという結論を出したが、19世紀に活躍したホールチの動向を根拠にして、ホ

---

208 查干巴拉斯 / 额日德尼巴特尔《胡仁烏力格爾 < 新生命 > 的探究》(蒙古語版)・内蒙古人民美術出版社・1990年2月2日出版。

209 却吉嘎瓦 / 查干巴拉斯《胡仁烏力格爾的新生命力》(蒙古語版)・内蒙古人民美術出版社・1978年5月17日出版。

210 却吉嘎瓦 / 查干巴拉斯《關於胡尔及胡尔齐》(蒙古語版)・内蒙古人民美術出版社・1990年5月5日出版。

ーリンウリゲルが16世紀末期から17世紀初期に発生したと判断するのは歴史的・学術的な根拠が足りない。

また、サンプルノルブ（参布拉諾日布）氏、ウ・シンバヤル（呉・新巴雅尔）氏、ボインヘシゲ（宝音賀希格）氏、テェグスバヤル（特古氏巴雅尔）氏は、明朝と清朝の時期に、多量の漢文漢籍がモンゴル語に翻訳されたことによって、その時代に蒙漢文化がかなり交流・融合したので、ホーリンウリゲルという伝統芸能は清朝より前の時期に発生したという観点を出しているが、漢文化の影響を強調して、モンゴル族が有する英雄叙事詩の影響を弱く考えるのは、ホーリンウリゲルという伝統芸能の基盤を無視することになる。

第二は、チョコトウ（朝克図）氏は、ホーリンウリゲルが発生した地域として公認されているモンゴルジン旗の社会環境および文化要素を分析した上で、17世紀末期から18世紀初期に蒙漢両族の経済融合と文化交流が盛んになってきたので、ホーリンウリゲルはこの時期に発生したという結論に導いた。しかし、明朝や清朝の時代に多くの漢文漢籍がモンゴル語に翻訳されたとしても、その後の変遷や視聴者の好感度によって民間芸人がリズムを入れて語るようになったので、むしろ、この時期にはヤバガンウリゲルが盛んになっていたと言うのが最も適切ではないかと考える。

第三は、ア・バダラーフ（阿・巴達日呼）氏を主とするホーリンウリゲル研究者は、清朝の蒙地開墾という政策によって、漢人の東部モンゴル地区への入植が激しくなったので、ホーリンウリゲルという伝統芸能は18世紀中期から末期に発生したという観点を出した。しかしながら、この時期にはベンスンウリゲルが発展する時期を経て、次第に視聴者が減少しつつあり、ホールチが低音のドリボンウタストホールを自ら弾いてモンゴル語でウリゲルを語り始めたので、ホーリンウリゲルの上演形式はこの時期にジョソト盟・トゥメット左旗で成立したと言える。

第四は、ボルジギン・ハスシウグイ（孛兒只斤・哈斯西貴）氏を主とするホーリンウリゲルの研究者は、これまでの史料の中に、元祖ホールチと称されるダンスンニマ（丹森尼瑪）・ホールチは1836年に生まれて1889年に逝去したので、ホーリンウリゲルは19世紀の中期あるいはそれよりもっと後の時期に発生したという観点を出したが、この観点が成立する余地はない。なぜかという、ダンスンニマ・ホールチが初めて語っ

た脚本は長編章回体の歴史小説『興唐五伝』であるが、この『興唐五伝』の作者であるエンケテグスも当該時期の有名なホールチであったので、ダンスンニマがエンケテグスから『興唐五伝』の説唱方法を学んだことは考えられるが、逆にエンケテグスが自分で創作・改編・説唱した『興唐五伝』をダンスンニマから学ぶということは考えられない。

そこで、まず、ホーリンウリゲルが12世紀から13世紀に淵源を持つことを支持する幾つかの理由を述べていきたい。まず、本論文の第二章「ホーリンウリゲルの概念と構成要素」において、「現存の文献資料によると、現在の学术界で専門用語として使われている「ホーリンウリゲル」という言葉は、実際に1956年までに東部モンゴル地区で全く使用されず、民衆の間に低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語でウリゲルを語る上演形式を「ᠠᠨᠠᠭᠤᠯᠠᠭᠤᠨᠠᠨᠠᠭᠤᠯᠠᠭᠤ」（ウリゲルを語る）と言い続けてきた」という事実を紹介した。現在の東部モンゴル地区でも、ホールチと言えばホール（12世紀から13世紀の時期に「ホール」という言葉は、モンゴル民族が有するすべての楽器を指す総合的な呼称であったが、18世紀末期から19世紀初期にその指向性が変化し、「ホール」と言えば四つ弦を持つ低音のドリボンウタストホールを指すことになるが、わざわざドリボンウタストホールと正式に呼ぶホールチは極めて少なかったので、「ホール」という呼称が現在までに継承され、一般的に「ホール」という言葉の前に「〇〇ホール」と呼び、ある楽器を指すように変化してきた）を自ら弾いてウリゲルを語る人々のことを指し、能弁な人というイメージがある。

また、モンゴル語の「ホールチ」という言葉は、漢語の記録では音読や訓読によってその言葉の表記が異なるが、ホールチのことを指す言葉は「忽児赤」「虎児赤」「蒙古説唱人」「胡琴芸人」となるので、現存の漢文漢籍から12世紀から13世紀に「ホールチ」が既に活躍していた史実が確認できる。例えば、本論の第二章・第二節の「ホーリンウリゲルの構成要素—伴奏楽器・説唱脚本・吟遊詩人—」に書いた「吟遊詩人ホールチの出現と役割」で、「ペルシア（波斯）人のアラーウッディン・アターマリク・ジュヴァイニー（阿老丁・阿塔蔑力克・志費尼）の書いた『世界征服者の歴史』という著作およびペルシアの政治家・史学家のラシードウッディーン（1247～1318）の書いた『史集』に「モンゴルの故事を語っている人」（蒙古讲故事的人）に関する記録があった」ということを述べた。

デンマーク出身のモンゴル音楽の集大成者で、有名な探検家・作家の Henning Haslund Christensen（亨寧・哈士綸）氏は、『モンゴルの人と神』<sup>211</sup>（蒙古的人和神）というノンフィクションの著作で、「波斯の蒙古汗阿魯渾給法国国王路易・菲利普写过信、信使是一位著名的胡琴艺人」（日本語訳：ペルシアのモンゴルハーン・アルグン<sup>212</sup>（阿魯渾汗）は、フランスの国王ルイ・フィリップ（路易・菲利普）に手紙を書いたことがあり、手紙の使者は著名な胡琴芸人である）と述べた。

また、同じ著作には、「20 世紀 20 年代、丹麦探検家哈士綸几经游历蒙古草原、期间它曾从蒙古族老人那里听说过成吉思汗时期著名胡琴演奏家合流浪歌手-阿尔噶松的相关传说」（日本語訳：20 世紀 20 年代に、デンマークの探検家・Henning Haslund Christensen は、何度もモンゴル草原に遊歴したときに、モンゴル族の老人からチンギス・ハーンの時代の有名な胡琴演奏家・流浪芸人であるアラガソンに関することを聞いたことがある）と述べていた。チンギス・ハーンの宮廷で「アラガソン・ホールチ」という説唱芸人が活躍していたことが確かめられ、当該時期の説唱芸術はかなり高いレベルまで達成したことが認められる。

モンゴル国の学者ツェ・ダムディンスレン（策・達木丁蘇榮）氏は、『モンゴル古代文学一百編』<sup>213</sup>で、ホーリンウリゲルの語り手であるホールチたちが確信している「アラガソン（阿日嘎孫）・ホールチ（胡尔沁）の伝説」を収録し、以下のように記述していた。

無敵と言われたチンギス・ハーンは、ソロンゴウド国（高麗国）を討伐する前に、アラガソン・ホールチに国師の職を与えて、モンゴルハーン国を管理してくれと命令した。それゆえに、すべての国事を配置できたチンギス・ハーンは、ソロンゴウド国に遠征して相手の国を征服したので、ソロンゴウド国のボハ・ツァーガン・

---

<sup>211</sup> 亨寧・哈士綸著、徐孝祥訳『モンゴルの人と神』（漢語版）、新疆人民出版社、1999 年、323 頁。

<sup>212</sup> アルグン・ハーン（1258?～1291）、漢語で「阿魯渾汗」と表記するが、モンゴル帝国・イルハン朝の第 4 代君主（在位：1284～1291）。

<sup>213</sup> 策・達木丁蘇榮著《阿拉加松汗的传说》（モンゴル語版）、《蒙古学》、1979 年、108 頁、116 頁。

ハーン（布噶斯察罕汗）は、王女のホラン（忽蘭）をチンギス・ハーンに献上して敗戦したことを認めた。チンギス・ハーンは王女のホランとそのまま兵營で結婚式を行い、ソロンゴウド国に3年間滞留した。

しかし、モンゴルハーン国に統治された地域は広いので、国事もほかの国と違って非常に多かった。チンギス・ハーンがソロンゴウド国に滞留して戻らないため、アラガソン・ホールチを主とした使者は駿馬に乗って、通常3ヶ月走る道を3日間で到着して、「チンギス・ハーンに君主と臣民のお礼を申し上げた」。この時、チンギス・ハーンはアラガソン・ホールチに、「私のハーン国は通常通りでしょうか、私の家族や臣民たちは健康でしょうか」と聞いたが、アラガソン・ホールチは「ハーンの家族は通常通り生活しており、臣民も安定した環境で喜んでいる」と答えた。チンギス・ハーンはこのようにアラガソン・ホールチと何度も遣り取りしたので、モンゴルハーン国の状態を承知した。この時、アラガソン・ホールチはホーリンウリゲルを語る時によく使う韻文を用いて、遠回しにチンギス・ハーンにモンゴルハーン国に戻ってほしいという気持ちを強く伝えた。チンギス・ハーンはアラガソン・ホールチの話に感動し、「貴方（アラガソン・ホールチ）たちは先に帰国して良いが、私は荷物や軍隊のことを配置してからすぐ戻る」と決意した。

しばらくしてチンギス・ハーンは、ホラン・ハトンとモンゴル大軍を連れてモンゴルハーン国に戻ってきた。そのとき、部下が「アラガソン・ホールチはお酒に酔っ払って、ハーンのホール（楽器）を持ってほかの所で休憩している」と報告したので、チンギス・ハーンは大将のボグルチジ（博尔术）とモホレイ（木華黎）を派遣して、「何も言わずに、静かにアラガソン・ホールチを殺せ」と命令を下した。両大将はアラガソン・ホールチの所に行って、チンギス・ハーンの話教え、彼を逮捕してチンギス・ハーンの住むゲル（蒙古包）に連れてきた。アラガソン・ホールチが「死刑に決まった人の話を聞き、死ぬ人の遺言を聴くべきだ」と言うと、チンギス・ハーンはゲルに入ることを許可した。

チンギス・ハーンのゲルに入ってきたアラガソン・ホールチは、「私は10歳からハーンのホール（胡尔）を収蔵し、謀略と知恵を学んできたが、悪い習慣をやめることができず、お酒に酔ったのも真実であるが、酔っばらってからホールを持つ

て行ったことに悪念はなかった。私は20歳からハーンのホール（胡尔）を収蔵し、風采と知識を学んできたが、陋習を改善することができず、お酒に負けたことも事実であるが、お酒に負けてからハーンのホールを持って行ったことに野心はなかった」と説明した。このように、構造が綿密で論理性が強く、詩文のような弁解を聴いたチンギス・ハーンは、「雄弁に語って罪を脱するアラガソン・ホールチ、滑稽なアラガソン・ホールチ」とおっしゃって、アラガソン・ホールチの死罪を免じたと言う。

上述の内容によると、チンギス・ハーンの時代には、モンゴルハーン国に「ホール」を弾きながらウリゲルを語る説唱芸人が実在し、名前は「アラガソン」と呼ばれていたことが確認できる。しかし、ある研究者は、1979年に出版されたツェ・ダムディンスレン（策・達木丁蘇榮）氏の『モンゴル古代文学一百編』（モンゴル語版）に収録されている「アラガソン・ホールチの伝説」を根拠にせず、その後、1985年に漢訳された『漢訳モンゴル黄金史綱』<sup>214</sup>（漢語版）に記述されている「アラガソン・ホールチの伝説」を参考にしている。それは、文中の「阿儿合孙虎儿赤」（阿兒哈孫虎兒赤）の「虎兒赤」（虎兒赤）をモンゴル語で「ᠬᠣᠷᠠᠳᠤ」（ホールチ）と呼び、「弓矢手」の意味を持つとする一方で、「虎兒赤」をモンゴル語で「ᠬᠣᠷᠠᠳᠤ」（ホールチ）と呼び、説唱芸人の「ホールチ」（胡尔沁）を指すという異なった観点が生まれ、研究者の意見は一致していない。

筆者はホーリンウリゲルを家族で継承する家系5代目として生まれ育ったので、子どもの頃からホールチである祖父と父から、「アラガソン・ホールチの伝説」を何度も聞いたことがある。本章では、ツェ・ダムディンスレン（策・達木丁蘇榮）氏がモンゴル語で記録した「アラガソン・ホールチの伝説」の内容を根拠としているので、モンゴル語で記録されている「ᠬᠣᠷᠠᠳᠤ」（ホールチ）は説唱芸人のことを指すと考える。また、漢訳された「虎兒赤」については、第一章・第二節の「吟遊詩人ホールチの出現と役割」で詳しく論じたように、『漢訳モンゴル黄金史綱』に記述されている「虎兒赤」も「ᠬᠣᠷᠠᠳᠤ」と呼ぶべきであると考えられる。

---

<sup>214</sup> 朱風・賈敬顔『漢訳モンゴル黄金史綱』（漢語版）、内蒙古人民出版社、1985年7月、19-23頁。





上述の史書や史料に記録されていた内容によると、12世紀から13世紀にチンギス・ハーンのモンゴルハーン国でアラガソンのようなホールチが活躍していた史実が確かめられるほか、その時代の吟遊詩人たちの説唱技術や創作能力は非常に高いレベルに達したという事実も確認できる。しかし、残念なことには、第二章で既に記述したように、モンゴル語で「ホール」（胡尔）と呼ばれている楽器は、その時代から20世紀の末期までモンゴル民族が有しているすべての楽器を指す総称であったので、アラガソン・ホールチが実際に使っていた「ホール」は、英雄叙事詩を語る時に使うチョール（潮尔）を指しているのか、あるいは、現在のホールチたちが使っている四つ弦を持つドリボンウタストホールを指しているのかははっきりしない。

そこで、ホーリンウリゲルの形成過程を分析することを通して、各時期にモンゴルの吟遊詩人が使っていた楽器の実態を明確にし、さらには吟遊詩人が説唱する内容の変化によって、もともとトブシュリ（托布秀尔）を使っていたのがチョール（潮尔）を使うようになり、楽器を使わない特殊な時期を経て、現在のドリボンウタストホールを使うようになり変化した経緯を示したい。

## 第二節 ホーリンウリゲルの形成過程

モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルは、吟遊詩人のホールチが低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語でウリゲルを語る上演形式を指すことについて、第二章「ホーリンウリゲルの概念」で既に紹介したので、ここで贅言しない。しかしながら、これまでの記述によると、多くの人から、ホーリンウリゲルという伝統芸能は、なぜほかのモンゴル地区で流行せず、東部モンゴル地区で流行したのか、そして、なぜ四つ弦を持つ低音のドリボンウタストホールという伴奏楽器を使わなければならなかったのか、このような上演形式はいつから始まったのか、などという様々な疑問点が生まれているのではないかと推察される。

そこで本節では、ホーリンウリゲルの形成過程を考察することを通して、モンゴルの説唱芸人たちは、もともと使っていたトブシュリ（托布秀尔）およびチョール（潮尔）などの伴奏楽器を変え、さらには視聴者の意志や好感度により吟遊詩人の語る脚本とその内容を変え、清朝の時期に現在のようなドリボンウタストホールを使って、モンゴル

語でウリゲルを語る上演形式に固定化したのかを明らかにしたい。

## 一 モンゴル英雄叙事詩の誕生と変容

東部モンゴル地区の民間には、「トーリ」(陶力)という説唱芸術があったので、多くのホールチ(説唱芸人)は「トーリはホーリンウリゲルの原型である」と言い続けてきて、この観点に関しては多くの研究者も認めている。なぜこのような言い方が成立したのかという点、それはホーリンウリゲルの詞牌・曲牌と密接な関係があることが考えられる。例えば、ホールチが『モンゴル秘史』という脚本を語るときに、登場人物および戦争状態に似合う特定の詞牌・曲牌を使って物語の内容を聴衆にきちんと伝える必要がある。この特定の詞牌・曲牌には、ホーリンウリゲルを語るときによく使われる詞牌・曲牌以外に古い時代から継承してきたトーリの詞牌・曲牌も頻りに使用されているので、ホールチの中に上記の言い方が生まれたのだとされる。

日本語のカタカナで「トーリ」と表記している言葉は、モンゴル語では「 $\text{ᠲᠤᠷᠢ}$ 」(バガトリイゲトーリ)となるが、それは日本語で「英雄叙事詩」という意味を持っている。そして、もともとのモンゴル人が生活している地域では、英雄叙事詩を語ることを「 $\text{ᠲᠤᠷᠢ ᠬᠠᠢᠷ᠎ᠠ}$ 」(トーリハイラホ)と呼んだ。そこで、モンゴル語で言う「 $\text{ᠲᠤᠷᠢ}$ 」(トーリ)という言葉がどのような意味を持つのかを知るために、『蒙漢辞書』を調べると、「 $\text{ᠲᠤᠷᠢ}$ は(名詞)〈文〉①史诗、英雄史诗(史诗、英雄叙事詩)、②历史故事、叙事诗(歴史故事、叙事詩)」<sup>217</sup>のような解説があった。言葉としての「トーリ」は、即ち「英雄叙事詩」であると理解すれば、英雄叙事詩とは長編叙事詩のことを指すことが確認できる。そして、モンゴルの英雄叙事詩には英雄叙事詩と歴史故事の二つのジャンルが含まれていることも分かる。

モンゴルの伝統的な説唱芸術であるトーリ(陶力)を語る語り手は「 $\text{ᠲᠤᠷᠢᠴᠢ}$ 」(トーリチ)、「 $\text{ᠲᠤᠷᠢᠴᠢᠨ}$ 」(トーリチン)と呼ばれた。『蒙漢辞書』を調べると、「 $\text{ᠲᠤᠷᠢᠴᠢ}$ (名詞)编写英雄故事的作家、说唱英雄故事的艺人」(日本語訳:英雄故事を創作する作家、英

<sup>217</sup>  $\text{ᠲᠤᠷᠢ}$  (名詞) (史诗/英雄史诗) (蒙汉辞書) ・  $\text{ᠲᠤᠷᠢ ᠬᠠᠢᠷ᠎ᠠ}$  (名詞) (英雄叙事诗) (蒙汉辞書) ・ 1975 年 ・ 692 頁



特に説明する必要がある研究は、長編英雄叙事詩の『ジャンガル・ハーン物語』（江格尔汗の烏力格尔）と『ゲセル・ハーン物語』（格斯尔汗の烏力格尔）の二つの英雄叙事詩が世界各国の研究者に注目されて以来、長年にわたって国際的な視点からの研究成果が出されてきて、現在は「ジャンガル学」（江格尔学）と「ゲセル学」（格斯尔学）という二つの研究学科として独立している。

もうひとつの英雄叙事詩である『モンゴル秘史』に関しては、モンゴル民族の歴史・政治・経済・文化・芸術・言語・儀礼などを研究する際に必要不可欠な1冊であると見なされ、重要な資料として活用されている。各国の研究者による『モンゴル秘史』の研究は歴史学・民俗学・文化人類学・言語学など様々な分野で進められ、貴重な成果が挙げられている。

例えば、日本人で『モンゴル秘史』を研究した村上正二氏は、1970年から1976年までに『モンゴル秘史—チンギス・カン物語—』<sup>222</sup>（第1部から第3部まで）に訳注を入れた。それによって、日本のモンゴル研究およびモンゴル英雄叙事詩研究において高く評価され、モンゴルの歴史と文化を研究する際の重要な資料となった。

モンゴルの英雄叙事詩は雄大なモンゴル文学に属するジャンルの一種であり、一般に英雄の事績を褒め称える長編韻文体の文学作品を指す。モンゴルの英雄叙事詩はその作品の長短によって長編・中編・短編に分けられるが、すべての英雄叙事詩は「叙事性が強い」という特徴を共通に持っている。モンゴルの英雄叙事詩の場合、各作品の中に多くの誇張・比喩・擬人法が使われ、登場人物の人相と性格および使っている兵器、戦争場面、物語内容を聴衆に伝えている。

上述した『ジャンガル・ハーン物語』『ゲセル・ハーン物語』『モンゴル秘史』は、文体の種類に沿って分類すると、すべて長編の英雄叙事詩（ホーリンウリゲルの場合は長編の脚本）となる。実は、モンゴルの英雄叙事詩には、長編の作品（脚本）以外に中編および短編の作品（脚本）も多くに残されている。最も歌い広められている作品（脚本）は、『マングスを鎮圧する故事』（鎮圧蟒古斯的故事）と『ハーンチンゲレ』（汗青格勒）などの英雄叙事詩である。

---

<sup>222</sup> 村上正二（訳注）『モンゴル秘史—チンギス・カン物語—』（日本語版）、平凡社、第1部は1970年、第2部は1972年、第3部は2006年に出版された。

これらの長編・中編・短編の英雄叙事詩は、ホールチの説唱する脚本として大変人気のあるものとなっていた。例えば、20世紀の東部モンゴル地区では、有名なパジェ（琵琶）・ホールチの説唱した『アラタンゲレト・ハーンの勇士アブラグチョロン』（阿拉坦格日勒図汗的勇士阿布拉古朝論）、モーヒイン（毛依罕）・ホールチの説唱した『傑出した好漢アリヤフー』（傑出的好漢阿日亜夫）、バラジニマ（巴拉吉尼瑪）・ホールチの説唱した『アスリ・ツァガン・ハイチン』（阿斯尔查干海青）などが民衆に歓迎された<sup>223</sup>。

この「トーリ」はどのような楽器を使って語るのかについて解説しておきたい。もともとトーリは、吟遊詩人のトーリチ（陶力沁）が、トブシュリ（托布秀尔）という撥弦楽器を自ら弾いて、ホーミーのような声を活かしてモンゴル語で英雄叙事詩の主要内容、登場人物、故事文脈などを視聴者に伝える上演形式を指し、前述したように、東部モンゴル地区に限らず、世界中にモンゴル系の民族が集住しているすべての地域に広く伝播している。

しかし、各モンゴル地区でかなり流行っていたトーリ、即ち英雄叙事詩は、東部モンゴル地区に伝来してからその伴奏楽器と説唱方法を次第に変化させ、チョール（潮尔）を使って語るマングスインウリゲルとして流行るようになった。その相違点の事例を挙げると、それは伴奏する楽器に顕著に現れている。トーリを語る際にはトブシュリ（托布秀尔）という撥弦楽器を使うのが通常であるが、マングスインウリゲルを語る際にはチョール（潮尔）という擦弦楽器を使うので、トーリ（陶力）がマングスインウリゲル（蟒古斯因烏力格尔）であるとは言い難い。

## 二 マングスインウリゲルの形成と発展

モンゴルの各部落・部族の中で流行っていたトーリ（英雄叙事詩）は、多文化が融合する東部モンゴル地区に伝来した後、この地域に特有の半遊牧半農耕文化の影響を受けて、古代英雄叙事詩とは異なるマングスインウリゲル（蟒古斯因烏力格尔）という説唱芸術に変容した。このマングスインウリゲルは、伴奏楽器がトーリと異なるだけでなく、

---

<sup>223</sup> 仁欽道尔吉『蒙古英雄叙事詩源流』（漢語版）、内蒙古大学出版社、2001年、211-214頁。



指す。このような解説をもとにすると、トーリは韻文体の史詩および叙事詩のことを指すので、発生した時代を遡ると古代までに辿り着くことができるが、一方、ウリゲルは主に口頭文学を題材とする脚本を語る際に使っていた。従って、ウリゲルはトーリが定着した後に形成されたことは明らかである。

ここまで論を進めてきたが、「ᠮᠠᠩᠭᠤᠰᠢᠨᠤᠷᠢᠭᠡᠯ」(マンガスインウリゲル)という言葉はどのような意味合いであり、どのような上演形式を言うのかという問いに答えるためには、モンゴル語の名詞「ᠮᠠᠩᠭᠤᠰᠢ」(マンガス)の意味を明確する必要がある。『蒙漢辞書』<sup>227</sup>を調べると、「ᠮᠠᠩᠭᠤᠰᠢ (名詞) <神> 妖魔、魑魅、魔怪。」の意味を持つと解説している。この解説によると、モンゴル語の「マンガス」という言葉は、日本語に訳すと、悪魔・怪物・魑魅・妖怪変化などの言葉に相当することが分かる。

マンガスの意味が明確になった上で、前述したウリゲルという言葉の意味を振り返ると、マンガスインウリゲルとは、この説唱芸術の語り手であるチョールチ(潮尔沁)あるいはマンガスチ(蟒古斯沁)が、擦弦楽器のチョールを自ら弾いて、長編の英雄叙事詩および長編の歴史故事を語る上演方式を指していると定義しても良いのではないかと考えられる。

しかし、残念なことには、現存の史料および先行研究の研究成果を整理すると、マンガスインウリゲルという説唱芸術は、どのような時代背景のもとで発生して、民間芸人が語るようになったのかはまだ明らかになっていない。確定できるのは、18世紀の末期から19世紀の初期にかけて、東部モンゴル地区でマンガスチ(蟒古斯沁)がチョールを弾きながら遊芸してマンガスインウリゲルを語っていたということが現地調査によって明らかになるということである。

例えば、中国の遼寧省・阜新モンゴル族自治州には、清朝・康熙帝の指令を受けて建てられた東北地区で最大の瑞應寺という寺院があり、この寺院を建てるために山東地方から招待してきた工匠が無数にあったと言う。第1回のインタビュー調査を実施した結果、9番の視聴者が自分の祖父と父から聞いたマンガスチに関することがあると教えて

---

<sup>227</sup> 蒙汉辞书(蒙语与汉语双语版)·内蒙古民族出版社·呼和浩特·1975年·507页



くれた<sup>228</sup>。具体的な内容としては、「昔のモンゴルジン旗のゲゲンスム（モンゴル語の発音、地名の仏寺を指す）では、ノウンネザバ<sup>229</sup>（農奈扎布）というマングスチが周辺の村落でマングスインウリゲルを語りながら活躍していた」というので、18世紀の末期にモンゴルジン旗でマングスチが活動していたことが確かめられる。

また、現代人の場合でも、ある楽器を弾きながらある芸術を学んで熟練させるまでには、短くても5年、10年という歳月がかかり、長く延びれば15年、20年もかかる。そうすると、ノウンネザバ（農奈扎布）・マングスチが18世紀の末期頃にモンゴルジン旗で活躍していたことは、彼のチョールを弾く技法およびマングスインウリゲルを語る方法はかなり熟練していたことになる。敢えて推測すると、マングスインウリゲルという説唱芸術は、18世紀の中期あるいはそれより前の17世紀には形成されていたことが考えられる。

マングスインウリゲルは発生した後、速やかに各モンゴル地区に伝播したので、当時の東部モンゴル地区では、トーリのような古代英雄叙事詩よりマングスインウリゲルが歓迎される時代を迎えていた。例えば、『ホールチの揺籃—ジャルート—』<sup>230</sup>（胡尔齐摇篮—扎鲁特—）の記載によると、東部モンゴル地区でマングスチとホールチとして名が高まったチュイバン（朝玉邦）は、当時有名だったナランバスル（那仁巴斯尔）およびゲンデウン（亘敦）に拝師して、マングスインウリゲルを学んだという。

また、前述したように、リンチンドルジ（仁欽道古吉）の『モンゴル英雄叙事詩源流』の記載によると、パジエ（琵琶傑）・ホールチの演唱した『アラタンゲレット・ハーンの勇士アブラグチョロン』（阿拉坦格日勒图汗的勇士阿布拉古朝论）、モーヒイン（毛依罕）・ホールチの説唱した『傑出した好漢アリヤフー』（傑出的好汉阿日亚夫）、バラジニマ（巴拉吉尼玛）・ホールチの説唱した『アスリ・ツァガン・ハイチン』（阿斯尔查干海青）などの、マングス（悪魔）を鎮圧する物語が語られていたという記録がある。マングス

---

<sup>228</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・視聴者9番」を参照されたい。

<sup>229</sup> 有名なモンゴル英雄叙事詩説唱芸人・ホールチであるノウンネザバ（農奈扎布）は、1827年モンゴルジン旗のダバ・バラガソ・ハダホシュ・ライラ（大巴新哈達戸稍村）で生まれ、1910年に逝去した。

<sup>230</sup> ᠠᠷᠠᠲᠤᠨᠭᠡᠷᠡᠲᠦ ᠬᠡᠰᠢᠨ ᠤᠯᠤᠰ《ᠠᠷᠠᠲᠤᠨᠭᠡᠷᠡᠲᠦ ᠬᠡᠰᠢᠨ ᠤᠯᠤᠰ》（モンゴル語版）・ ᠠᠷᠠᠲᠤᠨᠭᠡᠷᠡᠲᠦ ᠬᠡᠰᠢᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠶ᠋ᠢᠨ ᠠᠷᠠᠲᠤᠨᠭᠡᠷᠡᠲᠦ ᠬᠡᠰᠢᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠶ᠋ᠢᠨ ᠠᠷᠠᠲᠤᠨᠭᠡᠷᠡᠲᠦ ᠬᠡᠰᠢᠨ ᠤᠯᠤᠰ 2010年12月12日、3頁



このような説唱方法を継承させるために、新たな形式で伴奏楽器を使わず語る方法で試みた後の産物であった。また、この新たな上演形式には、吟遊詩人のヤバガンウリゲルチが、伴奏楽器を一切使わないままで長編・中編・短編のウリゲルを語り、どんな地域に行ってもホールチのように低音のドリボンウタストホールを背負う必要がないため、視聴者たちは「ᠶᠪᠠᠭᠠᠨ ᠬᠣᠤᠨ」<sup>233</sup> (ヤバガンホウン) と称するようになった」と語ってくれた。

上述したように、マングスインウリゲルが次第に衰退していた時期に、民間芸人の改造や改編によって写本の内容をそのまま語るヤバガンウリゲルという説唱芸術が形成され、マングスインウリゲルの代わりに民間で人気者になってきた。そして、ここで特に解説する必要があることは「そのまま語る」ということで、それは、語り手のヤバガンウリゲルチがウリゲルの内容をずっと伴奏楽器がない状態で語るのではなく、前述したトーリおよびマングスインウリゲルに使われていた曲牌と詞牌を十分に駆使して、韻文体および散文体で創作された脚本の内容をきちんと視聴者に伝えるものであった。

例えば、前述した『興唐五伝』の第2部である『全家福』をヤバガンウリゲルチが語る時に、まず、「炎熊皇帝は、奸臣の代表である符厚の献上した美人に心を奪われ、符氏の奸臣たちをもう一度重用し、もともとの官職に復職した。しかし、符厚を主とする符氏家族の同僚たちは、炎熊皇帝をもう一度信頼させたことは、唐朝の政権を転覆させる新しいチャンスを得たと思い、また、陰では唐朝の不倶戴天の敵である羌・匈奴・西夏などの隣国と共謀して、唐朝の政権を亡ぼした後、唐朝の権利を把握しようと計画していた」という背景をモノログで解説する。

続けて、「しばらくしてから羌・匈奴・西夏の三つの敵国から唐朝に出兵した。しかし、唐朝の太子を主とした功臣たちは、唐朝の正義軍を指揮して反乱軍を鎮圧するために出征した。ちょうど太子が唐軍を指揮して出征する際に、内部にいる符厚を主とする彼の同僚たちは、愚昧で無能な炎熊皇帝を罷免し、逆に西宮・符賢妃が産んだ、自分の甥である李平を補佐して、皇帝に即位させた」という故事の脈絡を紹介する。

これらの背景と事件の起因を解説した後、その内容と場面に従って、適当なリズムを使って、「このような唐朝の政権は、首の皮一枚に繋がっている状態であり、忠義の功

---

<sup>233</sup> モンゴル語の「ᠶᠪᠠᠭᠠᠨ ᠬᠣᠤᠨ」(ヤバガンホウン)とは、日本語の徒歩者の意味を持っている。

臣たちは自宅の軍隊を指揮して、符厚のような奸臣たちを鎮圧するため、長い旅の苦勞をして長安に来た。しかし、今回の反乱軍は符氏等の奸臣たちだけではなく、唐朝の敵国である羌・匈奴・西夏のような強敵もいたため、両方の戦争が何年間にもわたって続いた。最終編には、功臣の子孫である薛嵩・秦龍・程四海・羅猛・尉遲顛徳・徐世黎・秦俊彪・鐘旭亮・薛寒・羅強たちが、唐軍の主力を指揮して長安の城内に闖入し、炎熊皇帝を救出して、奸臣に奪われた唐朝の政権を取り戻した」という経緯を説唱する。

このように、マングスインウリゲルが当時の視聴者になかなか受け入れられない時期には、ヤバガンウリゲルという、マングスインウリゲルの説唱方法を継承してきた新たな説唱芸術が形成されたので、その後はモンゴル人の間にヤバガンウリゲルチの語るヤバガンウリゲルを聴く聴衆が次第に増えてきた。しかし、いったん出来上がれば永久に変わらないことはないように、時代の変遷および社会環境の激変に伴って、ヤバガンウリゲルもマングスインウリゲルのように視聴者が激減してしまい、民衆たちの視線から次第に離れてしまった。

この時期には、モンゴルの説唱芸人たちはおのおの知恵と知識を發揮して、当時の宮廷音楽で頻繁に使われていた四つの弦を持つドリボンウタストホールを伴奏楽器として、以前のマングスインウリゲルチのようにウリゲルを語ろうと試みていた。それゆえに、ある固定した地域で既に語られていたベンスンウリゲルという説唱ジャンルが民間芸人に注目されるようになり、それから多くのトーリチ、マングスチ、ヤバガンウリゲルチもベンスンウリゲルを語るようになった。

#### 四 ベンスンウリゲルからホーリンウリゲルへの転換期<sup>234</sup>

モンゴル語で言う「*ᠪᠡᠨᠰᠢᠨᠤᠷᠢᠭᠡᠯ*」（ベンスンウリゲル）とは、モンゴル語に翻訳および写本化された漢族の古典小説のことを指す。なぜモンゴル語に翻訳された漢族の古典小説なのかと言うと、漢語で「本子」（BenZi）と発音するこの言葉は、モンゴル語で「ベンス」と読み、モンゴル文人の翻訳および写本化された漢語の古典小説のテキストをすべ

---

<sup>234</sup> 蒙古貞夫「ホーリンウリゲルの脚本・興唐五伝に関する一考察」（日本語版）、研究代表者・石井正己『令和元年度広域科学教科教育学研究経費成果報告書 北海道・東北および沖縄・九州を視野に入れた歴史認識の構築と教材開発に関する戦略的研究』、東京学芸大学、2020年3月、128頁。

て「ベンスウリゲル」（本森烏力格爾）と呼ぶようになったからである。この「ベンスウリゲル」が形成された時期は清朝政権の中後期までに辿り、この新たなジャンルは東部モンゴル地区に広く伝播した。

満州政権が成立した初期、清朝の政府はモンゴル人を統治するため、モンゴルの諸部族・部落を「アイムグとホシュー」（盟と旗）の行政制度によって分散させ、次第にモンゴル人の勢力は衰えた。特に、清朝・雍正帝が政権を握った時期（1722～1735）の第2年（1724年）に山東と河北地方で旱魃災害が起こって民衆は生活が困難になり、人々の不満が募ってきた。

それゆえ、清朝のモンゴル・チベットの事物を管理する理藩院によって、多くのモンゴル人が生活するジョソト盟（卓索図盟）とジリム盟（哲里木盟）などの東部モンゴル地区を対象に、モンゴル人の土地を借りて、漢人の難民を養成する「借地養民」という移民政策を作り上げた。その時から無数の漢人が次々にモンゴル地区に入ってきて、次第に東部モンゴル地区ではモンゴル人と漢人が共に生産・労作することになった。

このようにして多くの漢人が東部モンゴル地区に入り込んだことに伴い、モンゴル人が漢人と交流する機会が急増し、モンゴル人は漢語を学び、漢人はモンゴル語を学ぶようになった。もともとモンゴル人は遊牧文化および畜牧経済を重視していたが、漢人の移住によって農耕文化と農業経済を重視するようになり、東部モンゴル地区、特にジョソト盟地区に住むモンゴル人の中では次第にモンゴル語と漢語を話すようになり、半遊牧半農耕の生産方式を営むようになった。その結果、漢語とモンゴル語に精通するモンゴル文人は、漢語で書かれた長編歴史小説および古典文学の作品をモンゴル語で翻訳し、写本にしはじめた。

この時期の翻訳と写本化の作業は、主にジョソト盟（卓索図盟）のトウメット左旗（土黙特左旗、即ちモンゴルジン旗）とトウメット右旗（土黙特右旗、朝陽一帯）を中心に行われたので、有名なラマ僧の文人と翻訳家が徐々に出現した。例えば、前述したように、近代のモンゴル文学史上で翻訳家・評論家として名が知られているハスボ（ハス宝）は、漢族の古典文学の名作である『紅樓夢』を漢文文献と『紅樓夢』の諸本を比較して、モンゴル語で『新訳紅樓夢』という著作を出版した。清朝・乾清門の護衛・アラナ（阿喇納）は、1721年（康熙帝60年）に漢族の古典名作である『西遊記』をモンゴル文に翻

訳した。

また、その時代にモンゴル語に翻訳・写本化された漢語作品には、上記の『紅樓夢』と『西遊記』以外に、『三国演義』『水滸伝』『聊齋志異』などの歴史を題材とする名作とともに、志怪伝奇小説もあった。ここで説明する必要があるのは、清朝政権の中後期に蒙漢文化の接触および融合によって、漢族の章回体小説が東部モンゴル地区に流入してきたことがある。その結果、漢族の章回体小説の文体および書き方を参考にし、さらにモンゴル民族に特有のトーリ、即ち英雄叙事詩にしばしば登場する英雄をもとにした「モンゴル風な章回体小説」が創作されるようになった。

例えば、モンゴル民族の有名な文学家・詩人・ホールチ（語り手）で、モンゴル語の巨匠・ラマ僧の文人であるエンケテグス（恩赫特古斯）は、ジョソト盟・トウメット左旗のゲゲンスム（瑞應寺）で働いていたとき、ホーリンウリゲルの古代書目である長編英雄叙事詩『ゲセル・ハーン伝説』（格斯尔汗の烏力格尔）と『ジャンガル・ハーン伝説』（江格尔汗の烏力格尔）に登場する英雄をモデルとし、さらに、上述した漢族の長編演義小説である『隋唐演義』『三国演義』『水滸伝』などの作品を参考にし、これらの表現・表記を使って、モンゴル英雄の性格、戦争の状態、キャラクターのイメージを描写する長編歴史小説シリーズ作品『興唐五伝』を創作した<sup>235</sup>。

このような歴史演義小説、志怪伝奇小説、モンゴル風な章回体小説は、ラマ僧の文人および翻訳家の翻訳と写本化によって、モンゴル民衆が閲覧できる書籍と作品が徐々に増えてきたので、民衆はモンゴル民族の英雄叙事詩を楽しむほか、漢族およびほかの異民族の歴史と文化を知ることが可能となった。エンケテグスの創作した『興唐五伝』という作品は、主に中原唐朝の忠臣と奸臣の間に発生した事件を手掛かりに描写した。その英雄の性格・容貌・姿勢などはすべてモンゴル人らしく書かれているので、モンゴル族の人々はこの小説にモンゴルの英雄の姿を見て、同時に漢族の歴史と文化を知ることになった。

これらの作品がモンゴル語で翻訳・創作・写本化された初期には、漢文が読めるモン

---

<sup>235</sup> 楊陽(モンゴル名:蒙古貞夫)「ホーリンウリゲルの中興の祖と名著『興唐五伝』の作者—エンケテグス(恩赫特古斯)を中心に—」(日本語版)、『東京学芸大学大学院・連合学校教育学研究科・学校教育学研究論集』第40号、2019年、33頁。

ゴルの文人たちは文字ごとに大声で朗読していたが、長い間に同じ作業がずっと続くと、多くの人はこのような形式に嫌気が出てきた。そこで文人は、このような悪い状況を改善するために、音楽を入れて作品を演唱し始めたので、嫌がっていた人々も戻ってきて真面目に聞くようになった。

その時から、モンゴル人の中ではあまり人気がなかった漢文の作品が歓迎されるとともに、さらには文人の語る各種のウリゲル（物語）を聴くことが習慣として定着した。それによって、無数のマングスチとヤバガンウリゲルチは、低音のドリボンウタストホールを持って、モンゴル語でウリゲルを語るようになってきて、伝統芸能であるホーリンウリゲルが成立する条件はすべて満たされた。

## 小結

第三章では、これまでのホーリンウリゲル研究者の提唱によって、既に出されている五つの起源説の中心にまとめた上で、それぞれの起源説が形成された要因を各歴史時代の社会背景および文化要素に合わせて考察を行った。その結果、多くのホールチおよび研究者たちが口述史・民俗学・文化人類学などの研究方法を用いて論証した12世紀から13世紀に淵源を持つと再考して捉え、ホーリンウリゲルという芸能を「変容」という視点で捉えることを提案した。

しかし、これらの文献や研究に関して考察したところで、現存の史書および史料の記載によると、チンギス・ハーンの時代でアラガソンと呼ぶホールチが活躍していた史実を確認することができる。彼が当該時期に使っていた「ホール」と呼ぶ楽器は、現在のホールチたちが使用している低音のドリボンウタストホールかどうかについては明確にすることができなかった。

そこで、第二節の「ホーリンウリゲルの形成過程」を分析することを通して、その楽器を論証しようと考えた。第二節では、第一節に残された疑問点に対して、モンゴル英雄叙事詩の誕生と変容、マングスインウリゲルの形成と発展、ヤバガンウリゲルの登場とその役割、ベンスンウリゲルからホーリンウリゲルへの転換に関して考察を行った。その結果、ホーリンウリゲルという伝統芸能は、視聴者の意志および好感度によって、吟遊詩人のホールチが説唱する内容と方法で形成されたと考えた。もともとのトーリ、

マングスインウリゲル、ヤバガンウリゲル、ベンスンウリゲルを語っていた吟遊詩人たちは、時代の変遷および社会環境の激変に伴って、最終的に四つ弦のドリボンウタストホールを採用してモンゴル語でウリゲルを語るようになり、ホールチがドリボンウタストホールを使ってウリゲル語る上演形式に固定化される条件が満たされたという結論を得ることができた。

それゆえに、上述したホーリンウリゲルの形成過程および第二章・第二節「ホーリンウリゲルの構成要素—伴奏楽器・説唱脚本・吟遊詩人—」で述べた「ホール」という楽器に関する内容を振り返ると、トーリチ(陶力沁)の使っていたトブシュリ(托布秀尔)という楽器も「ホール」に属しているので、民間芸人たちは「トーリはホーリンウリゲルの原型である」と言い続けてきた。また、この民間で流行っている言い方が史実であったとすると、チンギス・ハーンの時代に活躍していたアラガソン・ホールチの使っていた「ホール」は、現在のホールチたちが使用している低音のドリボンウタストホールではなく、モンゴル民族に有しているすべての楽器を指す総称であった「ホール」に属する「トブシュリ」(托布秀尔)という楽器であった可能性が考えられる。

このように、ホーリンウリゲルの説唱方法や伴奏楽器は、長い歴史の中で社会環境などの要素の影響を受けて何度も革新された。清朝期に至って、吟遊詩人の使う伴奏楽器およびウリゲルを説唱する方法などが大きく変化し、トブシュリ(托布秀尔)およびチョール(潮尔)を捨てて、低音のドリボンウタストホールを使わなければならなくなつたと考えた。





がら、近年、極めて少数派の研究者の間および民間では、ホーリンウリゲルという伝統芸能がフフホト（呼和浩特）地区およびジャルート旗（扎魯特旗）地区で固定化したという観点が流行っている状況を知った。

筆者は多くの研究者が支持しているモンゴルジン旗で固定化したという説に賛同している。その理由は、ホーリンウリゲルが12世紀から13世紀に淵源を持つことが史書に記録されていたので、清朝に至って突然発生したとは言えないと考えられる。そこで本章では、先行研究で頻繁に使われていた「発生」という言葉ではなく、「成立」に言い替えて、論を進めていきたい。

### 一 フフホト地区における成立説

内モンゴル自治区の首府都市であるフフホト<sup>236</sup>（呼和浩特）は、北元のアルタン・ハーン（阿拉坦汗）がモンゴル政権を握っていた時期に建てられて以来、長い間モンゴル文化の中心地として重要な位置を占めてきた。特に、現在の内モンゴル・フフホトと遼寧省の阜新モンゴル族自治県に住むモンゴル族の人は、「同源異流」という密接な関係がある。そこで、テェ・タリバ（特・塔日巴）氏とチン・タナ（秦塔娜）氏を主とするホーリンウリゲルの研究者は、ホーリンウリゲルは16世紀末期から17世紀の初期に、現在の内モンゴル首府のフフホト周辺地帯で成立したという観点を出している<sup>237</sup>。

その理由としては、16世紀、北元のアルタン・ハーンがモンゴル軍を統率して、朱氏の明朝政権を何度も討伐した後、北元と明朝の間に政治の往来と交流の事業が回復し、友好関係で結び付いた。その後、明朝の貧乏な農民たちが国境線を越えて、北元の中心都市である帰化城（フフホトの旧称）・トウメット（土默特）帯に入ってきて定住したので、トウメットのモンゴル人は漢人と接触・交流することが増えたと言う。

しかし、土默特左旗「土默特誌」編集委員会が編集した『土默特誌』<sup>238</sup>、吉田順一氏

---

<sup>236</sup> 現在内モンゴルの首府都市であるフフホト(呼和浩特)は、16世紀にアルタン・ハーンによって築かれた南モンゴルの古都フフホトと、近隣の四つの県、一つの旗(ホショー)によって構成された中華人民共和国の地級市のひとつであり、内モンゴル自治区の首府都市でもある。

<sup>237</sup> 秦塔娜、特・塔日巴「關於旧蒙古説書の起源及其他」(漢語版)、民族文学研究、1999年、37頁。

<sup>238</sup> 土默特左旗「土默特誌」編集委員会編集『土默特誌』(漢語版)、内蒙古人民出版社、1997年。

等が共に訳注した『アルタン・ハーンの伝記』<sup>239</sup>（阿拉坦汗伝）、トンボウシアン（佟宝山）・リピンチン（李品青）両氏編集の『阜新蒙古史研究』<sup>240</sup>、暴風雨氏主編の『蒙古貞史』<sup>241</sup>、ショケ（暁克）氏主編の『土黙特史』<sup>242</sup>、ウグウエジ（武国驥）氏・暴慶五氏共著の『蒙古族史綱』<sup>243</sup>などの、フフホト・トウメット（呼和浩特・土黙特）およびトウメット左旗（土黙特左旗）に関する史料には、アルタン・ハーンが明朝政権を何度も討伐したという史実が見られる。しかし、明朝の漢人の移住によって、漢族の歴史演義小説と古典文学の作品がフフホトのトウメット地区に流入して広く伝播したという情報は見つからなかった。両氏の強調する「フフホトの成立説」の情報源は信頼できないと考えている。

## 二 ジャルーツ旗地区における成立説

内モンゴル自治区の通遼市に所属しているジャルーツ（扎魯特）旗では、長い歴史の中で優秀な説唱文化を作り上げられてきた。ホーリンウリゲルの継承および発展のために、無数のマングスチ、チョールチ、ホールチが一生をかけて努力してきたので、現在は「中国ウリゲル故郷」（中国烏力格爾之郷）にも認定されている。

近現代に至り、ジャルーツ旗出身の（少数派）研究者は、「モンゴルジン旗出身のダンスンニマ（丹森尼瑪）・ホールチは、流浪芸人としてジャルーツ旗に行き、チュイバン（朝玉邦）とバインボリゴ（白音宝力高）両氏を弟子として取った」ことを理由の一つとして、ホーリンウリゲルがジャルーツ旗で発生したという観点を成立させようとしている。

もう一つは、現在のジャルーツ旗は清朝時代にジリム（哲里木）盟に所属し、隣接するジョソト盟と同様に、亡命する漢人が多く移住した地域であるため、蒙漢両族の文化が上手く融合した地域であることによって、ダンスンニマ・ホールチが遊芸してこの地

---

<sup>239</sup> 吉田順一・賀希格陶克陶・柳澤明・石濱裕美子・井上治・永井匠・岡洋樹訳注『アラタン・ハーン伝』（日本語版）、風間書房、1998年。

<sup>240</sup> 佟宝山・李品青主編『阜新蒙古史研究』（漢語版）、遼寧民族出版社、1998年。

<sup>241</sup> 暴風雨主編『蒙古貞史』（漢語版）、内蒙古人民出版社、1998年。

<sup>242</sup> 暁克主編『土黙特史』（漢語版）、内蒙古教育出版社、2008年。

<sup>243</sup> 武国驥・暴慶五共著『蒙古族史綱』（漢語版）、内蒙古教育出版社、2018年。

域に行って以降、チュイバン（朝玉邦）とバインボリゴ（白音宝力高）という2人の弟子が師匠であるダンスンニマ・ホールチを受け継いで、ホールチとしてホーリンウリゲルという説唱芸術を広く宣伝した。それゆえ、19世紀50年前後の時期から、ジャルート旗はホーリンウリゲルが盛んになった地域として最も重要な役割を果たしてきた。そのため、ホーリンウリゲルはジャルート旗で成立したという見方を出している。

先行研究からこのような情報を得て、文献資料とネット検索を使って、ホーリンウリゲルがジャルート旗で成立したという説に関する情報を収集するほか、ジャルート旗を中心にフィールド調査を実施するときにも、協力者のホールチおよび民間の知識人にさまざま尋ねることにした。しかし、残念なことには、昔からジャルート旗に住んでいる年長者も、ホーリンウリゲルがジャルート旗で成立したということは聞いたことがないと教えてくれた。この説に関して、現在まで研究論文は1編も書かれず、この観点に協調する研究者はいないので、民間人によって宣伝された仮説に過ぎなかったということになる。

### 三 モンゴルジン旗地区における成立説

我々が長年にわたって「ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠵᠢᠩ」（モンゴルジン）と呼んできたのは、清朝時代のジョソト盟・トウメット左旗、現在は中国・遼寧省に所属する阜新モンゴル族自治県のことを指し、漢語では「蒙古貞」<sup>244</sup>と表記されている。この地域は早い時期から漢人が移住してきて、漢文化と深く接触したので、ホーリンウリゲルが新たな形で復興する要因となったと多くの研究者は考えている。

例えば、サンプルノルブ（参布拉諾日布）氏は、「史詩・好来宝・胡仁烏力格尔」<sup>245</sup>、「廣播電台中播放的胡仁烏力格尔」<sup>246</sup>、「本子故事与胡仁烏力格尔研究」<sup>247</sup>といった研

---

<sup>244</sup> モンゴル語の「ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠵᠢᠩ」（モンゴルジン）という言葉は、漢語で書かれた史書では、忙豁勒津・満官曠・蒙古錦・猛古振・穆果勒青・蒙古勒錦・猛古六津・蒙郭勒津・蒙古勒津などの名称に変更され、近代に至ってから俗称して「蒙古貞」と表記・呼称するようになった。

<sup>245</sup> ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠵᠢᠩ《ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠵᠢᠩ ᠲᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ》（モンゴル語版）・ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠵᠢᠩ（ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠵᠢᠩ ᠲᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ）1997 年 8 月 1 日 発行 1997 年 8 月 1 日 発行

<sup>246</sup> ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠵᠢᠩ《ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠵᠢᠩ ᠲᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ》（モンゴル語版）・ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠵᠢᠩ（ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠵᠢᠩ ᠲᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ）1998 年 8 月 1 日 発行 1998 年 8 月 1 日 発行

<sup>247</sup> ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠵᠢᠩ《ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠵᠢᠩ ᠲᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ》（モンゴル語版）・ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠵᠢᠩ（ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠵᠢᠩ ᠲᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ）1999 年 8 月 1 日 発行 1999 年 8 月 1 日 発行

究論文で、「ホーリンウリゲルというモンゴル民族の伝統的な口承文芸は、清朝・康熙帝八年（1669）、あるいは、十四年（1675）の時期に、ジョソト（卓索図）盟・モンゴルジン（蒙古貞）旗の民間で演じられていたが、その時代、モンゴルジン旗以外のモンゴル地域でも英雄叙事詩は演じられており、ホールチは一人もいなかったもので、ホーリンウリゲルはモンゴルジン旗で成立したことは史実である」と述べた。

これ以外に、ウ・シンバヤル（呉・新巴雅尔）氏の「关于胡仁烏力格爾的起源問題」<sup>248</sup>、チョコトウ（朝克圖）氏の『胡仁烏力格爾研究』<sup>249</sup>、チムディンドルジ（斉木徳道尔吉）氏の「浅談蒙古族説唱芸術的產生和發展」<sup>250</sup>、ボージンガン（包金剛）氏の「胡仁好来宝的起源」<sup>251</sup>と「胡仁烏力格爾的起源」<sup>252</sup>、チェジガワ（却吉嘎瓦）氏の「关于胡尔及胡尔齐」<sup>253</sup>などの研究論文と専門的な著作でも、ホーリンウリゲルはモンゴルジン旗で成立したことが述べられている。

上述してきた成立に関する記述によると、多くの研究者が「ホーリンウリゲルはモンゴルジン旗地区で成立したという説」に賛同していることが分かるほか、極めて少数の研究者がフフホト地区およびジャルート旗地区で成立したという、論証できない説を成立させようと試みている現状が掌握できる。

しかし、フフホト地区とジャルート旗地区の説が成立する根拠は不足しているので、モンゴルジン旗で成立したという観点に賛同するが、その理由は上述した各研究論文と専門的な著作に書かれている要因とは異なるので、その理由を以下のように説明したい。

筆者は2018年の8月から9月にかけて第1回のインタビュー調査を実施するときに、民間の知識人でありながらも民間のホールチでもある9番の視聴者<sup>254</sup>から瑞應寺の歴

---

248 16 • 1986年8月3日発行の《蒙古語版》（モンゴル語版）、「胡仁烏力格爾的起源問題」・1986年8月3日発行の《蒙古語版》。

249 2002年5月60日発行の《蒙古語版》（モンゴル語版）、「胡仁烏力格爾研究」。

250 1980年1月1日発行の《蒙古語版》（モンゴル語版）、「浅談蒙古族説唱芸術的產生和發展」。

251 1988年6月6日発行の《蒙古語版》（モンゴル語版）、「胡仁好来宝的起源」。

252 2000年4月4日発行の《蒙古語版》（モンゴル語版）、「胡仁烏力格爾的起源」。

253 1990年5月5日発行の《蒙古語版》（モンゴル語版）、「关于胡尔及胡尔齐」。

254 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・視聴者9番」を参照されたい。

史およびホーリンウリゲルの成立地域に関わる有力な情報が収集できた。そして、9番の視聴者の話によると、「彼の先祖は東北最大の瑞應寺を建てるときに、当該時期の山東地方からモンゴルジン旗に移住してきた工匠の後裔で、現在は第5代までに受け継がれてきた」という。

説得力があると言えるのは、彼の家には保存されている「面積が大きな柱」と「実物のドリボンウタストホール」であり、この「面積が大きな柱」は、1669年（清朝・康熙帝8年）に瑞應寺<sup>255</sup>を建てるとき、瑞應寺の初代ゲゲン（生き仏）・サンダンサンブ<sup>256</sup>（桑丹桑布）が、瑞應寺の建立事業に尽力した工匠を表彰した賞品であった。その「実物のドリボンウタストホール」（図8）は、瑞應寺の第4代ゲゲン（生き仏）・ロブサントブダラゲ<sup>257</sup>（羅布桑図布丹拉格）が円寂した後、ゲゲンが生前に使っていた長方形のテーブルの木を使用して、大小不等の四つのドリボンウタストホールを作ったものであった。



【図8】 清代のドリボンウタストホール

<sup>255</sup> 瑞應寺は1669年（清朝・康熙帝8年）から建設され、1703年（康熙帝42年）に大体の形ができ、同年に康熙帝から「瑞應寺」という寺の名前を与えられ、それを満州語・漢語・チベット語・モンゴル語の四つの言語で刻んだ扁額を持ち、現地のモンゴル人は「ゲゲンスム」と呼び、俗称では「東蔵」と呼んでいる。

<sup>256</sup> 瑞應寺の初代ゲゲン（生き仏）・サンダンサンブは、1633年、内モンゴル自治区・赤峰市（元ジョーオダ盟）のアオハン（敖漢旗）に生まれた。その後、ダルハン王・シアンバ（善巴）のトゥメット左旗軍と共に、現在の遼寧省・阜新モンゴル族自治州・佛寺地区に移住してきた。1669年に清朝・康熙帝の許可を得た上で、チベット仏教寺院「瑞應寺」を建設し始め、1720年（康熙帝59年）に円寂し、享年88歳だった。

<sup>257</sup> 瑞應寺の第4代ゲゲン（生き仏）・ロブサントブダラゲは、清朝・乾隆帝42年（1777）にジョント盟・トゥメット左旗に生まれ、1782年に瑞應寺の第4代ゲゲンに認定されたが、1934年に円寂し、享年58歳だった。

これらの史料および実物によると、ホーリンウリゲルがモンゴルジン旗で成立したことは明らかになったと言え、実際に成立した時期も 18 世紀末期から 19 世紀の初期の時期と考えられる。それゆえに、モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルは、12 世紀から 13 世紀に淵源を持ち、長い歴史の中で緩慢な形で変化し、さらに 18 世紀の末期から 19 世紀の初期に、ジョソト盟・トウメット左旗、即ちモンゴルジン旗で、現在のような吟遊詩人のホールチが低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語で長編の英雄叙事詩と歴史小説を語る上演形式に固定化されたとと言える。

## 第二節 ホーリンウリゲル成立の歴史背景と文化要素

ホーリンウリゲルという伝統芸能が 18 世紀の末期から 19 世紀の初期のジョソト盟・トウメット左旗（モンゴルジン旗）でその上演形式が固定化された要因としては、この地域には最も早い時期から漢人が流入して、漢文化とモンゴル文化が接触されたことを外因とすると、当該地区でモンゴルの先祖から代々に継承してきた口承文芸が多種多様な形で各々の役割を果たしていたことが内因になると考えられる。

### 一 清代ジョソト盟の社会背景とモンゴルジン旗の実態

清代のジョソト盟<sup>258</sup>（卓索図盟）には、ハラチン（喀喇沁）左旗・中旗・右旗 3 旗、トウメット（土默特）の左旗と右旗 2 旗、ハルハ（喀尔喀）右翼の 1 旗、合計 6 旗が包括されていたが、中華人民共和国が建立された後の 1950 年、清朝時代に制定された「盟」という制度が撤廃されてしまったので、もともとジョソト盟に管轄されていた領地の大半は現在の遼寧省の管下になり、省の西部に位置している。

清朝・康熙帝に至ると、山東地方の周辺を主とする漢人地域で、毎年、旱魃や土砂崩れなどの自然災害が起こったので、無数の漢人の農民の生活が重大な影響を受けた。そこで、それらの漢人の農民たちは、清朝政府が制定した「禁止令」を無視して、境界線を越えて東部モンゴル地区のハラチンとトウメットなどの蒙地に移住してきた<sup>259</sup>。大勢の漢人の農民が遊牧生活をしている蒙地に移住してきたので、ジョソト盟の各旗に住む

---

<sup>258</sup> 張穆「清代」『蒙古遊牧記』（漢語版）、蒙藏委員会印刷、1859 年、18—19 頁。

<sup>259</sup> 汗阿林汗《蒙古源流》（モンゴル語版）・汗阿林汗・1991 年 2 卷 2 頁。

モンゴル人の生活は変化し、次第に遊牧しながら農耕を行うようになった。

その後、清朝・嘉慶帝、あるいは、道光帝の時期に至って、全国各地から東部モンゴル地区のジョソト盟、ジリム盟、ジョーオダ盟、フルンボイル盟などの蒙地に移住する漢人の農民の数が急増した影響で、東部モンゴル地区の経済は変容し、以前の遊牧から徐々に半遊牧半農耕の経済に移り変わった。このような社会環境の変化に伴い、ジョソト盟のモンゴル人は、漢人の習慣に倣って定住するようになり、東部モンゴル地区ではモンゴル人を主とした村落が形成され、ホーリンウリゲルの固定化を促進した。

ジョソト盟の社会環境が大きく変化することによって、ハラチン人とトウメット人は、ほかのモンゴル盟旗より早い時期に漢人と漢文化に接触する機会を得たので、モンゴル人の中にも、漢語と漢字を学びながら、漢文で書かれた書籍および歴史小説を読んで、漢族の文化を深く理解しようと努力する人が増えてきた。そして、漢文で書かれた各領域の書籍がハラチン人とトウメット人の中に広がることによって、ジョソト盟モンゴル人の中で自民族の母語のモンゴル語以外に、漢語・チベット語・満州語にも精通する人材が育成され、多くの漢文と漢籍がモンゴル語に翻訳された。

例えば、漢族古典小説の代表作である『紅樓夢』は、漢人の移住によってジョソト盟に持ち込まれ、モンゴル人の文学愛好者と知識人の中に広く流行し、19世紀の初期、ジョソト盟・トウメット左旗のハスボ<sup>260</sup>（ハス宝）は、『紅樓夢』の作者・曹雪芹の筆鋒にずっと興味を持っていた。そこで、漢字と漢文を学んだ後、『紅樓夢』をモンゴル語で翻訳した。ハスボ（ハス宝）は『紅樓夢』を翻訳する際に、原本の120回を40回に絞り、毎回の後ろに評語を添付したので、モンゴル語版の『新訳紅樓夢』という著作は、モンゴル人の中でも大変人気がある作品になった。

また、漢人が蒙地に移住してきたことによって、モンゴル文化と漢文化の交流がジョソト盟の各地域で盛んになり、漢文と漢字に精通したモンゴルの文人は、自民族の文化要素をもとに、さらに漢族の古典小説と演義小説の書き方を参考にして、モンゴル独特の文学作品を創作しはじめた。このことによって、当時のジョソト盟で文学家・作家・翻訳家が育成されて、近代モンゴル文学と翻訳事業の発展に大きく貢献した。

---

<sup>260</sup> 亦隣真「蒙古族文学家哈斯宝和他的訳著」（漢語版）、蒙古史論文選集第三輯・呼和浩特市蒙古語文歴史学会編印、1983年、516—531頁。



例えば、近代モンゴル文学史上に名を広めたインジャンナシ<sup>261</sup>（尹湛納希）は、父親のワンチンバラ（旺欽巴勒）が完成できなかった『ᠠᠨᠢᠵᠢᠨᠠᠰᠢ』<sup>262</sup>（『青史演義』）を受け継いで執筆して完成させた。それ以外に、モンゴル語と漢語に精通することによって、自らも『一層楼』『泣紅亭』『紅雲淚』などの長編・中編・短編の歴史小説を創作した。彼の事績およびモンゴル文学界に送った作品は、モンゴルの民衆に対する影響が大きく、現在もモンゴルの青少年が必ず熟読する文学作品として重要視されている。

郷土資料である項福生氏主編の『阜新モンゴル族自治県民族誌』<sup>263</sup>の記載によると、当時のジョソト盟・トウメット左旗、即ちモンゴルジン旗では、名が広く知られている文学者・翻訳家・文人は、トウメット左旗の王府で書記として働く文官以外は、トウメット左旗のゲゲンスム（瑞應寺）で働くラマ僧であった。ラマ僧の文人は、当時、総合大学と称された瑞應寺で仏教の経典と宗教の法事を行う以外に、モンゴル語と漢語に精通し、漢文や漢籍をモンゴル語に翻訳する作業を行っていた。

また、当時の瑞應寺の中では、モンゴル民族の言語・文化・習慣などの領域に関する知識を学ぶ専門機関が設置されただけでなく、仏教の法事や寺院の祭祀を行うときに専用の音楽団体である「寺院経箱楽」も設置された。寺院の仏教音楽のような仕事を担当している楽士たちは、定期的に瑞應寺のゲゲン（生き仏）と上層部のラマ僧に、仏教音楽に関する曲牌（独奏リズム）を演奏したり、ホーリンウリゲルのような説唱芸術を披露したり、雑技や声帯模写（物まね）などの演目を上演したりする習慣があったことも確かめられる。

上述した内容をまとめると、清朝期のジョソト盟・トウメット左旗、即ちモンゴルジン旗地区は、すべてのモンゴル地区の中でも最も早い時期に漢人および漢文化と接触したので、東部モンゴル地区で率先して蒙漢文化が融合したのはなく、この文化接触の影

---

<sup>261</sup> 尹湛納希（1837～1892）、幼名はハスチョロー、漢名は宝瑛、字は潤亭、ジョソト盟・トウメット右旗、即ち現在中国・遼寧省の北票県の人、自らの陳述によるとチンギス・ハーンの第28代目の子孫になる。

<sup>262</sup> 大元の盛世状況を描写する『青史演義』という文学作品は、1830～1891年の間に尹湛納希によって執筆されたモンゴルの歴史小説である。この物語は長い間、手書き写本によって伝えられてきたが、近年になって活字印刷によって出版されるようになった。内モンゴルでは伝統的な縦モンゴル文字によって、モンゴル国では新しいモンゴル文字と言われているキリル文字によって出版された。

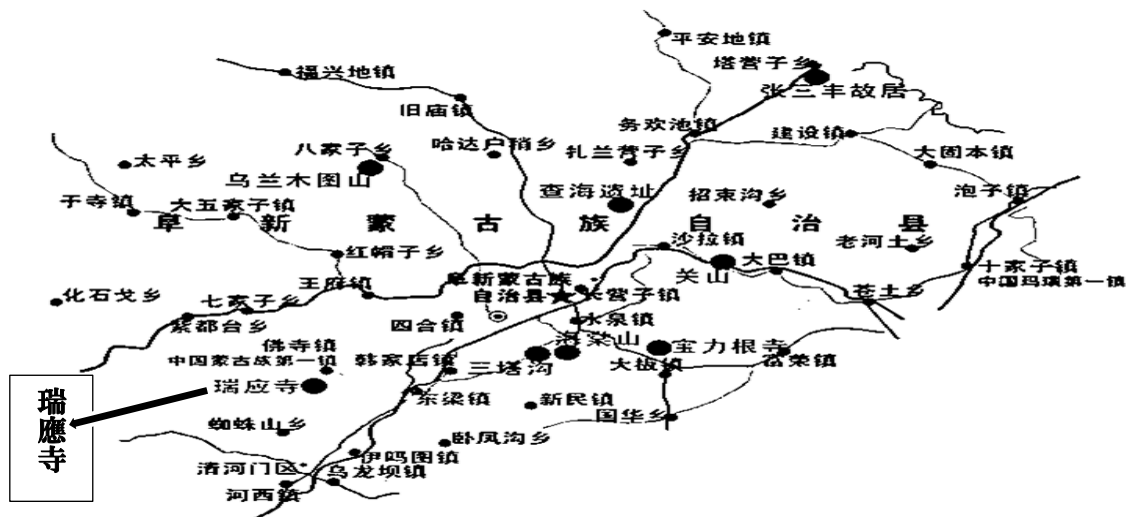
<sup>263</sup> 項福生主編『阜新蒙古族自治県民族誌』（漢語版）、遼寧民族出版社、1991年、260～275頁。

響を受けて半遊牧半農業の生活方式が形成され、次第にモンゴル人と漢人が共に生活する村落も形成されたことになる。

そして、このような社会的な条件が完備されただけでなく、ホーリンウリゲルがモンゴルジン旗地区で成立した決定的な条件は、清朝・康熙帝の許可を得たラマ増・サンダグサンブ（桑丹桑布）が、1669年（清朝・康熙帝8年）にモンゴルジン旗の奥地であるゲゲンスムという所に東北地区で最大のチベット仏教寺院である「瑞應寺」が建てられた後、寺院の中に「文書房」と「経箱楽班」を創設して、モンゴル語で漢文・漢籍を翻訳させる事業および仏教文化と寺院音楽を発展させたことと密接な関係がある。

## 二 瑞應寺の建立と寺院音楽の役割

仏教聖地の「 $\mathcal{M}\mathcal{U}\mathcal{L}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{R}$   $\mathcal{L}\mathcal{A}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{S}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{B}\mathcal{A}$   $\mathcal{L}\mathcal{E}\mathcal{G}\mathcal{U}$ 」<sup>264</sup>（瑞應寺）は、1669年から建設され、1703年（康熙帝42年）までに大体の寺院群の形ができあがった。同年に康熙帝からこの寺に「瑞應寺」という名前を与えられ、満州語・漢語・チベット語・モンゴル語の四つの言語で刻んだ扁額が交付された。それ以降の長い間、現地のモンゴル人によって「 $\mathcal{M}\mathcal{U}\mathcal{L}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{R}$   $\mathcal{L}\mathcal{A}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{S}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{B}\mathcal{A}$ 」（モンゴルジンゲゲンスム）という愛称で呼ばれ、また、建物自体がチベットの「布達拉宮」と似ているので、「西藏」と区別するために、俗称では「東蔵」とも呼ばれた。



【図9】阜新モンゴル族自治県と瑞應寺<sup>265</sup>

<sup>264</sup>  $\mathcal{M}\mathcal{U}\mathcal{L}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{R}$   $\mathcal{L}\mathcal{A}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{S}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{B}\mathcal{A}$   $\mathcal{L}\mathcal{E}\mathcal{G}\mathcal{U}$ ,  $\mathcal{M}\mathcal{U}\mathcal{L}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{R}$   $\mathcal{L}\mathcal{A}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{S}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{B}\mathcal{A}$   $\mathcal{L}\mathcal{E}\mathcal{G}\mathcal{U}$   $\mathcal{M}\mathcal{U}\mathcal{L}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{R}$   $\mathcal{L}\mathcal{A}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{S}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{B}\mathcal{A}$   $\mathcal{L}\mathcal{E}\mathcal{G}\mathcal{U}$  (モンゴル語版)・ $\mathcal{M}\mathcal{U}\mathcal{L}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{R}$   $\mathcal{L}\mathcal{A}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{S}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{B}\mathcal{A}$   $\mathcal{L}\mathcal{E}\mathcal{G}\mathcal{U}$   $\mathcal{M}\mathcal{U}\mathcal{L}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{R}$   $\mathcal{L}\mathcal{A}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{S}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{B}\mathcal{A}$   $\mathcal{L}\mathcal{E}\mathcal{G}\mathcal{U}$   $\mathcal{M}\mathcal{U}\mathcal{L}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{R}$   $\mathcal{L}\mathcal{A}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{S}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{B}\mathcal{A}$   $\mathcal{L}\mathcal{E}\mathcal{G}\mathcal{U}$ , 1984年/頁1  
 $\mathcal{M}\mathcal{U}\mathcal{L}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{R}$   $\mathcal{L}\mathcal{A}\mathcal{M}\mathcal{A}\mathcal{S}\mathcal{U}\mathcal{M}\mathcal{B}\mathcal{A}$   $\mathcal{L}\mathcal{E}\mathcal{G}\mathcal{U}$

<sup>265</sup> この地図は第2回の調査協力者1番から入手した。

瑞應寺は、東北地区最大の寺院として、建立された初期から東部モンゴル地区の各地域に住むモンゴル人に愛されてきた。勿論、当該時期にはジョソト盟以外の盟旗にも多くの寺が建てられたが、瑞應寺は無数のお寺の一隅として「政教合一」（1824年から実施した）の特徴を持つので、瑞應寺のゲゲン（生き仏）は王府の貴族と同じく政治的な特権を持つほか、仏教の指導者として宗教的な権利を握っていた。

モンゴルジン旗のゲゲンスム（仏寺）地区に建てられた瑞應寺<sup>266</sup>は、初代ゲゲンのサンタンサンブ（桑丹桑布）にはじまり、第2代ゲゲンのアワンロボサンダン（阿旺羅布桑丹）、第3代ゲゲンのガラサンダンポウンスケ（嘎拉桑丹贊朋斯克）、第4代ゲゲンのロブサントゥブラアゲ（羅布桑図布丹拉格）、第5代ゲゲンのヤェシトゥブダン（叶喜図布丹）、第6代ゲゲンのヤェシダリザ（叶喜達日扎）とスメピィニマ（森丕勒尼瑪）を経て、第7代ゲゲンのロサンイシ・ツェンライジェンツオ（洛桑儀希・成來堅措）は寺院のすべての政務と宗教活動を指導する立場にあった。

郷土資料である暴風雨氏主編の『蒙古貞史』<sup>267</sup>の記載によると、清代モンゴルジン旗の教育には、寺院教育、官営教育、官倉教育、私塾の四つの形態が存在した。この中でも、瑞應寺で働くラマ僧の文人を主とした寺院教育は質が高く、民衆の評価が高かった。清朝モンゴルジン旗の教育の主体となった。郷土資料『ᠰᠢᠷᠢᠨᠦᠭᠤᠯᠤᠯᠡᠭᠦᠨᠭᠠᠨᠠᠳᠠᠨᠤᠯᠤᠰᠤ』<sup>268</sup>（瑞應寺）の統計によると、1669年に瑞應寺を建て始めた後、普安寺などの寺院もモンゴルジン旗の各地に相次いで建てられたので、清朝末期に至ると、モンゴルジン旗の全土に300寺以上のチベット伝来の仏教寺院が建てられた。

これらの寺院は「政教合一」の瑞應寺を中心として動き、モンゴルジン旗の全土の寺院教育に関わる科目・教材・教具・教案などはすべて瑞應寺が統一して提供することとなっていた。1702年（清朝・康熙帝41年）に、瑞應寺の初代ゲゲンのサンタンサンブ（桑丹桑布）の主導で、伝統的なモンゴル医学を学習・研究する「門巴学部」が創設された。この「門巴学部」では、モンゴル民族が有する伝統医学を研究するほか、当該時

266 ᠰᠢᠷᠢᠨᠦᠭᠤᠯᠤᠯᠡᠭᠦᠨᠭᠠᠨᠠᠳᠠᠨᠤᠯᠤᠰᠤ (モンゴル語版) ・ ᠰᠢᠷᠢᠨᠦᠭᠤᠯᠤᠯᠡᠭᠦᠨᠭᠠᠨᠠᠳᠠᠨᠤᠯᠤᠰᠤ / 1984 年 / 87 巻 / 11 頁

267 暴風雨主編『蒙古貞史』(漢語版)、内蒙古人民出版社、1998年、128－132頁。

268 ᠰᠢᠷᠢᠨᠦᠭᠤᠯᠤᠯᠡᠭᠦᠨᠭᠠᠨᠠᠳᠠᠨᠤᠯᠤᠰᠤ (モンゴル語版) ・ ᠰᠢᠷᠢᠨᠦᠭᠤᠯᠤᠯᠡᠭᠦᠨᠭᠠᠨᠠᠳᠠᠨᠤᠯᠤᠰᠤ / 1984 年 / 10 巻 / 11 頁

期までのモンゴル医学史を整理・執筆・出版する作業も進められた。さらに、モンゴル語・漢語・チベット語・梵語・満州語に精通するラマ僧たちは、各々の知識を活かしてモンゴル語以外の言語で書かれた医学経典を多量に翻訳した。

例えば、瑞應寺のラマ僧の医師の編纂によって製本された『四部医典』『増方四部演経』『密封療法』『薬方』などの書籍は、伝統的なモンゴル医学を学ぶときの必須教材として重要視されるほか、伝統的なモンゴル医学の真髄を教えるときにも重要な役割を果たしてきた。このような影響を受け、当時の瑞應寺で墨尔根、温布、善濟米図のような名人のラマ僧の医師が育成されたので、彼らはモンゴルジン旗の全土を遊歴した後、東北や内モンゴルなどの地域に行き、瑞應寺で学んだモンゴル医学の知識を活かして無数の患者を治療した。

1823年（清朝・道光帝3年）に、瑞應寺の第4代ゲゲンのロブサントゥブラアゲ（羅布桑図布丹拉格）の主導によって、モンゴルの天文暦法のような文科の知識を学習・研究する「丁科学部」が創設された。この「丁科学部」には古代モンゴル人の制作した地球儀と漏鐘のような測定器具があったので、瑞應寺のラマ僧たちはこれらの器具を上手く使って、学習中のラマ僧に実演しながら理論的な知識を教えた。その時からモンゴルジン旗のラマ僧たちは、モンゴル語で編纂・印刷した「暦書」を作って、瑞應寺が管轄する周辺の村落に配布した。

この「丁科学部」に教鞭をとるラマ僧の教師の努力によって、当該時期に無数の天文・地理・天象を肉眼で測定できる人材が育成されたので、モンゴルジン旗の遊牧民と農耕民たちは放牧や農耕に出かけるとすぐ時間が確認できるようになった。これらの天文の人材は、瑞應寺である程度の課程を履修した後、チベットの布達拉宮に行って再び研修する機会があった。現代人の視点から見ると、「丁科学部」では瑞應寺と布達拉宮で連合して教育を運営していたと言える。

上述した「門巴学部」と「丁科学部」以外に、瑞應寺の中には「文書房」と「経箱楽班」など様々な部門が設置されたが、「文書房」で働くラマ僧たちは、モンゴルの言語と文化の伝承および漢文・漢籍をモンゴル語に翻訳する事業に重要な役割を果たした。例えば、「文書房」の設置によって、寺内のラマ僧たちは協力し、漢語・チベット語・満州語などの言語を学び、さらに学習した知識を活かして漢籍を翻訳したり、モンゴル

語で歴史小説を創作したり、仏教の古典経典を整理したりしたので、当時の瑞應寺からは有名な文学家・小説家・医者・天文学家・楽士・ホールチが多く出た。

また、瑞應寺の「経箱楽班」<sup>269</sup>には、仏教の経典および宗教儀礼に精通する上層部のラマ僧1名（指揮官の存在）と、寺院音楽でよく使われている仏具（主に打楽器）・唄（チャルメラ）・笛・笙・官・木魚（ウッドブロック）・九音鑼・羊角号・ホラガイ・ドリボンウタストホール（四胡）など様々な楽器を独奏・合奏・弾きながら歌唱・説唱するラマ僧8～12名がいた。これらの楽士の中で特筆して紹介したい人は、上述した「文書房」の指導者でありながら「経箱楽班」の楽士でもあった上層部のラマ僧文人・ホールチのエンケテグス（恩赫特古斯）である。

彼は当時のモンゴルジン旗を管理していたタブナン（塔布囊）出身で、子どものときからより良い教育を受けてきたので、ラマ僧（バンディ）として瑞應寺に入門するとき、すでにモンゴル語と漢語に精通していた。瑞應寺に入門した後、寺院教育を受けながら、ラマ僧の教師やラマ僧の文人の指導によって、仏教の経典および漢文で書かれた歴史小説を学んだ<sup>270</sup>。そこで、彼はモンゴル民族の古代英雄叙事詩に登場する英雄像をもとにして、さらに寺院教育の授業で学んだ漢文小説の書き方を参考にし、モンゴル語で212万字を超える長編章回体の歴史小説『興唐五伝』（シリーズ文学作品）を創作した<sup>271</sup>。

この長編歴史小説が誕生した直後、瑞應寺のゲゲンを主とするラマ僧の上層部に歓迎され、しばらくすると、モンゴルジン旗王府の貴族も『興唐五伝』を朗読するようになったので、エンケテグスとともに創作した作品もモンゴルジン旗で有名になった。しかし、貴族と民衆が『興唐五伝』を朗読したので、民間では少し不満の声も出て、エンケテグスは寺院音楽に合わせて演唱しはじめた<sup>272</sup>。その後も長い間続けていたが、さらに不満の声が出てきたので、エンケテグスは寺院の楽士が使っていたドリボンウタストホ

---

<sup>269</sup> 暴風雨主編『蒙古貞史』（漢語版）、遼寧民族出版社、1998年、122-127頁。

<sup>270</sup> 楊陽（モンゴル名：蒙古貞夫）「ホーリンウリゲルの中興の祖と名著『興唐五伝』の作者—エンケテグス（恩赫特古斯）を中心に—」（日本語版）、『東京学芸大学大学院・連合学校教育学研究科・学校教育学研究論集』第40号、2019年、36-37頁。

<sup>271</sup> 同上の楊陽（モンゴル名：蒙古貞夫）「ホーリンウリゲルの中興の祖と名著『興唐五伝』の作者—エンケテグス（恩赫特古斯）を中心に—」（日本語版）、33頁。

<sup>272</sup> 同上の楊陽（モンゴル名：蒙古貞夫）「ホーリンウリゲルの中興の祖と名著『興唐五伝』の作者—エンケテグス（恩赫特古ス）を中心に—」（日本語版）、35-37頁。



たほか、ダンスンニマ・ホールチにも拝師して、ホーリンウリゲルの説唱方法と技巧を習得していた。

それゆえに、ホーリンウリゲルという上演形式が固定化されても、トブシュリ（托布秀尔）とチョール（潮尔）を使って語るトーリとマングスインウリゲルは迅速に衰退したのではなく、長い間、東部モンゴル地区でマングスチとホールチは共存していた。また、この時期のホーリンウリゲルは上演形式が固定化しても、モンゴル民族を代表する伝統芸能にはまだなっていなかったもので、民間芸人がトブシュリ（托布秀尔）とチョール（潮尔）を使った語る時間を減らして、主に低音のドリボンウタストホールを使って語る形式を擦り合わせ、マングスチとチョールチたちは次第にホールチに変わったのではないかと考えられる。

マングスチとホールチが共存する時期は、ホーリンウリゲルにおいて最も重要な転換期になると考えられる。なぜかと言うと、上述したチュイバン（朝玉邦）・ホールチの弟子である有名なホールチとマングスチ・パジエ（琵琶）について、冬青氏主編の『ホールチの揺籃—ジャルート—』<sup>275</sup>（胡尔齐摇篮—扎鲁特—）という著作には、「パジエ（琵琶）はチュイバン（朝玉邦）・ホールチに拝師して、マングスインウリゲルとホーリンウリゲルを語る技法を習得し始めた後、悪魔のマングスを鎮圧する物語と歴史小説を語るレベルが上達した」と記述している。

このような記述から見ると、一人の民間芸人が同時にマングスチとホールチという二つの身分を持って、多種多様なモンゴル英雄叙事詩と歴史小説を語る状況は少なくとも20世紀の60年代および80年代まで継承されてきたと考えられる。しかし、パジエ・ホールチが活躍していた時に、チョールを使って悪魔のマングスを鎮圧するウリゲルを語っていたマングスチの多数は、低音のドリボンウタストホールを使って語るホーリンウリゲルに変わったので、20世紀後半期までに東部モンゴル地区でチョールを使って悪魔のマングスを鎮圧するウリゲルを語るマングスチは極めて少数となってしまった。

また、郷土資料である暴風雨氏主編の『蒙古貞史』<sup>276</sup>の記載によると、清代の統治者

---

<sup>275</sup> 蒙文著者《胡尔齐摇篮—扎鲁特—》（モンゴル語版）、内蒙古人民出版社、2010年12月、36頁。

<sup>276</sup> 暴風雨主編『蒙古貞史』（漢語版）、遼寧民族出版社、1998年、108—110頁。

は、満州文化と満州語を学習する文化政策を押し広めていたので、当時のモンゴルジン王府と瑞應寺の中にはモンゴル語・満州語・漢語に精通する人が年々増加し、多量の満州語と漢語で書かれた古典文学作品および歴史小説がモンゴル語に翻訳されて写本化された。

清朝の乾隆帝・嘉慶帝・道光帝の時期には、全国の農業総生産額の増加によって、モンゴルジン旗に集住するモンゴル人の生活レベルも次第に向上した。その時のモンゴル民衆たちは物質生活だけに満足せず、精神生活を多様化させる意向も高くなってきたので、モンゴルジン王府の楽士と瑞應寺の「経箱楽班」のメンバーを中心に、昔の時代に流行っていた伝統芸能（民謡・故事・物語・写本・文学作品など）を対象に、革新・改編する作業を行ったという。

これらの記述によると、モンゴルの民間芸人たちは、もともと使っていたトブシュリ（托布秀尔）とチョール（潮尔）を捨て、低音のドリボンウタストホールに変えた。それは、悪魔のマンガスを鎮圧するマンガスチたちがみずから志願したのではなく、時代の変遷および視聴者の好感度によって決定されたのであり、それは即ち歴史の選択であった。また、ホーリンウリゲルの変容史上に、このようなマンガスチとホールチが共存する重要な転換期があったので、現在ホーリンウリゲルの詞牌と曲牌にはシャーマニズムの音楽・宮廷音楽・寺院音楽の要素が数多く入っていると考えられる。

ここで特筆すべき点は、ホーリンウリゲルの上演形式が固定化され、東部モンゴル地区で悪魔のマンガスを鎮圧するマンガスインウリゲルを語るマンガスチが次第に減少したのは、時代の変遷および視聴者の好感度によって変化した外因だけではなく、説唱芸人の説唱内容と方法などの要素と密接に関係する内部の原因も考えなければならない。

例えば、モンゴルの英雄叙事詩を語るトーリチ（陶力沁）と悪魔のマンガスを鎮圧するウリゲルを語るマンガスチ（蟒古斯沁）は、モンゴル語に翻訳された漢族の古典文学と演義小説を語るホールチと同様に、その語り手は各々の伴奏楽器を使ってモンゴル語でウリゲルを語っている。清朝期に至って、ジョソト盟を主とする東部モンゴル地区では、多くの漢人農民が生計を維持するために、次々にモンゴル人が集住する地域に移住したので、東部モンゴル地区で蒙漢両族の人々が共住する村落が形成され、遊牧文化を



代表するモンゴル文化が農耕文化を代表する漢文化と接触することになった。

そこで、このような社会環境の影響で、トールチとマングスチたちは、以前に説唱していた内容と方法を変えて、ホールチが主に説唱している漢族の演義小説を説唱しなければならなくなり、マングスチの数は次第に減少し、逆にホールチの数はだんだん増加した。その時からホーリンウリゲルという伝統芸能は、東部モンゴル地区に集住するモンゴル人中で、悪魔のマングスを鎮圧するマングスインウリゲルより歓迎される民族の伝統芸能になっていった。

### 第三節 ホーリンウリゲルの伝播状況

ホーリンウリゲルという伝統芸能は、清朝期のジョソト盟・トウメット左旗（モンゴルジン旗）で成立した初期に、吟遊詩人のホールチが瑞應寺のゲゲン（生き仏）と上層部のラマ僧に対して上演していたが、しばらくの時間を経てからエンケテグス・ホールチの説唱によって瑞應寺の周辺地区の民間に伝播した。その後、ダンスンニマ（丹森尼瑪）・ホールチが瑞應寺のルールに違反して瑞應寺から追い出され、民間芸人として、このような上演形式を瑞應寺の内部から佛寺全域、佛寺全域からモンゴルジン旗全域、モンゴルジン旗全域からジャルート旗、ジャルート旗から東部モンゴル地区までに拡散させた。

しかし、現存の史料と文献を振り返ると、ずっとラマ僧文人と認識されていたエンケテグス（恩赫特古斯）は、実際に「ホールチ」という重要な身分を持っているという情報はあまり紹介されていなかった。また、ダンスンニマ（丹森尼瑪）・ホールチについても、研究界ではホーリンウリゲルの元祖と記述されてきたが、筆者の現地調査の結果によると、ダンスンニマがエンケテグスからホーリンウリゲルの説唱方法を学んだ史実があったので、本章では、調査によって収集した内部資料を使って、ホーリンウリゲルの伝播に関わる疑問点を明らかにしたい。

## 一 ホーリンウリゲルの中興の祖と名著『興唐五伝』の作者<sup>277</sup>

長編章回体の歴史小説『興唐五伝』<sup>278</sup>（以下『五伝』と記す）は、モンゴル民族に特有の長編英雄叙事詩『ゲセル・ハーン伝説』（格斯尔汗）と『ジャンガル・ハーン伝説』（江格尔汗）に登場する英雄をモデルとし、主に漢族の長編演義小説である『隋唐演義』<sup>279</sup>の表現や表記を参考にして創作された虚構の文学シリーズ作品である。この『五伝』の原稿はモンゴル語で書かれ、総字数が212万字に及ぶ巨大な作品であり、第1部の『苦喜伝』、第2部の『全家福』、第3部の『殤妖伝』、第4部の『契僻伝』、第5部の『羌胡伝』（上部・下部）で構成され、その続編として『寒風伝』（第6部と言える）も残されている。



【図10】モンゴル語版の長編歴史小説シリーズ『興唐五伝』<sup>280</sup>

小説『五伝』の第1部である『苦喜伝』の巻頭において、隋朝の皇帝・隋煬帝は自分

<sup>277</sup> 楊陽(モンゴル名:蒙古貞夫)「ホーリンウリゲルの中興の祖と名著『興唐五伝』の作者—エンケテグス(恩赫特古斯)を中心に—」、『東京学芸大学大学院・連合学校教育学研究科・学校教育学研究論集』第40号、2019年10月、33-45頁。

<sup>278</sup> 小説『興唐五伝』の写本を再整理して1979年～1982年の間に内モンゴル人民出版社からモンゴル語版を出版した。また、2000年～2006年の間に遼寧民族出版社は内モンゴル人民出版社から出版したモンゴル語版を手本として漢語で翻訳して出版した。この小説の正式の名称は『興唐五伝』と呼ばれるが、長い民間で『唐書五伝』および『五伝』と呼ばれてきたため、本章では略称した『五伝』を使うことにした。

<sup>279</sup> 漢族の演義小説『隋唐演義』は、明朝の末期と清朝の初期に緒人獲が創作した長編の歴史的な章回体小説である。本小説の隋唐の正史・野史・民間での伝説を総括して創作された。魯迅は『隋唐演義』という作品が清朝の1675年(康熙帝14年)に完成したと判断しているが、現存する最も古い写本は、1695年(康熙帝34年)に四雪草堂から刻印した図版である。

<sup>280</sup> この資料は第2回の調査協力者5番から入手した。

の父親である隋文帝・楊堅を殺して隋朝の政権を支配して以来、全国の徴税を増加し、官僚が民衆を圧迫する現象が次第に増え、隋朝の各地で隋煬帝の政権に反対する声が日々に高まってきた。それゆえに、もともとの隋朝で正義の代表であった李淵は、塗炭の苦しみに巻き込まれた民衆を救い出すため、隋朝各地の正義軍が集まって酒色に溺れて見境のない隋煬帝を討伐し、隋朝の政権を転覆した。

李淵は、隋の帝室楊氏と同じく武川鎮軍閥の出身で、北魏（鮮卑）・北周（鮮卑）以来の八柱国・十二将軍と称される鮮卑系の貴族であった。隋の帝室と同じく貴族であった李淵は、隋煬帝の反乱を鎮圧したことに伴い、民衆の意と天命に順応して国号を「唐」に命名し、新しい唐朝の政権を作り上げて開元した。李淵には長男・李建成、次男・李世民（唐太宗）、第三子・李玄霸（李元霸）、第四子・李元吉という4人の息子がいたが、次男の李世民は、中国古代の堯帝と舜帝の人徳を修養し、唐高祖・李淵を補佐して天下を得た。唐の高祖・李淵が逝去した後、次男の李世民が皇位に就き、年号を「貞観」に命名した。同時に、唐の太宗・李世民は仁政を施して民衆の徴税を削減し、唐朝の民衆たちに安穏な暮らしを送らせたので、全国各地で安泰の光景が現われ、このような状態は200年以上維持され、後世の人々はその安定した時期を「貞観之治」と呼んだ。

『五伝』は上述した唐太宗・李世民が逝去した後、李氏の子孫である李子暉が皇位を就いた時から語り始めた。第1部の『苦喜伝』からの続編である『寒風伝』まで、忠義と正義を代表する唐朝の建国功臣徐茂公・秦叔宝・程咬金・羅成・尉遲恭の子孫達が、狡猾と邪悪を代表する狡い奸臣符氏等と闘争したことを中心に、第1部の『苦喜伝』に登場する主人公・唐高祖李淵の第8代子孫の炎熊皇帝・李子暉から、続編の『寒風伝』に登場する李信皇帝まで100年以上の唐朝の歴史を語る。

全巻において大きい国と小さい国が20カ国ほど出現するが、これらの国は同盟国であり、隣国であり、敵国でもあった。この国々の多くは、唐朝内部にいる奸臣符氏と共謀して炎熊皇帝が美色にのめり込んでいることを機に唐朝の政権を転覆させようと謀った。しかし、彼らの陰謀が発覚し、建国功臣の子孫薛嵩・秦龍・程四海・羅猛・尉遲顛徳・徐世黎・秦俊彪・鐘旭亮・薛寒・羅強に鎮圧される。物語の最後は唐朝が安定的な状況に回復したことでまとめる。

『五伝』はモンゴル文学において最も重要な位置を占めてきた。しかし、価値のある

文学作品なので、これまで研究者たちの論争点になり、特に『五伝』の作者に関しては長年にわたり定説がなかったため、『五伝』を研究する各雑誌・投稿論文・学術論文で勝手に執筆している現象が絶えなかった。そのために、筆者は2019年8月26日から9月18日<sup>281</sup>にかけて『五伝』の発祥地である中国・遼寧省の阜新モンゴル族自治県に行き、現地でモンゴル族の文化遺産を収集・整理・保護している人および国家級非物質文化遺産の伝承人、合計8人を対象にインタビュー調査を実施し、同時にこれらの人々から埋もれていた多くの内部資料を入手した。以下、これらの郷土資料を使って、小説『五伝』およびその作者に関わる課題を明らかにしたい。

これまでの『五伝』に関する先行研究には、作品と作者に関する研究に分けられる。作品に関する研究には、第1部から第5部までの各部を対象とした研究と『五伝』全巻を（第6部の『寒風伝』を除く）を対象とした研究が見られる。例えば、ザラガ（扎拉嘎）氏の著作『比較文学：文学平行本質における比較研究—清代の蒙漢文学関係への考察』に収録されている「蒙古史詩伝統と漢族演義小説の結合—『五伝』への考察」<sup>282</sup>は、歴史小説『五伝』の全巻を対象に比較文学の視点からモンゴル文化の要素を分析した上で、『五伝』は単なる漢族の歴史小説の書き方・表現方法などを吸収したものではなく、モンゴル民族の長編英雄叙事詩の特徴を十分に発揮したもので、蒙漢両族（モンゴル族と漢族）の文化が接触した後の結晶作品であると述べている。

『五伝』の各部を対象にした研究としては、陳永春氏を主とする幾つかの論文が挙げられる。例えば、文風・陳永春両氏の「小説『苦喜伝』の叙事特徴を論じる」<sup>283</sup>という論文では、まず、第1部の『苦喜伝』で、皇居の下僕である鶯雛が西宮・符賢妃を主とする奸臣の脅迫で、東宮・張貴妃の生んだ太子を陰で交換し、さらに、東宮・張貴妃は西宮・符賢妃の誣告によって炎熊皇帝から張貴妃の名誉を取り下げ、庶民に貶めたとまとめた。これを蒙漢文学の視点から分析し、『苦喜伝』は単なる漢族歴史小説の書き方・

---

<sup>281</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・エンケテグス・ダンスンニマ・五伝に関するインタビュー調査」を参照されたい。

<sup>282</sup> 扎拉嘎『比較文学：文学平行本質的比較研究—清代蒙漢文学関係論稿』（漢語版）、内蒙古出版社、2003年。

<sup>283</sup> 文風・陳永春「論〈苦喜伝〉叙事特点」（漢語版）、『内蒙古民族大学学报（社会科学版）』第41巻第1期、2015年、21-23頁。





者はエンケテグスであることは確認できるが、第5部の作者はエンケテグスではなく他の人が纏めた」という結論を出している。

また、別の研究者は、『五伝』の作者は未だ明確にされていないことを記す。例えば、内モンゴル自治区で主催した『朝魯門』という雑誌には、「所謂『五伝』という作品は1979年～1982年の間に、内モンゴル人民出版社から民間で残された写本をもう一度整理してモンゴル語で正式に出版した。しかし、最新の『五伝』には、この本はモンゴルジン旗・ゲゲンスムにある瑞應寺のラマ僧たちが共に創作した作品であり、実際の作者は未だ明確にされていない」<sup>297</sup>という記載があった。バイイウリウン（白玉栄）氏は「小説〈羌胡伝〉と前〈四伝〉との関係を再論」<sup>298</sup>という論文で、「東部モンゴル地域で有名な『五伝』は、中原唐朝の100年間の盛衰史を語る長編歴史小説であり、作者はモンゴル人である」と述べている。さらに、白玉栄氏は「蒙古本子故事〈五伝〉の写作する文化背景」<sup>299</sup>という投稿論文で、「国内の学者達は、20世紀の80年代から『五伝』に注目し、かつ、一部の研究者は『五伝』の作者はモンゴルジン旗・ゲゲンスムにある瑞應寺のラマ僧エンケテグスであることを認めているが、このような結論は単に民間で流行っている言い方であり、実際に証明できる資料はなく、これからも考証する必要がある」と説明している。

上述したように、現在の中国国内には『五伝』の作者について三つの説があるが、『五伝』の作者はエンケテグスであるとする説に賛成する。その理由としては、筆者の現地調査の結果によると、まず、『五伝』は清朝期のモンゴルジン旗で書かれたことについて、研究者の意見は一致している。次に、調査によって長年にわたって埋もれていた資料が公開され、これらの資料から阜新モンゴル族自治州では<sup>300</sup>、1983年から『五伝』の

---

297 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 860. 861. 862. 863. 864. 865. 866. 867. 868. 869. 870. 871. 872. 873. 874. 875. 876. 877. 878. 879. 880. 881. 882. 883. 884. 885. 886. 887. 888. 889. 890. 891. 892. 893. 894. 895. 896. 897. 898. 899. 900. 901. 902. 903. 904. 905. 906. 907. 908. 909. 910. 911. 912. 913. 914. 915. 916. 917. 918. 919. 920. 921. 922. 923. 924. 925. 926. 927. 928. 929. 930. 931. 932. 933. 934. 935. 936. 937. 938. 939. 940. 941. 942. 943. 944. 945. 946. 947. 948. 949. 950. 951. 952. 953. 954. 955. 956. 957. 958. 959. 960. 961. 962. 963. 964. 965. 966. 967. 968. 969. 970. 971. 972. 973. 974. 975. 976. 977. 978. 979. 980. 981. 982. 983. 984. 985. 986. 987. 988. 989. 990. 991. 992. 993. 994. 995. 996. 997. 998. 999. 1000.

298 白玉栄「〈羌胡伝〉と前〈四伝〉関係再論」(漢語版)、『内蒙古民族大学学报(社会科学版)』第37卷第3期、2011年、37頁。

299 白玉栄「蒙古本子故事〈五伝〉写作文化背景」(漢語版)、『内蒙古民族大学学报(社会科学版)』第43卷第2期、2017年、72頁。

300 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者2番」を参照されたい。

作者を明らかにするため、自治県全域を対象に多くの郷土資料を収集する作業およびインタビュー調査を行った際に、エンケテグスの孫であるボバ（布巴）とモル（毛茹）の協力を得て、『五伝』の作者がエンケテグスであることを明確にしたことが分かる。

一方、ザラガ氏は、『五伝』の第5部である『羌胡伝』（上部・下部）の作者はエンケテグスではないという観点を持たず、『五伝』の作者はエンケテグスであるが、第1部から第4部までの作品を完成した後、相当の時間が経ってから第5伝を執筆したかもしれないという不明瞭な結論であった。この観点に関して、内部資料として取り扱ったリュウウンシャン（劉文祥）氏の論文<sup>301</sup>から得られるのは、まず、エンケテグスはモンゴル語で『五伝』の原稿を作って、自分の弟子に手書きで第1部から第5部までの写本を作らせた。次に、エンケテグスは『五伝』を創作する際に、1段落を作った後、すぐ近所に住む友達の前で語ってみた。友達が大きい声で笑ったので、彼は続けて創作したが、逆に友達があまり笑わないと、彼はその作品を創作し直す習慣があった。そこで、上述したように、手書きで創作しながら膨大な文学作品を完成するのに、相当の時間がかかったと考えられる。

他方、チョコトウ氏は、『五伝』の第1部から第5部までの内容を読んだ後、『五伝』の第1部から第4部までの作者はエンケテグスであるが、第5部は別人の執筆したものであるという結論を出した。この観点に関して、劉文祥氏の論文<sup>302</sup>から得られるのは、阜新モンゴル族自治県では全域を対象に調査を実施する際に、エンケテグスの生まれた仏寺郷・東河欄村に住んでいる彼の孫であるボバ（布巴）とモル（毛茹）の協力を得た。孫たちは先祖であるエンケテグスのことを家族の中で伝え、『五伝』のウリゲルは祖父であるエンケテグスが創作した文学作品であることを述べた。彼の第5部の作者は別人であるという観点は筋が通るとしても、第5部を実際に執筆した人の名前は示されていないの

---

<sup>301</sup> 劉文祥「内部資料」「關於蒙古族名著〈興唐五伝〉及其作者的采訪調查」（漢語版）、阜新蒙古族自治県・蒙古語文工作委員会、1990年。また、劉文祥の紹介によると、彼はモンゴル語の名前リュウ・ボゴ（劉・宝力高）を使って、『阜新モンゴル族自治県新聞・特刊采貝集（1983～1993）』を皮切りに、中国モンゴル語文学学会・内モンゴル自治区モンゴル語文学学会・内モンゴル自治区モンゴル族文学学会・遼寧省モンゴル語文学学会・内モンゴル師範大学学報・遼寧省優秀な論文集・中国モンゴル語語文・中国文学報・内モンゴル日報・遼寧日報に口頭発表・投稿した、また、モンゴル族文学研究優秀成果賞と遼寧省新聞論文2等賞を受賞した。

<sup>302</sup> 同上、劉文祥の論文。



で、この観点は成立する根拠がないと判断できる。

また、『五伝』の作者は明確にされていないという観点に関しては、先行研究に関する検討および資料を収集することが不十分であったことが分かる。そこで本章では、筆者による現地調査の結果と入手した内部資料に基づき、まず、これまで『五伝』の作品・作者に関する研究を整理した上で検討する。次に、『五伝』の作者はエンケテグスであることを明らかにした上で、先行研究によりモンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルの元祖はダンスンニマであるという記述を改めて、ホーリンウリゲルの中興の祖はエンケテグスであることを明らかにする。

歴史小説『五伝』は、清朝期のジョソト盟・トウメット左旗、即ちモンゴルジン旗で創作されてから、モンゴルジン旗を主とする広大な内モンゴル自治区で広く伝えられてきた。小説『五伝』の写本は、100年以上の歳月を経て、多くが民間に流布した。残念なことには、文化大革命の時にエンケテグスの直筆を含む多くの写本は燃やされてしまい、モンゴル文学にとっては取り返しのつかない損失であった。幸運なことには、広いモンゴルの大草原で生活していた民衆たちは、自分の命を賭けて『五伝』の写本を残していた。しかし、これらの写本には作者の名前が書かれていなかったため、民衆と研究者たちは『五伝』の作品のみ読んで語り、もともとの作者が誰かということは忘却された状態であった。

そこで本章では、阜新モンゴル族自治州・蒙古語文工作事務所で秘蔵され、長年にわたって外部に公開できなかった重要な内部資料であるトグトンガ氏等の共著『瑞應寺』<sup>303</sup>、『阜新モンゴル族自治州新聞・特刊采貝集（1983～1993）』を参考にして、さらに、第2回の調査協力者5番<sup>304</sup>により入手した論文「小説『五伝』の作者を訪ねる」<sup>305</sup>、調査協力者3番<sup>306</sup>により入手した論文「モンゴルジン旗の〈インザナシ〉—エンケテグス—」

---

303 蒙文版『五傳』、第1冊、第1章、第1節、第1段、第1行（モンゴル語版）、北京、人民文学出版社、1984年。

304 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者5番」を参照されたい。

305 托·恩和（『五傳』の著者）の自伝（モンゴル語版）、北京、人民文学出版社、1984年。『五傳』の著者（1983～1993）、北京、人民文学出版社、1993年。『五傳』の著者（1983～1993）、北京、人民文学出版社、1993年。『五傳』の著者（1983～1993）、北京、人民文学出版社、1993年。

306 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者3番」を参照されたい。



ルを改編して語った。子どもの頃から多くの領域に関わる書籍を熟読したため、ドリボンウタストホールを弾きながらウリゲルを語るときに、多種多様な文学的な言葉や比喻表現を使って聞き手の人々を大笑いさせ、何カ月語り続けても終わらない状態であった。

エンケテグスはかなり面白い新しいウリゲルを語るということが多くの人に知られてきたが、ちょうどその頃、瑞應寺のゲゲン（日本語の生き仏に近い者を指す）もエンケテグスのことを聞き、寺院に誘った。彼はゲゲンにウリゲルを語ることは大切な機会になると思い、普段は民間で語って好評だった唐朝のウリゲルをまとめてから、ゲゲンにウリゲルを語った。ゲゲンはエンケテグスの語ったウリゲルを聞いて喜んだ。それ以降、彼は長い間瑞應寺のジンサ（寺院の官職）という職業を仕事にした。

エンケテグスは30歳になってから『五伝』を書き始め、長い時間をかけて第1部の『苦喜伝』を完成し、続編である『寒風伝』までの長編歴史小説シリーズを完成した。40歳になってから内モンゴル自治区のナアイマン・ホシュ（奈曼旗）に移住し、そこでも多くの文化遺産を整理したり、漢族の歴史小説をモンゴル語で翻訳したり、民謡と新しいウリゲルを創作したりして人生の最後の生活を過ごし、50歳を過ぎて逝去した、と書かれていた。

次に、上述した資料を提供した5番の調査協力者は、「私は1986年に瑞應寺から退職したラマ僧、民間芸人、モンゴル語教師、合計50以上の人を対象に聞き取り調査を実施する際に、協力者はほぼ70～80歳以上の年配者だった。調査が終わった後にしばらくして逝去した者が多かったため、今日までもし生きていても110歳を超えているはずであるが、残念なことには、今日までに50人以上の協力者は全員逝去してしまった。しかし、私より年齢が上で、現在も民族の文化遺産を継承・保護するために努力している年配者は、自分の父親と母親、さらにお祖父さんとお祖母さんの時代のことをまだ覚えていると思うが、貴方はその人たちを対象に調査すれば、史実に近い資料を得られるのは確実である」と述べ、筆者にもアドバイスと資料を提供してくれた。

第三は、3番の協力者にインタビュー調査した結果および内部資料として取り扱った論文「モンゴルジンホシュの〈インザナシ〉—エンケテグス—」によると、1986年7月26日に、内モンゴル師範大学の教授・ボウインバトウ（宝音巴图）氏は、『五伝』の作者を明らかにするため、フフホト（呼和浩特）から阜新モンゴル族自治州にきた。教

授は、「私はフフホトで歴史小説『五伝』の作者は、モンゴルジン旗・ゲゲンスムのラマ僧達が共に創作した作品だということを知った。瑞應寺のゲゲンはウリゲルを聞くことが趣味だったが、古代の英雄叙事詩を聞き飽きて、新しいウリゲルを聞きたいので、手下のラマ僧に命じて『興唐五伝』を創作したと聞いたが、これは本当のことなのだろうか」と尋ねた。この質問に対して、元瑞應寺のラマ僧、仏寺老人ホームの院長であるヤェシ（叶喜）・ラマ僧とバト（巴図）・ラマ僧は、「『五伝』はラマ僧達が共に創作したのではなく、この瑞應寺のビチゲインゲリ（管理職）のエンケテグス一人で創作した作品である」と語った。

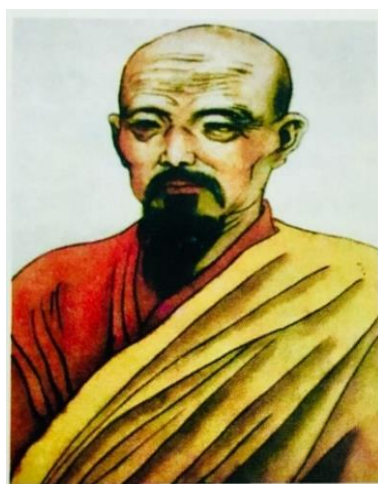
第四は、今年83歳になった有名なモンゴル言語学者・蒙古学学者・翻訳家の調査協力者1番は、「私は物事をわきまえるときに、お祖母さんが『五伝』の小説は瑞應寺のラマ僧エンケテグスの創作した作品であることを教えてくださった。また、うちの父親は『五伝』の小説を第1部の『苦喜伝』から第5部の『羌胡伝』まで朗読することが趣味だったため、『五伝』の小説に深い印象が残っていた。私は1963年に内モンゴル大学の蒙古言語文学専攻を卒業した後、阜新モンゴル族自治県の教育研修室に就職し、モンゴル語の監督員として多量の民俗資料を掘り出し、整理・出版する仕事をした。その中に、1979年から1982年の間に、内モンゴル人民出版社からモンゴル語で正式に出版した『五伝』の本を漢語で翻訳する作業が阜新モンゴル族自治県で始まり、私は翻訳委員会の一員（仕事が始めた2カ月後に身体の件で退会した）として『五伝』を熟読したが、この内モンゴル人民出版社から出版した『五伝』をうちの父親が朗読していた『五伝』と比べると、そんなに大きな差はなく、小説の粗筋はほとんど同じであると感じたため、『五伝』の作者はエンケテグスであることが判断できる」と述べた。

第五は、上述した調査協力者1番と全く同じ時に内モンゴル大学に入学し、1963年に内モンゴル大学の蒙古言語文学専攻を卒業してから阜新モンゴル族自治県に就職先が確定した協力者2番は、「私は阜新モンゴル族自治県・蒙古語文工作事務所の初代主任の役を務めていたが、自治県の政府は1963年の時点で、全県を対象にモンゴル族の東蒙短調民歌・胡尔沁説書・安代舞踊・民間小説などの文化遺産を収集・整理・出版・保存する作業を始めた。その中に、清朝・康熙帝8年（1669年）に建設し始め、康熙帝42年（1703年）に大体の形ができた『瑞應寺史』を整理することが自治県の民族工作にとつ

で最重要な課題として取り上げられた。その時期に、瑞應寺のラマ僧であったエンケテグスの書いた『五伝』の経緯・創作スタイル・表現と表記をもう一度細かく整理・分析したが、最後に『瑞應寺史』を執筆する委員会のメンバーは全員一致で、『五伝』の作者はエンケテグスであることを『瑞應寺史』に書き込んだ」と述べた。

第六は、モンゴル族ウリゲルの国家伝承人である6番の調査協力者は、「父親がホーリンウリゲルの語り手であるホールチだったので、子どもの時から父親の語る『五伝』のウリゲルを聞きながら成長した。また、自分は低音のドリボンウタストホールを弾きながらウリゲルを語れるようになったときから、長い間『五伝』のウリゲルを語ってきた。そこで、『五伝』の第1部の『苦喜伝』から第6部の『寒風伝』（前の5部の続編）までの文脈、作者のスタイル、表現表記の使い方、ウリゲル全体の経緯、主要人物に関する描写、モンゴル語語彙の豊富さなどの要素から見ると、『五伝』の作者はエンケテグスであることに疑問はなく、特に『五伝』はエンケテグス一人で創作し完成させたことが分かる」と述べた。

本章では、上述した阜新モンゴル族自治州・蒙古語文工作事務所で秘蔵されていた内部資料をもとに、さらに、インタビュー調査の協力者1番・協力者2番・協力者3番協力者5番・協力者6番による調査の結果を根拠に、『五伝』の作者はエンケテグスであり、『五伝』もエンケテグス一人で創作した文学作品であることが明確になった。



【図11】小説『興唐五伝』の作者・エンケテグスの画像<sup>312</sup>

<sup>312</sup> この図像は第2回の調査協力者6番から入手した。

しかし、残念なことには、近年のモンゴル学術界では、骨肉相食む現象が見られる。それゆえに、1986年にモンゴルジン旗の研究者の調査によって明らかになった『五伝』の作者について、内モンゴルの『五伝』研究界ではそれを認めたくないのかもしれない。そのために、内モンゴル地区での多くの『五伝』研究では、『五伝』の作者に関する先行研究の内容を確認せずに、「歴史小説『五伝』の作者はエンケテグスではなく、未だ不明確な状態」となっており、「原稿がモンゴル語で書かれたので、作者はモンゴル人である」などと述べる内容が多かった。

例えば、上述した白玉栄氏は「小説〈羌胡伝〉と前〈四伝〉との関係を再論」と「蒙古本子故事〈五伝〉の写作文化背景」などの論文で、『五伝』の作者は未だ明確でないと記述している。また、文風・陳永春両氏の「小説『苦喜伝』の叙事特徴を論じる」、イリグウイ（伊日貴）・陳永春両氏の「蒙古族本子故事『全家福』の漢文化影響への論述」<sup>313</sup>、リエシチラ（雷沙其拉）・陳永春両氏の「小説『殤妖伝』の歴史叙事芸術」<sup>314</sup>、ハイリハン（海日罕）・陳永春両氏の「比較文学の視点から見る『契僻伝』と『説唐全伝』」<sup>315</sup>などの『五伝』研究では、『五伝』の内容を対象に分析したが、作者は誰かまったく記述しなかった。

モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルは、12世紀から13世紀のモンゴル帝国時代に淵源を持つが、その時代には戦争が多かったためあまり発展しなかった。しかし、清朝<sup>316</sup>政権が統治していた18世紀末期から19世紀の初期の時期に至り、ジョソト盟・トゥメット左旗で吟遊詩人のホールチが低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語でウリゲルを語る上演形式が固定化され、ジョソト盟・トゥメット左旗を原点として、農業と畜産が入り交じった東部のモンゴル地区に広く知れわたった。

---

<sup>313</sup> 伊日貴・陳永春「蒙古族本子故事〈全家福〉的漢文化影響考述」（漢語版）、『民族論壇』第9期、2015年、102-104頁。

<sup>314</sup> 雷沙其拉・陳永春「〈殤妖伝〉的歴史叙事芸術」（漢語版）、『芸術科学』第8期、2015年、3-4頁。

<sup>315</sup> 海日罕・陳永春「比較文学視域下的〈契僻伝〉与〈説唐全伝〉」（漢語版）、『芸術科学』第12期、2017年、5-6頁。

<sup>316</sup> 当時のジョソト盟（卓索図盟）の領地は、現在の内モンゴル自治区の赤峰市・喀喇沁旗と寧城県、遼寧省の朝陽地区とトゥメット左旗（阜新モンゴル族自治県全域）、河北省の平泉県の北部、承德、圍場の一部が包含されている。

近年、ホーリンウリゲルを研究する多くの先行研究には、ダンスンニマはホーリンウリゲルの「元祖」および「先駆者」などという記述が多く見られるが、『日漢大辞典』では、「元祖」<sup>317</sup>とは一家の先祖と創始者という二つの意味があり、「先駆者」<sup>318</sup>とは先鋒、先導者、一般人より最も遠くの見通しと卓越した見識を持つ人を指している、と説明している。それゆえに、前述によって明確にした『五伝』の作者はエンケテグスであることを根拠にすると、先行研究にホーリンウリゲルの元祖はダンスンニマという記述は間違っていると判じられる。

本章では、ホーリンウリゲルを研究する際に基準の資料となっているサンプルノルブ（参布拉諾日布）氏が1989年にモンゴル語で編集し、章虹氏が漢語で翻訳した『蒙古胡尔齐三百人』<sup>319</sup>におけるダンスンニマの記述を引き、間違えて記述しているホーリンウリゲルの元祖はダンスンニマ（丹森尼瑪）という箇所をホーリンウリゲルの「中興の祖」はエンケテグス（恩赫特古斯）であるとした。

ダンスンニマ（1836～1889）、ホーリンウリゲルの先駆者の一人、遼寧省阜新モンゴル族自治州、即ち、モンゴルジン旗の人である。彼は生まれつき頭が賢く、人並み優れた子であったので、仏教を信じる親がモンゴルジン旗にあるゲゲンスム<sup>320</sup>（瑞應寺）に送って、ラマ僧になった。そこで、彼は出家した初期から、溢れた才能によって同世代のラマ僧の中から頭角を現した。例えば、寺院でモンゴル語とチベット語の聖文を朗読する時や、縁日で様々な楽器を吹き、弾き、歌って演奏する際に、すべて同世代のラマ僧より優れた表現をした。そこで、寺院のゲゲンから、上の世代や同世代のラマ僧の中から選ばれて褒美を頂いた。しかし、彼は自分の状況にまだ不満を持っており、余暇の時間をしっかりと利用して、寺院の近所にある

---

<sup>317</sup> 『日漢大辞書』（日本語と漢語双語版）、上海訳文出版社、2002、471 頁。

<sup>318</sup> 『日漢大辞書』（日本語と漢語双語版）、上海訳文出版社、2002、1204 頁。

<sup>319</sup> 参布拉諾日布主編・章虹翻訳『蒙古胡尔齐三百人』（漢語版）、哲里木盟文学芸術研究所（内部資料）、1989 年、16 頁。

<sup>320</sup> 瑞應寺は 1669 年（清朝・康熙帝 8 年）から建設され、1703 年（康熙帝 42 年）に大体の形ができ、同年に康熙帝から「瑞應寺」という寺の名前を与えられ、それを満州語・漢語・チベット語・モンゴル語の四つの言語で刻んだ扁額を持ち、現地のモンゴル人は「ゲゲンスム」と呼び、俗称では「東蔵」と呼んでいる。

村落に行き、民間の歌手、楽器が優れた人、モンゴル語とチベット語をかなり知っている民間芸人から民謡の歌い方、ドリボンウタストホールの弾き方、音符の読み方などの技術を学び続けた。

彼は子どもの頃から賢かったので、何年もかからずホーリンウリゲルの語り方、ドリボンウタストホールの弾き方を把握できた。まだ20歳になっていないのに、古代のモンゴル文字、散文、詩歌、英雄叙事詩が語れるようになっており、その上で、『五伝』をモンゴル語で翻訳・改編し、かつ、ドリボンウタストホールの音符に合わせて『五伝』のウリゲルを語り始めた。しばらくしてゲゲンスム地区で有名なホールチになり、近所の村落に住む人の家に誘われてウリゲルを語り、民衆の娯楽生活を満足させるために努力した。しかし、彼の民間での行為は、寺院上層部のラマ僧に怒られ、「ダンスンニマは仏教の聖地を汚し、仏教のルールに違反した」とされ、彼は寺院から追い出されてしまい、ラマ僧としての生活は終わった。これ以降、彼は自分の考えたように、多くの漢族小説を翻訳・改編して、多くのモンゴル語のウリゲル脚本を作り出し、ドリボンウタストホールを持ってあちこちの村落に行き、長い間にウリゲルを語ることを生計としていた、と書かれている。

上述した内容を検討すると、ダンスンニマに関する記述には不適切な所が随所に見られる。例えば、『五伝』に関する記述を例とすれば、『五伝』の原稿はモンゴル語で、手書きで創作された。しかし、上記の資料には、『五伝』はダンスンニマがモンゴル語で翻訳・改編したと記述しているが、これは一つの不適切な点であった。また、『五伝』のウリゲルはモンゴル族の民衆に大歓迎されたが、ダンスンニマのウリゲルを語りながら民衆の娯楽生活を満足させる行為は、ゲゲンを怒らせて寺院から追い出されたという記述は、もう一つの不適切な点となる。これ以外に、前述したエンケテグスに関する記述を上述したダンスンニマの記述と比較して分析すると、以下の結論が得られる。

第一は、ダンスンニマは1836年に生まれ、エンケテグスは1836年から1846年の10年間のある年に生まれたという記述があった。実にダンスンニマとエンケテグスは同じく1836年に生まれたとしても、エンケテグスは30歳になってから『五伝』をモンゴル語で創作したため、サムピラノリブ氏によるダンスンニマと『五伝』の記述は間違っている



と判断できる。

第二は、李青松氏の『胡尔沁説書』<sup>321</sup>には、ダンスンニマはホーリンウリゲルの元祖ホールチであるが、1810年から1889年の間に生きていたという記述があった。それゆえに、もしダンスンニマが1810年に生まれ、エンケテグスが1836年に生まれたとすれば、ダンスンニマは1836年で26歳になるが、エンケテグスは1836年に生まれの1歳だった。1歳のエンケテグスが長編歴史小説『五伝』を創作することは不可能であり、ダンスンニマもまだ創作されていなかった『五伝』のウリゲルを語ることは不可能だと判断できる。このような経緯から見れば、ダンスンニマがエンケテグスから『五伝』のウリゲルを学んだ後に、近所に住んでいる人たちに語り始めた可能性はないとは言えない。

一方、蒙漢文化を上手く融合させた結晶作品である『五伝』は、東部のモンゴル地域に住む民衆たちおよび伝統芸能であるホーリンウリゲルに対して唯一無二の重要な位置を占め、近代においてはホーリンウリゲルの脚本の中でも里程標的な存在である。例えば、サンプルノルブ（参布拉諾日布）・章虹両氏の共著である『蒙古胡尔齐三百人』、李青松氏の『胡尔沁説書』、ブエテチ（波特奇）氏等の共著『科尔沁右翼中旗—全国で人気があるウリゲルの故郷—』<sup>322</sup>、ガンズウリ（甘珠尔）・バインテムル（巴音特木尔）の各氏等の共著『トゥシェト・ホールチの伝記』<sup>323</sup>といった研究がある。以下、これらの先行研究の具体的な内容を記す。

まず、サンプルノルブ（参布拉諾日布）・章虹両氏の共著『蒙古胡尔齐三百人』の「前書き」で、サンプルノルブ氏は、1981年から1989年の間に民間でのホールチを対象に400人以上の情報を収集し、その中から308名のホールチを選出して本として出版したという。この本にはモンゴルジン旗出身のダンスンニマ・ホールチを冒頭に、内モンゴル自治区の東部地区で活躍していたホールチの出身地、生年月日、芸術の特徴、ホーリンウリゲルを何部まで語れるかなどの多種多様な内容を記載している。

---

<sup>321</sup> 李青松『胡尔沁説書』(漢語版)、遼寧民族出版社、2000年、127頁。

<sup>322</sup> 波特奇・高長勝・包文誠共著『科尔沁右翼中旗—享誉全国的烏力格尔之郷—』、遠方出版社、2004年、158—177頁。

<sup>323</sup> 样本尔布・章虹合编《蒙古胡尔齐三百人》(蒙语版)、内蒙古人民出版社、2014年。…

次に、李青松氏は『胡尔沁説書』で、大昔からモンゴルジン旗で有名で、名前、生年月日、出身地が確認できるホールチは300名以上であったという。これらのホールチは、各モンゴル族の村落で活躍していたが、現在まで残された史料によって118名のホールチの情報が記載されている。

第三には、波特奇氏等の共著『科尔沁右翼中旗—全国で人気があるウリゲルの故郷—』は、内モンゴル自治区の科尔沁右翼中旗で活躍していた一部のホールチ39名の芸術的な特徴、語れるウリゲルの部数、その地域のホールチの特徴、子孫等に残された功績などの内容を記載している。

第四には、ガンズウリ（甘珠尔）・バヤンテムル（巴音特木尔）両氏の共著『トゥシエト・ホールチの伝記』では、1810年に生まれたダンスンニマ・ホールチを冒頭に1999年生まれの若いホールチまで、すべてのホールチを紹介している。この本を読むと、トゥシエト盟のホーリンウリゲル史を読んでいる気がするほどである。この本には合計354名のホールチが記載されており、最初に、逝去したホールチの芸術的功績、言葉の豊富さなどを紹介し、次に、今も活躍している老・中・青年のホールチを分析し、最後に、現在まだドリボンウタストホールの弾き方、ウリゲルの語り方を学んでいる若いホールチの情報を記載している。これは特筆に値する。

上述した四つの研究に登場したホールチの総数を纏めると819名であった。しかしながら、これらのホールチの数は、当時の東部モンゴル族地域で活躍していたホールチの総数というわけではなく、記載に漏れた民間のホールチがさらにいるはずである。地理的に見れば、清朝期のジョソト盟のホールチをはじめ、現在内モンゴル自治区の東部地区全般でホーリンウリゲルは流行っていたが、これらの地域で活躍したホールチたちはほぼ全員エンケテグスの創作した『五伝』のウリゲルを初めての脚本として語ったことが分かる。

また、統計819名のホールチに関する記述から見れば、1836年から1999年までのホーリンウリゲルの歴史と東部モンゴル族地域で活躍していたホールチ達の生活状況などが想像できる。それゆえに、モンゴルの学術界と芸術界で一致しているように、モンゴル民族の伝統芸能であるホーリンウリゲルでは、『五伝』を最初の脚本として語り始めることを基準とすれば、ホーリンウリゲルの元祖はダンスンニマであるという記述を改

めて、ホーリンウリゲルの中興の祖はエンケテグスであるとするのが正しいと言えよう。

## 二、ダンスンニマ・ホールチの生涯とホーリンウリゲルの足跡<sup>324</sup>

モンゴルジン旗出身の有名なホールチ・ダンスンニマ（丹森尼瑪）は、ホーリンウリゲルの継承と伝播の事業に大きく貢献した人物であり、彼の弟子が東部モンゴル地区の各地で大活躍しているので、ホーリンウリゲル発展のために功績を残したと言える。しかしながら、残念なことには、これまでのホーリンウリゲルに関する先行研究を整理すると、ダンスンニマの生涯や芸歴などの詳しい情報を記録しているものは少なく、現存の資料に記述されている内容にも疑問視される点が幾つかあった。

例えば、これまでのホーリンウリゲルに関する先行研究を振り返ると、研究者のサンプルノルブ（参布拉諾日布）氏が1989年にモンゴル語で編集し、ジャンホン（章虹）氏が漢語で翻訳した『蒙古胡尔齐三百人』<sup>325</sup>という著作は、現存の資料の中で最も古い史料として、多くの研究者に引用され、参照されている。しかし、この『蒙古胡尔齐三百人』の16頁と17頁に記述されている「ダンスンニマ・ホールチの生涯資料」の記述内容について、前述した「ホーリンウリゲルの中興の祖と名著『興唐五伝』の作者」<sup>326</sup>に書かれている文章を参照すると、批判すべき内容がある。まず、エンケテグスの『興唐五伝』はダンスンニマの翻訳と改編によって、説唱するホーリンウリゲルの脚本となったということは不適切だと考えられる。次に、ダンスンニマは瑞應寺のゲゲンを怒らせたので、寺院から追い出されたという記述も史実に合っていないことが分かる。第三には、ダンスンニマの生涯に関する資料について、彼の両親の名前をはじめ、内モンゴル地方（ジャルート旗）に行き遊芸してからモンゴルジン旗に帰ってきて、続けて弟子を育成したことなどの詳しい内容については、サンプルノルブ氏の著作に記述されていなか

---

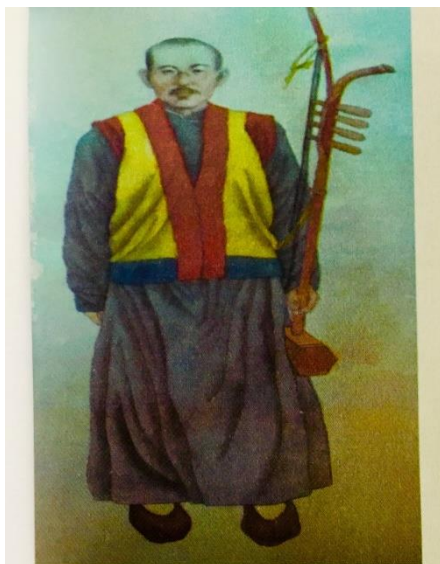
<sup>324</sup> 蒙古貞夫「浅評胡尔沁説書芸術家丹森尼瑪」（漢語版）、『喜劇世界』2020年1月下（総第631期）、2020年5月、93-94頁。

<sup>325</sup> ダンスンニマ・ホールチの生涯に関しては、ただサンプルノルブ（参布拉諾日布）が主編し、ジャンホン（章虹）が翻訳した『蒙古胡尔齐三百人』という著作に記述されず、さらにはサンプルノルブ（参布拉諾日布）・ワンシン（王欣）が共著した『蒙古族説書芸人小伝』（漢語版）、遼瀋書社、1990年、序言1頁と本文の1-4頁に記述しているが、その内容は『蒙古胡尔齐三百人』とほとんど一致しているので、ここでは贅言しない。

<sup>326</sup> ダンスンニマ・ホールチの生涯は、本論文の147-148頁に書いた。

った。サンプルノルブ氏の記録は最も早い時期に書かれたとしても、その内容の完全性と信憑性は低いと判断できる。

そこで、筆者は2019年8月26日～9月18日<sup>327</sup>にかけてダンスンニマ・ホールチの故郷であるモンゴルジン旗（現在の阜新モンゴル族自治州）を対象地域としてインタビュー調査を実施した時に、当地の政府の職員・民俗家・学者から入手できた郷土資料・内部資料・インタビュー調査の結果を使って、先行研究で間違っ て記述していた内容を修正・補充した上で、さらに、ダンスンニマ・ホールチはモンゴルジン旗から東部モンゴル地区の全域までにホーリンウリゲルを伝播した足跡を論証したい。



【図12】有名なダンスンニマ・ホールチ画像<sup>328</sup>

まず、モンゴルジン旗のホーリンウリゲルの状況とホールチの生涯を紹介する『胡尔沁説書』<sup>329</sup>と『蒙古胡尔齐三百人』<sup>330</sup>の記載によると、ダンスンニマ・ホールチは1889年に逝去したという史実が確認できる。しかしながら、ダンスンニマは1810年に生まれたのか、あるいは、1836年に生まれたのか、という問題について論証する必要がある

---

<sup>327</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容」を参照されたい。

<sup>328</sup> この画像は第2回の調査協力者6番から入手した。

<sup>329</sup> 李青松『胡尔沁説書』（漢語版）、遼寧民族出版社、2000年、127頁。

<sup>330</sup> 参布拉諾日布主編・章虹翻訳『蒙古胡尔齐三百人』（漢語版）、哲里木盟文学芸術研究所（内部資料）、1989年、16頁。

る。このような状況もとで、サンプルノルブ（参布拉諾日布）氏の『蒙古胡尔齐三百人』に記述されている、「彼はまだ 20 歳になっていないのに、古代のモンゴル文字、散文、詩歌、英雄叙事詩が語れるようになっており、その上で、『五伝』をモンゴル語で翻訳・改編し、かつ、ドリボンウタストホール（王欣）の音符に合わせて『五伝』のウリゲルを語り始めた」（サンプルノルブ（参布拉諾日布）・ワンシン（王欣）が共著した『蒙古族説書芸人小伝』<sup>331</sup>という作には、ダンスンニマが 23 歳、あるいは、24 歳の時からモンゴル語で『五伝』の内容を翻訳し、改編し始めた」と記述している）という内容を手掛かりにして、さらに拙稿の「ホーリンウリゲルの中興の祖と名著『興唐五伝』の作者—エンケテグス（恩赫特古斯）を中心に」という研究論文で述べた、「エンケテグスは 1836～1846 年の間のある年に生まれたが、長編歴史小説『興唐五伝』は彼が 30 歳になってからモンゴル語で創作し始めた」<sup>332</sup>という研究成果を利用して、ダンスンニマの実際に生まれた生年月日に関する情報を確かめる。

例えば、仮にダンスンニマが 1810 年に生まれたとすると、彼は 1830 年前後に時期に長編歴史小説の『興唐五伝』を説唱できるようになったはずであるが、上述した研究論文から得た結果によると、この時期にエンケテグスはまだ生まれていなかった。また、仮にダンスンニマは 1836 年に生まれたとして、エンケテグスは 1836 年から 1846 年の 10 年のある年に生まれたとすると、ダンスンニマとエンケテグスは同じ年ではなくても、ダンスンニマはエンケテグスより年齢が上だった可能性があるが、上述した研究論文から得た結果によると、エンケテグスは 30 歳になってから『興唐五伝』を創作し始めた。それゆえに、上記の内容を根拠とすれば、『蒙古胡尔齐三百人』に記述された 1836 年の情報は『胡尔沁説書』より正しかったことが明らかになったほか、『蒙古胡尔齐三百人』で記述している、「まだ 20 歳になっていないのに、古代のモンゴル文字、散文、詩歌、英雄叙事詩が語れるようになっており、その上で、『五伝』をモンゴル語で翻訳・改編し、かつ、ドリボンウタストホール（王欣）の音符に合わせて『五伝』のウリゲルを語り始

---

<sup>331</sup> 参布拉諾日布・王欣共著『蒙古族説書芸人小伝』（漢語版）、遼瀋書社、1990 年、1-2 頁。

<sup>332</sup> 楊陽（モンゴル名：蒙古貞夫）「ホーリンウリゲルの中興の祖と名著『興唐五伝』の作者—エンケテグス（恩赫特古斯）を中心に—」、『東京学芸大学大学院・連合学校教育学研究所・学校教育学研究論集』第 40 号、2019 年 10 月、33-45 頁。

めた」、「ダンスンニマが23歳、あるいは、24歳の時からモンゴル語で『五伝』の内容を翻訳し、改編し始めた」という内容は間違っていることも明らかになった。

次に、サンプルノルブ（参布拉諾日布）氏は、主編を担当した『蒙古胡尔斋三百人』<sup>333</sup>と『蒙古族説書芸人小伝』<sup>334</sup>の二つの専門的な著作において、「ダンスンニマ・ホールチの出身地は、遼寧省阜新モンゴル族自治県、即ち、モンゴルジン旗の人である」、「ジャルート旗の説書芸人であり、原籍はモンゴルジン旗のゲゲンスム（葛根蘇木）である」と記述している。しかしながら、サンプルノルブ（参布拉諾日布）・ワンシン（王欣）両氏が共著した『蒙古族説書芸人小伝』<sup>335</sup>という著作に書かれているダンスンニマ・ホールチの生涯に関する資料を熟読すると、その中に「ダンスンニマの両親は、彼がまだ子どもだった時に、モンゴルジン旗のゲゲンスムに送って、バンディ（班迪）ラマ僧になり、あるときジャルート旗に来た」などという内容が記述されていた。それゆえに、上記の内容を根拠とすれば、「ダンスンニマ・ホールチは、モンゴルジン旗に生まれ、瑞應寺で育てられた史実が確かめられるほか、ジャルート旗はダンスンニマの出身地ではなく、あるときにジャルート旗に来たことがあったが、この地域に定住していない」という事実が明らかになったと言えるので、サンプルノルブ（参布拉諾日布）氏の説は、自分の説の中で辻褄が合わないことになる。

第三には、サンプルノルブ（参布拉諾日布）氏が主編を担当した『蒙古胡尔齐三百人』<sup>336</sup>と『蒙古族説書芸人小伝』<sup>337</sup>の二つの著作には、「彼の民間での行為は、寺院上層部のラマ僧に怒られ、「ダンスンニマは仏教の聖地を汚し、仏教のルールに違反した」とされ、彼は寺院から追い出されてしまった」という記述があった。しかし、この段落では、ダンスンニマは実際に瑞應寺のどの規則（ルール）を違反したのか、彼を怒った上層部のラマ僧とゲゲン（生き仏）とは誰を指しているのか、ということが曖昧で不明瞭

---

<sup>333</sup> 参布拉諾日布主編・章虹翻訳『蒙古胡尔齐三百人』（漢語版）、哲里木盟文学芸術研究所（内部資料）、1989年、16頁。

<sup>334</sup> 参布拉諾日布・王欣共著『蒙古族説書芸人小伝』（漢語版）、遼瀋書社、1990年、1-2頁。

<sup>335</sup> 参布拉諾日布・王欣共著『蒙古族説書芸人小伝』（漢語版）、遼瀋書社、1990年、2-3頁。

<sup>336</sup> 参布拉諾日布主編・章虹翻訳『蒙古胡尔齐三百人』（漢語版）、哲里木盟文学芸術研究所（内部資料）、1989年、16頁。

<sup>337</sup> 参布拉諾日布・王欣共著『蒙古族説書芸人小伝』（漢語版）、遼瀋書社、1990年、2頁。



上述したように、近年のホーリンウリゲル研究界では、必須の参考資料として頻繁に引用されている『蒙古胡尔齐三百人』と『蒙古族説書芸人小伝』に記述されている「ダンスンニマ・ホールチの生涯資料」で疑問視される内容を考察してきたが、ダンスンニマ・ホールチの生涯に関する資料は、これで全部の内容が補充・論証させたともいえないので、続けて検討・考証する必要がある。しかしながら、ダンスンニマ・ホールチが1889年に逝去した時点で、彼の生涯に関する資料を記録した史書や文献が不足していることの影響で、彼の生涯に関する資料をすべて考証することは非常に困難である。

そこで、正確な資料を得るために、東部モンゴル地区の主要地区である内モンゴル自治区のジャールト旗、吉林省の前ゴルロスモンゴル族自治州、黒龍江省のドルボトモンゴル族自治州、遼寧省の阜新モンゴル族自治州などのモンゴル人が集住している地域に行き、郷土資料と内部資料を収集しながら多くの民間芸人を対象にインタビュー調査を実施してきたが、単なるダンスンニマの故郷である遼寧省の阜新モンゴル族自治州（モンゴルジン旗）の調査（第2回）の協力者1番と8番<sup>340</sup>から貴重な情報が得られた。


第一に、第2回の調査協力者1番と8番の話によると、「ダンスンニマ、男、モンゴル族、漢姓の白を取った有名なホールチ（胡尔沁）である。1836年に阜新モンゴル族自治州・ゲゲンスム・シャラハアイラ（沙日呼音艾里）に生まれ、1889年に病気でモンゴルジン旗・シャラハアイラ（沙日呼音艾里）の家でなくなったが、享年53歳であった。彼は中肉中背で少しやせているようで、子どもの頃から賢いので、父のタチンガ（塔青嘎）と母のシリンホウラ（希仁花日）は彼を瑞應寺に送ってラマ僧になった。彼は15歳の時に瑞應寺の「経箱楽班」の楽士からドリボンウタストホルの弾き方、モンゴル民謡民歌の歌い方、エブゲンサン（額布根倉）の吟唱する方法を学んだ。35歳から独自に民間で説唱する活動を始めたので、無断欠勤する回数が増えてきたが、ゲゲン（生き仏）と上層部のラマ僧が言い聞かせることによって少し抑え、この間にエンケテグス（恩赫特古斯）に拝師して、小説『興唐五伝』の語り方を学習し把握した。彼は40歳前後の時期にホーリンウリゲルを語ることに心を奪われてしまい、毎日の決められた時間帯の仏教の法事に参加しないので、ゲゲンに瑞應寺から追い出されてしまった。その後、流浪

---

<sup>340</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者1番と8番」を参照されたい。





イラ（沙日呼音艾里）に住んでいるツァーガンタタル（查干塔塔兒）部族の人々は、モンゴル姓の「」（アオハン）を漢姓の「白」に変えた」と記述している。

上述した先行研究に比べて、インタビュー調査の結果や郷土資料と内部資料をまとめると、ダンスンニマ・ホールチの生涯に関する資料が以前より詳しくなったと言える。ダンスンニマ・ホールチはモンゴルジン旗から出発して、ジョソト盟以外の東部モンゴル地区に行って多くの弟子を育成したので、ホーリンウリゲルという説唱芸術が次々と伝播した路線が掌握できる。以下、その生涯に関する資料と伝播状況を示していきたい。

ダンスンニマ（丹森尼瑪）、男、モンゴル族、漢姓の白を取り、有名なホールチ（胡尔沁）で、1836年に現在の遼寧省・阜新モンゴル族自治州・ゲゲンスム・シャラハアイラ（沙日呼音艾里）に生まれた。彼は中肉中背で少しやせているようで、暮らしが貧しく、8歳の時に父のタチンガ（塔青嘎）と母のシリンホウラ（希仁花日）は、彼を瑞應寺に送ってラマ僧になった。彼は出家した初期から溢れた才能によって同世代のラマ僧の中から頭角を現したので、瑞應寺・第5代ゲゲンのヤェシトゥブダン（叶喜图布丹）に才能が認められた。

ダンスンニマは15歳の時に瑞應寺の「経箱楽班」の楽士からドリボンウタストホールの弾き方、モンゴル民謡民歌の歌い方、エブゲンサン（額布根倉）の吟唱する方法を学んだが、35歳から独自に民間で説唱する活動が始まったので、無断欠勤する回数が増え、ゲゲン（生き仏）と上層部のラマ僧が言い聞かせることによって少し抑え、この間にエンケテグス（恩赫特古斯）に拝師して、小説『興唐五伝』の語り方を学習し把握し、もう一度瑞應寺から逃げ出して民間に行ってホーリンウリゲルを披露した。それゆえに、ホーリンウリゲルを語ることに心を奪われてしまい、毎日の決められた時間帯の仏教の法事に参加せず、ゲゲンと上層部のラマ僧たちは「ダンスンニマが馬鹿は死ななきゃ治らない」と判じて、彼を瑞應寺から追い出した。

その後、流浪芸人（40歳の時）として日常生活を維持していた。45歳前後の時に内モンゴル自治区のジャルート旗に行ったが、そこでチュイバン（朝玉邦）とバインボルゴ（白音宝力高）を弟子として取って、ホーリンウリゲルの説唱方法およびドリボンウタストホールの弾き方を教え、その後、ジリム盟・ジョーオダ盟・フルンボイル盟などの東部モンゴル地区に夕餉して、無数の弟子を取ってホーリンウリゲルの説唱方法を教え

た。晩年はモンゴルジン旗のシャラハアイラ（沙日呼音艾里）に戻って、続けて弟子を取ってホーリンウリゲルを教えていたが、しばらくしてから「ダンスニマ説書流派」を創始した。1889年に病気でモンゴルジン旗・シャラハアイラ（沙日呼音艾里）の家でなくなったが、享年53歳であった。

ダンスニマ・ホールチの説唱の特徴は、モノローグ（独白）、即ち脚本の内容を「説明する」ことを主として、「吟唱する」ことをフォロー（補佐）しながら、脚本の主要な内容のストーリーを明晰に聴衆に伝えた。語る言葉は分かりやすく、うそ偽りのない感情で上演し、特に主要人物のキャラクターイメージを表現し、両軍が激戦している情景を描き出す点は特徴的だったので、東部モンゴル地区に集住しているモンゴル人の中で大変人気があった。ダンスニマの流派は、彼の故郷であるモンゴルジン旗の佛寺鎮・王府鎮・伊瑪圖鎮・沙拉鎮・大巴鎮・富榮鎮などの地区を中心に、広大な東部モンゴル地区にある各モンゴル地区まで拡散した。

### 三 ホーリンウリゲルの流派形成と分布状況

モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルは、長い歴史の中で自民族の伝統文化を継承しながら、満州族および漢族のような兄弟民族が持つ優秀な文化要素を吸収してきた。そのことに限らず、エンケテグス・ホールチとダンスニマ・ホールチの説唱および伝播によって、モンゴルジン旗からジャルート旗までに伝播し、さらに彼らの弟子たちの継承によって広大な東部モンゴル大草原に波及して、最後にモンゴル民族を代表する伝統芸能となったことについて、前章で既に紹介した。

ここでは、ダンスニマはホールチとして、当時のジリム盟に所属していたジャルート旗に遊芸してきた時に、チュイバン（朝玉邦）とバインボルゴ（白音宝力高）を弟子に取って、伴奏楽器であるドリボンウタストホルの弾き方、説唱脚本であるウリゲルの語り方を教えたので、内モンゴル自治区で低音のドリボンウタストホルを使ってモンゴル語でウリゲルを上演する形式が登場し、さらには説唱団体の拡大に伴って、東部モンゴル地区で各々の説唱の風格を持つ流派が形成されたことを紹介したい。

ホーリンウリゲルの流派形成については、前述したサンプルノルブ（参布拉諾日布）





スンニマ・ホールチから学んだホーリンウリゲルの説唱方法を継承したので、彼は師匠のように主にモノローグ（独白）、即ち脚本の内容を「説明する」ことを主として、「吟唱する」ことはフォロー（補佐）するという説唱方法を使用していたことを確認することができる。

それゆえ、この時期をホーリンウリゲルの流派の「形成期」にすると、チュイバン（朝玉邦）・ホールチのような、以前からチョールを使って悪魔のマンガスを鎮圧するマンガスインウリゲルを語っていたマンガスチたちは、伴奏楽器を低音のドリボンウタストホールに変えてマンガスインウリゲルを語るように変化し、さらにはバインボルゴ（白音宝力高）・ホールチのような師匠から学んだホーリンウリゲルの説唱技法を継承してきた二種類の説唱の風格は共存していたのではないかと考えられる。

例えば、『ホールチの揺籃—ジャルート—』<sup>353</sup>の記載によると、有名なマンガスチおよびホールチであるチュイバン（朝玉邦）は、ダンスンニマ・ホールチからホーリンウリゲルの説唱技法を学んだとしても、その後の長い間にチョールを使って悪魔のマンガスを鎮圧するマンガスインウリゲルを語り続けていたことが分かる。また、バインボルゴ（白音宝力高）・ホールチは、チュイバン（朝玉邦）のようなマンガスインウリゲルを学んだ経験はなかったので、ダンスンニマ・ホールチからホーリンウリゲルの説唱技法を学んだ後、ずっと低音のドリボンウタストホールを使って、モンゴル民謡・ホルボー・叙事民歌・ホーリンウリゲルを披露していたことが確かめられる。

最後に、上述したチュイバン（朝玉邦）・ホールチとバインボルゴ（白音宝力高）・ホールチの弟子であるパジェ（琵傑）やモーヒイン（毛依罕）がホールチとして活躍した時に、彼らに拝師してマンガスインウリゲルおよびホーリンウリゲルの説唱技法を学ぶ人が大勢に増えてきたので、ホーリンウリゲルの流派は顕在化してきた。それゆえに、この時期をホーリンウリゲル流派の「成熟期」にすると、吟遊詩人のホールチが低音のドリボンウタストホールを使って、モンゴル語でウリゲルを語る上演形式が形成されたと言える。

例えば、前述した六つの専門的な著作で記述されている 1178 名ホールチの生涯に関

---

<sup>353</sup> 同上、11 ᠬᠣᠯᠠᠲᠢ ᠶ᠋ᠢᠨ ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤ 12 ᠬᠣᠯᠠᠲᠢ ᠶ᠋ᠢᠨ ᠶ᠋ᠢᠨᠠᠭᠤ ..

する資料から見ると、19世紀の中期から末期にかけて、低音のドリボンウタストホールを使ってホーリンウリゲルを語る人が急増した傾向があり、最も有名なホールチの下で少なくとも5名や6名、多くときに15名から20名の弟子が集まっていたので、次第にホーリンウリゲル流派が形成されることになった。この時期のホーリンウリゲルは、主に弟子が師匠の説唱方法を真似て学ぶことが多かったので、次第にあるホールチを主とする流派が形成され、ホーリンウリゲルを次世代に継承していたと考えられる。

上述した内容を総合して言うと、あるホールチがどんな流派に所属しているのかを判断するのは、ホールチが説唱する風格だけではなく、ホールチがウリゲルを語る時に使用する詞牌と曲牌を聴けばほとんど識別される。ダンスンニマ・ホールチが師匠であるエンケテグス・ホールチの説唱方法を継承したように、ダンスンニマ・ホールチの弟子等も彼の説唱方法を継承したことが考えられるので、ホーリンウリゲルの流派は、早くても19世紀50年代、遅くても80年代までに東部モンゴルの各モンゴル地区で生まれたことが推測される。

## 小結

第四章では、現地調査によって入手できた郷土資料・内部資料・調査結果を使って、ホーリンウリゲルのという伝統芸能が成立した地域を確定した上で、これまでのホーリンウリゲル研究であまり記述されなかったジョソト盟・トウメット左旗（モンゴルジン旗）の社会背景と文化要素を詳しく紹介し、ホーリンウリゲルの上演形式が寺院音楽の形成に伴って固定化した経緯およびマングスチとホールチが共存していた史実に対して考察を行った。

最後には、先行研究でホーリンウリゲルの元祖はダンスンニマ・ホールチであるとするのを改めて、実際の中興の祖はエンケテグス・ホールチであった史実を論証した。そして、曖昧で不十分だったダンスンニマ・ホールチの生涯を訂正・補充し、さらにダンスンニマ・ホールチが遊芸したために、ホーリンウリゲルという説唱芸術は広大な東部モンゴル地区に伝播し、次第にホーリンウリゲルの流派が形成されたことを考察した。

とりわけ、長い間にモンゴルジン旗で秘蔵されていた内部資料が公開されることによって、ホーリンウリゲルの研究界で長年にわたって明確にできなかったエンケテグス・

ホールチとダンスニマ・ホールチの生涯や正確な身分が論証できたことは、ホーリン  
ウリゲルの基礎研究に精緻な研究成果が提供できたと考えられる。



## 第五章 ホーリンウリゲルの繁栄と衰退

中華人民共和国が建国された直後の1949年10月に、56民族が持つ伝統的な文化を発展させるため、様々な優遇政策を作り上げた。その時からホーリンウリゲルの主要な地域である東部モンゴル地区では、低音のドリボンウタストホールを使ってウリゲルを語るホールチの数は年々増加してきた。もともと旧社会では地位が非常に低かったホールチたちも苦難の生活から解放されて、民衆に尊敬される「文化継承者」になった。さらには国家からホールチの掌握している才能を展示するため、内モンゴル自治区の中心都市と中心地区で「ᠤᠷᠢᠭᠡᠯᠢᠨᠭᠡᠯᠢ」（ウリゲルインゲル）を建設し始めたので、ホーリンウリゲルという伝統芸能が繁栄する時期を迎えた。

また、この「ウリゲルインゲル」が設立されたことによって、ホーリンウリゲルに関するすべての事業が発展するようになった。具体的な内容を示すと、ホーリンウリゲルの担い手であるホールチおよびホーリンウリゲルの命脈と言われている視聴者の数も次第に増加し、ホーリンウリゲルの影響力が強くなった。次に、ホーリンウリゲルの影響を受けたモンゴルジン旗の「佛寺劇団」は、内部改革および演目の改編などの作業を行い、1984年に中国文化部・中国民族事務委員会・中国戯曲家協会で「少数民族地方劇種」に認定され、それによって伝統的なホーリンウリゲルの脚本を改編する作業と新しい時代に似合う脚本を創作する事業が始まり、ホーリンウリゲルは未曾有な発展を遂げる機会が得られた。

しかしながら、21世紀のグローバル時代に入った後の中国では、国家の急速な経済発展および都市化の促進に伴って、東部モンゴル地区の社会環境は激変し、現代的な情報媒介も発展してきたので、ホーリンウリゲルの運命を支える視聴者の娯楽生活は多様化して、昔のようにホールチの説唱するウリゲルを聴く人は減少している。また、東部モンゴル地区の社会環境が激変する中では、モンゴル族の子どもがモンゴル語を話す・書く・読む能力が次第に低下している傾向にあり、ホーリンウリゲルの後継者が育成し難くなってきた。

そこで本章では、中国が正式に建国された後、国家の民族文化に関する政策の変化に伴って、ホールチ数が次第に増加し、説唱芸人の場と言われている「ウリゲルインゲル」

を建立して、ホーリンウリゲルという伝統芸能が未曾有な繁栄の時期を迎えたこと、そして、21世紀のグローバル時代に入った後、現代的な情報媒介の発展によって、ホールチの演出する機会と視聴者の数の急減しており、ホーリンウリゲルも衰退しつつあった原因について考察して行きたい。

## 第一節 ホーリンウリゲルの繁栄とその状況

新中国が建立された後、ホーリンウリゲルという伝統芸能に関わるモンゴル文学、伴奏楽器のドリボンウタストホール、担い手のホールチなどが発展する歴史時期を迎えた。具体的な内容を示すと、中国共産党の「民族区域自治」という政策によって、モンゴル族の人々に自民族に関する事情を管理・決定する権利が与えられ、さらに地域で「自治区」「自治州」「自治県」制度を設立させた。その時期から東部モンゴル地区の各モンゴル族地域では、ホーリンウリゲルという説唱芸術を学ぶ人が増え、ホールチの掌握している技法を披露する場である「ウリゲルインゲル」も次第に建設されて、ホーリンウリゲルの影響力は最も拡大した。

### 一 ウリゲルインゲルの設立とその役割

モンゴル語で言う「ᠤᠷᠢᠭᠡᠯᠢᠨᠭᠡᠯᠢ」（ウリゲルインゲル）とは、ホーリンウリゲルの語り手であるホールチがモンゴル民謡民歌を歌ったり、ホルボーや叙事民歌を語ったり、長編の英雄叙事詩および歴史小説を説唱したりする専用の場所（建物）を指しており、ホーリンウリゲルという伝統芸能の発展および繁栄には大きな役割を果たし、ホーリンウリゲルという説唱芸術がモンゴル民族を代表する伝統芸能になることが積極的に促進された。

しかしながら、残念なことには、ホーリンウリゲルという伝統芸能に対して最も重要な「ウリゲルインゲル」に関して長い間に文字で記録することは極めて少なかったため、今日までにホーリンウリゲル研究界で統一した観点が出されていない。その中でホーリンウリゲル研究者・楊玉成氏の著した『胡尔奇：科尔沁地方传统中的説唱艺人及其音乐』において、「中华民国17年（1928）に、当時の王府廟（現在内モンゴル自治区・ヒンガン（興安）盟・ウランホト（烏蘭浩特）で初めて「ウリゲルインゲル」が建設された」



グスインウリゲルおよびモンゴル民謡民歌・ホルボー・叙事民歌・ホーリンウリゲルの脚本を上演してもらった」と、ボウ・ナリサ（包娜日薩）氏の書いた『論説書館及其対説書芸人芸術的影響』<sup>356</sup>という論文に記述されている。

その時点からスタートした「ウリゲルインゲル」の建立事業は、相次いで1956年<sup>357</sup>に内モンゴル自治区のフルンボイル（呼倫貝爾）旗のハイラル（海拉爾）区、ジャルート（扎魯特）旗地区、ホルチン左翼後旗、クーロン（庫倫）旗などのモンゴル族の人々が集住している地区で進められ、現地で有名なホールチを招待して、新しい時代に似合う脚本および伝統的な脚本を上演していた。同年に、ホルチン右翼中旗<sup>358</sup>のゴリバン・バラガソで「ウリゲルインゲル」、清朝期のジョソト盟・トウメツト左旗<sup>359</sup>（モンゴル旗、現在の遼寧省・阜新モンゴル族自治県）で文化館の内部に民族文化服務隊を設立して、現地で有名なティゲシイ（特格舍）・ホールチを招待して、民族文化服務隊の隊員と共に各モンゴル族地域に行き、モンゴル民謡民歌・ホルボー・叙事民謡・ホーリンウリゲルなどを上演したという。

これ以外に、1957年8月<sup>360</sup>、内モンゴル自治区の人民政府から公文書が公布され、これから首府都市のフフホト（呼和浩特）、ウランハダ（烏蘭哈達）、トンリョウ（通遼）市、シリンホト（錫林浩特）市、ハイラル（海拉爾）区など重要な中心地区と中心都市で18座の「ウリゲルインゲル」を設立することを決定したが、同年の9月<sup>361</sup>には、ホルチン左翼中旗のボウカアン（宝康）・バラガソでも「ウリゲルインゲル」が設立されたという記録があった。

上述の内容によると、中国が建国された1949年から1957年までに、内モンゴル自治区を主とする各モンゴル族の地区では、多くの「ウリゲルインゲル」が設立され、各モ

356 2002 оны 7 сард «Уулстайн үеийн хөгжлийн талаарх үзэл мэдэл» (Монгол хэлээр) • Уулстайн үеийн хөгжлийн талаарх үзэл мэдэл • 7 дугаар хэсэг ••

357 2002 оны 4 сард «Уулстайн үеийн хөгжлийн талаарх үзэл мэдэл» (Монгол хэлээр) • Уулстайн үеийн хөгжлийн талаарх үзэл мэдэл • 1997 оны 6 сард • 15 дугаар хэсэг ••

358 2002 оны 116 дугаар хэсэг (Монгол хэлээр) • Уулстайн үеийн хөгжлийн талаарх үзэл мэдэл • 2002 оны • 116 дугаар хэсэг ••

359 李青松『胡尔沁説書』(漢語版)、遼寧民族出版社、2000年、168頁。

360 2001 оны 387 дугаар хэсэг (Монгол хэлээр) • Уулстайн үеийн хөгжлийн талаарх үзэл мэдэл • 2001 оны • 387 дугаар хэсэг ••

361 1957 оны 29 дугаар хэсэг (Монгол хэлээр) • Уулстайн үеийн хөгжлийн талаарх үзэл мэдэл • 1957 оны 9 сард • 29 дугаар хэсэг ••



たことが分かる。

第三は、蒙漢両族の文人や作家の創作した文学作品がホーリンウリゲルの脚本に改編することが流行したので、新しい時代に似合う脚本が創作・説唱されることでホーリンウリゲルの詞牌庫を補充したという点がある。例えば、この時期のホールチたちは、創作文学作品でありながらホーリンウリゲルの伝統的な脚本としても頻繁に語られている『興唐五伝』を上演するほか、新たな脚本である『劉胡蘭』『地道戦』『鉄道遊撃隊』『王若飛』『内蒙古人民的勝利』『新兒女英雄伝』など様々な故事を説唱していた。

しかし、このような繁栄状況は、1966年に「文化大革命」運動が始まったことにより、ホールチの使っていた楽器と脚本およびホールチ自身も「反革命分子」などの悪名を着せられて、普通の人間が耐えられない残酷な刑罰を受けたので、以前に蓄積してきたホーリンウリゲルの業績はすべて消滅してしまった。1977年に「文化大革命」が終結したという宣言が出されるまでに、以前に設立された「ウリゲルインゲル」はほとんど廃除されてしまった。

それゆえに、1977年以前に設立された「ウリゲルインゲル」を復元する事業が始まった。例えば、内部資料である『哲里木盟文化誌』<sup>363</sup>の記載によると、「内モンゴル自治区のホルチン左翼中旗は、「文化大革命」が終結した直後に、全域のホールチが集まって「第二次民間芸人大会」を行い、もともと設立されていた「民間芸人協会」を復元したことが確認され、内モンゴル自治区のナイマン（奈曼）旗でも同年に、もともと設立されていた「群衆文化工作」および「曲芸調演試合」などの伝統活動を復元した」などという事実が確かめられる。

以上のように、ホーリンウリゲルの繁栄条件を表す「ウリゲルインゲル」の成立・発展・廃除・復元の経緯を考察してきたが、特に解説する必要があるのは「文化大革命」が終結したとしても、その影響は民衆およびホールチの間に非常に深かったので、復元された後の「ウリゲルインゲル」は、以前のように隆興することはできなかった。また、20世紀末期から21世紀初期には、国家の急速な経済発展に伴い、現代的な情報媒介が迅速に発展したので、わざわざ「ウリゲルインゲル」に行って、ホールチたちの語るウ

---

<sup>363</sup> 哲盟文化誌編纂委員会『哲里木盟文化誌(内部資料)』(漢語版)、1992年、36-46頁。



ホーリンウリゲルの後継者である若きホールチが多く育成された。都市部に住むモンゴル族の人々も、定期的に家の近くにある「ウリゲルインゲル」に行き、ホールチの上演するホーリンウリゲルを聴いていた情景があったことが分かる。

例えば、上述した『トゥシエト・ホールチの伝記』に記載されているジャルート旗のホールチの生涯に関する資料によると、ダンスンニマ・ホールチ（1836～1889）がモンゴルジン旗から遊芸してジャルート旗に来て、チュイバン（1856～1928）とバインボルゴ（1866～1925）を弟子として受け取ってからずっと 1899 年までに、ジャルート旗の全域で 19 世紀に生まれてホールチとして活躍していた芸人は 15 名（半分以上が悪魔のマンガスを鎮圧するマンガスインウリゲルを語るマンガスチであった）であったという情報が得られる。

しかしながら、20 世紀に入ってから 1989 年までの間に生まれた後、ホールチを拝師したり、民間でホーリンウリゲルを披露していたホールチの説唱方法を真似て自学したり、低音のドリボンウタストホルの弾き方およびホーリンウリゲルの説唱方法を勉強したりしていた人は、19 世紀にジャルート旗で活躍していた 15 名を何倍も超えて、合計 111 名までに増加したことが確認される。

また、同時期にモンゴルジン旗で活躍していたホールチの生涯に関する資料を記録した『胡尔沁説書』によると、ホーリンウリゲルの中興の祖であるエンケテグス・ホールチから 1899 年の間に生まれてホールチとして活躍した説唱芸人は 48 名であったが、20 世紀に入ってから 1965 年までの間に生まれてホールチとして活躍している説唱芸人は、19 世紀に活躍した 48 名を超えて、合計 118 名までに増加した事実を知ることができる。

上述のデータおよび内容によると、20 世紀に入ってから低音のドリボンウタストホルを使って、モンゴル語でウリゲルを語るホールチの数はずっと増加していた状況が確かめられるので、ホーリンウリゲルという伝統芸能が最も繁栄した時期は 20 世紀であったと言える。また、ホールチの数が大幅に増加するのに伴い、これらのホールチが語るウリゲルを聴いてくれる視聴者も同時に増えなければ繁栄期を迎えたとは言えない。そこで、入手した史料や文献やインタビュー調査の結果を使って、ホーリンウリゲルの視聴者について述べて行きたい。



ホーリンウリゲルの視聴者とは、モンゴル語で「*ᠬᠣᠷᠢᠨᠠᠭᠤᠷᠢᠭᠡᠯᠢ*」(ソヌソグチデ)と呼ばれ、ホールチたちの語るウリゲルを身分・職務・性別を問わず聴いてくれるすべての人のことを指すので、ホーリンウリゲルのソヌソグチデ(視聴者)は、ただホーリンウリゲルの主要な地域である東部モンゴル地区に限らず、世界中に分散しているすべてのモンゴル人がホーリンウリゲルの視聴者になる。

例えば、前述したボウ・ナリサ(包娜日薩)氏の書いた『論説書館及其対説書芸人芸術的影響』<sup>370</sup>において、「ドイツの有名なモンゴル学者ワルター・ハイシヒ(海西希)氏は、相前後して4回から6回内モンゴル自治区の「ウリゲルインゲル」に来て、パジェなどの有名なホールチが説唱していたウリゲルを聴きながら録音し、当時の東部モンゴル地区で活躍していた多数のホールチと懇談したことがあり、ホーリンウリゲルのという伝統芸能の忠実なファン(視聴者)および研究者としてよく知られている」と記述している。

また、第一章の冒頭で既に紹介したように、ホーリンウリゲルの研究は、モンゴル国の有名な作家・学者であるボ・リーンチン(博・仁欽)氏が、1927年から1929年にかけて、ロブサアン・ホールチを対象に2年間連続で調査を実施した後、1929年にホールチの語った脚本を整理して、『西の国を治めたボディ・メルゲン・ハーン』という学術報告書を読み上げた時から始まったので、吟遊詩人のホールチが低音のドリボンウタストホールを自ら弾いてモンゴル語でウリゲルを語る上演形式は、最も早い時期にモンゴル国までに伝播したことが証明できる。

国外および国外の視聴者や研究者の中では、ホーリンウリゲルという伝統芸能がこのような重要な価値があるものとして認識されているが、東部モンゴル地区でホーリンウリゲルの状況がどうなっているのかを訪ねると、第3回・インタビュー調査の協力者は、「東部モンゴル地区に集住するモンゴル人は、ホーリンウリゲルという上演形式を知らない人はほとんどいない」と一言で総括してくれた。

また、第3回インタビュー調査の調査協力者1番の経験したことを事例にすると、彼は子どもの頃からホールチである父からホーリンウリゲルの説唱方法、伴奏楽器で

---

370 *ᠮᠤᠩᠭᠣᠯᠤᠯᠠᠭᠤᠷᠢᠭᠡᠯᠢ* (ソヌソグチデ) (モンゴル語版) • *ᠮᠤᠩᠭᠣᠯᠤᠯᠠᠭᠤᠷᠢᠭᠡᠯᠢ* (ソヌソグチデ) (モンゴル語版) 30 巻 1 号 11 頁

あるドリボンウタストホルの弾き方を学びながら、小学校の時から夏休みと冬休みを利用して父と共にモンゴル族の人々が集住している村落に行き、お年寄りの誕生日パーティーや結婚式などの場所でモンゴル民謡民歌・ホルボー・叙事民歌・ホーリンウリゲルの脚本を披露・上演してきた。その時の情景を振り返ると、「肩摩穀撃と千客万来」<sup>371</sup>という四字熟語を使って表現することができる。

以上のように、ホーリンウリゲルが繁栄していた時期の状況を示すホールチと視聴者の増加の情勢に関して考察してきた。総合して言うと、ホーリンウリゲルという伝統芸能は、20世紀の初期から末期までに発展し、繁栄する時期になったと言え、この時期にホーリンウリゲルはモンゴル民族を代表する伝統芸能であるという地位が確立したと考えられる。

### 三 モンゴル劇の形成とその影響力

ホーリンウリゲルの繁栄に関わるもう一つの重要なポイントは、東部モンゴル地区で流行している「**ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠲᠤᠮᠤᠨᠠᠭᠤᠯᠤᠰᠤ**」(モンゴル劇)であると考えられる。なぜかと言うと、東部モンゴル地区の民間では、「現在のモンゴル劇は、ホーリンウリゲルが乗り移ったものであり、ただその上演方式が1人から数人になったのである」と言われているからである。この「モンゴル劇」の歴史に関しては史料が足りないため、断言できないが、現時点でははっきり言えるのは、1948年に清朝期のジョソト盟・トウメット左旗(モンゴルジン旗)、現在の遼寧省・阜新モンゴル族自治県の佛寺鎮で創設された「佛寺モンゴル劇団」をもとに、モンゴルジン旗の人民たちが新たな劇種である「阜新モンゴル劇」を創造したという事実である。

そして、郷土資料である『阜新モンゴル族自治県県誌』<sup>372</sup>の記載によると、1948年3月、現在の遼寧省・阜新全域が解放されて立ち上がり、もともと阜新地区に住んでいたモンゴル族の原住民たちは、阜新地区に住む兄弟民族の人々と共に国家の主人公になった。しかし、戦乱ばかりの激動の社会環境から安定した社会環境になると、人々が心

---

<sup>371</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第三節・第3回の調査内容・協力者1番」を参照されたい。

<sup>372</sup> 蘇立賢・朱宝珍主編『阜新蒙古族自治県県誌』(漢語版)、遼寧民族出版社、1998年、712頁。

理上の不安を感じるほか、阜新地区のモンゴル族の一部は、伝統的な文化が彼らの精神生活を満足させないと判じ、新しい時代に適切な文化要素を作り上げようという意欲が強くなってきた。

しかしながら、周知のように、文化というものは、非常に短時間ですぐに作り上げられない客観的な条件があるので、これらの革新派の人々は、モンゴル民族曲芸の「活化石」と呼ばれているホーリンウリゲルの説唱方法と上演方式をもとにして、阜新全域で広く語り継がれている東蒙短調民歌と叙事民歌など民間芸能の要素を吸収した上で、阜新地方のモンゴルジン部族の特色がある「阜新モンゴル劇」（阜新蒙古劇）という劇種を創造した。

そして、このモンゴル風な「阜新モンゴル劇」は、原形が立ち上がってすぐ東部モンゴル地区の全域に伝播したのではなく、まず、その発祥地である阜新モンゴル族自治県の佛寺地区を中心に上演されていた。1949年に中華人民共和国が建国される直前に、「阜新モンゴル劇」の原形である「佛寺モンゴル劇団」は、佛寺地区からモンゴルジン旗の全域までに拡大することが実現できた。そこで、モンゴルジン旗の各モンゴル族村屯でホーリンウリゲルの脚本・東蒙短調民歌・叙事民歌を改編した上で、民間で表現力が強い人々を選んで改編した脚本を実演していた状況は、『阜新モンゴル族自治県県誌』<sup>373</sup>に記録されている。

また、この『阜新モンゴル族自治県県誌』の記載によると、「阜新モンゴル劇という地方劇種は、新中国が建国された1949年から1983年までずっと新しい脚本を作りながら実演を試みて経験を蓄積してきたので、モンゴル族を代表する「劇種」の条件が満たされた。それゆえに、1984年11月、佛寺地区で活躍していた「佛寺モンゴル劇団」のメンバーから創作・改編した「烏雲其其格」という新たな劇目は、遼寧省と阜新地区を代表して、中国の昆明で開催された「全国少数民族劇種録像調演」に参加したところ、本調演で国家級の「銅杯賞」が受賞されたので、中国文化部・中国国家民族事務委員会・中国戯曲家協会が「少数民族地方劇種」に認定された<sup>374</sup>と記述している。

---

<sup>373</sup> 蘇立賢・朱宝珍主編『阜新蒙古族自治県県誌』(漢語版)、遼寧民族出版社、1998年、712頁。

<sup>374</sup> 蘇立賢・朱宝珍主編『阜新蒙古族自治県県誌』(漢語版)、遼寧民族出版社、1998年、713頁。

1948年から現在までの「モンゴル劇」の発展状況を見ると、この上演方式は発祥地である遼寧省の阜新モンゴル族自治州全域を中心に、内モンゴル自治区のトンリョウ（通遼）地区、セキホウ（赤峰）地区、フフホト（呼和浩特）地区などの東部モンゴル地区で伝播・実演されてきたが、1988年に内モンゴル自治区の劇作家たちは、「阜新モンゴル劇」を参考にして「安代伝奇」という劇目を創作し、同年の7月に、中国文化部・中国国家民族事務委員会・中国戯曲家協会などの関連部門の協力を得て、「科尔沁蒙古劇」も地方劇種に認定された。

上述の記述によると、現在の東部モンゴル地区で流行っている「モンゴル劇」は、実際に「阜新モンゴル劇」の変容である事実が確かめられる。また、この「阜新モンゴル劇」は、新中国が建国される前の1948年に誕生したとすると、2020年までに72年の長い歳月を過ごしてきたことになる。この72年の間に、前述したように、1988年7月に内モンゴル自治区の「安代伝奇」という劇目も「科尔沁蒙古劇」として地方劇種に認定されたことがある。

しかしながら、これまでの「阜新モンゴル劇」と「科尔沁蒙古劇」に関する先行研究を総括すると、研究者の間で「モンゴル劇」の起源に関しては観点や意見が一致していないのが現状である。例えば、道潤梯歩氏は「蒙古族戯劇建設的幾個問題」<sup>375</sup>という文章で、「モンゴル民族に古代から戯劇を演出する伝統があるが、この伝統的な上演方式は、様々な原因で断続して千年の歳月を過ごしてきた」と記述しており、肯定的な観点を出している。しかし、劉新和氏は「蒙古劇」<sup>376</sup>という著作で、「モンゴル劇の原形は、1912年（中華民国元年）のジリム盟・ホルチン左翼中旗のモンゴル族芸人に遡れる」と記述して、否定的な観点を出している。

筆者は道潤梯歩氏の観点到賛成するが、それは前述した理由による。文化というものは短時間では作り上げられない客観的な条件があるので、「阜新モンゴル劇」も現在のような上演方式に固定化されたのは1984年前後の時期であっても、その前のモンゴル社会で様々な形で存在していて、中華民国時代に至ってからその上演方式と表現方法は

---

<sup>375</sup> 道潤梯歩「蒙古族戯劇建設的幾個問題」（漢語版）、『北国影劇』第3—4期（合刊）、1988年。

<sup>376</sup> 劉新和「蒙古劇」（漢語版）、『中華芸術論叢』第9輯、2009年。

変化しなければならない時期を迎えていたと考えられる。

また、「古代のモンゴル社会でもモンゴル劇を演じる伝統が存在していた」という観点を出している研究としては、ザムソ（扎木蘇）氏の書いた「倒喇戲—元代蒙古歌舞劇形成—」<sup>377</sup>、ジャンホン（張虹）氏の書いた「現時期蒙古族戲劇的制高点」<sup>378</sup>、シエンユェン（刑源）氏の書いた「論<科尔沁蒙古劇>産生的歴史基礎」<sup>379</sup>などの文章が挙げられるので、劉新和氏が持つ否定的観点は成立し難い。

それゆえに、20世紀40年代末期から50年代初期にかけて、東部モンゴル地区のモンゴルジン旗で「モンゴル劇」、即ち阜新モンゴル劇の基本的な形が形成され、1984年に国家の文化部門から少数民族の地方劇種と認定されたことは、ただ少数民族の地方劇種にもう一つの劇種が増加したのではなく、その時期からモンゴル族の文化が新しい時代に新たな形式で発展してきたという現象が象徴されて、大きな意義があったと考えられる。

しかしながら、この問題を深く分析すると、新中国が建国された後、モンゴル族の人々が多元文化構成などの影響を受け、自民族の伝統文化を保護・継承する意識が次第に薄くなっている傾向がはっきり見られる。それゆえに、阜新モンゴル劇は、ホーリンウリゲルという伝統芸能をもとにして形成されたとしても、ホールチがもともとの主役者から劇団の一員として参加する、いわゆる傍観者という立場に立つようになったことになるので、20世紀の50年代前後の時期から「阜新モンゴル劇」が発展し始めたとする、同時期からホーリンウリゲルと言う伝統芸能の社会的位置および役割が下がってきたことも考えられるのである。

#### 四 説唱脚本の変化とその衰退

ホーリンウリゲルと言う伝統芸能は、新中国が建国された後に繁栄したのは、その脚本の変化に見られると考えるが、第二章で紹介した内容を振り返ると、ホーリンウリゲルの場合、ホールチがどのような脚本・書目を語るのかというと、その脚本・書目が創

---

<sup>377</sup> 扎木蘇「倒喇戲—元代蒙古歌舞劇形成—」（漢語版）、『北国影劇』第3—4期（合刊）、1988年。

<sup>378</sup> 張虹「現時期蒙古族戲劇的制高点」（漢語版）、『北国影劇』第3—4期（合刊）、1988年。

<sup>379</sup> 刑源「論<科尔沁蒙古劇>産生的歴史基礎」（漢語版）、『北国影劇』第3—4期（合刊）、1988年。

作された時代背景を考慮すると古代と現代に分けられ、文学の方面から見ると英雄叙事詩（史詩）と歴史小説の二つの種類に分けられる。

また、さらに詳しく分類すると、英雄叙事詩には、内容によって、『ジャンガル・ハーン伝説』（江格尔）と『ゲセル・ハーン伝説』（格斯尔）のような長編の脚本・書目があり、歴史小説にも「編訳」と「創作」した脚本・書目、即ち、ベンスンウリゲル（本森烏力格尔）が多量に残されている。特に、中華人民共和国が建国されて以来、偉大な建国の指導者、社会発展のために貢献した人物、美人美拳を題材に創作された新時代のウリゲルの脚本・書目が次第に増える傾向があることを確認できる。

しかし、第二章で主に古代脚本と現代脚本の具体的な内容を例にして挙げて紹介したが、実際にホールチたちが説唱している古代および現代の脚本が何部まで残されているのか、どのような方法で古代と現代の脚本を識別するのか、などについて紹介しなかった。それゆえに、ここでは、古代と現代の脚本の名称を挙げながら、歴史の変遷に伴ってホーリンウリゲル脚本が変化している状況を考察して行きたい。

まず、ホーリンウリゲルの古代脚本という概念は、実際に空間的な領域、即ちチンギス・ハーンの時代から満州政権が終結されるまでで、この長い間に口頭および文字で継承されてきたすべての脚本を指す。特に解説する必要があるのは、明朝の中期から清朝の末期までに多くの翻訳作品と創作文学の作品が、ホールチの改編および加筆によって、ホーリンウリゲルの古代脚本として分類されて語られているが、この中にモンゴル民族の英雄の功績を賛美する脚本があるとしても、漢族の演義小説およびその中に登場する人物を賛美する脚本が含まれている。

モンゴル民族の英雄の功績を賛美する古代脚本は、モンゴル民族の三大長編の英雄叙事詩と称されている『チンギス・ハーンの伝記』『ジャンガル・ハーン伝説』『ゲセル・ハーン伝説』を主として、『フビライ・ハーン伝説』『マンドウハイスチン皇后』（満都海斯琴皇后）『大元盛世青史演義』『トクトホ・バトル』（陶克陶呼巴特尔）『ビンドウワァン』（兵圖王）など視聴者が聞き慣れているウリゲルが挙げられる。

また、漢族の演義小説に登場する英雄を賛美する古代脚本は、東部モンゴル地区に広く伝播した創作文学である『興唐五伝』（第1部の『苦喜伝』、第2部の『全家福』、第3部の『殤妖伝』、第4部の『契僻伝』、第5部の『羌胡伝』（上部・下部）、続編

(第6部)の『寒風伝』) 以外に、モンゴル語に翻訳された脚本としては、『夏国』『商国』『周国』『秦国』『東漢』『西漢』『東晋』『西晋』『三国演義』『封神演義』『聊齋志異』『水滸伝』『西遊記』などの古代脚本が挙げられる。

次に、上述した古代脚本の相対する現代脚本という概念も古代脚本という概念と同様で、ある空間的な歴史時空を指している。具体的に解説すると、中華民国の南京臨時政府が成立してから現在までに創作・改編され、モンゴル語に翻訳されたすべての脚本が現代脚本に分類される。特に解説する必要があるのは、文化大革命が始まる前後の状況が大きく変化した点であるが、文化大革命が始まる前の時期には、ホールチたちはまだ古代脚本を中心に語っていたが、文化大革命が終結した後、ホールチたちは紅色革命および解放戦争を主題にして創作した脚本を語るようになった。

具体的な脚本の名称を示すと、『新兒女英雄伝』『茫茫的草原』『智取威虎山』『草原烽火』『白毛女』『オールドス風暴』『劉胡蘭』『平原遊撃隊』『渡江偵察記』『林海雪原』『鉄道遊撃隊』『共産党賛歌』『烈火金剛』『祖国阿・母親』『毛主席語録』『毛主席賛歌』『平原銃声』『地道戦』『龍山遊撃隊』『十万里長征賛歌』『紅歌賛』『送情報』『青春之歌』などとなる。新しい脚本が創作されて、現在までに語り継がれてきた。上述した古代脚本と現代脚本の内容を見ると、古代と現代でホールチたちの語る脚本の数および内容には大きな差異があることは一目瞭然である。

前述した「モンゴル劇」が国家の文化部門に「少数民族地方劇種」として認定される20世紀の80年代から、様々な社会的および個人的な原因でホールチの数が激減していた。例えば、ホーリンウリゲルの成立地域(発祥地として公認されている)であるモンゴルジン旗を事例とすると、1948年に阜新全域が解放された初期には、モンゴルジン旗の各モンゴル族村落で活躍するホールチは300人以上いたと言うが、2006年に「モンゴル族ウリゲル」は国家級非物質文化遺産名録に認定される時には、ホールチは僅かに2人、流派も解放初期の5派から2派に減少して、若い後継者を育成することが最大の課題となったので、現在は絶滅危機に瀕している<sup>380</sup>。

勿論、近年の東部モンゴル地区の民間では、社会で発生した有意義な出来事や大きな

---

<sup>380</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・ホールチ5番」を参照されたい。

事件を主題にして創作された脚本も少なくないが、例えば、2020年の最大の事件である「新型コロナウイルス」が発生した時から現在まで、各モンゴル族地域のホールチたちは新聞およびテレビ番組の報道を根拠にして、人類の身体に悪い「新型コロナウイルス」と戦うために、5分から6分、あるいは、10分から15分の短い脚本を創作して、人々に毎日必ず手を洗い、衛生管理をしっかりと呼びかけていた。残念なことには、実際にその「短い脚本」はホーリンホルボーに過ぎないものであり、ホーリンウリゲルとは言い難い。

それゆえに、前述した内容を総括すると、新中国が建国された後、中国政府から少数民族の伝統文化に関する優遇政策によって、ホールチが活躍する「ウリゲルインゲル」が設立され、ホールチと視聴者の数が増加し、新たな少数民族地方劇種である「モンゴル劇」も誕生した。しかし、ホーリンウリゲルと言う伝統芸能はこのような繁栄期を迎えて頂点に到達したが、現代的な情報媒介が迅速に発展する20世紀80年代から次第に衰退する現象が顕在化してきた。

## 第二節 ホーリンウリゲルの衰退とその実態<sup>381</sup>

近年、中国経済の発展に伴って社会全体の環境が変化してきた。その中では、現代の情報媒介の発展およびシステム化された進展が加速化しているのが現状である。それゆえに、東部モンゴル地区の社会環境も次第に変化し、各モンゴル族地区でも現代の情報媒介の影響を受けた結果、もともとの言語環境が破壊され、モンゴル族の政治経済、言語文化、伝統芸能、風俗習慣などすべてのものが衰退している傾向が見られる。

とりわけ、ホーリンウリゲルの場合は、モンゴル語の言語環境が悪化している影響を受け、この芸能を継承させる後継者の育成事業が阻害されていることが最も大きな課題となっている。さらにモンゴル族の生活レベルが上昇して、娯楽生活も多様化してきたことによって、昔のようにわざわざホールチの説唱するウリゲルを聴く視聴者が次第に減少し、ホールチたちの演出時間・機会・内容まで変化している。

---

<sup>381</sup> 蒙古貞夫「モンゴル族のホーリンウリゲルの現状と課題」(日本語版)、研究代表者・石井正己『平成30年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 越境するアジア—戦争・文学・女性—』、東京学芸大学、2018年12月、70—75頁。



## 一 社会環境の変化と娯楽生活の多様化

1978年12月に、中国共産党「第十一回中央委員会・第三次全体会議」が北京で開催されたことに伴って、国家の「経済を回復・発展させる」という国家戦略が決定された。その時から漢族を主として各少数民族の文化を発展させるために、国家の文化部門によって様々な促進策が決定された。モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルも民間芸能から政府機関が重要視するようなものになって、東部モンゴル地区の各地に「ウリゲルインゲル」などの文化機関および保護センターが設置され、伝統芸能のホーリンウリゲルが発展する時期を迎えた。

しかしながら、経済というものは昔から諸刃の剣と言われているように、急速な経済発展に伴い、社会の構造および環境が激変し、伝統文化が周縁化されることも次第に顕在化してきた。モンゴル語で説唱しなければならないという基本的な条件を持つホーリンウリゲル芸術も、国家の急速な経済発展に伴って東部モンゴル地区の社会環境が激変し、さらに現代的な情報媒介が迅速に発展することによって、ホーリンウリゲルの命脈である視聴者の娯楽生活が多様化した。

また、現在の東部モンゴル地区、即ち内モンゴル自治区の東部、遼寧省の西北部、吉林省の東北部、黒竜江省に住むモンゴル族の人々は、国家の経済を発展させる政策によって、これらの地域に住むモンゴル族の生活は昔より豊かになっている。しかし、経済の発展によってすべて良い影響を出ているわけではなく、悪い影響も各モンゴル族地区に流行っているのが現状でもある。特に、ホーリンウリゲルの継承と発展を妨げている要因は、この芸能を支えてきたモンゴル語とモンゴル文字が次第に消失していることにあり、主に以下の点に現れている。

まず、国家の民族教育に関する政策から見ると、中国政府は漢族以外の55少数民族に対して、普通話（漢語）と民族言語を同時に教える「双語教育政策」を実施することになった。それによって、全国の各地に住むモンゴル族の子どもたちは、自民族の母語・モンゴル語を勉強する以外に、国家の共通語である漢語を勉強することが義務付けられ、小学校1年生から必ず漢語を学ばなければならないことになっている。しかし、近年の国家教育制度を改善する政策によって、各モンゴル族の幼稚園に入園した子どもを対象に、幼児教育の段階から漢語で授業することも義務化されるようなので、モンゴル族の

各地で不安が高まっていることを第2回の調査協力者9番<sup>382</sup>から知った。

次に、社会の方面によると、近年のモンゴル族地域では、すべての授業をモンゴル語で勉強した学生は、大学の入試試験で全国各地の大学に入学するが、多くの大学では高校時代のようなモンゴル語教育は設定されていないので、漢語で授業をし、漢語で試験を受けることが困難となり、次第に大きな社会問題ともなっている。特に、モンゴル語で授業を受けた学生が大学を卒業した後、北京や上海などの大都市の会社で働くとき、漢語が上手く使えない影響で、民族差別が行われていることが頻繁に出現している。そのため、モンゴル族の親の中には、モンゴル語は必要ないなどという言論が出てきていることを第2回の調査協力者11番<sup>383</sup>が教えてくれた。

なお、各モンゴル族の学校では、国家民族教育を管理する部門の指導もとで、できる限りモンゴル語で授業を実施している。しかし、内モンゴル自治区以外の東北三省に生活しているモンゴル族の生徒はモンゴル語の基礎が弱いので、教師の講じている内容を十分に理解できていない現象が普遍的に存在している。また、授業はモンゴル語で実施しているが、放課後にこれらの生徒はモンゴル語で会話する人が少なくなっているため、モンゴル語のレベルもなかなか上達しない。

第三は、近年のモンゴル族の家庭では、自由解放となったグローバル社会において、漢族の男性がモンゴル族の女性と結婚している現象、あるいは、逆にモンゴル族の男性が漢族の女性と結婚することが普通になっている。それゆえに、このような二重性を持つ家庭では、モンゴル語の使用率もかなり異なっているのが現状である。第2回のインタビュー調査の結果<sup>384</sup>によると、男性がモンゴル族の場合は自分の子どもをモンゴル族の学校に入学させようと考えている親が多くあるが、逆に男性が漢族の場合は自分の子どもにモンゴル語を勉強させる親は極めて少数であると教えてくれた。

このような状況もとで、各モンゴル族地域の民族教育と伝統文化は、歴史上の未曾有

---

<sup>382</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者9番」を参照されたい。

<sup>383</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者11番」を参照されたい。

<sup>384</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者12番」を参照されたい。

の問題に直面する状態だったので、ホーリンウリゲルもその影響を受けて、ホールチたちの演出する機会が減少し、いわゆるホールチの場と呼ばれていた「ウリゲルインゲル」も閉室され、若き後継者がなかなか育成できず、視聴者も減っているという様々な問題が発生している。

その上、21世紀に入ってから現代的な情報媒介のシステムが中国の各地で迅速に発展することによって、モンゴル族の各地域の間および人々の間に交流することも昔より便利になっている。しかし、このような迅速な発展によって、モンゴル族の人々の生活は便利になっているが、深い社会問題もモンゴル族の地域で浮かび上がってきた。この中で顕在化しているのは伝統文化の消失問題であり、ホーリンウリゲルも著しい社会環境の衝撃を受け、次第に絶滅の危機に瀕してきた。

特に、近年の中国における現代の情報媒介の発展によって、「南で抖音、北で快手」という言い方が形成されているが、「抖音」は中国の南方地区で非常に流行っているアプリのことを指し、「快手」は北方地区に住む民衆の中で流行っているアプリのことを指す。この「抖音」と「快手」は、別々のマスメディア会社が管理している。使用者は、普通の民衆から有名な芸能人・俳優にまで至っているが、彼らは毎日「抖音」と「快手」の機能を使ってライブ配信しているので、インフルエンサー（ネット有名人）文化が時代の潮流となっている<sup>385</sup>。

勿論、これらの毎日ライブ配信をしているインフルエンサーの中にホーリンウリゲルの語り手であるホールチたちも参加しているが、モンゴル語で語ったライブ配信作品を多量に配信すると、アプリの管理本部からその作品が撤去される恐れがあるので、多くのインフルエンサーはできる限り漢語で話しながら配信している状態である。また、モンゴル族出身のインフルエンサーの中では、中年および年長者の人々の一部は漢語を話さないで、ずっとモンゴル語でライブ配信をしていたが、そのユーザーが永遠にロックされる状況も生じている。

そこで、現在のモンゴル族地域では、モンゴル族の人々が家を出なくても、多種多様なテレビ番組を通して世界中の各地に生じている情報が得られるようになってきたの

---

<sup>385</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者10番」を参照されたい。

で、ホーリンウリゲルのような伝統芸能は次第にモンゴル民衆の視線から離れてしまい、絶滅の危機に瀕している。例えば、第3回<sup>386</sup>のインタビュー調査の結果によると、「現在の中国本土（特に東部モンゴル地区を指す）では、長編の英雄叙事詩および歴史小説を語ることのできるホールチは、大幅に計算すると20人であるが、慎重に計算すると10人（中編や短編の脚本を語る芸人はホルボーチンおよびウリゲルトドーチンと呼ばれる）程度になる」という。

## 二 モンゴル語の消失による伝統文化の消滅危機<sup>387</sup>

中国は、多民族・多文化・多言語文字の統一国家であり、約100種以上の言語と30種以上の文字を持っている。言語は、漢語（中国語）と少数民族言語（略称：民族語文）に分けられ、言語と文字の種類が多だけでなく、特徴も複雑である<sup>388</sup>。そして、現行の「中華人民共和国憲法」（1982年施行、2004年修正）は、「序言」で同国が多民族国家であることを謳い、第4条では、各民族の一律平等、民族自治区の制定や各民族語・文字の使用と発展の自由などを定めている。第120条では、民族自治地方の自治機関が任務を実行する際に、自治条例に規定されていることに基づいて、当地に通用する一つあるいは複数の言語を使用すると記載されている<sup>389</sup>。

言語・文字は、各民族においてはその民族の命脈であり、その民族の文化を継承する最も重要なキャリアだとよく言われる。周知のように、モンゴル語とモンゴル文字はモンゴル民族の命脈であり、言語・文字が存続できればモンゴルの文化は保留できるはずである。しかし、2017年2月の国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）から発表された最新データによれば、世界中の約199種（内モンゴル自治区のチャハアル地区のモンゴ

---

<sup>386</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第三節・第3回の調査内容・協力者2番」を参照されたい。

<sup>387</sup> 蒙古貞夫「モンゴル族のホーリンウリゲルの現状と課題」（日本語版）、研究代表者・石井正己『平成30年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）研究成果 越境するアジア—戦争・文学・女性—』、東京学芸大学、2018年12月、70—75頁。

<sup>388</sup> 戴慶夏主編『中国少数民族言語使用現状及其演變研究』（漢語版）、民族出版社、2009年、1～5頁。

<sup>389</sup> 全国人民代表大会常務委員会『中華人民共和国憲法』（漢語版）、全国人民代表大会常務委員会公報、2004年。

ル語を標準語とするオイグルジンモンゴル語を含めて約18種)の言語が絶滅の危機に直面しているだけでなく、この数は年々増加する傾向にある。

また、中国ではモンゴル族に対して、実はモンゴル語と漢語を同じレベルまで達成させることを目的として「蒙漢双語教育」(モンゴル族の場合は、モンゴル語と漢語を同時に教えることを指す)制度を実施してきたが、近年は漢語に偏った「新たな双語教育」へ急速に移行してきた。さらに、漢語の社会的ステータスが上がることによって、モンゴル族の人々が自ら漢語を選ぶ傾向が拡大しつつある実態が明らかになった<sup>390</sup>。

ホーリンウリゲルという伝統芸能は、モンゴルの言語・文字をもとに発展してきた伝統文化であり、必ずモンゴル語を使用して楽器の伴奏に合わせて物語を弾き語り、モンゴル文字を使用して台詞・台本を作って記録するが、モンゴル語とモンゴル文字が次第に消失している実情よって、ホーリンウリゲルの継承は大きな問題となっており、視聴者も次第に減る状況になってきた。

例えば、ホーリンウリゲルの語り手であるホールチは、師匠の語っているホーリンウリゲルの意味を十分に理解できていない。そのため、師匠はまず一段落を語ってから、弟子たちは師匠を真似て繰り返して語る。また、モンゴル文字が読めない若いホールチがいて、師匠の書いた台詞の内容を理解できず、そのままアドバイスも聞かずに覚えてしまうホールチもいて、彼らは自分の語っているウリゲルの意味もすべて理解していない状態で語り続けている<sup>391</sup>。このような状況が生じた原因としては、ホールチのモンゴル語とモンゴル文字に関する知識が足りないことがある。

加えて、ホーリンウリゲルの視聴者<sup>392</sup>を例とすれば、現在の視聴者は言語・文字の消失に伴い、若い視聴者がウリゲルの意味を理解していない状況であり、理解できているのは大体40歳以上であると考えられる。こんな状況になったのは、教育の影響だと考えられるが、近年の各モンゴル族地域において、モンゴル族の親たちは子どもの将来のた

---

<sup>390</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者12番」を参照されたい。

<sup>391</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者10番」を参照されたい。

<sup>392</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者9番」を参照されたい。

め、モンゴル族の子どもを幼稚園から小学校・中学校・高校・大学まで一貫して漢語の学校に行かせて勉強させるのが誇りとなっている。彼らの考えとしては、漢語を把握できれば中国で生きられ、さらに多数の漢族の人と交流ができるということがあるからである。

上記の現象によれば、ホーリンウリゲルを継承するために、まず、この芸術の発展と継承を妨げている第一番の言語・文字の問題を解決しなければならない。現在、若いホールチの中に、モンゴル語がうまく話せず、モンゴル文字が読めないという問題が生じているが、ホーリンウリゲルはモンゴル語で語るため、師匠が弟子にモンゴル語・モンゴル文字を教えて、言語・文字を使い、読み、書き、語る力を向上させることが必要である。

次に、ホーリンウリゲルを表現する唯一の楽器である低音のドリボンウタストホールをしっかり練習して、弾きながら物語が語れるように努力しなければならない。ここで言う「弾きながら物語が語れる」ということはそんなに簡単にできることではなく、長い間繰り返し練習していかなければ実現できない。例えば、ホーリンウリゲルを勉強している人には誰でも会える状況があるが、楽器を弾くとウリゲルを語ることを忘れてしまい、逆にウリゲルを語ると楽器を弾くことを忘れてしまい、「弾きながら物語が語れる」ということはなかなかできないため、楽器を弾く力も上達しなければならない。

以上のように、近年の東部モンゴル地区の社会環境が変動する中で、子どもから大人までモンゴル語を話す機会が減少していて、モンゴル語で会話するとしてもその間に多くの漢語を挿入しながら話しているので、ホーリンウリゲルという説唱芸術を継承する基本的な条件がなくなっている。それゆえに、ホーリンウリゲルと言う伝統芸能を次世代に継承させる場合は、モンゴル語の継承と発展を妨げている原因を解決しなければならない。

### 三 ホールチの減少と若き後継者の不足<sup>393</sup>

ホーリンウリゲルという伝統芸能は、12世紀から13世紀に淵源を持ち、その後、語り手のホールチが語り継ぐことによって、グローバル化の現代社会までに継承されてきた。しかしながら、長年にわたってモンゴル語で「ᠬᠣᠷᠯᠴᠢ»(ホールチ)と表記・呼称されていること言葉に関して研究界で意見が一致していないのが現状である。実は、この「ᠬᠣᠷᠯᠴᠢ»は、字面上に表示されているように、楽器を指す「ᠬᠣᠷᠯ»(ホール)の後ろに「ᠴᠢ»(チ)という接尾語を付けたので、ある専門の職を務める「～の者」「～の人」のことを指すようになった。

それゆえに、ホーリンウリゲルの場合は、語り手の民間芸人が低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語で長編の英雄叙事詩および歴史小説を語る民間芸人のことを指すのは当然のことであるが、一部のホーリンウリゲル研究者は「低音のドリボンウタストホールを使って語る」という上演形式の認識が不足していて、民間芸人が低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語で韻文体の脚本を説唱すれば、その上演形式はホーリンウリゲルと言えると考えられている場合が少なくない。

実は、このような考え方がホーリンウリゲルという伝統芸能に対する誤解になっている。なぜかと言うと、東部モンゴル地区では、低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語で長編の英雄叙事詩および歴史小説を語るホールチ以外に、さらに同じ低音のドリボンウタストホールを使って、モンゴル民謡民歌・中編や短編のホルボー・叙事民歌を語る民間芸人も各モンゴル族地区で活躍している。

これらの低音のドリボンウタストホールを使って語るすべての民間芸人を「ホールチ」と呼ばず、モンゴル民謡民歌を語る民間芸人を「ダグチン」(達古沁)、ホルボーを語る民間芸人を「ホルボーチン」(好来宝沁)、叙事民歌を語る民間芸人を「ウリゲルトドーチン」(烏力格尔圖達古沁)と呼び、はっきり分類することもある。「ホールチ」と呼ばれる民間芸人は、モンゴル民謡民歌・中編や短編のホルボー・叙事民歌を語る民間芸人をもとに、主に長編の英雄叙事詩および歴史小説を語る民間芸人を語る人々のことを指

---

<sup>393</sup> 蒙古貞夫「モンゴル族のホーリンウリゲルの現状と課題」(日本語版)、研究代表者・石井正己『平成30年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 越境するアジア—戦争・文学・女性—』、東京学芸大学、2018年12月、70-75頁。

していると理解すれば、最も適切と考える。それゆえ、「ホールチの減少」ということは、民間芸人が低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて、モンゴル語でウリゲルを語るとしても、長編の英雄叙事詩および歴史小説を語ることができる人々、即ちホールチの数が次第に減少している現象を指している。

以上、ホールチが減少している現象および若き後継者が不足している問題を解説するにあたって、ホールチという概念についても一度解説した。続いて、現地調査の結果によって、20世紀80年代前後の時期から現在までに、東部モンゴル地区で活躍するホールチたちが死亡や病気や転業などの要素の影響で、その数が年々減少するようになってきたこと考察して行きたい。

まず、第1回<sup>394</sup>の調査協力者5番の話によると、ホーリンウリゲルの成立地域（発祥地としても公認されている）であるモンゴルジン旗、即ち現在の遼寧省・阜新モンゴル族自治州には、解放初期の最も繁栄した時期に5種の流派と300人以上のホールチが存在していた。しかし、現在は、ホールチは僅かに2人、流派も2種（子弟伝承と家族伝承）しか残っていない現状（ここで言うホールチは、すべてモンゴルジン旗出身のホールチであり、内モンゴル自治区のホールチは含まれていない）が把握できた。

次に、第2回<sup>395</sup>の調査協力者1番から入手した『蒙古族文学資料編成集』<sup>396</sup>（内部資料）の記載によれば、内モンゴル自治区社会科学院文学研究所は、1963年の時点で内モンゴル自治区を対象にフィールド調査を実施して、ジャルート旗・ヒンガン盟・アオハン旗・クーロン旗などの中心都市と主要地区で活躍する多数のホールチの資料を収集した。その上で、1980年にそれらの資料をもう一度整理して、内部資料として『蒙古族文学資料編成集』を出版したと挨拶の所に書かれている。

しかし、残念なことには、本書では、内モンゴル自治区出身のホールチを対象とした調査報告書であり、東北三省の雑居区モンゴル族地域と内モンゴル自治区の中の哲里木

---

<sup>394</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・ホールチ5番」を参照されたい。

<sup>395</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者1番」を参照されたい。

<sup>396</sup> 内蒙古社会科学院文学研究所編『蒙古族文学資料編成集(内部資料)』（漢語版）、第七巻・挨拶言葉、1980年。



盟の奈曼旗などの地域は対象外となっている。加えて、この本に記載されているホールチの生年月日と年齢は記載されず、名前と基本的な情報しかないので、あまり価値がある研究にならなかったと考えられる。しかしながら、この本は1963年のホールチの状況を把握しているため、その時代のホールチの状況が説明できる資料になるはずである。

最後に、第3回の調査協力者2番<sup>397</sup>から入手したパンフレットを見ると、2006年8月に、中国曲芸家協会、内モンゴル自治区文化庁などの後援で「曲芸家であるモーヒイン誕生100周年・中国内モンゴルのウリゲル芸術祭」が開催された時に、内モンゴル自治区の通遼市20人、内モンゴル自治区の興安盟11人、内モンゴル自治区の赤峰市3人、内モンゴル自治区のフルンボイル（呼伦贝尔）市2人、吉林省の前ゴルロス（郭爾羅斯）モンゴル族自治県4人、遼寧省の阜新モンゴル族自治県2人、青海省海西モンゴル族・チベット族自治州2人が参加した状況が確認できる。

また、本大会に参加した46名ホールチの年齢構成から見ると、60歳以上のホールチが10名、50歳～60歳のホールチが5名、40歳～50歳のホールチが9名、30歳～40歳のホールチが7人、20歳～30歳のホールチが12人、20歳以下のホーリンウリゲルの学生が1人となっている。現役のホールチの中でも年長者が多数を占め、さらに年齢層が次第に上がっている傾向があり、若き後継者の数は極めて少数であるという状況が確認できる。

上述の資料および調査結果によると、現在の東部モンゴル地区で活躍しているホールチの数は、20世紀の時期に同じ東部モンゴル地区で活躍していたホールチと比べると、半分もいないという状況が分かる。特に内モンゴル自治区以外の東北三省（吉林・遼寧・黒龍江）に分散しているホールチに関しては、長年にわたって正確な情報が得られないほか、これまでの記録も少ないので、ホーリンウリゲル研究の盲点になっている。

このようなホールチの数が年々減少することに伴って、若き後継者の数も非常に不足するようになってきたので、現時点から国家の文化部門および地方部の文化部門が適切な保護・継承政策を作り上げなければ、今の世代のホールチが逝去した後、ホーリンウリゲルと言う伝統芸能は世の中から消えてしなう可能性が高い。そこで、現役のホールチのインタビュー調査をして、若き後継者を育成している状況が把握できたので、以下

---

<sup>397</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第三節・第3回の調査内容・協力者2番」を参照されたい。

のようにまとめておきたい。

まず、第1回の調査協力者5番<sup>398</sup>は、「ホールチになるには幾つかの条件があるが、まず、基本としてモンゴル語と漢語の二つの言語を把握すること、次に、ある程度の歌唱力、表演力、音楽力を持つこと、第三に、驚くほどの記憶力を持つこと、第四に、楽器を上手く弾ける能力を持つこと、第五に、この芸術を把握する決意も必要だが、根気の強さも必要であることがある。それゆえに、多くの子どもはこれらの条件を満たさず、満たしたとしても中途半端の児童・生徒が多数を占めているので、若き後継者を育成することが難しい」と教えてくれた。

次に、第2回の調査協力者9番<sup>399</sup>は、「現在、モンゴル族の子どもに「漫画」と「ホーリンウリゲル」の選択肢を挙げれば、いまの子どもの90%以上は「漫画」を選択し、残りの10%の子どもが「ホーリンウリゲル」を選ぶことは確かなので、若き後継者の育成問題はなかなか解決し難くなり、ホーリンウリゲルという伝統芸能も次第にモンゴル族の人々の視線から離れてしまい、歴史の舞台から退出している」という。

最後に、第3回の調査協力者4番<sup>400</sup>は、「近年のグローバル時代において生活方式の変化に伴い、モンゴル族の若者たちは次第に現代の流行文化に興味を持つようになり、伝統的な芸能と文化にあまり興味を持たず、伝統的なものは「頑固、古い、価値がない」などという考え方が生じてきて、モンゴル民族の誇りとなる伝統文化を伝承していきたいと考える若者は少なく、その中で特にホールチを仕事として継承していく者は鳳凰の羽毛と麒麟の角のように少なくなっているので、21世紀までに継承されてきたホーリンウリゲル芸術に対して、次世代の若者に継承してもらうことが非常に困難なことになってきた」と語った。

これらの調査結果から見ると、現役のホールチが次第に高齢化する現状の中では、若き後継者を育成が問題になり、800年以上の歴史を持つホーリンウリゲル芸術がグロー

---

<sup>398</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・ホールチ5番」を参照されたい。

<sup>399</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者9番」を参照されたい。

<sup>400</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第三節・第3回の調査内容・協力者4番」を参照されたい。

バル化の社会の中で次第に衰退している様子がはっきり見られるようになってきたと言える。

#### 四 演唱時間の減少と説唱内容の変化<sup>401</sup>

昔の東部モンゴル地区では、モンゴル人の中でシャーマンを崇拝するのは通常的なことであり、ホールチを家に招待してホーリンウリゲルを上演してもらうことは単純な娯楽生活を豊かさせること以外に、新しい家を建てた祝いや農業収入が豊かになることを願うときや、ひいては家族のメンバーが重病になって、どうしても治らない状況になったときにも、ホールチを招待して治癒を願うことが多かった。それゆえ、旧社会でホールチは、邪悪を取り除け、災害と事故を予防し、人々の幸せと健康を守るような役割を果たしてきたので、人々から「神人」と言われたという。

しかし、グローバル化の加速と都市化の促進に従って、近年の東部モンゴル地区で集住するモンゴル族の村落では、わざわざホールチを家に招待して、ホーリンウリゲルを上演したり、病気を治すために願ったりすることはなくなり、人々が集まって活動することはすべてのテレビ番組およびネットワークに替えられた。そこで、ホールチたちが出演する機会が減少し、演唱する時間も短縮され、説唱する内容も大きく変化している実態について、インタビュー調査の結果から以下のような情報が得られた。

まず、第1回の調査協力者2番<sup>402</sup>に演唱時間と説唱内容について尋ねたところ、「私が生活している吉林省の前ゴルロスモンゴル族自治州では、昔、農村部のあるモンゴル族の家で月を単位としてウリゲル語っていたが、現在は祝日、お祭り、非物質文化遺産の宣伝などの活動以外にウリゲルを語る機会は少なく、演唱の時間は次第に短縮され、英雄叙事詩などの長編の小説が語れない状態になってしまった。特に、昔は古代脚本である「チンギス・ハーンの伝説」を語る時は、大体1カ月をかけて幾つかの場所に移動しながら語ったが、現在は「チンギス・ハーンの伝説」を語る時は、時間を短縮して重

---

<sup>401</sup> 蒙古貞夫「モンゴル族のホーリンウリゲルの現状と課題」(日本語版)、研究代表者・石井正己『平成30年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 越境するアジア—戦争・文学・女性—』、東京学芸大学、2018年12月、70—75頁。

<sup>402</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・ホールチ2番」を参照されたい。

要な部分だけを取り上げて語るようになってきた」と語った。

次に、第2回の調査協力者1番<sup>403</sup>は、「大昔のモンゴルジン旗では、ホールチを招待するときに、モンゴル民族の最高の儀礼であるハダック<sup>404</sup>を上げて酒なども奉納して礼拝するような習慣がかなり行われていたが、現在は拝礼する習慣が完全になくなっている一方、昔は何カ月を単位に語り続けていた脚本を語るときに、できる限り短縮して語ってほしいと要求する視聴者が少なくない。特に昔の東部モンゴル地区で大変人気がある『興唐五伝』（『苦喜伝』『全家福』『殤妖伝』『契僻伝』『羌胡伝』）『夏国』『商国』『周国』『秦国』『東漢』『西漢』『東晋』『西晋』『三国演義』『封神演義』『聊齋志異』『水滸伝』『西遊記』などの古代脚本は、近年はあまり語れていないのが現状であり、長編の英雄叙事詩および歴史小説を語ることができるホールチも次第に減少し、全国でおおよそ20名上下になっているはずである」と語ってくれた。

最後に、第3回の調査協力者1番<sup>405</sup>の話によると、「2006年に「モンゴル族ウリゲル」という項目は、中国の国家国務院からの審査を通過して国家級非物質文化遺産名録に認定されて以来、ホーリンウリゲルと言う伝統芸能に関わる語り手のホールチ、説唱脚本の内容と芸術的な特徴、伴奏楽器ドリボンウタストホルの由来・作り方・革新方法などすべての構成要素が学術研究の対象になり、研究者も一時的に急増し、今年の新型コロナウリゲルの影響も受けず、十何人も若き研究者に電話でインタビュー調査を受けた。しかし、これらの研究者たちは、ホールチの演唱時間と説唱内容が変化していることに注目せず、自分の研究したい所だけ調査している。率直に言うと、ホールチの演唱時間は昔の何カ月から現在の30分、あるいは20分に絞られ、5分で完了する時もかなり増え、形式上の遊びものになっている。あなた（筆者）は若き後継者として、この芸能を研究しながら実際にも継承してください。特に時間があれば、毎日楽器を弾きながら自分の説唱能力と即興する技法を高めることが大切である」と教えてくれた。

---

<sup>403</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者1番」を参照されたい。

<sup>404</sup> ハダック(哈達)とは、モンゴル族が敬意や祝賀のしるしとして献納する薄く、細長く、青い絹である。

<sup>405</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第三節・第3回の調査内容・協力者1番」を参照されたい。

この部分では、筆者は上述した第1回・第2回・第3回の調査協力者から得られた調査結果を使って、ホーリンウリゲルの主要な地域である東部モンゴル地区、即ち調査地である吉林省・内モンゴル自治区・遼寧省で活躍するホールチは、演唱時間が短縮され、説唱内容が簡略化している現実問題の直面している状況が明らかになった。そして、ホールチたちがホーリンウリゲルと言う伝統芸能の動向を非常に心配している姿をはっきり見ることができた。

## 小結

第五章では、筆者が2018年から2020年までに実施した第1回・第2回・第3回のインタビュー調査の結果および郷土資料を用いて、ホーリンウリゲルの繁栄と衰退に関わる状況を考察してきた。具体的な内容としては、まず、第一節で、ホーリンウリゲルという伝統芸能が最も繁栄していた時期には多くのウリゲルインゲルが設立され、ホールチの数と視聴者の数も同時に増加し、ホーリンウリゲルの影響を受けてモンゴル劇が誕生したことなどを明確にした。第二節では、近年のホーリンウリゲル芸術は、社会全体の環境が変動することによって、モンゴル族の人々の心理が次第に変化したので、モンゴル語を話したくないなどという複雑な心情が表れるようになってきた。さらにこのような言語環境の変化に伴って、ホーリンウリゲルという伝統芸能を維持する根本的要素が動揺し、ホールチの数が年々減少するなかで、ホールチたちの演唱時間が短縮され、説唱内容も変えなければ上演できないという状況が明らかになった。

とりわけ、インタビュー調査の結果および現地調査によって収集・入手できた内部資料と一次資料を使って、ホールチの数が激減している状況とホーリンウリゲルをもとにして形成された「モンゴル劇」の内容を取り上げたことは、これまでのホーリンウリゲル研究で空白となっていた部分を補充したと考えられる。

## 第六章 ホーリンウリゲルの現状と変容

グローバル化が全面的に展開された 21 世紀に入った後、中国の各地で現代の情報媒介および現代の科学技術の発展が著しくなり、モンゴル族の伝統文化も次第に主流文化と融合し、各モンゴル族地区の文化的差異は縮小された。しかし、遊牧民族文化の代表とも言われるホーリンウリゲル芸術は、モンゴル民族の特有の言語やイデオロギーなどの作用によって、主流文化と融合する時に微妙な矛盾が生じ、次第に衰退化している状況を説唱文化の担い手であるホールチたちが発覚し始めた。ちょうどホーリンウリゲルを含む多種多様な伝統文化を保護・継承・維持しようとする意識が高まってきた所であった。

ホールチたちが、ホーリンウリゲルの衰退している問題に憂慮していたときに、中国政府は国際情勢を慎重に洞察して、国内にいる各民族の伝統文化を守る「非物質文化遺産」の制度を導入して、各民族が古代から代々継承してきた宗教信仰・民族心理・生活習俗・思考方法などのものを「非物質文化遺産項目」として認定し、国家の力量を十分に発揮して、中華文化の多様性を保全するようになった。それゆえに、この「非物質文化遺産」の政策によって、モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルは、初期の収集・整理・審査の段階を経て、2006 年に国家級非物質文化遺産項目に認定された。

しかしながら、中国の「非物質文化遺産」という制度は、新たな文化政策として導入されて、まだ完備されていない箇所もある。そして、ホーリンウリゲルという伝統芸能には、モンゴル民族の特有の文学作品・伝統音楽・民間小説・モンゴル民謡などの様々な要素が混在しているので、ホーリンウリゲルの保護と継承の事業は少し混乱しているように感じられ、最も継承し難い芸術であると認識している若者が次第に増加しているようである。

そこで本章では、中国の「非物質文化遺産」に関わる法律法規およびそれらの法律法規に定めている伝承人の義務と権利に関する内容を整理・分析し、モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルが国家級非物質文化遺産名録に認定されて後の変化した状況と、ホーリンウリゲルの継承や保護を妨げている原因を探り出して、迅速に発展する 21 世紀のグローバル社会でも、古代から継承してきたホーリンウリゲル芸術を継承する方法

を提案したい。

## 第一節 中国における非物質文化遺産制度の確立

2001年に、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）は、「文化の多様性に関するユネスコ世界宣言」を公表した後、さらに2年後の2003年に「無形文化遺産保護条約」という法律を公表した。それゆえ、中国政府は、このような国際情勢にしたがって、2003年から「中華民族民間文化保護プロジェクト」を稼働させ、国内に生活している56民族を対象にして、100年以上の歴史を持つ民間の民族文化の整理・調査・記録等の仕事を緊急に行うようになった。

### 一 非物質文化遺産

国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の公布した「無形文化遺産保護条約」の条文によると、無形文化遺産、即ち非物質文化遺産とは「(伝承者・保持者・実践者たる)コミュニティが自分たちの文化遺産の一部として認める「習慣・描写・表現・知識・技術」をいう。また、これらに関連付けられた「器具、物品、加工品、文化的空間」をいう」と定義され、さらには、「無形文化遺産の性質は、世代から世代へと伝承される、コミュニティによって環境や歴史に即して常に更新される、コミュニティにアイデンティティや継続の意識を与える、文化の多様性や人類の創造性に対する尊重を促進する4点であり、主に口承の伝統や表現、芸能、社会的慣習・儀礼・祭礼行事、自然や万物についての知識と慣習、伝統工芸技術」などの分野に表れると、七海ゆみ子氏の書いた『無形文化遺産とは何か』<sup>406</sup>という専門的な著作で解説している。

一方、中国では、文化遺産を物質文化遺産と非物質文化遺産の二種類に分け、文化遺産と自然遺産は有形的、物質的であるのに対して、無形の文化財は非物質文化遺産と称され、さらに中国は、国際条約の概念に照らして、非物質文化遺産は、「各民族が代々に伝承し、一般庶民の生活と密接に関わる各種伝統文化の表現形式（伝統知識と技能、民俗活動、演技芸術及びそれと関連する器具、実物、手作業製品など）と文化空間のことであり、それは口承伝統・文化キャリアとしての言語、伝統演技芸術、民俗活動・儀

---

<sup>406</sup> 七海ゆみ子『無形文化遺産とは何か』（日本語版）、彩流社、2012年、60-62頁。

礼・節句、自然界と宇宙に関する民間伝統知識と実践、伝統工芸技能、及び以上の表現形式と関わる文化空間が含まれている」<sup>407</sup>と定義している。

上述の二つの定義を比べると、中国政府は、国際連合教育科学文化機関から公布された「無形文化遺産」に関する規定をそのまま受け取らず、国内の各民族が持つ文化遺産の種類および性質を十分に考慮した上で、国際連合教育科学文化機関が公布した「無形文化遺産」に関する法律法規を参考にして、自国の文化遺産を認定する仕事を開始したことが確認できる。そして、国際連合教育科学文化機関が公布した「無形文化遺産」という法律は、中国に導入された後に本土化されて、もともとの「無形文化遺産」から「非物質文化遺産」に変えられて実施した差異がはっきり見られる。

## 二 非物質文化遺産法

中国政府は、2003年から「中華民族民間文化保護プロジェクト」を稼働させた後、2005年7月から2006年4月にかけて、全国31の省、自治区、直轄市そして香港、マカオ（澳門）を対象に、中華人民共和国「第一批国家級非物質文化遺産リスト」の選定を実行し始め、その結果、上述した全国31の省、自治区、直轄市そして香港、マカオ（澳門）から合計1300件以上の申請が殺到した。それゆえに、中国・国務院の人力と財力を集めて1300件の申請項目に厳密な審査を行った結果、その中の518件が絶滅危機に瀕しているという理由で、率先して、2006年5月20日に「第一批国家級非物質文化遺産」項目（名録）として公布された。

しかし、このような国家と国民に有力の文化政策が施行された後、ある「国家伝承人」の申請資料を偽造したという問題が発覚したので、2011年2月5日に「中華人民共和国・非物質文化遺産法」（以下「非物質文化遺産法」と記す）を公布し、同年6月1日から正式に施行することを決定した。

この法律（非物質文化遺産法）は、中国の文化事業の発展や国民の文化生活にとって重要な意味を有するのみならず、国家的文化政策の制定ならびに展開、さらには文化的ソフトパワーや国際的影響力の強化、国民の文化的アイデンティティの向上等に関して

---

<sup>407</sup> 王文章主編『非物質文化遺産概論』（漢語版）、教育科学出版社、2013年、44-46頁。



も重要であった。それゆえに、この「非物質文化遺産法」の施行によって、中国における非物質文化遺産の保護事業は、それ以降、「依法行政」「有法可依」という新たなフェーズに進むことが実現できた。

中華人民共和国・非物質文化遺産法<sup>408</sup>は、「総則」「非物質文化遺産の調査」「非物質文化遺産の代表的な項目リスト」「非物質文化遺産の伝承と伝播」「法律責任」「附則」の54条から構成され、それ以降、中国の非物質文化遺産制度は、これらの条文の具体化によって推進されていくことになった。そして、本法律の具体的な内容を熟読すると、すべての「国家級非物質文化遺産項目」と「国家伝承人が履行する義務および持つ権利」については、やや細かく規定されていることが確認できるので、以下に「非物質文化遺産法」の具体的な内容を見て行きたい。

最初の「総則」において、この法律を制定した趣旨および規制対象について解説し、第1条では、「中華民族の優秀な伝統文化を継承・発揚し、社会主義の精神文明を促進させ、非物質文化遺産の保護と保存する事業を強化するため、本法律を制定した」と謳われている。この趣旨および規制対象の内容によると、「非物質文化遺産法」は、各民族が有している文化遺産の保護を通して、中華民族の優秀な伝統文化を継承・発揚することを目的としていることになる。

第2条には、「本法で称する非物質文化遺産法は、各民族が代々、伝承してきた伝統文化及び表現形式に関連する資料・実物・場所をいう」と記載されているので、その具体的な内容を以下に示す。

1. 伝統的な口承文学およびその手段としての言語
2. 伝統的な美術・書道・音楽・舞踊・演劇・芸能および雑技
3. 伝統的な工芸技術・医学および暦法
4. 伝統的な儀礼・祭日・祭りなどの習慣
5. 伝統的なスポーツと遊芸・遊び

---

<sup>408</sup> 中国非物質文化遺産網・中国非物質文化遺産数字博物館のホームページで全国人民代表大会常務委員会から2011年に編纂した「中国非物質文化遺産法」(漢語版)の全文が記載されている。IPアドレスは「[http://www.ihchina.cn/tool\\_book\\_detail/19342.html](http://www.ihchina.cn/tool_book_detail/19342.html)」となる。

## 6. その他の非物質文化遺産

上述した定義および1から5までの具体的な項目によると、これらの項目は、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の「無形文化遺産の保護に関する条約」の内容をもとにし、中国国内の現状に合わせて定義および制定したものであり、モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルは、上述した2に属するものであり、その中の「芸能類」の一種となっている。

とりわけ、現在（第一批から第五批）まで「中国非物質文化遺産」に関する認定や保護の実践によると、上記の2に指摘されているように、「芸能類および芸術類」に関する認定項目が多数を占めており、「宗教・儀礼・信仰」に関する認定項目は極めて少数であり、非常に慎重な態度で行われている現象が見られる。

また、ホーリンウリゲルの語り手であるホールチがウリゲルを説唱する際に使っている伴奏楽器、即ち第2条で指摘している「伝統文化の表現形式に関わる実物と場所」の内容から見ると、伴奏楽器のドリボンウタストホールもその「実物」に属し、国家に保護される範疇に含まれているという意味を持つようである。

しかしながら、1982年11月19日から施行した「中華人民共和国・文物保護法」の規定によると、ホールチたちが使っている伴奏楽器「低音のドリボンウタストホール」（低音四胡）は、「文物」の範疇にも包括されているので、非物質文化遺産法に規定されている「実物」や「場所」が「文物保護法」で指摘する「文物」と重複している問題が確認できるので、今後の立法を通して改善する必要があることが検討される必要があるかもしれない。

以上のように、中国の非物質文化遺産法は、新しい「文化政策」としてまだ不安定な要素が懸念されるが、はっきり言えるのは、この「非物質文化遺産法」の施行によって、2006年に「第一批国家級非物質文化遺産項目」を申請する際に、国家伝承人の資料を偽造した組織と当事者が逮捕され、以前に認定した「国家伝承人」の資格を削除した事件があったので、それから申請した第二批・第三批・第四批そして現在の第五批まで、申請する項目および伝承人の資料の偽造は再発しなかった。

また、国家級・省級・市級・県級伝承人の増加によって、各級の伝承人の中でも自分

の義務をしっかりと履行しない人が存在している現象が懸念されるため、各地方の人民代表たちは、非物質文化遺産を管理する関連の文化部門に呼び掛けて、「国家級非物質文化遺産代表性传承人認定与管理条例」という法律法規を打ち出し、全国の各地に分散されている各級の传承人を管理することが提案された。

### 三 国家传承人の権利と義務

2019年11月12日に、中華人民共和国・文化和旅游部門によって、「国家級非物質文化遺産代表性传承人認定与管理条例」という公文書を公布し、2020年3月1日から全国の各地方部の文化部門に配布し、同時に施行することが決まった。この法律<sup>409</sup>は、第1条から第26条までの具体的な内容から構成され、第26条には、「本条例の施行によって、もともと中華人民共和国文化部は、2008年5月14日に公布した「国家級非物質文化遺産項目代表性传承人認定与管理暫定条例」という公文書」を廃止することを決定した。

また、この条例の第1条では、「中華民族の優秀な伝統文化を継承・宣伝し、非物質文化遺産を有効的に保護・伝承し、国家級非物質文化遺産代表性传承人による多面的な活動を支持し、さらには「中華人民共和国非物質文化遺産法」による関連の法律や条文を参考にした上で、本条例を制定した」と謳われている。そして、この「管理条例」に指摘されている趣旨によると、国家の文化部門は国家传承人の益々の活躍を期待し、この条例は、2011年に公布された「中華人民共和国・非物質文化遺産法」の姉妹編として重要な位置を占めることが強調されている。

国家級非物質文化遺産代表性传承人の伝承活動を保護するために制定された国家の法律として最も注目すべき点は、第17条と第18条の内容である。第17条では、「国家の文化および旅行部門は、各地域の現状によって以下の措置を採用して、国家級非物質文化遺産代表性传承人の伝承・伝播活動を支持する」と記載しているので、以下にその具体的な内容を示す。

---

<sup>409</sup> 中国非物質文化遺産網・中国非物質文化遺産数字博物館のホームページで中国文化和旅游部門から2020年に打ち出した「国家級非物質文化遺産代表性传承人認定及其管理条例」(漢語版)の全文が記載されている。IPアドレスは「[http://www.ihchina.cn/zhengce\\_details/19498](http://www.ihchina.cn/zhengce_details/19498)」となる。

1. 必要な伝承場所を提供する
2. 必要な経費を提供し、伝承人の弟子入れ・伝承活動・交流活動を支持する
3. 国家伝承人を指導・支持することを通して、非物質文化遺産の記録・整理・データベース化・研究・出版・展示展覧・演出活動を展開する
4. 研究会・学習会に参加することを支持する
5. 社会的な公益活動に参加することを支持する
6. 継承・伝播に関する活動および措置を取ることを支持する

経済的な収入が少なく、生活上貧しい国家伝承級非物質文化遺産代表性伝承人に対して、当該地区に設置された文化および旅行部門は、他の文化部門からの協力を得ながら積極的に条件を作り上げ、社会組織と個人資金を提供することによって、伝承人の生活を保障するとした。

また、第18条には、「国家級非物質文化遺産代表性伝承人は、以下の義務を担う必要がある」と書かれているので、以下にその具体的な内容を示す。

1. 継承活動を展開し、後継する人材を育成する
2. 非物質文化遺産に関連する実物・資料を保管・保存する
3. 文化と旅行の主管部門および他の部門からの仕事を協力して、非物質文化遺産に関する調査を行う
4. 非物質文化遺産の公益活動に参加する

上述した第17条および第18条の内容によると、この条例では、国家級非物質文化遺産代表性伝承人の持つ権利と履行する義務が細かく制定されているので、国家伝承人が継承活動を行う際に専用の資金を提供してくれるという保障があったようでありながら、上述した「非物質文化遺産法」と重複している点があり、それは即ち第18条の第2項目「非物質文化遺産に関連する実物・資料を保管・管理する」にあたる。

上述した「非物質文化遺産」では、国家伝承人の申請資料を偽造したという現象が発覚したことを既に紹介したように、今回の「国家級非物質文化遺産代表性伝承人認定与

管理条例」において、そのような問題が一切再発しないため、第21条では、「文化和旅行部は、これらの非物質文化遺産に関連する部門と連携して、国家級非物質文化遺産の保護や継承に大きく貢献した伝承人に表彰・奨励する」と謳われている。こうした条文以外に、最も注目すべき点として第22条の内容が挙げられるため、以下にその具体的な内容を示す。

第22条では、次に掲げるいずれかの事由のひとつがあった場合、省級文化および旅行主管部門が確認した後、文化および旅行部門が「国家級非物質文化遺産代表性伝承人資格」を取り消し、公布するとする。

1. 中華人民共和国国籍を喪失したとき
2. 虚偽を弄して不当の手段で資格を取得したとき
3. 正当な理由がなく義務を履行しないで、累計2回評価に不合格したとき
4. 法律法規や社会道徳を違反し、重大な悪影響を及ぼすとき
5. 自由意志で諦め、あるいは、その他の理由で国家級非物質文化遺産代表性伝承人の資格を取り消さなければならないとき

上述の第22条によると、2020年3月から国家の文化および旅行部門は、新しく制定した「国家級非物質文化遺産代表性伝承人認定与管理条例」に規定されている条文によって、国家級非物質文化遺産代表性伝承人が「自由意志で退出」、あるいは、「伝承人としての義務を履行しない場合に国家の文化および旅行部門から伝承人の資格を削除する」という、より慎重な審査制度を実施することを決定したことが確認できる。

以上のように、2020年から施行された「国家級非物質文化遺産代表性伝承人認定与管理条例」には、中国非物質文化遺産項目の国家伝承人として、必ず履行する必要がある義務および伝承人として持つ様々な権利をはっきり区分した。この法律が施行されたことによって、中国の非物質文化遺産に関する法律法規が完備されるようになった一方、国家伝承人として実行しなければならない任務がすべて明確化された。国家伝承人は法律法規に規定されている条文に従って、ホーリンウリゲルの保護や継承の活動が実行できるほか、地方部の文化部門に不当な事件があれば、国家伝承人も国から与えられた権

利を使って、自ら責任を持つ非物質文化遺産項目を維持することができるようになった。

## 第二節 非物質文化遺産としてのホーリンウリゲル芸術

現在、モンゴル民族を代表する伝統芸能ホーリンウリゲルは、中国の「第一批国家級非物質文化遺産」の項目に認定されることによって、もともとの民間芸能から国家から重要視される伝統文化の一員になった。そのことに限らず、旧社会で「ホールを学習するより別人の物を盗む泥棒になった方が良い」と嘲られていたホールチも、伝統文化の「国家伝承人」として承認されたので、社会的な地位も非常に高まった。

しかし、冷静な態度でホーリンウリゲルの現状を考慮すると、全国各地から国務院に殺到した 1300 件の中から「第一批国家級非物質文化遺産」に認定されたことは、モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルが国家の文化部門に重要視されるようになったことが確信される一方、ホーリンウリゲルという伝統芸能自体は時代の変遷およびホールチと視聴者の減少によって、衰退化されているスピードが著しくなり、次第に絶滅危機に瀕してきたという事実が強調されていることも分かる。以下、ホーリンウリゲルの現状について紹介したい。

### 一 ホーリンウリゲルの認定と国家伝承人の実態

2005年、内モンゴル自治区のジャルート（扎鲁特）旗とホルチン右翼中旗、吉林省の前ゴルロス（郭尔羅斯）モンゴル族自治県、遼寧省の阜新モンゴル族自治県は、共同で「モンゴル族ウリゲル」（蒙古族烏力格尔）という項目名を使って、中華人民共和国「第一批国家級非物質文化遺産」の項目に申請した。

しばらくしてから、2006年5月20日、中国本土で初めての「国家級非物質文化遺産リスト」（276-V40番）が公布されたが、幸運なことには、モンゴル民族の伝統芸能を代表する「ホーリンウリゲル」は国務院の慎重な審査を通過して、「第一批国家級非物質文化遺産」として公布され、同時に「国家級非物質文化遺産名録」に収録され、その項目の代表性の「国家伝承人リスト」も発表されたので、以下にその具体的な内容を示す。

### 国家級非物質文化遺産・蒙古族烏力格尔項目一覽表

順番	公布時間	類型	申請地区と推薦組織	保護組織の具体的な名称
1	第一批	新增	内蒙古扎魯特旗	扎魯特旗文化館
2	第一批	新增	内蒙古科尔沁右翼中旗	科尔沁右翼中旗文化館
3	第一批	新增	遼寧阜新蒙古族自治县	文化体育旅行服務中心
4	第一批	新增	吉林前郭爾羅斯蒙古族自治县	自治县草原文化館
5	第二批	擴展	内蒙古通遼市	通遼市文学芸術研究所

上述の「国家級非物質文化遺産・蒙古族烏力格尔項目一覽表」の内容から見ると、本論文の研究対象であるホーリンウリゲル芸術は、2006年に「第一批国家級非物質文化遺産項目」（内蒙古扎魯特旗・内蒙古科尔沁右翼中旗・遼寧阜新蒙古族自治县・吉林前郭爾羅斯蒙古族自治县）として交付された後、2008年に「第二批国家級非物質文化遺産項目」を公布する際に、内蒙古通遼市文学芸術研究所から申請・推薦した「モンゴル族ウリゲル」の項目も、拡大項目として追加された事実が確認できる。

また、中国「国家級非物質文化遺産」の項目の公布については、上述の2006年に「第一批国家級非物質文化遺産リスト」、2008年に「第二批国家級非物質文化遺産リスト」が公布されたほか、その後の2011年に「第三批国家級非物質文化遺産リスト」が公布され、2014年と2017年には、それぞれ「第四批国家級非物質文化遺産リスト」と「第五批国家級非物質文化遺産リスト」が公布された。

とりわけ、注目すべき点としては、国家級非物質文化遺産リストと同時に公布された「国家伝承人」の名簿のことが挙げられる。なぜかと言うと、実はホーリンウリゲルという伝統芸能は、国家級非物質文化遺産として公布されたとしても、この芸能のことを大切にしながら次世代に人々に教え、継承させることを実践する者が「ホールチ」なので、国家級非物質文化遺産という名称より、実際にはこの芸能を継承・実演している「ホールチ」たちのことが最も重要ではないかと考えるからである。

それゆえに、本章では、各申請地域および推薦組織を代表する「国家級非物質文化遺産項目代表性伝承人」の名簿を整理した上で、現役の国家伝承人、即ちホーリンウリゲルの担い手である「ホールチ」たちの性別状況・民族成分・年齢構造・分布地域を分析

して、ホーリンウリゲルという伝統芸能の将来性について考えて行きたい。

蒙古族烏力格尔代表性国家传承人一覧表

順 番	姓 名	性 別	民 族	生年月日	所在地
1	勞斯尔	男	モンゴル族	1946-12	内蒙古扎魯特旗
2	代沃德	男	モンゴル族	1950-3	内蒙古科尔沁右翼中旗
3	甘珠尔	男	モンゴル族	1950-10-28	内蒙古科尔沁右翼中旗
4	韓英福	男	モンゴル族	1963-4-27	遼寧阜新蒙古族自治县
5	楊鉄龍	男	モンゴル族	1965-4-19	遼寧阜新蒙古族自治县
6	包朝格柱	男	モンゴル族	1969-10-5	吉林前郭爾羅斯蒙古族自治县
7	白扎力増	男	モンゴル族	不明	内蒙古通遼市

上述の「蒙古族烏力格尔代表性国家传承人一覧表」は、中国非物質文化遺産網・中国非物質文化遺産数字博物館のホームページで記載されている「国家传承人」の資料を参考に作成した表である。そして、この一覧表の「性別」と「民族」の欄を見ると、現役の国家传承人は全員「男性」であり、民族もすべて「モンゴル族」であることが確認できる。続けて「生年月日」の欄を見ると、現役の「国家传承人」の中で内蒙古扎魯特旗の传承人である「1番」の「勞ス尔・ホールチ」の年齢は、最も上である情報が把握できるほか、吉林省前郭爾羅斯蒙古族自治县の国家传承人である「6番」の「包朝格柱・ホールチ」が最も若いことが分かる。

しかしながら、筆者は第1回<sup>410</sup>のインタビュー調査を実施する際に、「包朝格柱・ホールチは、自分は「1956年1月1日」（旧暦）に生まれたが、職場が前郭爾羅斯蒙古族自治县に移ってきた関係で「1969年10月5日」に生まれたと変更したので、その時から身分証明書や仕事上の資料でも「1969年10月5日」に生まれたと記録するようになった」と真実の情報を教えてくれた。それゆえに、このような記述によると、実際に最も若い国家传承人は、遼寧省阜新蒙古族自治县の传承人である「5番」の「楊鉄龍・ホールチ」

<sup>410</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・ホールチ2番」を参照されたい。



という事実が確認できる。

また、一覧表の「所在地」という欄の内容を見ると、内蒙古自治区の扎魯特（ジャールト）旗、科尔沁右翼中（ホルチンウヨクチュウ）旗、通遼（トンリョウ）市に4人の国家伝承人が入り、遼寧省の阜新蒙古（モンゴル）族自治県に2名、吉林前郭爾羅斯（ゴルロス）蒙古（モンゴル）族自治県に1名となっている分布状況が把握できる。しかしながら、残念なことには、中国非物質文化遺産網・中国非物質文化遺産数字博物館のホームページで記載されている「国家伝承人」の資料は不足しているため、第二批国家級伝承人として発表された通遼市の代表である「白扎力増・ホールチ」の生年月日を把握することができなかつたほか、ジャールト旗の「勞斯尔・ホールチ」と科尔沁右翼中（ホルチンウヨクチュウ）旗の「代沃徳・ホールチ」が実際に生まれた「日」と「甘珠尔・ホールチ」が実際に生まれた「月日」が確認できなかつた。

しかし、筆者が第3回のインタビュー調査を実施するときに、調査協力者2番<sup>411</sup>はジャールト旗の「勞斯尔・ホールチ」が、2010年に逝去したという情報が得られたので、現在のジャールト旗には「ホーリンウリゲルの国家伝承人」がいない現状が確認できる。また、上述した「甘珠尔・ホールチ」が実際に生まれた「月日」については、郷土資料である『蒙古族説書芸人口述史』という専門的な著作において、「ホルチンウヨクチュウ旗の伝承人である「甘珠尔・ホールチ」は、10月28日に生まれた」と記述されているので、上記の一覧表を作成する時に、甘珠尔・ホールチの生年月日に関する情報はすべて補充できた。

以上のように、モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルは、2006年に「国家級非物質文化遺産」の項目に認定されたことによって、語り手のホールチたちも「国家伝承人」に命名されて、グローバル社会でも継承させる環境が得られた。しかし、国家伝承人の一覧表から見ると、現役の国家伝承人たちは普遍的に高齢化している傾向がはっきり見られるようになってきた。したがって、何百年も使用されてきた伝統的な「師伝継承の方法」を大切に、早く若き後継者を育成して、グローバル時代に適合する継承方法を探り出すことを最優先する必要があると考えている。

---

<sup>411</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第三節・第3回の調査内容・協力者2番」を参照されたい。

## 二 伝統的な「師伝継承の方法」の変容状況

モンゴル民族には、「ホーリンウリゲル」以外に、前述したモンゴル英雄叙事詩、マングスインウリゲル、ヤバガンウリゲル、ベンスンウリゲルなど多種多様な説唱芸術を持ち、主に師匠は自分の知っている知識と技法を「口頭」で弟子に教えるという「師匠継承方法」で継承されてきた。しかし、近年の現代的な情報媒介が迅速に発展することによって、規模が異なる様々なインターネットメディアおよびライブ配信できるソフトウェアが開発され、多数のソフトウェアは必ず漢語で配信するという規定があるので、漢語の使用率が次第に上がってきている<sup>412</sup>。

それゆえに、このような社会環境のともで、ホーリンウリゲルという伝統芸能は、内部のモンゴル語で消失する問題および外部の現代的な情報媒介からの衝撃を受けて、師匠であるホールチの数が激減していることに限らず、ホーリンウリゲルの視聴者も著しく減っているので、現在は昔のように、ある有名なホールチに拝師して、口頭で教えてもらうという人は稀となってきた<sup>413</sup>。そして、あるホールチに拝師して、口頭で教えてもらう人がいるとしても、その人たちのモンゴル語力が不足しているので、師匠が教えている内容および説唱している内容を十分に理解できていない現状がある。

例えば、第1回の調査協力者5番<sup>414</sup>は、「彼のもとでホーリンウリゲルを学んでいる弟子は5人いるが、この弟子たちは師匠の語るウリゲルの意味を十分に理解できていないので、師匠とした協力者5番は、自分がまず一段落を語ってから弟子たちが師匠を真似て繰り返して語っている。また、わずかに5人の弟子がいる中には、モンゴル文字が読めない弟子がいるので、師匠の書いた台詞の内容をまったく理解できずに、そのまま覚えてしまう弟子もいて、彼らは自分の語っているウリゲルの意味をすべて理解していない状態で語り続けている。このような悪状況が生じた原因としては、弟子たちのモンゴル語とモンゴル文字に関する知識が足りないことがある」と語ってくれた。

このような状況によると、ホーリンウリゲルを継承する現場では、確かに弟子のモン

---

<sup>412</sup> 蒙古貞夫「浅論胡仁烏力格尔传承方式演变」(漢語版)、文化創新比較研究、第四卷・第22期、2020年8月、149頁。

<sup>413</sup> 同上、蒙古貞夫「浅論胡仁烏力格尔传承方式演变」、150頁。

<sup>414</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・ホールチ5番」を参照されたい。

ゴル語の能力が足りないことの影響で、師匠が教えている内容が理解できていないなどという多種多様な問題が生じ、平常通りのホーリンウリゲルの継承を妨げている現状が確認できるほか、グローバル社会で様々な現代的な情報媒介およびソフトウェアが伝統的な継承方法の機能を切り替えたので、「師伝」の効果次第に衰退し、何百年の前からずっと大きな役割を果たしてきた伝統的な「師伝継承の方法」が未曾有の厳しい試練に直面するようになってきたと考える。その理由を以下のように述べる。

まず<sup>415</sup>、ホーリンウリゲルというモンゴル民族に特有の伝統的な説唱芸術は、モンゴル語とモンゴル文字を土台に形成されたので、仮にモンゴル語とモンゴル文字が消失したとすると、ホーリンウリゲルも自然に世の中から消えてなくなる。例えば、第1回の調査協力者2番<sup>416</sup>の話によると、「彼の弟子の中で最も年上の方は、今年60歳を越えており、最も若い人でも10歳以上になっている。しかし、年が60歳を越えている老人と未熟の子どもを問わず、モンゴル語の基礎が非常に弱いことは共通しているので、師匠としての協力者2番は、彼らにホーリンウリゲルの詞牌と曲牌を教えるときに、常にモンゴル語とモンゴル文字を教えるから低音のドリボンウタストホルの技法およびウリゲルの説唱方法を教えている」と語ってくれた。

次に<sup>417</sup>、本論文の研究の対象であるホーリンウリゲルは、モンゴル民族の民間芸術を代表する伝統芸能として、すでに民間で形成されてからモンゴル族の人々に伝わる説唱芸術のため、視聴者が減少する、あるいは、視聴者が聞いてホールチの語るウリゲルの意味が理解できない、ということになると、ホーリンウリゲルという伝統芸能も絶滅する危機に瀕してきたと認識しても言い過ぎることがない。例えば、第3回の調査協力者2番<sup>418</sup>は、「近年の東部モンゴル地区では、40歳以下の青年と壮年の中でンゴル語を話せる人が年々減少しているので、現在ホールチたちの語るウリゲルの意味をしっかりと理

---

<sup>415</sup> 蒙古貞夫「浅論胡仁烏力格尔传承方式演变」(汉语版)、『文化創新比較研究』第4巻第22期、2020年8月、150頁。

<sup>416</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・ホールチ2番」を参照されたい。

<sup>417</sup> 蒙古貞夫「浅論胡仁烏力格尔传承方式演变」(汉语版)、『文化創新比較研究』第4巻第22期、2020年8月、150頁。

<sup>418</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第三節・第3回の調査内容・協力者2番」を参照されたい。

解できる人は、ほとんど 40 歳以上および最も年上の老人になっている。また、携帯電話などの現代の情報媒介が普及しているため、お年寄り人でも日々の生活の中で現代的な情報媒介に最も親しめるようになってきたので、それでホールチの語るウリゲルを聴きたいと考えている人も現れている」と教えてくれた。

また、特別に解説する必要があることは、視聴者がモンゴル語で語るウリゲルの意味を理解しているかどうかという問題である。ホーリンウリゲルは民間で形成された芸術という事実があるが、芸術と認定できれば必ず普通の生活より高いことが考えられるので、ホールチがウリゲルを語るときに使っているモンゴル語も、日常会話で使用されているモンゴル語とはある程度の差があって、すべて生活化された言葉と表現方式ではなく、ホールチたちが芸術的に加工した後の言葉になることも考えられる。

最後に<sup>419</sup>、前述した内容でも少し触れたように、現代的な情報媒介およびソフトウェアがなかった時代、モンゴル族の人々が自民族および周辺地区に生活している兄弟民族の歴史や文化を知るときに、文字が読める人以外にはすべてホールチの語る多種多様なウリゲルを聞いて、その中から自分に有利な情報と知識を吸収していたので、ホーリンウリゲルという説唱芸術はモンゴル族の人々に愛されてきた伝統芸能であり、民衆たちにとって重要な娯楽活動でもあった。しかし、グローバル化が迅速に促進される現代社会では、モンゴル族の人々の娯楽生活が不断に多様化されているので、わざわざホールチの語るウリゲルを聞く人も自然に減少している傾向がある。

それゆえに、上述の内容を総合して言うと、現在のホーリンウリゲル芸術は、内部のモンゴル語が消失している問題と外部の現代的な情報媒介が迅速に発展するなど要素の影響で、伝統的な「師伝継承の方法」の本来の機能が上手く発揮できず、次第に衰退している傾向がある。あるモンゴル族の地域では伝統的な「師伝継承の方法」が形だけ残留していると言えるような状況になるので、これからどんな方法でホーリンウリゲルを保護・継承するのかということは、我々の速やかな改善・解決が望まれる問題であると考えている。

---

<sup>419</sup> 蒙古貞夫「浅論胡仁烏力格尔传承方式演变」(汉语版)、『文化創新比較研究』第 4 卷第 22 期、2020 年 8 月、150—151 頁。

### 三 新たな「学校継承の方法」の設立とその課題<sup>420</sup>

2014年10月15日に、習近平国家主席は「全国の文芸工作座談会」<sup>421</sup>において、「中華民族の優秀な文化を継承する、中国非物質文化遺産の保護と継承を強化する」という重要な講演において、「なぜ高度な文芸工作を重要視するのかと言うと、この問題を我が国の発展状況を世界大環境に置いて観察する必要があるからである。中華民族の復興を実現することは近代以来わが国民の最大の願望であり、現在の我々は歴史上のいかなる時期よりも中華民族の復興事業が実現できることに近づいているので、この目標を実現するため、必ず各民族の文芸工作を重視しなければならない」と語った。

そこで、遼寧省の阜新モンゴル族自治県では、習近平国家主席が全国の文芸工作に対する重要な講演を行ったことをもとに、「中華人民共和国非物質文化遺産法」(2011年)<sup>422</sup>、「遼寧省非物質文化遺産条例」(2014年)<sup>423</sup>を根拠にして、さらに、「阜新モンゴル族自治県のモンゴル語文工作条例」(1989年)<sup>424</sup>、「阜新モンゴル族自治県のモンゴル族教育条例」(2006年)<sup>425</sup>、「阜新モンゴル族自治県双語教育实施方案」(2016年)<sup>426</sup>の指示によって、2014年の春学期からホーリンウリゲルの国家伝承人・楊鉄龍を特任教師として沙拉モンゴル族学校に招聘し、「ホーリンウリゲルキャンパス継承クラス」(胡仁烏力格爾校園継承班)が設置された。

そこで、ホーリンウリゲルを沙拉モンゴル族学校に導入し、1科目として授業を実施

---

<sup>420</sup> 蒙古貞夫「浅論胡仁烏力格爾傳承方式演變」(漢語版)、『文化創新比較研究』第4卷第22期、2020年8月、149-151頁。

<sup>421</sup> 習近平「在文芸工作座談會上的講話」(漢語版)、新華社、2014年。

<sup>422</sup> 中国非物質文化遺産網・中国非物質文化遺産数字博物館のホームページで全国人民代表大會常務委員會から2011年に編纂した「中国非物質文化遺産法」(漢語版)の全文が記載されている。IPアドレスは「[http://www.ihchina.cn/tool\\_book\\_detail/19342.html](http://www.ihchina.cn/tool_book_detail/19342.html)」となる。

<sup>423</sup> 遼寧省人民代表大會常務委員會のホームページで2014年11月27日に遼寧省第12回人民代表大會常務委員會・第14回會議で通過した「遼寧省非物質文化遺産條例」(漢語版)の全文が記載されている。IPアドレスは「<http://www.lnrd.gov.cn/npcdata/show-37679.html>」となる。

<sup>424</sup> 阜新蒙古族自治縣蒙古語文工作條例委員會編纂「阜新蒙古族自治縣蒙古語文工作條例(内部資料)」(モンゴル語と漢語双語版)、1989年。

<sup>425</sup> 阜新蒙古族自治縣人民代表大會委員會編纂「阜新蒙古族自治縣蒙古族教育條例(内部資料)」(モンゴル語と漢語双語版)、2006年。

<sup>426</sup> 阜新蒙古族自治縣双語教育实施方案委員會編纂「阜新蒙古族自治縣双語教育实施方案(内部資料)」(モンゴル語と漢語双語版)、2016年。

している状況を把握するため、2019年8月26日から9月18日にかけて、第2回の現地調査を行った。「現在の沙拉モンゴル族学校では、主に小学校1年生から6年生を対象に、モンゴル語が話せる、モンゴル文字が読めるような優秀な児童を優先する、という制度で生徒を選んでいる。教員に関して言えば、楽器とウリゲルを教える教員は1人、モンゴル語・モンゴル文字を教える教員は2人であり、主に生徒の言語のレベルによって教育することとなっている」<sup>427</sup>という現状が把握できた。また、この「ホーリンウリゲルキャンパス継承クラス」（胡仁烏力格尔校園継承班）の担任先生（以下に「担任先生」と記す）、即ち第2回の調査協力者10番<sup>428</sup>から具体的な教育目標を聞いたので、以下の通りに示す。

まず、小学校・低学年の目標として、第一は、モンゴル語で伝統楽器ドリボンウタストホルの各部件の名称を呼べること。第二は、モンゴル語でドリボンウタストホルの構成をすぐ説明できること。例えば、ドリボンウタストホルは琴頭・琴棒・琴筒・琴弓の四つの部分で構成されるが、これ以外に四つの弦と弦を調整する四つの琴軸がある。琴軸の1軸と3軸は外軸であり、2軸と4軸は内軸である。また、琴棒の真ん中の「音喉」があり、その楽器の音調・音響を調整する。第三は、モンゴル語で略譜（数字譜）の順序と音階の呼び方を呼べること。第四は、モンゴル語でモンゴル族の伝統楽器を幾つか呼べること。第五は、ドリボンウタストホルの基礎演奏技法を把握すること。例えば、1弦と3弦は内弦、2弦と4弦は外弦、楽器をD調で設定する場合は、内弦は1、外弦は5、即ちD=1弦—5弦となる。

次に、小学校・中学年の目標として、第一は、自分で楽器を弾きながらモンゴル語でウリゲルを語ること。例えば、ウリゲルの曲目「皇帝上朝」を2分から4分間語る。第二は、モンゴル民族に特有の古代民謡・現代民謡・流行民謡を2曲から4曲歌えること。第三は、授業中にモンゴル語でドリボンウタストホルの部位名と指の部位が説明できること。例えば、D調の音調で1・2・3・4・5・6・7を演奏する際に、正しい置き場に置く

---

<sup>427</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者9番」を参照されたい。

<sup>428</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者10番」を参照されたい。

こと。

最後に、小学校・高学年の目標として、第一は、授業中にモンゴル語で略譜によく使う音符と休符が説明できること。第二は、モンゴル語で3曲から5曲のモンゴル民謡を歌えること。第三は、エンケテグスの創作した長編の歴史小説シリーズである『興唐五伝』の物語をモンゴル語で読み、モンゴル民謡の歌詞を朗読すること。第四は、ドリボンウタストホールを弾きながらモンゴル語で4分から10分間のウリゲルを語ること。

沙拉モンゴル族中学校の校長先生、第2回の調査協力者9番<sup>429</sup>の話によると、沙拉モンゴル族学校は、モンゴル族の教師とモンゴル族の生徒を主とするモンゴル族の学校であり、校内を普蒙クラスと純蒙のクラスに分けている。普蒙クラスというのは、表面的に理解すると普通のモンゴル族クラスであり、このクラスの児童・生徒は全員モンゴル族出身であるが、モンゴル語の授業は母語のモンゴル語で行う以外に、ほかの授業は完全に漢語で行う教育モデルである。純蒙クラスというのは、表面的に理解すると純粋なモンゴル族クラスであり、このクラスの生徒は全員モンゴル族出身で、普蒙クラスと異なる所は純蒙クラスの全ての授業は母語のモンゴル語で授業を行うことである。

2014年には、担任先生・第2回の協力者10番<sup>430</sup>を沙拉モンゴル族学校の特任教師として招聘し、ホーリンウリゲルを学校の1科目として授業を行うこととなり、現在沙拉モンゴル族学校の「ホーリンウリゲルを継承する芸術クラス」の主力は、「純蒙クラスと普蒙クラスのモンゴル族の児童である。漢族の児童・生徒はホーリンウリゲルに大変興味を持ち、漢族クラスから普蒙クラスにクラスを変えて、モンゴル語を学びながらホーリンウリゲルの技法を勉強している特例があった」ということであった。

上述した内容によると、新たな「学校継承の方法」は、思った通りに進められているようであるので、ホーリンウリゲルの継承難という問題は、非物質文化遺産項目を学校教育に導入することによって、現存の問題を解決して、若き人々に継承させることが可能となったと言えよう。

---

<sup>429</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者9番」を参照されたい。

<sup>430</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者10番」を参照されたい。

しかしながら、国家級非物質文化遺産項目を学校教育に導入して、在学の児童・生徒に伝統芸能を継承してもらおう「学校継承」という最新の方法と試みでは、やはり多くの問題が生じている。そのことについては、沙拉モンゴル族中学校の民族教育係主任、第2回の調査協力者11番<sup>431</sup>に対する調査結果から多少知られるので、以下のように示したい。

阜新モンゴル族自治州・沙拉モンゴル族中学校は、2014年の時点で国家級非物質文化遺産ホーリンウリゲルの国家伝承人、遼寧省人民政府から優秀な民間芸術家という称号を受けた10番の担任先生を沙拉モンゴル族学校の特任教師として招聘し、ホーリンウリゲルを生徒に教えることを通して、ホーリンウリゲルを継承させる新しい継承方式として探索することが決まり、そのときから計算すると現在まで5年以上になった。

この5年間の歳月にいろいろなことが生じた。まず、担任先生を特任教師としてホーリンウリゲルという芸能・芸術を生徒に教えてもらう予定だった。しかし、ホーリンウリゲルを語る際に使っているモンゴル語は生徒が日常生活で話すモンゴル語ではなく、生活用語より深い書きことばであるため、生徒たちは自分の語っているウリゲルの意味が理解できない。このような状況下で、担任先生は音楽教師とモンゴル語教師と両方の職を務め、両方の仕事をしていた。

また、ホーリンウリゲルを語るときには、必ずドリボンウタストホールという楽器を使うことが常識となっている。そこで、ホーリンウリゲルを勉強するには、まず、ドリボンウタストホールの弾き方を勉強して楽器が上手く使用できるようになり、次に、ホーリンウリゲルの曲牌と詞牌を学ぶという順番になる。

しかし、担任先生は生徒にホール（楽器）の各構成と各部位の名称を教える際に、生徒たちは深いモンゴル語の意味が理解できず、構成図と各部位のモンゴル語の名称を新しいモンゴル語の語彙として勉強した。このような状況を解決するため、私と担任先生は、生徒にドリボンウタストホールの弾き方とホーリンウリゲルの語り方を教えるより、まず、モンゴル語の知識を強化することから始めた。

この5年間、生徒にホーリンウリゲル専用のモンゴル語を教えることを通して、私た

---

<sup>431</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者11番」を参照されたい。



ちは様々な大変なことに接し、経験も積んできた。そして、生徒たちのモンゴル語と琴技が次第に上達する様子を見て、感動した。例えば、去年の学園祭でドリボンウタストホールを弾きながらホーリンウリゲルの1段落を生徒に披露させたが、そのときに来場してくださった来賓とほかのモンゴル族学校の教師たちは全員、生徒の琴技に驚いていた」と述べた。

上述した調査の結果によると、沙拉モンゴル族学校に導入されたホーリンウリゲルは、モンゴル族の児童や生徒がモンゴル語とモンゴル文字のレベルが上達していない問題があり、導入された初期には様々な問題が生じ、相当苦労したことが分かる。しかし、5年の時間を1日として、毎日たゆまなく努力してきたため、ホーリンウリゲルの新しい継承方式である「学校継承」を妨げているモンゴル語とモンゴル文字の問題は次第に良くなってきた。

また、国家級非物質文化遺産のホーリンウリゲルを正式に学校教育に導入して、「ホーリンウリゲルキャンパス継承クラス」（胡仁烏力格尔校園継承班）まで設置した地域は、遼寧省以外のモンゴル族の人々が集住している内モンゴル自治区、新疆ウイグル自治区、吉林省、黒龍江省、青海省、甘肅省などのモンゴル地区では、まだ実施されていないのが現状である。そこで、現時点では、沙拉モンゴル族学校でホーリンウリゲルを導入し、さらにはモンゴル族の児童と生徒に教えることを通して、伝統文化を継承させるという試みは、初めての事例として成功したと言えよう。

### 第三節 ホーリンウリゲルを持続的に発展させるための提言

現在のホーリンウリゲルは、現代的な情報媒介が迅速に発展するなど様々な要素の影響を受けて、ホールチと視聴者が同時に減少して、次第に絶滅危機に瀕しているようである。しかしながら、モンゴル民族の伝統芸能を代表する文化として、無数の人々に愛されてきたので、モンゴル族の人々の心の中で一定の位置を占めていることを信じている。

それゆえに、上述した「非物質文化遺産法」および「国家級非物質文化遺産代表性传承人認定与管理条例」などの法律法規をもとにして、現役の国家传承人および国家传承人の下でホーリンウリゲルを学んでいる弟子や児童・生徒を保護して、さらには現有の

ホーリンウリゲルに関する実物・資料・場所などものをきちんと保護すれば、何年後に昔のようなホールチたちが、低音のドリボンウタストホールを背負って、全国のあちこちに行って、ホーリンウリゲルを上演する情景が再現されると考える。

しかし、周知のように、ホーリンウリゲルの継承を妨げている最も重要な原因は、この芸能を支えているモンゴル語が次第に消失している問題なので、言語や文字に関する問題が解決しなければ、ホーリンウリゲルの継承問題もなかなか解決されないと考えるので、現在から伝統的な「師伝継承の方法」を維持した上で、新たな「学校継承の方法」を改善して、若き後継者を育成することおよび適切な教材を開発しながらホールチの説唱する脚本をデータベース化することが最重要な任務だと考えるので、以下にこの3点について述べて行きたい。

## 一 後継者育成の重要性

前述した内容を振り返ると、ホーリンウリゲルの主要な地域と言われてきた東部モンゴル地区、即ち内モンゴル自治区・遼寧省・吉林省・黒龍江省には、死亡や病死など様々な原因によって、長編の英雄叙事詩と歴史小説を語るホールチの数が年々減少し、現役の国家伝承人と民間のホールチでも、高齢化や病弱などの要因で上演する機会や時間が激減しているので、ホーリンウリゲルという伝統芸能を継承する後継者が欠乏していることが分かる。

特に、現在の若き青年や壮年たちは、携帯ゲームおよびライブ配信などの現代的な情報媒介に惑溺し、ホールチとして生計を維持していく人が減少していて、たとえホーリンウリゲルという説唱芸術を学ぶ学習者がいたとしても、彼らの演奏技法や説唱能力が不足し、出演する際の待遇や報酬が少ないなどという多種多様な要因があり、中途半端なホーリンウリゲルの児童・生徒が多数を占めているので、しばらく跡が続かない状態で、端境期にあるというのが現状である。

それゆえに、このような問題に直面しているホーリンウリゲル芸術に対して、その言語の問題を解説するより、どのような方法を使って子どもに興味を持たせて、この芸能を次世代に継承させるのかということを慎重に考慮しなければならない歴史的な転換期になってきたと考えるので、以下に、筆者が現地調査によって収集できた現地に関す

る状況を紹介した上で、各地域の状況に応じて私見を述べたい。

第一に、第1回の調査協力者1番<sup>432</sup>の話によると、「近年の内モンゴル自治区・ジャールト旗では、ホーリンウリゲルという伝統芸能に関係がある現象が二種あるが、ひとつ目は、低音のドリボンウタストホールを使って、モンゴル民謡民歌およびホルボーを語る人が増えているが、長編の英雄叙事詩や歴史小説を語るホールチが減少している状況である。もう一つは、低音のドリボンウタストホールより、独奏の演奏家になりたいので、高音のドリボンウタストホールを学んでいる人が次第に増加している傾向にある」という状況が確認できた。

第二に、第1回の調査協力者4番<sup>433</sup>は、「モンゴルジン旗（遼寧省の阜新モンゴル族自治県を指す）は、ホーリンウリゲルという伝統芸能が成立した地域として公認されている。しかし、最も早い時期から漢人の農民が移住してきたなどの影響を受け、モンゴル族の子どもがモンゴル語を話さないという状況が日々に続いているので、ホーリンウリゲルの継承は大きな社会問題と教育問題としても注目されている。2014年に「遼寧省非物質文化遺産条例」が通過したことによって、国家級非物質文化遺産のホーリンウリゲルを沙拉モンゴル族学校で導入して、一つの科目として授業を実施し、児童・生徒に継承してもらおうという政策が実行されるようになったので、現在は順調に進められているが、児童・生徒たちが日常会話で使っているモンゴル語より何倍も難しい書き言葉を勉強するときに非常に苦労しているようであるので、まずホーリンウリゲルの詞牌が全面的に理解できた上で、ホーリンウリゲルの説唱方法を教えている」という状況を教えてくれたので、遼寧省の状況も困難にあることが分かる。

第三に、第3回の調査協力者3番<sup>434</sup>は、「ホーリンウリゲルという伝統芸能は、国家級非物質文化遺産項目に認定される前、吉林省の前ゴルロス（郭爾羅斯）モンゴル族自治県地区では、モンゴル族に人々が会話するときに、モンゴル語の中に多くの漢語を挿

---

<sup>432</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・ホールチ1番」を参照されたい。

<sup>433</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第一節・第1回の調査内容・ホールチ4番」を参照されたい。

<sup>434</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第三節・第3回の調査内容・協力者3番」を参照されたい。

入する習慣が形成されたので、ホーリンウリゲルの視聴者が激減していた時期であった。しかし、2006年にこのような（ホーリンウリゲル）上演形式は、国家の文化部門に重要視されて、「第一批国家級非物質文化遺産」に認定されて以来、文化部が専用の資金および非物質文化遺産に関する制度を相次いで作り上げたので、我々のようなホールチたちも、もう一度上演の場に戻ることができた。現在は、毎年2～3回の「ホーリンウリゲル試練クラス」を開催して、ホーリンウリゲルを学びたい児童・生徒に教えることが実現できたので、若き後継者を育成する仕事が順調に進むようであるが、モンゴル語の能力が足りないなど様々な原因でなかなか高いレベルの若いホールチを育成することが困難な状態にある」と教えてくれたので、吉林省の状況は良い方向に展開している状況が把握できる。

第四に、第3回の調査協力者5番<sup>435</sup>の話によると、「彼が生活している黒龍江省のドルボド（杜爾伯特）モンゴル族自治州には、20世紀の80年代までに低音のドリボンウタストホールを背負って、遊芸しながらホーリンウリゲルを説唱するホールチがあちこちで活躍している様子が見られたが、グローバル化が進む21世紀に入った後、次第に見えなくなってきた。それゆえ、2006年に内蒙古自治区のジャルート（扎魯特）旗とホルチン右翼中旗が、遼寧省の阜新モンゴル族自治州と吉林省の前ゴルロス（郭爾羅斯）モンゴル族自治州と共同で「第一批国家級非物質文化遺産」項目を申請するときに、黒龍江省にホールチがいなかったため、それらの地区と共に申請することができなかった。また、近年の黒龍江省では、もし全国的な芸能大会およびホーリンウリゲルの試合があれば、内モンゴル自治区のある地域からホールチを招待してきて、黒龍江省の代表として大会や試合に参加してもらおう」という状況になっていることが分かる。

上述の内容を総合して言うと、昔、ホーリンウリゲルの主要な地域として名が広く知られた東部モンゴル地区では、近年の社会環境の変化に伴って、モンゴル語の言語環境が悪化しており、次第にモンゴル族の子どもまで影響を受けているので、ホーリンウリゲルを継承する後継者を育成することが困難な状態に陥っている。特に、現在の黒龍江省では、2000年前後の時期からホールチがいなくなっているのに、この間に関連の文

---

<sup>435</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第三節・第3回の調査内容・協力者5番」を参照されたい。

化部門も救済措置を講じていない状態は、ホーリンウリゲルという伝統芸能がまだ残っているモンゴル族地域の传承人たちにも注意を促す役割があると考えるので、改めて以下のように、「後継者育成の重要性」に関する私見を述べたい。

まず、繰り返しの話になるが、前述の内容によると、中国社会の激変およびモンゴル言語環境の悪化によって、伝統的な「師伝継承の方法」の効果は、日々に衰退している傾向にあることが確認できるが、衰退しているということは、その効果が既に無効になっているということ象徴してはいないので、この方法をもう一度やり直してから須臾の方法として使うべきであると考え。なぜかと言うと、まず、このような教え方は、800年以上の長い歴史を持つ伝統的な方法なので、伝統的な習慣を保持する点でも継承すべきであると考え。次に、昔から伝えてきた「口で伝えながら心で悟せる」という方法には、裏面で教えてはいけない部分も含まれているので、各流派が持つ独特な技法や詞牌・曲牌を保護・継承する面でも重要である。第三は、伝統的な継承方法の発展を妨げている要因は、弟子たちのモンゴル語能力が足りないという点で顕在化しているので、師匠から弟子にモンゴル語を教えるという方法以外に、弟子自身も努力してモンゴル語能力を上達させて師匠の指導を受けるという案も考えられる。

次に、ホーリンウリゲルの継承を妨げている要因であるモンゴル語能力が足りないという問題を解決するため、高学歴を持つ大学生や大学院生を主な対象に継承活動を行うことが考えられる。その理由は、まず、高学歴の学生たちは、一定のモンゴル語能力を持っているので、ホールチたちの語るホーリンウリゲルの内容を理解しやすいと考える。次に、高学歴の学生たちは、現代的な科学技術および情報媒介に熱心であり、毎日パソコンや携帯電話などの通信手段を使用しているので、ホーリンウリゲルに関する情報を集めたり、携帯電話とパソコンを使ってライブ配信したり、ホーリンウリゲルという伝統芸能を宣伝する方面でも、ある程度の有利な条件を持っているはずである。第三は、高学歴の学生たちは、世界の変動および社会環境の変化に対して、自分の世界観・価値観・人生観も形成されているので、自民族の伝統文化の価値およびホーリンウリゲルの存在がモンゴル民族に対する重要性を理解できていると考える。

最後に、「子どもは民族の未来」とはよく言われているように、モンゴル族の子どもたちもモンゴル族の未来であるので、新たな継承方法である「学校継承」の現場に生じ

ている諸問題を改善しながら、この方法を維持するべきである。なぜかと言うと、社会環境が激変する中では、学校が民族の伝統文化を継承させる最後の防衛ラインだと考えられるので、社会より継承環境が完備されている学校を通して、モンゴル民族の伝統文化ホーリンウリゲルを継承することは現代社会で最も適切な継承方法である。また、遼寧省の阜新モンゴル族自治州で実施している「学校継承の方法」については、ホーリンウリゲルの国家伝承人がいるモンゴル族地域にも、現地の代表性伝承人を学校に招待して、ホーリンウリゲルを一つの科目として実施し、子どもにホーリンウリゲル芸術を継承してもらう方法を採択することが考えられる。

## 二 教材開発の必要性

2011年に施行した「中国非物質文化遺産法」の第35条には、「国家は非物質文化遺産に関する科学技術研究と非物質文化遺産保護・保存方法研究を推奨し、非物質文化遺産の記録と非物質文化遺産代表性項目の整理・出版などの活動を激励する」と定められ、さらに2020年に施行された「国家級非物質文化遺産代表性伝承人認定与管理条例」の第17条にも、「国家伝承人を指導・支持することを通して、非物質文化遺産の記録・整理・データベース化・研究・出版・展示展覧・演出活動を展開する」と訴えている。

これらの法律法規の規定によると、国家の政策としては、非物質文化遺産項目の代表する伝承人たちが自ら代表している非物質文化遺産項目に関する研究をして、専門的な著作を出版することを積極的に推し進めていることが確認できる。筆者はインタビュー調査を実施するときに、ホーリンウリゲルの主要な地域と称されている東部モンゴル地区では、国家伝承人が弟子たちの状況に合わせて教える伝統的な方法以外に、グローバル化時代でも伝統文化を継承させる新たな継承方法も採用されている現状があることを知った。

例えば、前述した新たな「学校継承の方法」という政策は、国家級非物質文化遺産項目を発展させる重要な一環として実行しているが、最終的な目的は、各民族が持つ優秀な伝統文化を学校教育に導入することを通して、民族の未来である子どもに自民族の伝統文化を継承してもらうことであった。それゆえに、ホーリンウリゲルという項目に関しては、遼寧省の阜新モンゴル族自治州にある沙拉モンゴル族学校を試行学校として、

全国で率先してホーリンウリゲを学校教育に導入することを決定した。

国家の非物質文化遺産政策によって、モンゴル族の民間芸術であるホーリンウリゲルは、一躍して国家から重要視される国家級非物質文化遺産項目になる一方で、さらには学校教育にも導入され、民間芸人から子どもまでに楽しめる伝統文化として公認されるようになった。しかし、この新たな「学校継承の方法」は、最新の物事として誕生してきたので、専用の資金が不足しているなど様々な客観的な原因の影響で、児童や生徒たちがホーリンウリゲルを理解するときに困難な状況にある問題が顕在化していて、子どもが呼んでもすぐ分かるような教材を開発することを検討しなければならない時期になってきた。

そして、筆者が第2回の調査協力者10番<sup>436</sup>、即ち沙拉モンゴル族学校でホーリンウリゲルの授業を担当している担任先生に新たな「学校継承の方法」の授業状況について伺ったところ、「毎回のホーリンウリゲル授業を実施する前に、2日や3日間の時間を利用して、子ども分かりやすく楽器の教材・詞牌の教材・曲牌の教材・モンゴル語の教材を作った後、さらに人数に合わせてコピーして配っているので、事前準備の段階で相当の時間が掛かっている」と教えてくれた。

それゆえ、これらの内容によると、ホーリンウリゲルの継承を妨げている原因は、ただモンゴル語の言語環境が悪化している問題ではなく、グローバル化時代の変化状況に対応できていない問題が言語環境の悪化問題より致命的であるほか、ホーリンウリゲルを学校教育に導入したこと自体も、準備不足のため、現場で弟子が授業を聞いても理解できないなどの問題が生じていると考える。

このような状況のもとで、学校でホーリンウリゲルの授業を受けている子どもには、読んでもすぐ分かる教材を開発することがより早急に検討すべき大きな問題となる。以下、これまでに蓄積してきたホーリンウリゲルの継承に関する知識や経験を活かして、グローバル化の時代に対応できるホーリンウリゲルの教材を開発して、活用することについて私見を述べて行きたい。

第一は、ホーリンウリゲルの発展は、この芸能を継承する弟子や児童・生徒のモンゴ

---

<sup>436</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第二節・第2回の調査内容・協力者10番」を参照されたい。

ル語能力が不足していることが最も主要な原因になっているので、ホーリンウリゲルに関する知識を総括した総合教材を開発することを速やかに解決する必要がある。例えば、昔、口頭で教えていた内容の抜粋部分を取って、モンゴル語に精通している人および知識のある国家传承人自身が重要であると考えた内容を文字化して、弟子や児童・生徒が理解できる教材を開発すれば、モンゴル語の言語環境が悪化して、ホーリンウリゲルの発展を妨げている問題もある程度緩和されると考える。

第二は、科学技術および情報媒介が発展する現代社会において、ホーリンウリゲルを継承するときにも、これらの通信手段をきちんと利用する必要があると考える。例えば、ホーリンウリゲルの保護と継承を管理している文化部門は、国家からの専用の資金を活用して、弟子や児童・生徒が分かりやすいビデオ教材を開発することが考えられる。具体的な開発方法については、ある特定の場所を利用して、事前に開発したビデオ教材を放送しながら、国家传承人が楽器を持ってプレゼンテーションを行うほか、国家传承人 が楽器を持ってライブ配信しながら、ホーリンウリゲルの説唱技法および楽器の弾き方などの知識を解説しても良いのではないかと考える。

第三は、現代社会は視聴覚教育が重要視される時代なので、多くの挿絵が描かれている教材を開発することも考えられる。例えば、近年のドリボンウタストホールを教える教材の内容を読むと、ほとんど中級レベルの弟子や児童・生徒に対応しているものの、ゼロからスタートする弟子や児童・生徒には適切ではないことが実感できる。ホーリンウリゲルという伝統芸能を継承するため、モンゴル語の基礎が弱い弟子や児童・生徒が読んでも、すぐ分かるような教材を開発すれば、弟子や児童・生徒たちが速くホーリンウリゲルの技法や楽器の弾き方を掌握できると考える。

要するに、ホーリンウリゲルは現代的な情報媒介からの影響を受けて衰退したと考えるより、この芸能が衰退しているという現状を認識しながら、現有の資料・実物・通信手段などすべて継承事業に有利な条件を利用して、ホーリンウリゲルを継承したい弟子や児童・生徒に、ホーリンウリゲルの説唱技法と低音のドリボンウタストホールの弾き方を教えることが有益的であると考えられる。



### 三 説唱脚本のデータベース化の緊急性

21 世紀に入った後、世界文化の多様性を保つため、国連から様々な政策を提案してきた。その中で 2003 年 10 月に開催した「国連の教育科学文化組織・第 32 回国際大会」で表決し通過した「保護非物質文化遺産公約」（2006 年 4 月に施行）は、非物質文化遺産項目を保護する方面では最も権威的な法律として公認され、中国政府もこの公約に規定されている条文に応じて、国内にいる各民族が持つ伝統的な口頭表述・祭祀礼儀・手工技能・音楽・舞踊等の代表的な非物質文化遺産を保護している。

特に、近年の非物質文化遺産研究界では、「非物質文化遺産デジタル化」という概念、即ち非物質文化遺産項目をデータベース化するという事業は、次第に非物質文化遺産を保護・継承する一環として、中央政府から地方政府まで重視するようになってきた。データベース化とは、コンピューターの情報処理という機能を使って、ある特定の条件に当てはまるデータ、即ち声・光・電・磁等の信号を数字に転換し、あるいは、音声・文字・図像等の情報を数字コードに切り替える過程を指している。

それゆえに、近年の中国では、国家文化部門および地方部の非物質文化遺産保護センターによって、国家級非物質文化遺産項目のホーリンウリゲルに対して、データベース化が順調に進んでいるようである。以下、筆者が第 3 回のインタビュー調査を実施するときに、ホーリンウリゲルという伝統芸能が流行っている遼寧省・吉林省・黒龍江省などのモンゴル族地区では、ホーリンウリゲルに関するデータベース化が進歩している状況を省ごとに紹介して行きたい。

まず、第 3 回の調査協力者 2 番<sup>437</sup>の話によると、「モンゴル語の民謡民歌・ホルボー・ウリゲルトドー・ホーリンウリゲルの脚本を録音しながら撮影することは、各モンゴル族地域にあるモンゴル語広播電台ですと昔からやってきたが、データベース化のために収集しているのかははっきりわからないが、2016 年にホルチン左翼中旗の文化部門の人が家に来て、私の説唱するウリゲルトドーとホーリンウリゲルの脚本を録音・撮影したことがある。また、2018 年と今年（2020）の 8 月から 10 月の間にも、非物質文化遺産の研究に関わる組織からこの地域に流行っている歌と曲を録音・撮影したことがあ

---

<sup>437</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第三節・第 3 回の調査内容・協力者 2 番」を参照されたい。

るが、主にモンゴル民歌の「ハンデリマ」(韓徳日瑪)と「バイリィングウンズウ」(白玲公主)、ホルボーの「ホルチンのマガタラ」(科尔沁賛歌)と「チンギス・ハーンのマガタラ」(成吉思汗賛歌)、ウリゲルトドーの「トクトホ・バトル」(陶克陶胡巴特尔)、ホーリンウリゲルの「リボロン」(李宝龍)と「センゲリンチン」(僧格仁欽)などの曲目と脚本を収録した」ということを知ることができる。ホルチン左翼中旗では、長編のホーリンウリゲル脚本に対してのデータベース化を進む中で、同時にモンゴル民謡、短編と中編のホルボーおよび中編のウリゲルトドーも進行している実態が確認できる。

次に、第3回の調査協力者1番<sup>438</sup>は、「2016年に、遼寧省の非物質文化遺産保護センターのメンバーは、我が家に来てホーリンウリゲルの会場順番通りに、「前奏曲」「点綱曲」「前口上」「上朝調」「將軍令」「出征曲」「行軍曲」「山水頌」など20種類の曲牌とホーリンウリゲルの伝統的な脚本である『興唐五伝』の一部を録音・撮影し、そして、その後にモンゴル語で説唱したすべての内容を漢語で翻訳して、自治県の非物質文化遺産保護センターを通して、遼寧省の非物質文化遺産の関連部門に提出したことがある。また、2017年に、遼寧省の非物質文化遺産センターに招待されて、首府都市の瀋陽にある瀋陽音楽学院に行って、ホーリンウリゲルの脚本を録音したこともあった」と語ってくれた。遼寧省のホーリンウリゲルに関するデータベース化が順調で行われている現状を知ることができた。

第三は、第3回の調査協力者3番<sup>439</sup>の話によると、「吉林省の前ゴルロスモンゴル族自治県では、2016年前後の時期からホーリンウリゲルをデータベース化する仕事が始まった。私自身は2016年の年末に吉林省の非物質文化遺産センターに招待されて、短編のホルボーおよび長編の『ダロン・タェジ』という脚本を録音・撮影したことがあった。また、2019年の6月にも、吉林省・非物質文化遺産センターの調査員は、前ゴルロスモンゴル族自治県に来て視察するとき、吉林省の国家級非物質文化遺産項目のデータベース化資料を収集しているという理由で、短編のホルボーおよびモンゴル民謡を録

---

<sup>438</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第三節・第3回の調査内容・協力者1番」を参照されたい。

<sup>439</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第三節・第3回の調査内容・協力者3番」を参照されたい。

音・撮影したことがある」という状況にある情報を知ることができる。

第四は、第3回の調査協力者4番<sup>440</sup>にホーリンウリゲルのデータベース化について伺ったところ、「現在の黒龍江省・ドルボド（杜爾伯特）モンゴル族自治州では、低音・高音・低音のドリボンウタストホールを演奏する独奏者が増えているが、ホールチのような低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて長編の英雄叙事詩や歴史小説を語るホールチがほとんど見えなくなってきたので、ホーリンウリゲルのデータベース化という概念は存在しない。しかし、黒龍江省のモンゴル民謡民歌も非物質文化遺産項目に認定されているので、モンゴル民謡民歌に対するデータベース化は2016年から始めているが、近年、何度も録音・撮影したことがある」と語った。

そこで、上述の調査結果によると、中国でホーリンウリゲルの国家代表性传承人の説唱する脚本に関するデータベース化は、2016年から正式に開始して、内モンゴル自治区・遼寧省・吉林省・黒龍江省などのホーリンウリゲルという伝統芸能が広く説唱されているモンゴル族地域を中心に展開してきた事実が分かる。また、上述の内容から見ると、各モンゴル族地域でホーリンウリゲルに関するデータベース化の進度は、その地域の現状および非物質文化遺産センターの重視度による。先にホーリンウリゲルの脚本なのか、モンゴル民謡民歌とホルボー、あるいは、ウリゲルトドーなのか、について少し異なる場合もあったが、ほぼホーリンウリゲル脚本のデータを収集する時に、モンゴル民謡民歌やホルボーやウリゲルトドーなどの説唱芸術のデータを同時に収集している状況もはっきり見られる。

特に、各モンゴル族地域で活躍するホールチから収集しているデータ（曲目と脚本）の内容から見ると、現時点でホーリンウリゲルに関するデータベース化は、各モンゴル族地域で流行っており、当該地域に活躍するホールチたちも頻繁に説唱している曲目および脚本を主として取材している状況が確認できる。しかし、取材している地域を見ると、まだ省ごとに展開されていて、省を超えてデータ収集をしてからベース化する作業はあまり実行されていない現状にあることが確認できる。ホールチたちが高齢化していることを考えると、データベース化は緊急を要するようと思われる。

---

<sup>440</sup> 資料編「インタビュー調査の具体的な内容」の「第三節・第3回の調査内容・協力者4番」を参照されたい。

中国で国家級非物質文化遺産に関するデータベース化事業は、ほとんど近年の国際情勢に応じて導入してきた新たな制度のため、政策上にまだ完備されていないほか、急速に実行するために様々な問題が生じている現状があることが分かる。しかし、このような方法で実行しながら経験を蓄積して行けば、近いうちに「非物質文化遺産のデータベース化制度」は必ず完備されると信じているので、モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルも国家の文化部門および地方部の非物質文化遺産保護センターからの保護によって、グローバル化が進む現代社会でも次世代に継承する方法が探り出せることを確信している。

## 小結

第六章では、上述したように、ホーリンウリゲルという伝統芸能は、中国の国家級非物質文化遺産項目に認定された後の変化状況について分析してきたので、非物質文化遺産制度の実行に伴って、次第に衰退してきたホーリンウリゲルがもう一度発展する機会を得られ、伝統的な「師伝継承の方法」を維持しながらも、新たな「学校継承の方法」も探り出され、以前のように順調に継承されている状況が確認できた。

まず、中国に「非物質文化遺産」という制度が導入された経緯および近年国家の文化部門から公布された「非物質文化遺産法」及び「国家級非物質文化遺産代表性传承人認定与管理条例」について分析して、その中からホーリンウリゲルの担い手であるホールチに関連する法律法規を選出して考察し、国家級非物質文化遺産項目の代表性传承人として履行する義務および持つ権利を明らかにした。

次に、モンゴル族の民間芸術であったホーリンウリゲルは、中国に「非物質文化遺産」という制度を導入するのに伴って、国家級非物質文化遺産項目に認定された経緯および非物質文化遺産としてのホーリンウリゲルが次第に変化しつつあった箇所について考察した。伝統的な「師伝継承の方法」だけでなく、グローバル化時代に適合する新たな「学校継承の方法」が探り出されている現状を確認した。

第三は、現段階のホーリンウリゲル芸術は、伝統的な「師伝継承の方法」および新たな「学校継承の方法」の作用によって順調に継承されているようであるが、実際にホールチたちが死亡することによって、ホールチの数が次第に減少している状況で、若き後

継者を育成する仕事と児童・生徒や弟子の能力に合わせて適切な教材を開発すること、およびホールチたちの説唱する曲目と脚本をデータベース化した上で、専門の組織や場所で保存し、再利用することは早急に検討すべき点となっている。

## 終章 総括

本論文では、「変容」という視点から、モンゴル民族の伝統芸能であるホーリンウリゲルを対象に、この芸能の淵源、形成、成立、伝播、繁栄、衰退、現状について検討を行った。その結果、ホーリンウリゲルの淵源を確認し、それが発展した経緯、現在の上演形式に固定化されて成立した地域と時間、伝播した路線とその後の影響力、繁栄した時期の実態、衰退化している主要な原因と現在の状況を捉えた。

具体的な内容を整理すると、モンゴル語・日本語・漢語で書かれたホーリンウリゲルの研究史を整理・分析・検討して、現在までの国内外の研究者によるホーリンウリゲルの研究状況を把握した。なかでも、これまでの研究史ではあまり紹介されてこなかった日本・イギリス・ハンガリー・アメリカ・フランス・韓国の研究者によるホーリンウリゲルの研究成果を整理したことは、ホーリンウリゲル研究史の基盤となる情報の提供になった。

上記の研究史を振り返ると、ホーリンウリゲルとは何かという概念に関しては、研究者の専攻および視点が異なることから、現在まで長年にわたって論争が続いてきたことが知られる。そこで、これまでのホーリンウリゲルに関する概念を整理・分析した上で、筆者自身がこの芸能の伝承者として長い間ホーリンウリゲルを実演してきた経験をふまえて、基本的な辞書等を調べることで、より厳密な概念を提供した。

また、ホーリンウリゲルを構成する三要素である伴奏楽器のホール・説唱脚本のウリゲル・吟遊詩人のホールチについては、未公開の日本語資料『大清楽譜』および現地調査の一次資料を活かして、ホールの形状は早くても同治と咸豊、さらに道光と嘉慶の年間、遅くても 1880 年（光緒帝 6 年）には定まり、説唱脚本は時代の変遷を経て、英雄叙事詩を語ることから歴史小説を語るようになり、チンギス・ハーンの宮廷楽士の中でアラガソンというホールチがすでに活躍していた史実が明らかになった。

ホーリンウリゲルの起源に関する論争は、長年にわたって研究界で絶えないのが現状である。筆者が子ども頃に祖父と父から聞いたアラガソン・ホールチの伝説が印象深かったので、継承者としてはホーリンウリゲルが 12 世紀から 13 世紀に発生したことを信じてきた。そして、研究者として多くの文献を調べることによって、チンギス・ハーン

の時代で書かれた史書にモンゴル説唱芸人のアラガソン・ホールチが記録されていたので、それを根拠にして、12世紀から13世紀にホーリンウリゲルの淵源の一端であるホールチが存在したことを確認することができた。

東部モンゴル地区で活躍するホールチに尋ねると、必ず、トゥリ（英雄叙事詩）はホーリンウリゲルの原型であると教えてくれる。しかし、学術的に厳密な分析を行うと、ホーリンウリゲルの形成過程には、英雄叙事詩だけでなく、マングスインウリゲルの形成やヤバガンウリゲルの登場やベンスンウリゲルの拡散などの影響があり、それらがホーリンウリゲルの成立を促進させたことが分かる。

しかし、近年の学術研究界では、ホーリンウリゲルが成立した地域について異なる観点が出されている。現地調査によって収集した内部資料・郷土資料・一次資料を使って、ホールチが低音のドリボンウタストホールを弾きながらウリゲルを語る上演形式は、清朝期のジョソト盟・トウメット左旗、即ちモンゴルジン旗で固定化されたということを論証した。特に、清代に作られたドリボンウタストホールの実物を公開したのは本論文がはじめてである。

それだけではなく、ホーリンウリゲルがモンゴルジン旗で成立した要因には、1669年（康熙帝8年）に、ジョソト盟・トウメット左旗でチベット仏教寺院の「瑞應寺」が建立されたことがあると考えられる。この寺院で寺院文学（漢籍をモンゴル語で翻訳）と寺院音楽（経箱楽班の創設と活躍）が発展し、それがホーリンウリゲルの成立を促進したことを明らかにした。

続いて、ホーリンウリゲルの伝播について考察を行った。その過程で、エンケテグスとダンスンニマの生涯を明らかにする資料を補充し、歴史小説『興唐五伝』の作者はエンケテグスという有名なホールチであったことを明らかにした。さらに、ダンスンニマを元祖ホールチと考えるのではなく、エンケテグスこそホーリンウリゲルの中興の祖であると考えるに至った。

また、ホーリンウリゲルの流派形成と分布実態について考察すると、ダンスンニマはモンゴルジン旗でホーリンウリゲルの説唱技法を修得し、ジャルート旗地区に遊芸してきたとき、チュイバン（朝玉邦）とバインボルゴ（白音宝力高）を弟子に取って、擦弦楽器であるドリボンウタストホールの弾き方、説唱脚本であるウリゲルの語り方を教え、

そこから内モンゴル自治区に説唱の特色を持つ各流派が形成された状況が明らかになった。

その後、中華人民共和国が建国され、ホーリンウリゲルという伝統芸能は繁栄の時期を迎えた。具体的な事項を紹介すると、1948年から内モンゴル自治区を主とする各モンゴル族地域ではウリゲルインゲル（蒙古説書館）の建設が始まり、旧社会では地位が低かったホールチたちは新しい時代に生まれ変わって、実演すると給料が貰えるようになり、同時に視聴者の数が急増することになった。そのようにして、モンゴル族地域に相次いでウリゲルインゲルが設立された意義を明らかにしたことは、新しい研究成果であった。

しかし、伝統文化を一掃する文化大革命が起こり、モンゴル族の伝統文化は壊滅的な状況に陥った。ホールチたちは反革命分子として批判され、彼らが使用していた伴奏楽器と説唱脚本は破棄されてしまった。その後、これが終息して正常の生活に戻ると、国家の文化部門の指示を受けて、残留したものを手本に積極的に復興や復元が始まったが、その時から伴奏楽器・説唱脚本・吟遊詩人の役割が変化した。

具体的な例を挙げると、モンゴル劇が生まれ、それに伴ってホールチの主導権が奪われ、次第に劇団の一員として幕の背後で俳優の伴奏をすることになっていった。それ以来、ホーリンウリゲルには次第に衰退の傾向が見られるようになり、ホールチたちはもともと説唱していた英雄叙事詩や歴史小説を脇に置いて、紅色革命を題材とする新時代の脚本を語り始めるようになった。

ホーリンウリゲルの衰退化がさらに顕著になったのは、上述した現象によるだけではなかった。グローバル社会における現代的な情報媒介の発展によって社会の環境が急激に変化する中で、モンゴル語の言語環境が悪化し、ホールチたちは楽器を破壊して説唱を止め、お金になる職業に転業し始めたことがある。20世紀末期に至ると、ホールチの数が減少しただけでなく、出演する機会があっても演唱時間や説唱内容は制限され、短縮化を余儀なくされることになった。

このような状況にあったが、中国政府は国際情勢に配慮しつつ、中華伝統文化を復興させるため、2003年に「非物質文化遺産」という制度を導入し、2006年に「第一批国家級非物質文化遺産リスト」と「国家級非物質文化遺産項目代表性国家伝承人」を公布



した。それらに基づいて「蒙古族烏力格爾一覧表」と「国家伝承人一覧表」を作成して、ホーリンウリゲルという伝統芸能の現状と伝承人の実態を分析すると、国家伝承人が高齢化している一方で、若き後継者が不足していることを明らかになった。

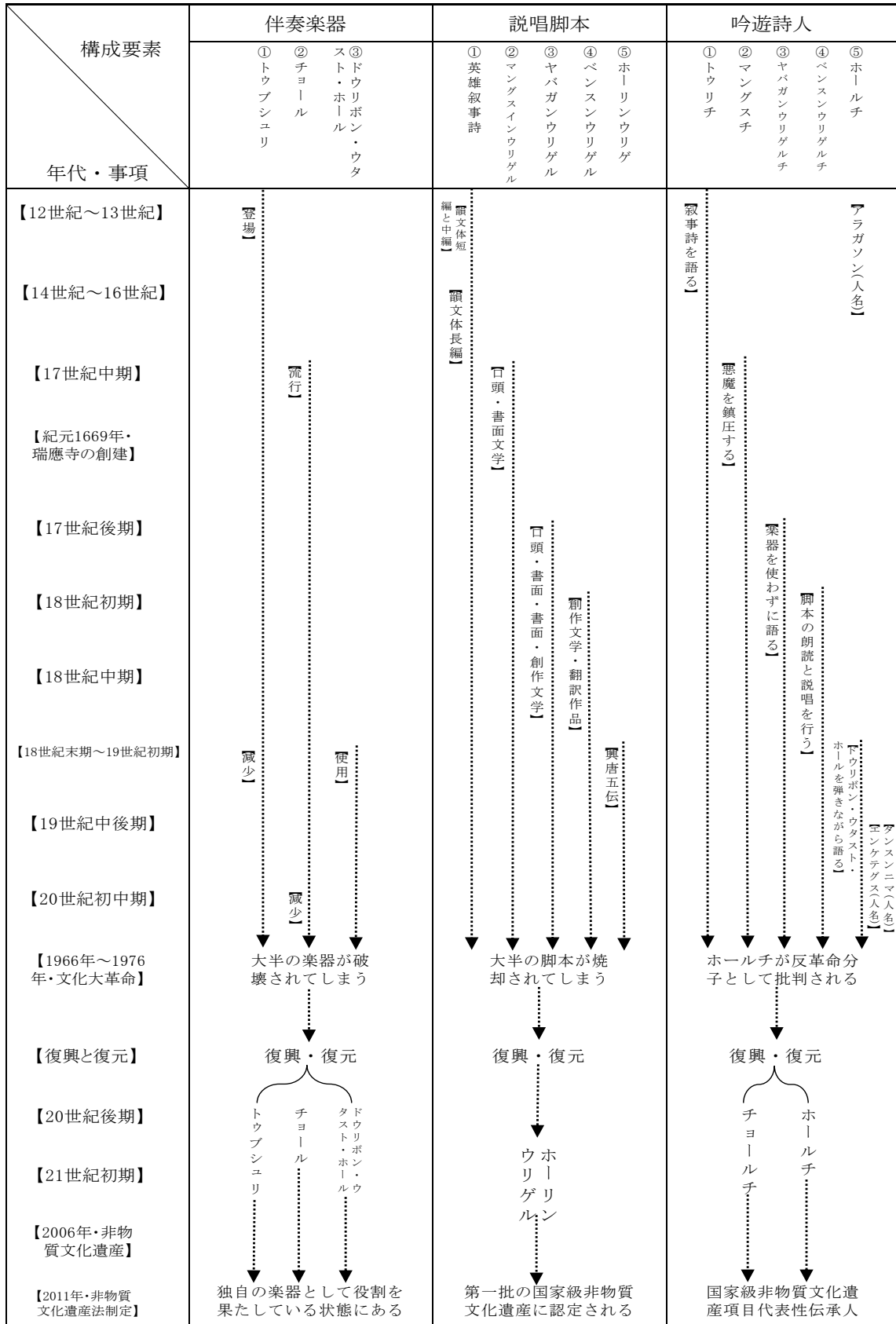
また、ホーリンウリゲルが国家級非物質文化遺産に認定されたことは喜ばしいことであつたが、同時にそれは、この芸能が絶滅危機に瀕してきたことを象徴していた。そのため、ホーリンウリゲルの未来に対する懸念が生まれ、伝統的な「師伝継承方法」を活用すれば、この芸能を次世代に継承することができるのではないかと考えた。しかし、国家伝承人および視聴者にインタビュー調査を実施したところによれば、伝承人は、弟子たちのモンゴル語の基礎が不足しているためにホーリンウリゲルの詞牌と曲牌が順調に勉強できていない現状を憂えていた。さらに、40歳を分岐点として、それより年齢が上の視聴者はホールチの語るウリゲルの意味が理解できるが、それより年齢が下の視聴者はあまり理解できていなくなっている状況も明らかになった。

さらに、最新の取り組みとして始まった「学校継承法」について考察を行った。この学校継承法は遼寧省の阜新モンゴル族自治州に限られているが、ホーリンウリゲルを未来に継承するため、モンゴル族の児童と生徒に自民族の文化への自覚を促し、学校教育の中で継承者と視聴者を育成していく新たな試みであり、一定の評価を得ている。これは先進的な事例であり、遼寧省以外のモンゴル族地域のモンゴル族学校に提供する一つのモデルになっている。

そして、最後に、現代の情報媒介を否定的にみるのではなく、ホーリンウリゲルの継承に役立てていく方法として考えられる改革の提言を述べた、具体的には、ホーリンウリゲルを持続的に発展させるために、後継者育成の重要性、教材開発の必要性、説唱脚本のデータベース化の緊急性について述べた。こうしたことが実現できれば、社会全体でこの芸能を支援していくことができると考えた。

以上のように、本論文では、ホーリンウリゲルという伝統芸能の歴史と現在を変容という視点で分析を行った。その成果を客観的に可視化するために、第三章から第六章までの内容を以下のような「ホーリンウリゲルの変容図」としてまとめた。

ホーリンウリゲルの変容図



## 資料編 インタビュー調査の具体的な内容

現在の学術研究界では、ホーリンウリゲルを対象に研究活動を行われている研究者が少数ではないのが現状である。しかしながら、これらの研究者の中で実際に子どもの頃から低音のドリボンウタストホールの弾き方およびホーリンウリゲルの説唱技法を学んだ経験がある人は極めて少ないので、長年にわたってホーリンウリゲルという伝統芸能を内部から見て紹介する研究もあまり見られない。これまでのホーリンウリゲルに関する先行研究を振り返ると、ホーリンウリゲルという伝統芸能がモンゴルジン旗で成立したことが公認されているのに、多くの専門的な著作と研究論文では簡略化して一言で解説・記述している現象がよく見られ、モンゴルジン旗出身のエンケテグス・ホールチおよびダンスニマ・ホールチに関する記述も間違っている文章が発見される。

それゆえに、先行研究を検討し、本論文の主題である「ホーリンウリゲルの変容」の状況を明らかにするため、2018年から2020年にかけて、中国内モンゴル自治区のジャールト（扎魯特）旗とホルチン左翼中旗、吉林省の前ゴルロス（郭爾羅斯）モンゴル族自治県、遼寧省の阜新モンゴル族自治県、黒竜江省のドルボド（杜爾伯特）モンゴル族自治県で活躍している現役の国家級非物質文化遺産項目の国家伝承人、現地でモンゴル族の文物および文化遺産を整理・収集・研究している民俗研究者、現地の宴会や婚礼などの民間の場でよく実演している民間芸人、現地の政府機関に所属している民族関係の職員を対象に、合計2回の現地調査と1回のネット調査を実施したので、その具体的な内容を以下のように示す。

### 第一節 第1回の調査内容

私は東京学芸大学大学院・学校教育学研究科・言語文化系教育講座でモンゴル族の伝統芸能であるホーリンウリゲルを中心に研究をしています。ホーリンウリゲルはモンゴル民族の伝統芸能として、東部モンゴル人の中で最も重要な位置を占めてきました。昔、ホーリンウリゲルを学ぶ人は、ほぼしょうがいを持っている子供であり、親は自分の子どもを世の中に生かすために、近隣の優秀なホールチとホールの先生に弟子として

入門させ、ホール（四胡）の弾き方とウリゲルの曲牌・詞牌などを勉強させました。

しかし、近年、モンゴル族の人々がモンゴル語で会話をする際に、必ずモンゴル語の中に漢語を入れて話すことがかなり行われ、次第に「蒙漢双語併用」（モンゴル語と漢語）、つまり、モンゴル語が大半で漢語もかなり挿入されている話し方で会話する状況が顕在化してきました。このような状況の影響で、モンゴル芸能の「活化石」と呼ばれてきた伝統芸能のホーリンウリゲルは、昔の輝かしく発展していた時代を失ってしまい、次第にモンゴル人の視線から離れ、絶滅危機に瀕してきました。

そこで本研究では、ホーリンウリゲルの語り手であるホールチと視聴者たちにインタビュー調査を通して、現在のホーリンウリゲルに存在している継承と保護の問題を明らかにしたいと考えております。ご協力をいただける場合は、誠に申し訳ありませんが、以下の項目についてご負担のないところで、お伺いしたいと思います。何卒、よろしくお願い申し上げます。なお、万一、途中で、インタビュー調査の打ち切りを希望される場合は、遠慮なくお申し出ください。なお、研究の成果は、博士論文としてまとめさせていただく予定です。

\*

この第1回のインタビュー調査は、2018年8月25日から9月15日にかけて、中国・遼寧省の西北部位置している阜新モンゴル族自治州（モンゴルジン旗）、内モンゴル自治区のジャールト旗、吉林省の前ゴルロスモンゴル族自治州で活躍するホールチ5名、四弦琴制作者3名、視聴者7名の合計15名に対して行った。その民族・年齢・性別・学歴・芸歴・生活地域を整理すると、次のようであった。

順 番	民 族	年 齢	性 別	学 歴	芸 歴	生活地域
1	モンゴル族	65 歳	男	私 塾	50 年	内モンゴル
2	モンゴル族	52 歳	男	高 校	37 年	吉林省
3	モンゴル族	58 歳	男	修 士	39 年	遼寧省
4	モンゴル族	55 歳	男	小学校	35 年	遼寧省
5	モンゴル族	54 歳	男	高 校	39 年	遼寧省
6	モンゴル族	57 歳	男	私 塾	18 年	内モンゴル

7	モンゴル族	55歳	男	高校	30年	遼寧省
8	モンゴル族	54歳	男	高校	32年	内モンゴル
9	モンゴル族	66歳	男	私塾	30年	遼寧省
10	モンゴル族	60歳	男	私塾	30年	遼寧省
11	モンゴル族	58歳	男	修士	30年	遼寧省
12	モンゴル族	45歳	女	大学	2年	遼寧省
13	モンゴル族	32歳	男	高校	10年	遼寧省
14	モンゴル族	24歳	女	大学生	6年	遼寧省
15	モンゴル族	12歳	女	小学生	2年	遼寧省

この表に記述されている1番から5番は、現役のホーリンウリゲル国家伝承人3名、市級伝承人1名、研究者でもありながら民間ホールチでもある人1名となる。6番から8番は、蒙古四胡の省級制琴師3名となる。9番から15番は、低音のドリボンウタストホールを弾きながら短いウリゲル段落を語る視聴者7名となる。

## 一 ホールチに対するインタビュー

**質問 1** この地域のホーリンウリゲルに対してどう思いますか？ その理由も教えてください。

**ホールチ 1 番** この地域のホーリンウリゲルに関しては、消失しているのが現状です。近年、我が国の経済が大きく発展し、いまの GDP は世界第 2 位を占めています。しかし、経済発展に伴って少数民族に先進的な知識を学ばせ、現存の資源を整合するという理由によって、モンゴル族の学校と組織を合併しています。その結果、モンゴル族の学校ではモンゴル語をあまり教えず、すべて漢語を中心に授業を行っています。モンゴル族の子どもが自民族の言語、文字、文化を知らないと、モンゴル人としてのアイデンティティが次第に衰え、自然にモンゴル族の伝統文化を守るという思いが生まれなくなります。ホーリンウリゲルは口承する文芸のため、実はホールチは自分の子どもとこの芸

術に興味を持っている子どもに教えることが理想的ですが、現在の若者には、モンゴル語を書けない、読めない、話せない人が多くなって、ホーリンウリゲルを勉強できない状況になっています。この地域には、高音の四弦琴を弾ける若者の専門家がいますが、モンゴル語ができないため、自分で弾きながら物語を語ることができず、ただ演奏するか、CDを作る時しか使用できません。例えば、先日、内モンゴル自治区で「全国ホーリンウリゲル大会」が開催されましたが、今回は必ず弾きながら物語と民謡を語るという条件があったため、この高音の四弦琴を演奏できる人は参加できませんでした。近年のこの地域では、ホーリンウリゲルという伝統芸能に関係がある現象が二種ありますが、ひとつ目は、低音のドリボンウタストホールを使って、モンゴル民謡民歌およびホルボーを語る人が増えていますが、長編の英雄叙事詩や歴史小説を語るホールチは減少している状況であります。もうひとつ目は、低音のドリボンウタストホールより、独奏の演奏家になりたいという人が増えていきますので、高音のドリボンウタストホールを学んでいる人が次第に増加している傾向にあります。

**ホールチ 2 番** 私は吉林省の前ゴルロスモンゴル族自治州にいるため、この地域のホーリンウリゲル状況を紹介します。周知のように、2006年にホーリンウリゲルは国家級の非物質文化遺産に認定され、私は国家級伝承人に任命されました。近年のホーリンウリゲルは、大雑把に言うところだと良くなって、消失しているのが現状です。その理由としては、現代の情報媒介の影響がかなり強くて、モンゴル族の人はモンゴル語をあまり知らない状態になってしまい、漢語の番組を見るしかありませんが、それはもちろん、モンゴル語の番組が比較的少ないのも原因となっています。例えば、ホーリンウリゲルの主な視聴者は、必ずモンゴル語が理解できるモンゴル族の人であるのは当然のことです。私は近く、『隋唐演義』という物語を新しい時代に合わせて再編集して新作品を出す予定ですが、再編集する際に伝統的な部分を残すのか、すべて直して新しい作品を作るのかについて困惑しています。もちろん、伝統と現在のものを合わせることも可能ですが、そうしたら生活の用語が漢語を中心となっている中国社会では、ホーリンウリゲルを半分漢語、半分モンゴル語にしなければなりません。しかし、このような作品は革新になれるのか、時代に合わせるのが分かりますが、半分漢語、半分モンゴル語となると、こ

これはモンゴル族のホーリンウリゲルではなく、漢族の説書になってしまいます。近年、内モンゴル自治区を中心とする、我々のようなモンゴル族自治州・自治県にいるモンゴル族の集居区において、モンゴル語の言語環境は次第に悪化し、モンゴル語を話せる若者が減っているのが現状です。このように、あまりモンゴル語が分からない環境の中で、伝統的なホーリンウリゲルをどのように革新して伝承するのかは、目の前にある最大の問題となっています。吉林省では、上記のような状況に対応しようと考えて、四弦琴を教える基地とホーリンウリゲルを教える基地を創設して、現有の資源を生かして伝承活動を続けています。また、私が生活している吉林省の前ゴルロスモンゴル族自治州では、昔に農村部のあるモンゴル族の家で月を単位としてウリゲル語っていましたが、現在は祝日、お祭り、非物質文化遺産の宣伝などの活動以外に、ウリゲルを語る機会は少なくなりまして、演唱の時間は次第に短縮され、英雄叙事詩などの長編の小説を語れない状態になってしまいました。例えば、昔は古代脚本である「チンギス・ハーンの伝説」を語る時は、大体1ヵ月を経て幾つかの場所に移動しながら語っていましたが、現在は「チンギス・ハーンの伝説」を語る時は、時間を短縮して重要な部分だけを取り上げて語るようになってきました。

**ホールチ 3 番** 私はモンゴルジンホシューのモンゴル族が集居しているゲゲンスウム（地名：佛寺）で生まれ、うちの父はホールチのため、小さい頃からホーリンウリゲルを学びました。大学を卒業して自治県の文化局に就職し、途中で中国芸術学院・修士課程に進学し、モンゴル族の伝統文化や習慣に関する研究しましたが、2001年に大量の先行研究と現地調査の結果に基づいて、『胡尔沁説書』という作品を編集しました。現在は自治県の文化局の書記の職務を担当し、主に自治県内にある非物質文化遺産の保護と伝承の事業を管理しています。ホーリンウリゲルはモンゴルジンホシューに発生したことは事実ですが、近年は現代の情報媒介の発展によって、まずラジオができて、さらにテレビ、ネットワーク、携帯電話、アイパッド、パソコンなどの通信道具ができて、家から出なくても、これらの物が一つあればなんでも見聞きできる時代になってきました。そこで、昔はホールチがホールを弾きながら表現しないと見えないし、聞こえなかった物語は、今はすべてテレビドラマと映画になっているため、ホーリンウリゲルを聞

く人は次第に減っています。また、モンゴルジンホシューは内モンゴル自治区の首府都市呼和浩特より遠いので、内モンゴル自治区のモンゴル語で放送しているテレビと番組をあまり見る事ができないので、今の人は見ない状態です。もう一つは、モンゴル語の問題となりますが、この地域は清朝の後期にはじめて多数の漢人が移住したモンゴル族地域のため、遊牧文化と農耕文化が長年にわたってしっかりと融合してきました。また、近年は現代の情報媒介の発展に加えて、モンゴル族の人はモンゴル語を話す際に、半分モンゴル語、半分漢語で会話するようになってきました。そのため、この地域のホーリンウリゲルは大体消失してしまったと言えます。

**ホールチ 4 番** まず言いたいことは、ホーリンウリゲルの発祥地はモンゴルジンホシューであることです。はっきり言うと、この地域のホーリンウリゲルは伝承危機に瀕していて、すぐ絶滅する可能性があります。中国は改革開放政策を実施して以来、経済発展を中心にして、その中でもまず一部の人を発展させる政策を作り上げ、その一部の人には本当にお金を取るようになったが、小学校を卒業していない人が多かったと思います。この人たちは、経済の面で不動産産業、文化の面で国家のソフトパワーを強化するなどの政策に従い、全国で高層ビルを建築するため、各地域にあるお寺をお金で買い、そのお寺を潰してから新しく高層ビルを建て、その結果、一部の伝承文化がなくなりました。また、文化のソフトパワーを強化するために、ネットワークを優先に発展させました。例えば、漢族の英雄叙事詩である『水滸伝』は、昔はホールチが楽器を弾きながら、その中にいる人物の性格、表情、行動、技術、能力、配役などを表現していましたが、現代の情報媒介が大きく発展したため、『水滸伝』はテレビドラマとなりました。映画を見れば、その中の人物に関して詳しく理解することができますが、そのために、ホールチの語っている『水滸伝』を聞く人はいなくなりました。これらのテレビドラマはホーリンウリゲルの位置に取って代わりましたので、ホーリンウリゲルを聞く人は減少しており、視聴者が減ると、この芸能も次第になくなるはずです。

**ホールチ 5 番** 私は 2006 年に公布された「第一批国家級非物質文化遺産・国家伝承人」の中で一番若い伝承人でした。現在は、阜新モンゴル族自治県のホーリンウリゲルを保



護・伝承するために、小学校と中学校で児童・生徒達に四弦琴の弾き方とウリゲルの語り方を教えています。この地域のホーリンウリゲルの現状に対して、非常に悲しく、もったいないと思っています。ホーリンウリゲルという伝統芸能は、単なる演奏と語るだけでなく、モンゴル族の英雄叙事詩、祝詞、ホルボー、民謡、民間音楽、宮廷音楽、諺、小説、物語などの要素を合わせた総合的な芸術ですので、モンゴル族の最も重要な文化遺産だと言えます。しかし、このような素晴らしい伝統芸能がグローバル化の時代で伝承危機に瀕してきたと考えられます。近年、ホールチの中に「ホーリンウリゲルの研究者が増えるより、視聴者と伝承者が増えてほしい」という言葉がかなり流行っています。これは、ホーリンウリゲルという伝統芸能が市場経済と改革開放に伴って、現在の情報媒介からの衝撃を受けた結果ではないかと考えられます。昔はネットワークがまだこんなに流行っていかなかったし、テレビドラマや映画、ラジオもなかったため、ホーリンウリゲルはモンゴル族の民衆に対して、唯一の娯楽であり、歴史と他民族の文化を理解・納得することができる媒介でしたが、現在は携帯電話などがあればなんでも見られる状況になり、少数の高齢者とモンゴルの文化に興味がある人しかホーリンウリゲルを聞かない状態になってきました。これからの何十年後の話しですが、ホーリンウリゲルは博物館に入館させられる可能性が高いと思われます。また、1948年に阜新全域が解放された初期には、モンゴルジン旗の各モンゴル族村落で活躍するホールチが300人以上いたと言うが、2006年に「モンゴル族ウリゲル」は国家級非物質文化遺産名録に認定される時に、ホールチが僅かに2人、流派も解放初期の5派から2派に減少してきて、特にその時から若き後継者を育成することが最大な課題となったので、現在は絶滅危機に瀕してきました。

**質問2** 昔のホーリンウリゲルは現在のホーリンウリゲルと比べると、どのような違いがあると思いますか？ 昔と比べて、現在は何が一番課題だと思いますか？

**ホールチ1番** 昔のホールチはお金持ちの家から誘われたら、ホールを持ってその人の家に行って、その家の人が聞きたいウリゲル（書目）を語る習慣がありましたが、その時に一番嬉しいことは、どこに行っても大勢の視聴者が集まり、みんなあまり漢語を

話さず、すべてホールチの語っているモンゴル語のウリゲルを聞きながら、その物語の経緯を論争したり、検討したり、最終段階まで話し合いして予想することでした。内モンゴル自治区の主体をなす民族はモンゴル族であり、ホーリンウリゲルに非常に関心を持つ人が大勢にいました。現在の言葉で表現すれば、そのホールチのファンとなるということです。また、昔のホーリンウリゲルは、一つの書目を語って行くと、少なくとも半月の時間が使えます。私が一番長く語ったのは、モンゴルの英雄叙事詩である『チンギス・ハーンの伝説』と『三国演義』2部のウリゲルを語る時でしたが、大体3ヵ月ぐらいの時間がかかりました。しかし、現在のホーリンウリゲルは、ある人の宴会、結婚式、老人の誕生日、商業の出演、非物質文化遺産の展示演奏会などの場所しか出られない状態になってしまいました。もちろん、現在もある人からの招待を頂いて、その人の家に行って、ウリゲルを語ることは可能ですが、時間は昔のような何ヵ月ではなく、何十分以内か何分以内の短縮したウリゲルばかりとなってきました。長編の英雄叙事詩などのウリゲルは、現在は各地域のモンゴル語の放送局で録音して放送する形になってきました。一番課題になるのは、昔は録音の設備がなく、交通が不便でしたが、現在はこの芸能を次世代まで継承できるかできないかの問題ではないかと思います。

**ホールチ 2番** 昔は交通が不便で、もし有名なホールチを家まで招待して、聞きたいウリゲルを聞こうと思えば、お土産などの物を持ってホールチの家に行って、聞きたいウリゲルの書目と招待期間をはっきり相談することが前提でした。ホールチは約束した時間の通りにその人の家に行って、ウリゲルを語り始めるわけです。中国国内にいるモンゴル族の人々は、清朝の中後期からもともと信じていた「シャーマニズム」を捨てて、チベットから伝来した「仏教・ラマ教」に交替することになりました。そして、ホーリンウリゲルという伝統芸能は、東北地方のモンゴルジン旗で発生してから次第に内モンゴル自治区の東部を中心に伝播しましたが、ホールチはウリゲルを語る前に、その家にある仏像の前に線香をつけて、3回額ずいてから始める習慣がありました。また、ホールチはその人に家に行くと、大体何ヵ月かその家の人と一緒に生活するため、その家の人と良い友達になるホールチが多かったのです。ホールチは招待された家に行ってウリゲルを語るについて真剣に考えおり、その人に家に行って一緒に生活することは、

その家の人たちの習慣、性格、家庭状況などをしっかりと把握できる機会でした。その家の人も、ホールチの技法、知識の豊富さ、特に人柄を把握できる良い機会となるので、ホールチは芸能人のように、自分の行動、言行、ウリゲルの語り方などをかなり注意してからウリゲルを語ったのです。一番課題になるのは、昔は交通が不便で、その家の人と一緒に生活すると様々な問題が発生することでした。現在は交通が不便であるという問題はなくなりましたが、現代社会において伝統をどのように守るのが注意すべき最大の問題点になっていると考えられます。

**ホールチ 3 番** 私の子どもころは、モンゴル族の中にホーリンウリゲルという言い方はありませんでしたが、ずっと昔から民衆の仮名にウリゲルと言えはわかります。ホーリンウリゲルという名称は、2006年にモンゴル族伝統芸能であるウリゲルが国家級の非物質文化遺産に認定された後に、ある研究者たちの中でホーリンウリゲルと呼ぶようになりました。ホーリンウリゲルという名称に関しては、私は評価にしません、物が存在すれば意義があるわけです。しかし、私は自分の著作の中にホーリンウリゲルと書けなくて、胡尔沁説書と定義して説明しました。また、近年、モンゴル族の中に文化を略奪するなどの現象があります。具体的に言えば、実はホーリンウリゲルという芸能はモンゴルジンホシューで成立しましたが、内モンゴル自治区の人、特に学者たちは、ホーリンウリゲルは内モンゴル自治区のある地域で成立してからモンゴルジン旗に伝播してきたと言います。モンゴルジン旗の民謡である「雲良」の歌詞を変えて、これは内モンゴル自治区の民謡であることを強調し、『民謡集』などの本をまとめて出版しています。歴史は歴史ですが、これらを変えて再出版する必要はないと思います。一番課題になるのは、ホーリンウリゲルの伝承問題と文化を略奪する問題だと思います。

**ホールチ 4 番** 昔はホーリンウリゲルを学ぶ人は、大体私のような障害を持っている人でした。私は5歳の時は白内障があることを知り、親は世の中に生きるために、四弦琴を弾ける先生とウリゲルを語れる先生を探し、その先生たちの下でホーリンウリゲルを学ばせましたが、私は目が不自由のため、ウリゲルの脚本があまり見えない、読めない状態でした、この時はウリゲルの先生からモンゴル語が堪能の人を招待して、ウリゲ

ルの脚本を読ませて、私はその人の読んだウリゲルを暗唱しながら、四弦琴のリズムに合わせてホーリンウリゲルの語り方を練習したことでした。現在はモンゴル族の子どもが自民族の言語を話さず、文字が読めないのが、この子どもたちは絶対にホーリンウリゲルを継承できないでしょう。また、2006年に、私はホーリンウリゲルの国家級伝承人に国から任命され、この伝統芸能を保護するようになりました。今、私の下でホーリンウリゲルを学んでいる学生は2、3人いますが、モンゴル語の基礎が弱く、自分の語っているウリゲルの意味をはっきり理解できていないと思います。一番課題になるのは、モンゴル語が消失している問題と若い伝承者が少ない問題です。

**ホールチ 5番** 昔のモンゴルジン旗では、各村落に何十人ものホールチがいましたが、みんなの流派が異なっても、ツァーガンーサル（新年）になると、私の家に集まって一緒に四弦琴を弾きながら、自分の技能を表すのが最大の喜びでした。ホーリンウリゲルを学ぶ時に、最初、父と母は反対の意見を持っていました。昔からモンゴルジン旗では、「ホールを学ぶより、泥棒になったほうが良い」という最悪な言葉がありました。この言葉の影響で、その時代に健常の子どもはホーリンウリゲルを学ぶことに対して軽蔑する意味を持ち、ホーリンウリゲルを学ぶ人はしょうがいを持つ人の専門職であるというのが、当時の社会の普遍的な意識でした。2006年にホーリンウリゲルは国家級の非物質文化遺産に認定され、私もこの芸能を伝承する国家伝承人に任命されたので、大勢の人がホーリンウリゲルを学ぶようになり、その中に20代と30代の若者がいましたが、長く続けるのが難しく、1年半ぐらい勉強するとお金が取れる仕事に移り、ホーリンウリゲルを止めてしまいました。また、私の指導で何人かの人が現役のホールチとして活躍していますが、モンゴル語の基礎が弱いため、ウリゲルの脚本が読めず、文字が書けません。一番課題になるのは、昔は「ホールチを学ぶより、泥棒になったほうが良い」という言葉の影響で、健常の子どもがホールチになっただけでなく、ホールチになれるのは障害を持っている子どもの専門職であるという意識でしたが、現代の課題としては、モンゴル語を理解する若い伝承者が足りないという問題があります。ここでホーリンウリゲルを語る時に、ホールチたちの使う技法を紹介したいことである。分弓は1音1弓、即ち、ひとつの音階を弾くために、弓を1回引っ張ることです。連弓は数音1弓、

即ち、弓を1回引っ張ると無数の音階を弾く琴です。頓弓は1音1弓、即ち、分弓と同じ発音原理であります。音が比較的短い音のことです。連頓弓は連弓で演奏しますが、音ごとに切断していることです。振弓は弓の頭の部分を使って、往復で速く押し、引っ張ることです。顫音は指で弦を震わせることで、通常で大・小2度の顫音がよく使われています。滑音は弦を滑らかに滑らせて演奏する方法を指しますが、一般的に原位滑音・長滑音・短滑音がよく使われ、原位滑音は、音を本音から高音と低音に滑らせてから、本音に戻ってくる演奏方法を指しています。長滑音は、指と把位（左手の虎口の所）を低音から高音、あるいは、高音から低音のように移動して演奏する方法を指します。短滑音は把位を動かさない状態で、指が上から下、あるいは、下から上のように弦を擦して演奏する方法を指します。快速全弓は弓を早く動かして、強烈で満ち満ちた音を出すように演奏することです。転調の場合、ホールは弦楽器で、固定した把位はなく、転調する技法はそんなに難しくはありません。しかし、転調するとき、音の高低の正確さに注意しなければなりません。常用しているのは、D調・G調・F調・C調の転調法です。

**質問3** ご自身がホールチとして、現在ホーリンウリゲルの継承と保護に対してどう思いますか？ 特に、弟子を育てることに対してどう思いますか？

**ホールチ1番** ホーリンウリゲルの継承と保護に関しては、若い継承者が少なく、現代のホールチの学力が足りないなどの問題があり、保護が順調に進んでいる様子も見られますが、地域によって状況がかなり異なっているのが現状です。また、国家文化部から、2006年から原則として1人の伝承者が毎年10000元の伝承資金を受けていましたが、2016年からは20000元にまで増加しました。近年の内モンゴル自治区では、非物質文化遺産を大学に導入するなどの政策を作り上げて、有名なホールチを大学に招待し、大学の授業を教えています。そして国家伝承人の語っている重要な部分を再録音して、文化遺産の資料としてCD、DVDを作って保存するようになりました。また、弟子を育成することに対しては、現時点ではホールあるいはウリゲルを学びたい人がいますが、モンゴル語の能力、ホールチとしての喉の条件、音楽性の不足、伝承者としての人柄などの

問題があります。そうしたことを考慮しているので、私の場合は、しっかりとした弟子がなく、弟子を育成する計画が立てられないので、伝承者になれる人を探している状況です。

**ホールチ 2 番** 吉林省の場合は、自治県でホーリンウリゲルの説書館を作り上げて、ホールチを招待し、1人のホールチが何ヶ月間もの時間をかけて一部のウリゲルを語り終えるようにしています。そのホールチに弟子がいれば、語っているウリゲルの全体を考慮しながらある部分を語る時は、自分の弟子と一緒に語るか、もしくは自分の代わりに弟子に任せるなどの方法を採用して、出来る限り伝承と保護の活動を同時に行っています。注目すべきなのは、自治県で育成した何人かの若い四弦琴奏者が、近年の楽器の演奏大会で特別賞などの賞状をかなり貰っていることです。また、自治県の文化部門の指導によってホールチの社会的な地位が高まり、ホールチ専用の練習室、リハーサルホームを設置して、いつでもホールチが自由に使えるように準備してくれています。現在、私の下に5人の生徒がいて、複雑な問題も多く存在していますが、目標を達成するために努力しているところです。現在、私の弟子の中で最も年上の方は、今年60歳を越えており、最も若い人でも10歳以上になっています。しかし、年が60歳を越えている老人と未熟の子どもに問わず、モンゴル語の基礎が非常に弱いことで共通していますので、私は彼らにホーリンウリゲルの詞牌と曲牌を教える時に、常にモンゴル語とモンゴル文字を教えるから低音のドリボンウタストホールの技法およびウリゲルの説唱方法を教えているわけです。最後に、秘密のことを教えて上げますが、自分が実際に1956年1月1日（旧暦）に生まれています。前に職場が前郭爾羅斯蒙古族自治県に移ってきた関係で1969年10月5日に生まれたと変更しましたので、その時から身分証明書や仕事上の資料でも1969年10月5日に生まれましたと記録しています。

**ホールチ 3 番** モンゴルジン旗のホーリンウリゲルは、2006年に国家級の非物質文化遺産として認定されました。それ以降、国务院の公布した文化指針である「国家、省、市、県4級の伝承・保護政策」に従い、自治県の文化局の中に「非物質文化遺産事務室」を設立しました。特に言いたいのは、ほかの地域の国家伝承人は1人しかいませんでし

たが、モンゴルジン旗の国家伝承人は2人いるため、文化局は2人の伝承人が交替で、「ホーリンウリゲルの研究セミナー」をおこなっており、今年までに9回の研修セミナーが終了し、30名ぐらいのホールチを育成しました。

**ホールチ 4 番** 2006年にホーリンウリゲルが国家級の非物質文化遺産に認定されて以来、私は自治県の事業編の正式の一員となり、現在は鎮（行政単位）文化センターで働いていますが、主に仕事はホーリンウリゲルの展示演奏会に参加し、若いホールチを育成することをしてしています。現在5人ぐらいの弟子がいますが、私は目が不自由のため、文字化してウリゲルの脚本を教えることが出来ないので、私の師匠が教えてくださって暗唱した内容をそのまま弟子たちに教えています。また、モンゴルジン旗は、ホーリンウリゲルという伝統芸能が成立した地域として公認されていますが、最も早い時期から漢人の農民が移住してきたなどの影響を受け、モンゴル族の子どもがモンゴル語を話さないという状況が日々嚴重化されているので、ホーリンウリゲルの継承も大きな社会問題と教育問題としても注目されています。特に紹介したいことは、2014年に遼寧省の文化部門は、中国の非物質文化遺産法をもとにして、「遼寧省非物質文化遺産条例」を作り上げて、遼寧省の人民代表大会で通過したことによって、国家級非物質文化遺産のホーリンウリゲルを沙拉モンゴル族学校で導入して、一つの科目として授業を実施し、児童・生徒に継承して貰うという政策が実行されるようになったので、現在は順調で進められていますが、児童・生徒たちが日常会話で使っているモンゴル語より何倍も難しい書き言葉を勉強する時に、非常に苦労していると担任先生から聞いたことがありますので、現在はまずホーリンウリゲルの詞牌を全面的に理解できた上で、ホーリンウリゲルの説唱方法を教えていると思います。

**ホールチ 5 番** 私はうちの父からホーリンウリゲルを学びましたので、誰か師匠についてウリゲルを語れるようになったわけではありません。2005年にホーリンウリゲルを国家級の非物質文化遺産項目の申請する際に、私の芸人履歴にモンゴルジンホシューで有名なホールチを師匠にしてホーリンウリゲルを学んだ、と書いてありましたが、実は先輩たちの語ったウリゲルを聞いたことがあるので、そのホールチから学んだという

表現を使うより、そのホールチの影響を受けたというほうが正確です。私の家庭状況を言いますと、うちの母は現地で有名な民謡歌手、父は自分で四弦琴を弾け、ウリゲルを語れる創作できる人です。このような家庭で生まれた自分にとっては、他のホールチを師匠にしてホーリンウリゲルを勉強するというのは不思議なことです。また、昔にホールチを持って何らかの内容を語る民間芸人が多くいましたが、それらの人の得意の演目が異なるので、民謡民謡を歌う芸人を「民間の歌手」と呼び、韻文体で創作された短編・中編・偶に長編の作品を語る芸人を「ホルボーチン」および「ウリゲルトドーチン」と呼んで、それぞれの呼び方があることを強調していました。モンゴル民謡・ホルボー・ウリゲルトドーをすべて歌えるおよび語る上で、長編の英雄叙事詩や歴史小説を主として語る芸人を「ウリゲルチン」と呼んでいました、ホーリンウリゲルは長編の脚本でなければいけない、ホールチ言える人も、長編のウリゲルを語られなければ、ホールチと言えず、民間の歌手・ホルボーチン・ウリゲルトドーチンと呼んだ方がより適切だと思います。ホールチになるには幾つかの条件がありますが、まず、基本としてモンゴル語と漢語の二つの言語を把握することです。次に、ある程度の歌唱力、表演力、音楽力を持つことです。第三に、驚くほどの記憶力を持つことです。第四に、楽器を上手く弾ける能力を持つことです。第五に、この芸術を把握する決意も必要ですが、根気の強さも必要であることがあることです。それゆえに、多くの子どもがこれらの条件を満たさなければならず、と満たされていたとしても中途半端の児童・生徒が多数を占めていますので、若き後継者を育成することが難しい。私のもとでホーリンウリゲルを学んでいる弟子は5人いますが、この弟子たちは私の語るウリゲルの意味を十分に理解できていませんので、彼らに教える時に、自分がまず一段落を語ってから弟子たちが師匠を真似て繰り返して語っています。また、わずかに5人の弟子がいる中には、モンゴル文字が読めない弟子がいますので、私の書いた台詞の内容をまったく理解できていません、そのまま覚えてしまう弟子もいて、彼らは自分の語っているウリゲルの意味をすべて理解していない状態で語り続けています。このような悪状況が生じた原因としては、弟子たちのモンゴル語とモンゴル文字に関する知識が足りないということがあります。



**質問 4** 母語が次第に消失している状況の影響で、ホーリンウリゲルの後継者と視聴者が次第に減少していることに対してどう思いますか？

**ホールチ 1 番** 近年の内モンゴル自治区では、モンゴル語が次第に消失している現状がかなり深刻化してきましたが、この状況は良くないと思います。現在は、全国でドゥイン（抖音）と火山小視頻などの音楽アプリがかなり流行ってきましたが、これらのアプリは漢語で設定され、漢語で開くようになっており、もともと国家の言語政策として普通話を普及することが中心となっています。モンゴル族の人も漢語を話せることが誇りであると考えてやってきましたが、これらの音楽アプリの影響を受けて、モンゴル語で話す人は年々減っています。また、1990 年代以降に生まれた子どもたちは、生まれてから周りの環境は既に漢語で話し、書き、読むことになっており、あるモンゴル族の家ではモンゴル語が使われているかもしれませんが、多くのモンゴル族の家庭では自民族の言語や文字を使っていません。

**ホールチ 2 番** 言語は民族の命脈と言われていますが、近年の吉林省でもモンゴル族の子どもがモンゴル語で会話している声あまり聞こえません。モンゴル語で挨拶することは、モンゴル族の幼稚園と小中学校で偶に聞こえます。私はモンゴル族の子どもがモンゴル語で会話をしないことは非常に良くないと思います。子どもが民族の未来であり、子どもが自民族の言語と文化を知らないと、今後誰がモンゴル族の言語、文字、文化を継承するのが最大な問題になって来ると思います。ホーリンウリゲルなどの伝統芸能がこのような伝承危機に瀕してきたのは、モンゴル族の就学前教育とかなり関係があります。

**ホールチ 3 番** 現在のモンゴルジンホシューでは、県内のモンゴル族はおよそ 20 万人いるはずですが、ホールチの語っているホーリンウリゲルの意味が分かっている人は既に少数になっていると思います。今の 20 代と 30 代の若者はあまりモンゴル語を話しません、40 代、50 代、60 代より年上の人はまだモンゴル語で会話したり、本を読んだり、ラジオでホーリンウリゲルを聞いています。また、文化局では、素晴らしいモン

ゴル文化を保護するために、毎年、専用の資金を使って、自治県の鎮と郷にあるモンゴル族の小中学校の文化建設の事業を支援しています。

**ホールチ 4 番** 私はホールチとしてはいろいろ言いたくはありませんが、心が痛く、非常に悲しいです。近年のモンゴルジンホシューでは、非常に不思議な現状が出てきました。2人のモンゴル族の人が会えば、当たり前のこととして、モンゴル語でサンバイヌ（こんにちは）と挨拶しました。しかし、今はモンゴル語を使わずに、漢語でニイハウ（こんにちは）と挨拶するようになってきました。特にホールチとして許してはいけないことですが、ある日、私がモンゴル族の村落で『モンゴル秘史』の物語を語っていた時、3人の視聴者はモンゴル語が分からず、「漢語で語ってください」と言ったので、その時は我慢できず、私は怒って、モンゴル語で結構批評したのです。また、モンゴルジン旗（地域）では、低音のドリボンウタストホールを弾きながらウリゲルを語る上演形式について、昔から「ホールチンウリゲル」と呼び出し、伴奏楽器を使わずに、ウリゲルを語る上演形式を「ベンスンウリゲル」や「ヤバガンウリゲル」と呼ぶ習慣があります。

**ホールチ 5 番** 私は9歳から父（ホールチ）の指導を受け、伝統楽器であるドリボンウタストホールの弾き方と技法、説唱芸術のホルボー（好来宝）と短編・中編・長編ウリゲルの語り方と表演方法などの知識を学びました。その後しばらくして、父が親戚や友達からお金を借りて、19元（人民元）を使って当時で人気があった「紅灯ラジオ機」（紅灯牌收音機）を買ってくれました。それゆえ、私はその貴重な「ラジオ機」を使って、哲里木盟の蒙古語ラジオ局、阜新蒙古語ラジオ局、フルンボイル（呼倫貝爾）の蒙古語ラジオ局により放送する「ウリゲル」の番組を聞き始めましたが、そのときは毎日、各ラジオ局の司会者から「今回の番組では、〇〇（人名）ホールチの語った〇〇（説唱脚本の名称）のウリゲルを放送する」という固定化した前口上で番組を開始していました。現在、モンゴル族の伝統芸能であるホーリンウリゲルで一番課題となっているのは伝承者が足りない問題であることは間違いありません。しかし、私は国家の伝承人のホールチとして、ホーリンウリゲルをすぐ保護しないと絶滅する可能性があると感じ、

今から若い伝承者を育成するべきであると考えます。私は2013年から国家の非物質文化遺産法で定めている指針に従い、ホーリンウリゲルをモンゴル族の小中学校に導入し、週3回はモンゴル族の学校に通って、子どもにホールの弾き方とウリゲルの語り方を教えています。このような実際の行動を通して、ホーリンウリゲルという伝統芸能を継承するべきであると考えています。

## 二 四胡制作者に対するインタビュー

質問1 昔の四弦琴は現在の四弦琴と比べると、作り方、形、音質などでどのような違いがあると思いますか？ 現在は何が一番課題だと思いますか？

制作者6番 私は小さい頃から父から大工の技法を勉強しましたが、たぶん10年前に、四弦琴を弾けるようになったら格好いいと思って、大工の技法を使って自分で四弦琴を作ってみました。最初はなかなか良い楽器が作れませんでした。自分で設計図を立てて、サイズを計算してから大体良い音が出るようになってきました。私は自分で探求しながら楽器が作れるようになったため、まずどっちを作るのか、何の材料を使うのかについては、決まりがないので、どの部位を先に作っても構わないと思っています。長年にわたって積み重ねてきた経験がありますが、四弦琴を作る時、まず琴桶（専門用語は発声器と呼ぶ）を作った方が良いと思うのは、琴桶を作るには時間がかかるからです。この楽器が良い楽器かよくない楽器かを判断する基準としては、琴桶から出る音を聞くべきです。琴桶を作るのは多くの秘密があり、琴桶をどのぐらい大ききで組み立てるのか、どの木と動物の皮を使うのかによって、出せる音がまったく異なるはず。ホーリンウリゲルを語る時は低音の四弦琴が望ましいが、低音の四弦琴の琴桶を作る時は鹿の皮と蛇の皮を使った方が良いのです。低音の四弦琴よりもっと音が低い超低音の四弦琴がありますが、長時間の長編の英雄叙事詩を語るホールチは、鹿の皮を使って制作した超低音の四弦琴を使うと喉に悪い影響を与えないため、それを使うことを推薦します。現在は四弦琴の制作技法において最も大きな課題となっているのは、若い人に大工を学ぶ人がいないことです。今の時代、家などの物を建てる時は、すべて高度先端技術を使

ってパソコンで計画を立てますので、昔のように人の手で設計図を書いてから組み立てることは次第に減っています。

**制作者 7 番** 良い四弦琴を作りたいならば、まず良い木を選ばなければなりません。国内において良い材料の木と言えるのは、紅檀と黒檀の木です。もちろん、白檀で作る四弦琴であれば一番相応しいのですが、白檀は貴重な木となっており、値段も結構高いため、普段は紅檀と黒檀で作る制作者が多いのです。作り方に関して、私は普段、琴桶、琴竿、琴頭、琴耳の順番で四弦琴を作っています。紅檀と黒檀は偶に良い木でない場合もありますが、その時は大きな鍋で煮って、もっと赤く、黒く色を付けてから楽器を作ります。昔の四弦琴の作り方は、美観を考えずに大雑把に作って、良い音が出ればよい楽器であるという考え方がありましたが、近年の四弦琴は仕事が細かく、琴桶と琴干の上でモンゴル特色の「福字」と「自分の名前」あるいは「諺」を彫刻する人が増えてきて、制作者は技法の面での大きな挑戦となっています。また、楽器を完成した時、どの楽器でどういう種類の「弦」を使うかで、音も違ってくるのは当然のことであるため、昔は牛皮とビニールを材料として作った弦を良く使っていましたが、近年は鉄弦、金弦、銅弦を良く使っています、上記の弦が好きではない人は、チェロの1弦と2弦あるいは琵琶の3弦と4弦を使ってもよい音が出るはずですが、これらは四弦琴の専門家ではないと知らないはずです。特に言いたいのは、弦楽器というものは、地域性と人間性があると信じていることです。なぜかという、楽器は大体同じやり方で作られ、ただ材料が違っているだけだと考えるのは間違いです。しかし、この楽器をどの人が使うか、どの地域で使うかによって、楽器の主と形も違ってくるはずですが、例えば、紅檀で作られた新しい四弦琴があり、その楽器をあるホールチが買った場合、その楽器はそのホールチの習慣と楽器の弾き方によってその紅檀の四弦琴の色（木の色）は次第に黒くなるのが自然です。課題となるのは、この伝統の技法を傳承しようと頑張ってくれる若者がいないことです。

**制作者 8 番** 伝統的な四弦琴は、その時代に科学技術が発展してないため、大雑把に作られており、あまり違和ない気がしました。近代に入ってきてから、特に近年の内モン

ゴル自治区では、四弦琴の琴桶と琴竿の上に「モンゴル文字」「自分の名前」「モンゴル福字」「諺」などを彫刻するのが自然になってきました。四弦琴の琴桶は他の弦楽器ともちょっと違い、超低音の楽器の中には直径が40ミリ、50ミリの琴桶が見られますので、普通の楽器の琴桶が15ミリの楽器であるのとは違います。そして、四弦琴は琴桶によって超低音、低音、中音、高音の四つの種類があります。一つの楽器においては、ホールチと制作者が一番気になるのは楽器の琴桶であり、琴桶が良くないと良い音が出ないので、ホールチの中でも人気の物になりません。私の作った琴桶の形は、外から見れば他の制作者と同じ形に見えますが、実は中の形が違っているのが特徴です。他の制作者の琴桶は中が四角形になっているのが多く、私の作った琴桶の中は丸の形になっているものが多いのです。琴桶は楽器の音響に関わるため、四角形に作ると、音が分散して消える可能性が高く、良い音がでない楽器が多いのですが、丸の形に作ると、琴桶は音が集まる効果があり、自然の音が出せます。

**質問2** 四弦琴の制作者として、現在の四弦琴の制作技法への継承と保護に対してどう思いますか？

**制作者6番** 私には息子が3人います。今年57歳を過ぎているため、実は誰かが私の技法を後継すればよいと考えていますが、3人はすべて呼和浩特、上海、北京でそれぞれ自分の家庭と仕事を持っているため、だれも継承してくれないのが現状です。もしある日私が死んだら、この技法もそのままなくなるはずですが、しかし、ずっと良い後継者を探しているため、たぶんうまくいくかもしれません。

**制作者7番** 私には息子が1人います。近所に住んでいますが、伝統のものは面白くない、特に四弦琴を制作することは現代社会でお金にならない、と考えています。このような考え方は、いまのモンゴル族の子どもの中では普通です。一つの楽器を作るのは、相当の時間がかかります。その前提として、遠い所に行って、楽器の木と材料を買ってくるので、交通費と木を買うお金がかかります。さらに、買ってくると、様々の作業手順で楽器を作りますが、完成した楽器は何百元、何千元で販売しているため、本音で言

うとお金になりませんが、この伝統技法を継承しようと思って続けています。

**制作者 8 番** いま弟子が 2 人いて、大体自分で楽器を作れるようになりましたが、ある部分の作り方はまだ改善しなければならない所があります。内モンゴル自治区では、モンゴル族の人が多いため、楽器を買うホールチと民間の愛好者が良く買ってくれます。私の世代でこの技法が絶滅することはできないと信じています。この技法が非物質文化遺産項目に認定されていますので、将来性について心配しています。

**質問 3** ご自身が四弦琴の制作者として、ホーリンウリゲルに興味を持っていますか？ホールチをどのように取り扱いますか？

**制作者 6 番** 私はホーリンウリゲルに対して、ただ興味を持っているだけでなく、心から愛しています。なぜかと言うと、子どもの時には現在のようなテレビ番組などの通信手段がありませんでしたので、私は、ホールチの語ったウリゲルを聴いて、モンゴル族と漢族の歴史文化を知ることが唯一の楽しみでした。その時のホールチは知識が豊富で、「最も偉いホールチは 50 部の脚本を語れる」と父親から聞いたことがあります。私から見ると、ホールチと言われる人はただの説唱芸人ではなく、モンゴル民族の文学、伝統音楽、伝統文化の有力な継承者であり、宣伝者であります。現在は非物質文化遺産になっていますので、絶滅危機に瀕していることを象徴すると思いますので、これから楽器を弾く演奏家が増えるより、実際に楽器を弾きながらウリゲルも語るホールチが増えた方が良いと思います。

**制作者 7 番** ホーリンウリゲルは子供時代に必要不可欠の物であると言えます。その時代のモンゴルジン旗では、楽器を背負って歩き、ウリゲルを語ることが潮流でありましたので、私のような子どもは、様々な腕と知識を持っているホールチから無限の知恵を貰ってきました。例えば、子どもの時に村落に来たホールチが語った『チンギス・ハーン物語』という脚本を聞いたことがありますので、偉人であるチンギス・ハーンのような英雄になりたいと自信を持って努力してきました。しかし、経済的負担が重かつ

たために退学して大工の技法を学び、四弦の楽器を作ることを職業にしました。この大工の技法を学ぶ時にも、毎日そのホールチの語ったウリゲルの内容を振り返って、民族のために頑張っていたいと決意して、今日までやってきました。

**制作者 8 番** 私はホーリンウリゲルが大好きで、布林バヤル・ホールチの語ったウリゲルをよく聞きました。実は子供時代にホールチになりたいと考えていましたが、両親の反対で失敗してしまいました。成人した後、生業を維持するために大工の技法を学びましたが、両親に報告せずに楽器の弾き方を勉強しました。現在は簡単な民謡であれば、楽器を弾きながら語れるようになりました。しかし、ホーリンウリゲルという芸能は、楽器の弾き方を学ぶのが難しいだけでなく、自分の声が楽器の高さと一致した上で長編のウリゲルを語っていくことは最も難しいので、何度努力しても、長編のウリゲルを把握することは不可能でした。しかし、私はウリゲルを語ることを諦めていませんが、ずっと興味として少し説唱してきました。現在は、短いモンゴル民謡やホルボーを説唱できるようになりました。

### 三 視聴者に対するインタビュー

**質問 1** 前からホーリンウリゲルを知っていましたか？ 興味を持っていますか？

**視聴者 9 番** 昔のモンゴルジン旗・ゲゲンスム地区（モンゴル語の発音、地名の仏寺を指す）では、ノウンネザバ（農奈扎布）というマングスチとダンスンニマというホールチが周辺の村落でマングスインウリゲルとホーリンウリゲルを語りながら活躍していたとお父さんから何度も聞きました。それゆえに、私も父に従って毎日ホールチの語るホーリンウリゲルを聞いていましたので、ウリゲルを聴くことが好きになりました。

**視聴者 10 番** 私はお父さんからヤバガンウリゲルという説唱ジャンルに関する話を聞いたことがありますが、その時代で悪魔のマングスを鎮圧するマングスインウリゲルを聴く人がかなり減ってしまいましたので、当時の説唱芸人たちがこのような説唱方法

を継承させるために、新たな形式で伴奏楽器を使わず語る方法で試みた後の産物でした。また、この新たな上演形式では、吟遊詩人のヤバガンウリゲルチが、伴奏楽器を一切使わないままで長編・中編・短編のウリゲルを語り、どんな地域に行ってもホールチのように低音のドリボンウタストホールを背負う必要がないため、視聴者たちはヤバガンホウンと称されるようになりました。

**視聴者 11 番** 私の父がホーリンウリゲルに大変興味がありますので、私も子どもの時からホールチの語るウリゲルをずっと聞いていましたが、特に張振江・ホールチの語るウリゲルを聴くことが好きでした。なぜかと言うと、彼はホーリンウリゲルを語る時に、この周辺にいるホールチとまったく違って、漢族の京劇の曲目を挿入しながらモンゴル英雄を描写していました。

**視聴者 12 番** 私は子どもの時に、祖母と共に生活していたので、いつも祖母の朗読する『興唐五伝』というベンスンウリゲルを聞いていました。また、15歳の時に、モンゴルジン旗で有名な楊鉄龍・ホールチの語る「ゲルインマガタラ」という中編のホルボーを聞いて以来、将来も低音のドリボンウタストホールを弾きながらモンゴル民謡でも語るようになればとずっと思っていました。

**視聴者 13 番** まず、モンゴルジン旗でホーリンウリゲルを知らない人はいないと思います。なぜかと言うと、私の子どもの時に、モンゴルジン旗で最も活躍していたホールチは楊鉄龍であり、民間の歌手は馬国宝でした。この2人がバイクを乗ってあちこちに行き、モンゴル民謡・ホルボー・叙事民歌・ホーリンウリゲルを上演していた情景は、今でもすぐ思い出せます。

**視聴者 14 番** 私がホーリンウリゲルという伝統芸能を知ったのは、祖父が楊鉄龍・ホールチの語るウリゲルに大変興味を持っていたことに直接関係しています。それゆえに、私も子どもの時からホーリンウリゲルを語るホールチが凄いと聞いていたので、大学生になってから低音のドリボンウタストホールを学び始めました。



**視聴者 15 番** 祖父が趣味として、低音のドリボンウタストホールを弾きますので、私もその影響を受けて低音のドリボンウタストホールを勉強しています。将来はこの楽器の演奏家、あるいは、女性のホールチになれるかと思っています。

**質問 2** 漢族のウリゲルとモンゴル族のウリゲルのどちらに対して興味が深いでしょうか？

**視聴者 9 番** ホーリンウリゲルの脚本には漢族の歴史事件を紹介するウリゲルが多数を占めていますので、『三国演義』と『興唐五伝』という脚本は印象が深かったです。モンゴル民族の歴史事件を紹介する脚本は、悪魔を鎮圧する『ジャンガル・ハーン伝説』と『チンギス・ハーン伝説』をよく聞きました。

**視聴者 10 番** モンゴルジン旗のホールチと言えば、楊鉄龍・ホールチの語る「ゲルインマガタラ」と『興唐五伝』のウリゲルが挙げられます。特に興味を持った脚本はありませんでしたが、『三国演義』『西遊記』『唐代故事』などのウリゲルをよく聞きましたので、あらすじをほとんど覚えています。

**視聴者 11 番** 私はフビライ・ハーンの功績を賛美する『青史演義』という脚本を聞くことが好きです。このウリゲルには、モンゴルの将軍が敵国と対戦する情景に大変興味を持って聞いていましたので、その段落の内容を覚えています。

**視聴者 12 番** モンゴルジン旗では、伝統的なウリゲル『興唐五伝』以外に、近現代で有名な「ガーダー・メイリン」（嘎達梅林）という中長編のモンゴル民謡も大変人気がありますので、あるホールチがこのウリゲルを語っていたことを覚えています。

**視聴者 13 番** 私は「トクトホ」というウリゲルが好きです。彼はモンゴル軍を指揮して敵と戦争しましたので、そのリズムを聞くだけで英雄像がすぐ形成されます。また、モンゴル近現代史上で有名な「ガーダー・メイリン」という民謡をよく聞いたことがあ

りますので、その大体のあらすじが印象に残っています。

**視聴者 14 番** 私はモンゴルジン旗で有名な『興唐五伝』（第 1 部の『苦喜伝』、第 2 部の『全家福』、第 3 部の『殤妖伝』、第 4 部の『契僻伝』、第 5 部の『羌胡伝』（上部・下部）、続編（第 6 部）の『寒風伝』）のウリゲルを聞いたことがあります、ほかのウリゲルは知りませんでした。

**視聴者 15 番** 祖父がチンギス・ハーンのウリゲルを教えてくださいましたので、ほかのウリゲルをよく知りません。

**質問 3** ホールチたちの語っているウリゲルの内容をどの程度理解できていますか？

**視聴者 9 番** 私の場合は、自分も短いウリゲルを語りますので、ホールチたちの語っているウリゲルの内容もすべて理解しています。しかし、本当に知識を持っているホールチたちは、やや古いモンゴル語を使って語ると、偶に意味が分からない時もあります。

**視聴者 10 番** 子ども頃からずっとホーリンウリゲルを聞いていますので、普段でよく語られている脚本であれば、その内容を理解することはそんなに難しくありません。しかしながら、私は以前に聞いたことがないウリゲルであれば、意味が理解できない場合もあります。

**視聴者 11 番** ホーリンウリゲルの内容については、近年は携帯電話が一部あれば、ビデオを見ることができたので、ホールチの語るウリゲルは何年間も聞いていません。現在は、多分聞いても内容は半分程度しか理解できないかもしれません。

**視聴者 12 番** ホーリンウリゲルは大変久しぶりで、多分 4 年間聞いていません。現在聞けば、大体的な内容を理解できるかもしれませんが、確定できません。

**視聴者 13 番** 近年は農村の家から大都市に行ったり、また家に戻ってきたり、あちこちに回っている状態なので、まずモンゴル語を使う比率が下がっていますので、現在はホーリンウリゲルを聞いても、多少分かるくらいかもしれません。

**視聴者 14 番** 私は幼稚園から高校までずっと漢語で授業を受けていましたので、モンゴル語の基礎が大変弱いです。現在は低音のドリボンウタストホールを勉強していますが、将来ウリゲルを語られるかどうかを分かりません。

**視聴者 15 番** 私はまだ子どもなので、ウリゲルの内容をまったく理解できていません。

**質問 4** 昔のホーリンウリゲルは現在のホーリンウリゲルと比べると、どのような違いがあると思いますか？

**視聴者 9 番** 私の先祖は、モンゴルジン旗にある東北最大の瑞應寺を建てるときに、山東地方からこの地域に移住してきた工匠の後裔で、現在は第 5 代まで受け継がれてきました。それゆえに、祖父から聞いたのは、その時代のモンゴルジン旗でホールを弾きながらウリゲルを語っていた人が沢山いたということです。また、昔のウリゲルは純粹ですが、現在のウリゲルは変質しています。

**視聴者 10 番** 昔のホールチたちが真面目に表演してくれますが、現在のホールチは舞台に出たとしても、5 分や 10 分以内に終わってしまいますので、時間が短縮化されたことが最も顕在化されています。

**視聴者 11 番** ホールチたちは語るウリゲルの内容が変わっています。昔は英雄叙事詩や歴史小説を語るホールチが多数を占めていましたが、現在のホールチはモンゴル民謡民歌を変曲してもう一度歌っていますので、長編のウリゲルを語るホールチが減少しています。

視聴者 12 番 すべて変化していますが、残念ですので、他のことを言いたくない。

視聴者 13 番 近年の社会環境が変化していますので、昔のような情景が見えなくなっています。特にホールチについては、私はモンゴルジン旗で楊鉄龍・ホールチが偶にテレビ番組で出演すること以外に、ほかのホールチがいるかどうかを知りません。

視聴者 14 番 ホーリンウリゲルについてはそんなに詳しくないので、以前と現在のホーリンウリゲルを比較できません。

視聴者 15 版 昔の事情を知らないので、すみません。

## 第二節 第 2 回の調査内容

私は東京学芸大学大学院・学校教育学研究科・言語文化系教育講座でモンゴル族の伝統芸能であるホーリンウリゲルを中心に研究をしております。国内（主に内モンゴル）の各大学および研究機関から刊行された学術誌と投稿論文によると、ホーリンウリゲルの元祖はダンスンニマ（丹森尼瑪）・ホールチであり、長編章回体歴史小説『興唐五伝』の作者はエンケテグス（恩赫特古斯）ではなく、瑞應寺のラマ僧たちが共に創作したという結論が出されています。そこで、本研究を通して、ホーリンウリゲルの元祖および小説『興唐五伝』の作者に関する問題を明らかにしたいと考えております。

ご協力をいただける場合は、誠に申し訳ありませんが、以下の項目についてご負担のないところで、お伺いしたいと思います。何卒、よろしく願い申し上げます。なお、万一、途中で、インタビューの打ち切りを希望される場合は、遠慮なくお申し出ください。なお、研究の成果は、博士論文としてまとめさせていただく予定です。

＊

この第 2 回インタビュー調査は、前回（2018 年）の続きとして、2019 年 8 月 26 日から 9 月 18 日にかけて、中国・遼寧省の西北部に位置しているモンゴルジン旗（地区）を中心に行ったが、8 人の協力者の民族、年齢、性別、学歴、職務、生活地域を整理す

ると、次のようであった。

順 番	民 族	年 齢	性 別	学 歴	職 務	生活地域
1	モンゴル族	82 歳	男	大 学	教 授	遼寧省
2	モンゴル族	82 歳	男	大 学	民俗研究家	遼寧省
3	モンゴル族	80 歳	男	大 学	作 家	遼寧省
4	モンゴル族	58 歳	男	大 学	民俗研究家	遼寧省
5	モンゴル族	61 歳	男	大 学	民俗研究家	遼寧省
6	モンゴル族	54 歳	男	高 校	伝 承 人	遼寧省
7	モンゴル族	61 歳	男	高 校	民俗研究家	遼寧省
8	モンゴル族	79 歳	男	高 校	伝 承 人	遼寧省

#### 一 エンケテグス、ダンスンニマ、『興唐五伝』に関するインタビュー

質問 1 モンゴルジン旗の有名人であるダンスンニマとエンケテグスのことを知っているならば、その史実を教えてくださいませんか？

協力者 1 番 ダンスンニマは有名なホールチであります。地元はモンゴルジン旗の団山子村であり、白という漢姓を持っています。エンケテグスについて、私は物事をわきまえる時に、祖母が『五伝』の小説は瑞應寺のラマ僧・エンケテグスの創作した作品であることを教えてくれました。また、父親は『興唐五伝』の小説を第 1 部の『苦喜伝』から第 5 部の『羌胡伝』まで朗読することが趣味だったため、この小説に深い印象が残っていました。私は 1963 年に内モンゴル大学の蒙古言語文学専攻を卒業した後、阜新モンゴル族自治県の教育研修室に就職し、モンゴル語の監督員として多くの民俗資料を掘り出し、整理・出版する仕事をしてきました。その中で 1979 年から 1982 年の間に、内モンゴル人民出版社からモンゴル語で正式に出版した『興唐五伝』の本を漢語で翻訳する作業が阜新モンゴル族自治県で始まりました。私は翻訳委員会の一員（仕事が始めた 2 ヶ月後に身体の件で退会した）として『興唐五伝』を熟読しましたが、この内モン

ゴル人民出版社から出版した『興唐五伝』を父親が朗読していた『興唐五伝』と比べると、そんなに大きな差はなく、小説の粗筋はほとんど同じであることをよく実感しました。また、大昔のモンゴルジン旗では、ホールチを招待する時に、モンゴル民族の最高の儀礼であるハダックを上げながらお酒なども奉納して礼拝するような習慣がかなり行われていましたが、現在は拝礼する習慣が完全に削除されている一方、昔は何ヵ月を単位に語り続けていた脚本を語る時に、できる限り短縮して語ってほしいと要求する視聴者が増えています。特に昔の東部モンゴル地区で大変人気がある『興唐五伝』（『苦喜伝』『全家福』『殤妖伝』『契僻伝』『羌胡伝』）『夏国』『商国』『周国』『秦国』『東漢』『西漢』『東晋』『西晋』『三国演義』『封神演義』『聊齋志異』『水滸伝』『西遊記』などの古代脚本は、近年であまり語られていないのが現状であり、長編の英雄叙事詩および歴史小説を語る事ができるホールチも次第に減少しており、全国でおおよそ 20 名上下いるはずです。

**協力者 2 番** 私は阜新モンゴル族自治州・蒙古語文工作事務所の初代主任の役を務めていましたが、自治県の政府は 1963 年の時点で、全県を対象にモンゴル族の東蒙短調民歌・胡尔沁説書（ホーリンウリゲル）・安代舞踊・民間小説などの文化遺産を収集・整理・出版・保存する作業を始めました。その中で、清朝・康熙帝 8 年（1669 年）に建設し始め、康熙帝 42 年（1703 年）に大体の形ができた『瑞應寺史』を整理することが自治県の民族工作にとって最も重要な課題であるとして取り上げられました。その時期に、瑞應寺のラマ僧であったエンケテグスの書いた『興唐五伝』の経緯・創作スタイル・表現と表記をもう一度細かく整理・分析しました。その結果、『瑞應寺史』を執筆する委員会のメンバーは全員一致で、『興唐五伝』の作者はエンケテグスであるということを書き込みました。ダンスンニマは有名なホールチであります。本県佛寺鎮・団山子村出身の人で、漢姓は白を取ったと昔の現地調査で明らかになったことを覚えています。また、エンケテグスは楽器・音楽・文学・詩歌の面で造詣が高い人なので、『興唐五伝』を創作した後、ダンスンニマはエンケテグスを拝師して『興唐五伝』の語り方を学びました。ダンスンニマがゲゲン（生き仏）に寺院から追い出された理由は、ラマ僧として寺院のルールに違反したからです。

**協力者 3 番** 私はダンスニマのことをあまり知りませんが、エンケテグスのことをお婆さんからよく聞きましたので、そのために「モンゴルジン旗の〈インザナシ〉—エンケテグス—」という文章を書いたことがあります。この文章で、「1986年7月26日に、内モンゴル師範大学の教授・ボウインバトウ（宝音巴図）氏は、『興唐五伝』の作者を明らかにするため、フフホト（呼和浩特）から阜新モンゴル族自治州にきました。教授は、「私はフフホトで歴史小説『五伝』の作者は、モンゴルジン・ホシュ・ゲゲンスムのラマ僧達が共に創作した作品だということを知りました。瑞應寺のゲゲンはウリゲルを聞くことが趣味だったので、古代の英雄叙事詩を聴き飽きて、新しいウリゲルを聴きたいので、手下のラマ僧に命じて『興唐五伝』を創作したと聞いたが、これは本当のことなのだろうか」と尋ねた。この質問に対して、元瑞應寺のラマ僧、佛寺老人ホームの院長であるエシ（叶喜）・ラマ僧とバト（巴図）・ラマ僧は、『興唐五伝』は、「ラマ僧達が共に創作したのではなく、この瑞應寺のビチゲインゲリ（管理職）のエンケテグス1人で創作した作品である」と語った」ということを整理し、書き留めました。

**協力者 4 番** この2人はこの地域でかなり有名ですが、ダンスニマはホールチで、エンケテグスもホールチで、さらに作家、文学者、詩人、モンゴル語の巨匠としても良く知られています。例えば、ダンスニマは、ホーリンウリゲルを東部モンゴル地区に伝播したことによって、モンゴルジン旗だけではなく、内モンゴル自治区でもかなり有名です。エンケテグスは、瑞應寺でラマ僧の職を務めていた時に、長編歴史小説の『興唐五伝』を創作しましたが、ある研究者の出した「瑞應寺のラマ僧たちは共に創作した」という結論の信憑性は低く、論文を書くために作った仮説に過ぎないと思います。なぜこんなに厳しく言うかと言うと、文学作品を創作する人がすべて共通しているように、1人でずっと創作した文章と何人が一緒に創作した文章は、文脈だけではっきり分かるだろうと思うからです。また、エンケテグスはホールチでありながら『興唐五伝』の作者でもあります。この点について、劉文祥がインタビュー調査を通して論証した文章がありますので、劉文祥に直接聞き取り調査した方がよりよい資料が収集できると思います。

**協力者 5 番** 「私はダンスンニマのことをあまり知りませんが、1986 年に瑞應寺を退職したラマ僧、民間芸人、モンゴル語教師、合計 50 以上の人を対象に聞き取り調査を実施したことがありました。当時の協力者は 70 歳から 80 歳以上の年配者でしたので、調査が終わった後しばらくして逝去した者が多かったため、今日までもし生きていても 110 歳を超えているはずですが、残念なことには、50 人以上の協力者は全員逝去してしまいました。しかし、私より年齢が上で、現在も民族の文化遺産を継承・保護するために努力している年配者は、自分の父親と母親、さらに祖父と祖母の時代のことをまだ覚えていると思うが、貴方はその人たちを対象に調査すれば、史実に近い資料が得られること確定的である」と述べ、アドバイスと資料を提供してくれた。

エンケテグスはモンゴルのウリヤンハイ（鳥梁海）部族の人であり、漢語では呉という姓を名のっています。彼は、1836 年から 1846 年の間に、現在の遼寧省阜新モンゴル族自治州・佛寺郷・東河欄村の農業を生計とする貧乏な家庭に生まれました。兄弟は 3 人で、長兄はミト（秘図）、弟もラマ僧でエンケバヤエ（恩赫巴雅爾）と呼ばれています。エンケテグスの孫であるボバ（布巴）とモル（毛茹）は、エンケテグスの生まれた佛寺郷・東河欄村に住んでいたが、佛寺の政府が佛寺ダムを再建するために佛寺郷・解放村に引っ越しました。孫であるボバ（布巴）とモル（毛茹）の話によると、彼らの家では祖父のエンケテグスに関する話が代々伝わってきました。エンケテグスは生まれ付き頭が賢く、本を読み、勉強することが大好きで、記憶力が凄まじかったが、身体の特徴は中肉中背であり、顔の右側に突起した大きなほくろがありました。彼は子どもの頃から瑞應寺にいるラマ僧に入門し、モンゴル語とチベット語を学んだ。10 歳を過ぎてから寺院での教育を受けながら外部の私塾でも言語と文学に関する知識を勉強し、20 歳を過ぎた頃にはモンゴル文字と漢文に精通しました。モンゴルの古典文学、英雄叙事詩とウリゲルを含む、広く様々な書物を熟読し、民謡とウリゲルを改編して語っていました。子どもの頃から多くの領域に関わる書籍を熟読したため、ドリボンウタストホール（モンゴル語の発音、漢語で四弦琴・四胡と呼ぶ）を弾きながらウリゲルを語る時に、多種多様な文学的な言葉や比喻表現を使って、聞き手の人々を大笑いさせ、何ヵ月語り続けても終わらない状態でありました。エンケテグスはかなり面白い新しいウリゲルを語るということが多くの人に知られてきましたが、ちょうどその頃、瑞應寺のゲゲン（日



本語の生き仏に近い者を指す)もエンケテグスのことを聞き、寺院に誘いました。彼はゲゲンにウリゲルを語ることは大切な機会になると思い、普段は民間で語って好評だった唐朝のウリゲルをまとめて、ゲゲンに語っていました。ゲゲンはエンケテグスの語ったウリゲルを聞いて喜んでいました。それ以降、彼は長い間、瑞應寺のジンサ(寺院の官職)という職業を仕事にしました。エンケテグスは30歳になってから『興唐五伝』を書き始め、長い時間をかけて第1部の『苦喜伝』を完成し、続編である『寒風伝』までの長編歴史小説シリーズを完成しました。40歳になってから内モンゴル自治区のナアイマン・ホシュ(奈曼旗)に移住し、そこでも多くの文化遺産を整理したり、漢族の歴史小説をモンゴル語で翻訳したり、民謡と新しいウリゲルを創作したりして、人生の最後の生活を過ごし、50歳を過ぎて逝去した。

**協力者6番** 私の父親はホーリンウリゲルの語り手であるホールチだったので、子どもの時から父親の語る『興唐五伝』のウリゲルを聞きながら成長してきました。また、自分が低音のドリボンウタストホールを弾きながらウリゲルを語れるようになった時から、長い間『興唐五伝』のウリゲルを語ってきました。そこで、この小説(ホーリンウリゲル脚本)の第1部の『苦喜伝』から第6部の『寒風伝』(前の5部の続編)までの文脈・作者のスタイル・表現や表記の使い方・ウリゲル全体の経緯・主要人物に関する描写・モンゴル語の語彙の豊富さなどの要素から見ると、『興唐五伝』の作者はエンケテグスであることに疑問はなく、特に『興唐五伝』はエンケテグス1人で創作し完成させたことが分かります。ダンスンニマは有名なホールチですが、1836年に阜新モンゴル族自治県・ゲゲンスム・シャラハアイラで生まれ、1889年に病気でモンゴルジン旗・シャラハアイラの家で亡くなり、享年53歳であった。彼は中肉中背で少しやせているようで、子どもの頃から賢いので、父のタチンガ(塔青嘎)と母のシリントウラ(希仁花日)は、彼を瑞應寺に送ってラマ僧にした、と逝去した戴維彧先生から聞いたことがあります。

**協力者7番** ダンスンニマはモンゴルジン旗でかなり有名なホールチですが、多くの研究者は彼がホーリンウリゲルの元祖・ホールチと見ています。実は、彼より前の時代に

も、モンゴルジン旗ではホールチがかなり活躍していました。エンケテグスも文学家・作家・詩人としてよく知られていますが、彼はもうひとつの身分も持っていて、ホールチです（この身分を多くの人知りませんが、『瑞應寺史』という本の中にも記録されています）。そして、私は1987年からモンゴルジン旗全土を対象に、モンゴル族の有形と無形の文化遺産を掘り出す仕事をしてきましたので、当時80から90歳になっていた民間芸人や知識人の話によると、ダンスンニマはただ文学に優れた人物だったというのではなく、宮廷音楽と伝統音楽にもかなり造詣が高い人でした。

**協力者8番** 私はエンケテグスの生涯についてあまり知りませんが、彼は瑞應寺で働いていた時に『興唐五伝』の小説を創作し、さらに民衆の意志によってその小説を説唱したこと、そして、ダンスンニマに『興唐五伝』の語り方を教えて上げたことを、子どもの時からずっと民間芸人から聞いてきました。ダンスンニマについては、お婆さんから聞いたことを覚えています。彼は男性で、モンゴル族、漢姓の白を取った有名なホールチでした。1836年に阜新モンゴル族自治県・ゲゲンスム・シャラハアイラ（沙日呼音艾里）で生まれ、1889年に病気でモンゴルジン旗・シャラハアイラ（沙日呼音艾里）の家でなくなりましたが、享年53歳でした。彼は中肉中背で少しやせているようで、子どもの頃から賢いので、父のタチンガ（塔青嘎）と母のシリンホウラ（希仁花日）は彼を瑞應寺に送ってラマ僧にしました。彼は40歳前後の時期に、ホーリンウリゲルを語ることに心を奪われてしまい、毎日の決められた時間帯に行われる仏教の法事に参加しないので、ゲゲンに瑞應寺から追い出されてしまいました。その後、流浪芸人として日常生活を維持し、45歳前後の時に流浪して内モンゴル自治区のジャルート旗に行きましたが、そこでチュイバン（朝玉邦）とバインボルゴ（白音宝力高）を弟子として取って、ホーリンウリゲルの説唱方法およびドリボンウタストホルの弾き方を教えたことがあります。晩年には、モンゴルジン旗のシャラハアイラ（沙日呼音艾里）に戻ってきて、続けて弟子を取ってホーリンウリゲルを教えていましたが、しばらくしてから「ダンスンニマ説書流派」を創始しました。

質問2 ホーリンウリゲルの脚本『興唐五伝』について知っていることを教えてくださいませんか？

協力者1番 エンケテグスの創作した『興唐五伝』は、確かに有名な脚本としてかなり語られていますが、実は、この脚本が創作された初期に、何人か、または何十人かが集まって共に朗読していたので、現在の研究会でベンスンウリゲルと定義して研究活動も進んでいます。その後、時代の変遷によって次第にこの小説を朗読する人が減りましたので、エンケテグスは寺院音楽のリズムに合わせて歌いながら朗読できるように変えましたので、楽器を使わずリズムだけに合わせて語るベンスンウリゲルが形成され、その後しばらくの間大人気になりました。しかし、時間の変化によってもう一度視聴者が減りましたので、エンケテグスはドリボンウタストホールを持って『興唐五伝』を語り始めました。それ以降、文学作品であった『興唐五伝』は、ホールチたちの語る脚本として歴史舞台に登場し、最も人気がある脚本になってきました。

協力者2番 この脚本は東部モンゴル地区の各地域で語られていますが、私の知っていることは、次のとおりです。この『興唐五伝』が創作された初期に、まず瑞應寺にいるラマ僧を中心に語られていましたが、その後民間に流入し、民衆たちが朗読しました。その後、急に視聴者が減少したので、エンケテグスはリズムに合わせて歌唱しながら解説する形式に変更した、と子どもの時に民間人から聞いたことがあります。また、その後、ホールチたちが語る主な脚本として東部モンゴル地区に伝播しましたが、この小説を内モンゴルまで持ち込んだ人はダンスニマ・ホールチでした。モンゴルジン旗でホールチと称される人には、「この脚本を語れないとホールチになれない」という言い方があります。

協力者3番 私は内モンゴル人民出版社から出版したモンゴル語版と、遼寧民族出版社から出版した漢語版を何度も読んだことがあります。章立ておよび内容から見ると、そんなに大きな差はありませんが、作者について両書で述べていることはかなり異なっています。例えば、モンゴル語版では、瑞應寺のラマ僧たちが共に創作したと書いてあ

りますが、漢語版では、エンケテグス創作したとはっきり記述しています。この作者を明らかにするために、私も瑞應寺を退職したラマ僧を中心に調査をしたことがあります。その結果として確かにエンケテグスが自分で書いたことが証明できました。理由は、第1部の『苦喜伝』から第6部の『寒風伝』までその文脈はほぼ一様です。

**協力者4番** 当時のモンゴルジン旗では、何人もの人がある特定の場所で集まって、エンケテグスの創作した『興唐五伝』を朗読することが趣味であり、唯一の楽しめることでもありましたので、老若男女と問わず、すべての人が大好きな小説でした。しかし、時代の変遷によって、視聴者と朗読者が減ったことがありましたので、最初の朗読から次第にリズムに合わせて語るように変化しましたが、その後に説唱芸人は楽器を弾きながら語るように定まりました。私も子ども時に、同級生たちと共に集まって、この小説を朗読していましたが、このような形式は20世紀の後半まで続いてきました。

**協力者5番** この『興唐五伝』の故事は章回体の文体で創作されていますので、朗読者と説唱者にとって大変便利です。例えば、私の観察によると、多くのホールチは『興唐五伝』を語る際に、その中からある章（段落）を選出して、それを重点的に語るがよくありました。また、私の子どもの時に、モンゴルジン旗で『興唐五伝』を知らない人はいなかったと思います。その時にはテレビのような通信できるものはありませんでしたので、子どもたちは小説を読んだり、共に集まって遊んだり、ホールチの語るウリゲルを聴いたりしていましたが、知識も蓄積していました。

**協力者6番** 私が『興唐五伝』のことを知りましたのは、小学校の時でした。父親はホールチなので、毎日、家に様々な民間芸人が集まってくれます。それらの人たちが常に語るのは『興唐五伝』のウリゲルでした。成人した後、私も父親の指導を受けながらホーリンウリゲルを学びましたが、最初のテキストはこの小説でした。具体的なやり方を言うと、まず楽器の練習を毎日して、モンゴル語の読む・書く・聞く能力を上達させました。次に、1段落を何度も繰り返して朗読することでしたが、かなり熟読した後で、ゆっくり楽器のリズムに合わせて語ってみます。もちろん、弾きながらウリゲルを語る

ことは簡単ではないので、このところでもかなりの時間がかかりました。しかし、この練習が上手くできれば、ホーリンウリゲルの基礎が把握できたということになります。

**協力者 7 番** ホールチの語る『興唐五伝』は、瑞應寺のラマ僧文人であるエンケテグスの創作した作品ですが、ダンスンニマ・ホールチの遊芸によって、内モンゴルに持ち込まれました。具体的な内容を紹介すると、この小説は李氏の子孫である李子暉が皇位に就いた時から語り始め、第 1 部の『苦喜伝』からの続編である『寒風伝』まで、忠義と正義を代表する唐朝の建国功臣の徐茂公・秦叔宝・程咬金・羅成・尉遲恭の子孫達が、狡猾と邪悪を代表する狡い奸臣の符氏等と闘争したことを中心にしています。第 1 部の『苦喜伝』に登場する主人公・唐高祖李淵の第 8 代子孫の炎熊皇帝・李子暉から、続編の『寒風伝』に登場する李信皇帝まで、100 年以上の唐朝の歴史を語ります。全巻において大きい国と小さい国が 20 カ国ほど出現しますが、これらの国は同盟国であり、隣国であり、敵国でもありました。これらの国々の多くは、唐朝内部にいる奸臣符氏と共謀して炎熊皇帝が美色にのめり込んでいるのを機に、唐朝の政権を転覆させようと謀っていました。しかし、彼らの陰謀が発覚し、建国功臣の子孫薛嵩・秦龍・程四海・羅猛・尉遲顛徳・徐世黎・秦俊彪・鐘旭亮・薛寒・羅強に鎮圧されるのです。

**協力者 8 番** 私の知っている限り、『興唐五伝』は、第 1 部の『苦喜伝』、第 2 部の『全家福』、第 3 部の『殤妖伝』、第 4 部の『契僻伝』、第 5 部の『羌胡伝』（上部・下部）で構成されており、さらにその続編である『寒風伝』（第 6 部と言える）も残されています。この小説は隋唐時代の社会環境・歴史文化を紹介するものでしたが、『苦喜伝』の最初には、隋朝の皇帝・隋煬帝が自分の父親である隋文帝・楊堅を殺して、隋朝の政権を支配して以来、全国の徴税を増加するなど、官僚が民衆を圧迫する現象が次第に増え、隋朝の各地で隋煬帝の政権に反対する声が日々に高まってきました。それゆえに、もともとの隋朝で正義の代表であった李淵は、塗炭の苦しみに巻き込まれた民衆を救い出すため、隋朝各地の正義軍が集まって酒色に溺れて、なんの見境もない隋煬帝を討伐し、隋朝の政権を転覆しました。こういう段落がありましたので、印象深かったです。

## 二 新たな「学校継承の方法」に関するインタビュー

私は東京学芸大学大学院・学校教育学研究科・言語文化系教育講座でモンゴル族の伝統芸能であるホーリンウリゲルを中心に研究をしております。2018年に第1回のインタビュー調査を実施する時に、この地域で活躍するホールチ（5番）から沙拉モンゴル族でホーリンウリゲルを学校教育に導入して、子どもに継承してもらっていることを聞きましたので、学校の状況およびホーリンウリゲルの継承クラスに関して教えていただければと考えております。

ご協力をいただける場合は、誠に申し訳ありませんが、以下の項目についてご負担のないところで、お伺いしたいと思います。何卒、よろしくお願い申し上げます。なお、万一、途中で、インタビューの打ち切りを希望される場合は、遠慮なくお申し出ください。なお、研究の成果は、大学院博士論文としてまとめさせていただく予定です。

\*

この第2回インタビュー調査は、前回（2018年）の続きとして、2019年8月26日から9月18日にかけて、中国・遼寧省の西北部に位置しているモンゴルジン旗にある沙拉モンゴル族学校を中心に行った。4人の協力者の民族、年齢、性別、学歴、職務、生活地域を整理すると、次のようであったが、ここで特に解説する必要があることは、10番の教師（担任先生）が2018年（第1回）の調査協力者の5番と同じ人であるという点である。

順 番	民 族	年 齢	性 別	学 歴	職 務	生活地域
9	モンゴル族	55歳	男	大 学	校 長	遼寧省
10	モンゴル族	54歳	男	大 学	教 師	遼寧省
11	モンゴル族	54歳	男	大 学	主 任	遼寧省
12	モンゴル族	50歳	男	大 学	教 師	遼寧省

総合質問　　沙拉モンゴル族の状況および新たな「学校継承の方法」に関する状況を教えてくださいませんか？

**協力者 9 番** 沙拉モンゴル族学校は、モンゴル族の教師とモンゴル族の生徒を主とするモンゴル族の学校であり、校内を普蒙クラスと純蒙のクラスに分けています。普蒙クラスというのは、表面的に理解すると普通のモンゴル族クラスであり、このクラスの児童・生徒は全員モンゴル族出身であります。モンゴル語の授業は母語のモンゴル語で行う以外に、ほかの授業は完全に漢語で行う教育モデルです。純蒙クラスというのは、表面的に理解すると純粋なモンゴル族クラスであり、このクラスの生徒は全員モンゴル族出身で、普蒙クラスと異なる所は純蒙クラスの全ての授業は母語のモンゴル語で授業を行うことです。国家の民族教育に関する政策から見ると、中国政府は漢族以外の 55 少数民族に対して、普通話（漢語）と民族言語を同時に教える「双語教育政策」を実施することになっています。それによって、全国の各地に住むモンゴル族の子どもたちは、自民族の母語・モンゴル語を勉強する以外に、国家の共通語である漢語を勉強することが義務付けられており、小学校 1 年生から必ず漢語を学ばなければならないことになっています。しかし、近年の国家教育制度を改善する政策によって、各モンゴル族の幼稚園に入園した子どもを対象に、幼児教育の段階から漢語で授業することも義務化されるようなので、モンゴル族の各地で不安が高まっています。私から見ると、現在の視聴者は言語・文字の消失に伴い、若い視聴者がウリゲルの意味をまったく理解していない状況であり、理解できているのは大体 40 歳以上であると考えられます。こんな状況になったのは、教育からの影響だと考えられますが、近年の各モンゴル族地域において、モンゴル族の親たちは子どもの将来のため、モンゴル族の子どもを幼稚園から小学校、中学校、高校、大学まで一貫して漢語の学校に行かせて勉強させるのが誇りとなっています。彼らの考えとしては、漢語が把握できれば、中国で生きられ、さらに多数の漢族の人と交流ができるということがあるからです。また、近年のモンゴル族の子どもに「漫画」と「ホーリンウリゲル」の選択肢を挙げれば、いまの子どもの 90%以上は「漫画」を選択し、残りの 10%の子どもが「ホーリンウリゲル」を選ぶことが確定されているので、若き後継者の育成問題がなかなか解決し難くなり、ホーリンウリゲルという伝統芸能も次第にモンゴル族の人々の視線から離れてしまい、歴史の舞台から退出しています。沙拉モンゴル族学校では、主に小学校 1 年生から 6 年生を対象に、モンゴル語が話せる、モンゴル文字が読めるような優秀な児童を優先する、という制度で生徒を選んでいきます。

教員に関して言えば、楽器とウリゲルを教える教員は1人、モンゴル語・モンゴル文字を教える教員は2人であり、主に生徒の言語のレベルによって教育することとなっています。

**協力者10番** 近年の中国で現代の情報媒介の発展によって、「南で抖音、北快手」という言い方が形成されていますが、「抖音」は中国の南方地区で非常に流行っているアプリのことを指し、「快手」は北方地区に住む民衆の中で流行っているアプリのことを指しています。この「抖音」と「快手」は、別々のマスメディア会社が管理していますが、使用者は普通の民衆から有名な芸能人・俳優に至っており、彼らは毎日に「抖音」と「快手」の機能を使って、ライブ配信しているので、インフルエンサー（ネット有名人）文化が時代の潮流となっているのが現状となります。ホーリンウリゲルの語り手であるホールチは、師匠の語っているホーリンウリゲルの意味を十分に理解できていません。そのため、師匠はまず一段落を語ってから弟子たちは師匠を真似て繰り返して語ります。また、モンゴル文字を読めない若いホールチがいて、師匠の書いた台詞の内容をまったく理解できず、そのままアドバイスも聞かずに覚えてしまうホールチもいて、彼らは自分の語っているウリゲルの意味もすべて理解していない状態で語り続けています。小学校・低学年の目標として、第一は、モンゴル語で伝統楽器ドリボンウタストホールの各部件の名称が呼べることです。第二は、モンゴル語でドリボンウタストホールの構成をすぐ説明できることです。例えば、ドリボンウタストホールは琴頭・琴棒・琴筒・琴弓の四つの部分で構成されますが、これ以外に四つの弦と弦を調整する四つの琴軸がある。琴軸の1軸と3軸は外軸であり、2軸と4軸は内軸です。また、琴棒の真ん中の「音喉」があり、その楽器の音調・音響を調整します。第三は、モンゴル語で略譜（数字譜）の順序と音階の呼び方が呼べることです。第四は、モンゴル語でモンゴル族の伝統楽器を幾つか呼べることです。第五は、ドリボンウタストホールの基礎演奏技法を把握することです。例えば、1弦と3弦は内弦、2弦と4弦は外弦、楽器をD調で設定する場合は、内弦は1、外弦は5、即ちD=1弦—5弦となります。次に、小学校・中学年の目標として、第一は、自分で楽器を弾きながらモンゴル語でウリゲルを語ることです。例えば、ウリゲルの曲目「皇帝上朝」を2分から4分間語ります。第二は、モンゴル民族に特有の古代民



謡・現代民謡・流行民謡を2曲から4曲歌えることです。第三は、授業中にモンゴル語でドリボンウタストホールの部位名と指の部位が説明できることです。例えば、D調の音調で1・2・3・4・5・6・7を演奏する際に、正しい置き場に置くことです。最後に、小学校・高学年の目標として、第一は、授業中にモンゴル語で略譜によく使う音符と休符が説明できることです。第二は、モンゴル語で3曲から5曲のモンゴル民謡が歌えることです。第三は、エンケテグスの創作した長編の歴史小説シリーズである『興唐五伝』の物語をモンゴル語で読み、モンゴル民謡の歌詞を朗読することです。第四は、ドリボンウタストホールを弾きながらモンゴル語で4分から10分間のウリゲルを語ることです。ホーリンウリゲルを継承する芸術クラス」の主力は、純蒙クラスと普蒙クラスのモンゴル族の児童ですが、漢族の児童・生徒はホーリンウリゲルに大変興味を持ち、漢族クラスから普蒙クラスにクラスを変えて、モンゴル語を学びながらホーリンウリゲルの技法を勉強している特例がありました。毎回のホーリンウリゲル授業を実施する前に、2日や3日間の時間を利用して、子ども分かりやすく楽器の教材・詞牌の教材・曲牌の教材・モンゴル語の教材を作った後、さらに児童・生徒の人数に合わせてコピーして、児童・生徒に配っているので、事前準備の段階で相当の時間が掛かっています。

**協力者 11 番** 実際にすべての授業をモンゴル語で勉強した児童・生徒は、大学入試試験で全国各地の大学に入学しますが、多くの大学で高校時代のようなモンゴル語教育が設定されていませんでしたので、漢語で授業することおよび漢語で試験を受けることが困難となり、次第に大きな社会問題ともなっています。特に、モンゴル語で授業を受けた学生が大学を卒業した後、北京や上海などの大都市で漢族の社員ばかりの会社で働くとき、漢語が上手く使えないことの影響で、民族差別が行われていることが頻繁に出現しているので、モンゴル族の親の中には、モンゴル語は必要ないなどという言論が出てきていることです。なお、各モンゴル族の学校では、国家民族教育を管理する部門の指導もとで、できる限りモンゴル語で授業を実施していますが、内モンゴル自治区以外の東北三省に生活しているモンゴル族の学生は、モンゴル語の基礎が弱いので、教師の講じている内容を十分に理解できていない現象が普遍的に存在しています。また、授業はモンゴル語で実施していますが、放課後にこれらの学生はモンゴル語で会話する人は少

なくなっているため、モンゴル語のレベルもなかなか上達できません。阜新モンゴル族自治県・沙拉モンゴル族学校は、2014年の時点で国家級非物質文化遺産ホーリンウリゲルの国家伝承人、遼寧省人民政府から優秀な民間芸術家という称号を受けた協力者10番を沙拉モンゴル族学校の特任教師として招聘し、ホーリンウリゲルを生徒に教えることを通して、ホーリンウリゲルを継承させる新しい継承方式として探索することが決まり、そのときから計算すると現在まで5年以上になっています。この5年間の歳月にいろいろなことが生じましたが、まず、担任の先生を特任教師としてホーリンウリゲルという芸能・芸術を生徒に教えてもらう予定でした。しかし、ホーリンウリゲルを語る際に使っているモンゴル語は生徒が日常生活で話すモンゴル語ではなく、生活用語より深い書きことばであるため、生徒たちは自分の語っているウリゲルの意味が理解できませんでした。このような状況下で、担任の先生は音楽教師とモンゴル語教師両方の職を務め、両方の仕事をしていました。また、ホーリンウリゲルを語るときには、必ずドリボンウタストホールという楽器を使うことが常識となっていますので、ホーリンウリゲルを勉強するには、まず、ドリボンウタストホールの弾き方を勉強して楽器が上手く使用できるようになると、次に、ホーリンウリゲルの曲牌と詞牌を学ぶという順番になります。しかし、担任先生は生徒にホール（楽器）の各構成と各部位の名称を教える際に、生徒たちは深いモンゴル語の意味が理解できず、構成図と各部位のモンゴル語の名称を新しいモンゴル語の語彙として勉強しました。このような状況を解決するため、私と担任先生は、生徒にドリボンウタストホールの弾き方とホーリンウリゲルの語り方を教えるより、まず、モンゴル語の知識を強化することから始めました。この5年間、生徒にホーリンウリゲル専用のモンゴル語を教えることを通して、私たちは様々な大変なことに接し、経験も積んできました。そして、生徒たちのモンゴル語と琴技が次第に上達する様子を見て、感動しました。例えば、去年の学園祭でドリボンウタストホールを弾きながらウリゲルの1段落を生徒に披露させましたが、そのときに来場して下さった来賓とほかのモンゴル族学校の教師たちは全員、生徒の琴技に驚きました。

**協力者 12 番** 私は担任の先生の助手として、モンゴル語を共同で教えています。自由解放となったグローバル社会において、漢族の男性がモンゴル族の女性と結婚している

現象、あるいは、逆にモンゴル族の男性が漢族の女性と結婚することが普通になっています。それゆえに、このような二重性を持つ家庭では、モンゴル語の使用率もかなり異なっているのが現状ですが、男性がモンゴル族の場合は、自分の子どもをモンゴル族の学校に入学させようと考えている親が多くあります。逆に男性が漢族の場合は、自分の子どもにモンゴル語を勉強させる親は極めて少数です。中国ではモンゴル族に対して、実はモンゴル語と漢語を同じレベルまで達成させることを目的として「蒙漢双語教育」（モンゴル族の場合は、モンゴル語と漢語を同時に教えることを指す）制度を実施してきましたが、近年は漢語に偏った「新たな双語教育」へ急速に移行しました。

### 第三節 第3回の調査内容

私は東京学芸大学大学院・学校教育学研究科・言語文化系教育講座でモンゴル族の伝統芸能であるホーリンウリゲルを中心に研究をしております。2006年に「蒙古族烏力格尔」（モンゴル族ウリゲル）は、中国の「第一批国家級非物質文化遺産」に認定されて以来、ホーリンウリゲルという伝統芸能がもう一度発展する時期を迎えてきましたので、このような古い文化は学校教育に導入されるほか、近年はデータベース化も進んでいるようでありますので、非物質文化遺産になってホーリンウリゲル芸術に関する事情を教えていただければと考えております。

ご協力をいただける場合は、誠に申し訳ありませんが、以下の項目についてご負担のないところで、お伺いしたいと思います。何卒、よろしくごお願い申し上げます。なお、万一、途中で、インタビューの打ち切りを希望される場合は、遠慮なくお申し出ください。なお、研究の成果は博士論文としてまとめさせていただく予定です。

＊

この第3回インタビュー調査は、2020年9月17日から9月25日にかけて、中国・遼寧省のホールチ1名、内モンゴル自治区のホルチン左翼中旗のホールチ1名、吉林省の前ゴルロスモンゴル族自治県のホールチ1名、黒龍江省の民間芸人1名と政府の職員1名を対象に調査を実施した。ここで特筆して解説する必要があることは、第3回のインタビュー調査は、2018年の第1回と2019年の第2回の補充調査として実施したの

で、第1回のホールチ2番（吉林省）と第3回の3番は同じ人であり、第1回の5番（遼寧省）と第2回の6番（遼寧省）と10番の教師（遼寧省）が第3回の1番と同じ人である。第3回の協力者6人の民族、年齢、性別、学歴、職務、生活地域を整理すると、以下のようであった。

順 番	民 族	年 齢	性 別	学 歴	職 務	生活地域
1	モンゴル族	54 歳	男	高 校	伝 承 人	遼 寧 省
2	モンゴル族	59 歳	男	高 校	伝 承 人	内 蒙 古
3	モンゴル族	52 歳	男	高 校	伝 承 人	吉 林 省
4	モンゴル族	58 歳	男	高 校	民 間 芸 人	黒 龍 江 省
5	モンゴル族	55 歳	男	大 学	政 府 職 員	黒 龍 江 省

## 一 非物質文化遺産に関わるホーリンウリゲルについてインタビュー

**総合質問** 国家級非物質文化遺産に認定されたホーリンウリゲルに関する事情を教えてくださいませんか？

**協力者 1 番** 2006 年に「モンゴル族ウリゲル」という項目は、中国の国家国務院からの審査を通して、国家級非物質文化遺産名録に認定されて以来、ホーリンウリゲルと言う伝統芸能に関わる語り手のホールチ、説唱脚本の内容と芸術的な特徴、伴奏楽器ドリボンウタストホルの由来・作り方・革新方法などすべての構成要素が学術研究の対象になっており、研究者も一時的に急増し、今年新型コロナウイルスの影響も受けず、十何人の若き研究者に電話でインタビュー調査を受けました。しかし、これらの研究者たちはホールチの演唱時間と説唱内容が変化していることに注目せず、自分の研究したい所だけ調査しています。率直に言うと、ホールチの演唱時間は昔の何カ月から現在の30分、あるいは20分に絞られ、5分で完了する時もかなり増えており、形式上の遊びものになっています。あなた（筆者）は若き後継者として、この芸能を研究しながら実際にも継承してください。特に時間があれば、毎日楽器を弾きながら自分の説唱能力と

即興する技法を高めることが大切です。2016年に、遼寧省の非物質文化遺産保護センターのメンバーが我が家に来てホーリンウリゲルの順番通りに、「前奏曲」「点綱曲」「前口上」「上朝調」「將軍令」「出征曲」「行軍曲」「山水頌」など20種類の曲牌と、ホーリンウリゲルの伝統的な脚本である『興唐五伝』の一部を録音・撮影し、そして、その後にモンゴル語で説唱したすべての内容を漢語で翻訳して、自治県の非物質文化遺産保護センターを通して、遼寧省の非物質文化遺産の関連部門に提出したことがあります。また、2017年に、遼寧省の非物質文化遺産センターに招待されて、首府都市の瀋陽にある瀋陽音楽学院に行き、ホーリンウリゲルの脚本を録音したこともありました。私は子どもの頃からホールチである父からホーリンウリゲルの説唱方法および伴奏楽器であるドリボンウタストホルの弾き方を学びながら、小学校の時から夏休みと冬休みの休み時間しっかり利用して、父と共にモンゴル族の人々が集住している村落に行き、お年寄りの誕生日パーティーおよび結婚式などの場所でモンゴル民歌・ホルボー・叙事民歌・ホーリンウリゲルの脚本を披露・上演してきました。その時の情景を振り返ると、「肩摩穀撃と千客万来」という四字熟語を使って表現することができます。

**協力者 2 番** モンゴル語の民謡民歌・ホルボー・ウリゲルトドー・ホーリンウリゲルの脚本を録音しながら撮影することは、各モンゴル族地域にあるモンゴル語広播電台です。ずっと昔からやってきましたが、データベース化のために収集しているのかははっきりわかりません。2016年に、ホルチン左翼中旗の文化部門の人が家に来て、私の説唱するウリゲルトドーとホーリンウリゲルの脚本を録音・撮影したことがあります。また、2018年と今年(2020)年の8月～10月間にも、非物質文化遺産の研究に関わる組織でこの地域に流行っている歌と曲を録音・撮影したことがあります。主にモンゴル民歌の「ハンデリマ」(韓徳日瑪)と「バイリィングウンズウ」(白玲公主)、ホルボーの「ホルチンのマガタラ」(科尔沁贊歌)と「チンギス・ハーンのマガタラ」(成吉思汗贊歌)、ウリゲルトドーの「トクトホ・バトル」(陶克陶胡巴特尔)、ホーリンウリゲルの「リボロン」(李宝龍)と「センゲリンチン」(僧格仁欽)などの曲目と脚本を収録した。近年、東部モンゴル地区では40歳以下の青年と壮年の中でモンゴル語を話せる人が年々減少しているため、現在ホールチたちの語るウリゲルの意味をしっかりと理解できる人は40歳

以上および最も年上の老人になっています。また、携帯電話などの現代の情報媒介が普及しているため、お年寄り人でも日々の生活の中で現代的な情報媒介に親しめるようになってきたので、それでホールチの語るウリゲルを聴きたいと考えている人も現れています。現在の中国本土（特に東部モンゴル地区を指す）では、長編の英雄叙事詩および歴史小説を語ることのできるホールチは、大幅に計算すると 20 人であるが、慎重に計算すると 10 人（中編や短編の脚本を語る芸人はホルボーチンおよびウリゲルトドーチンと呼ばれる）程度になりますが、その中でジャルート旗の「勞スル・ホールチ」が 2010 年に逝去したことは、ホーリンウリゲルにおいては大きな損失でした。

**協力者 3 番** ホーリンウリゲルという伝統芸能は、国家級非物質文化遺産項目に認定される前、吉林省の前ゴルロス（郭爾羅斯）モンゴル族自治州地区では、モンゴル族に人々が会話する時に、モンゴル語の中に多くの漢語を挿入する習慣が形成されたので、ホーリンウリゲルの視聴者が激減していた時期でした。しかし、2006 年にこのような（ホーリンウリゲル）上演形式は、国家の文化部門に重要視されて、「第一批国家級非物質文化遺産」に認定されて以来、文化部が専用の資金および非物質文化遺産に関する制度を相次いで作り上げたので、我々のようなホールチたちも、もう一度上演の場に戻ることができました。現在は毎年 2～3 回の「ホーリンウリゲル試練クラス」を開催して、ホーリンウリゲルを学びたい児童・生徒に教えることが実現できたので、若き後継者を育成する仕事が順調に進んでいるようではありますが、モンゴル語の能力が足りないなど様々な原因でなかなか高いレベルの若いホールチを育成することが困難の状態にあります。吉林省の前ゴルロスモンゴル族自治州では、2016 年前後の時期からホーリンウリゲルをデータベース化する仕事を始めました。私自身は 2016 年の年末に吉林省の非物質文化遺産センターに招待されて、短編のホルボーおよび長編の『ダロン・タェジ』という脚本を録音・撮影したことがありました。また、2019 年の 6 月にも、吉林省・非物質文化遺産センターの調査員が前ゴルロスモンゴル族自治州に来て視察するとき、吉林省の国家級非物質文化遺産項目のデータベース化資料を収集しているという理由で、短編のホルボーおよびモンゴル民謡を録音・撮影したことがあります。

**協力者 4 番** 近年のグローバル時代において生活方式の変化に伴い、モンゴル族の若者たちは次第に現代の流行文化に興味を持つようになり、伝統的な芸能と文化にあまり興味を持たず、伝統的なものは「頑固、古い、価値がない」などという考え方が生じてきて、モンゴル民族の誇りとなる伝統文化を伝承していきたいと考える若者は少なく、その中で特にホールチを仕事として継承していく者は鳳凰の羽毛と麒麟の角のように少なくなっているため、21 世紀までに継承されてきたホーリンウリゲル芸術に対して、次世代の若者に継承してもらうことが非常に困難になってきました。現在の黒龍江省・ドルボド（杜爾伯特）モンゴル族自治州では、低音・高音・低音のドリボンウタストホールを演奏する独奏者が増えていますが、ホールチのような低音のドリボンウタストホールを自ら弾いて長編の英雄叙事詩や歴史小説を語るホールチはほとんど見えなくなってきたので、ホーリンウリゲルのデータベース化という概念が存在していません。しかし、黒龍江省のモンゴル民謡民歌も非物質文化遺産項目に認定されているので、モンゴル民謡民歌に対するデータベース化は、2016 年から始めていますが、近年、何度も録音・撮影したことがあります。

**協力者 5 番** 私が生活している黒龍江省のドルボド（杜爾伯特）モンゴル族自治州では、20 世紀の 80 年代までに低音のドリボンウタストホールを背負って遊芸しながらホーリンウリゲルを説唱するホールチがあちこちで活躍している様子が見られましたが、グローバルが進む 21 世紀に入った後、次第に見えなくなってしまいました。それゆえ、2006 年に内蒙古自治区のジャルート（扎魯特）旗とホルチン右翼中旗が、遼寧省の阜新モンゴル族自治州と吉林省の前ゴルロス（郭爾羅斯）モンゴル族自治州と共同で「第一批国家級非物質文化遺産」項目を申請する時に、黒龍江省にホールチがいなかったため、それらの地区と共に申請することができませんでした。また、近年の黒龍江省では、もし全国的な芸能大会およびホーリンウリゲルの試合があれば、内モンゴル自治区のある地域からホールチを招待してきて、黒龍江省の代表として大会や試合に参加してもらっています。

## 付記

資料編では、東部モンゴル地区の各地域で活躍している政府の職員、ホールチ、民俗家、民間芸人などの関連者を対象にインタビュー調査を実施して、その地域のホーリンウリゲルの歴史および現状を把握した。その上で、このような膨大な一次資料をきちんと使用して、これまでのホーリンウリゲル研究で解決しなかったエンケテグス・ホールチとダンスニマ・ホールチの課題を論証したほか、さらにホーリンウリゲルという伝統芸能が民間芸術から国家級非物質文化遺産項目に認定された経緯および認定された後の現状について詳しく記述することができた。



## モンゴル語版の調査内容









نڈیا رہنمائی کے لئے مسہور ہے۔

نڈیا کے لئے رہنمائی کے لئے مسہور ہے۔

نڈیا کے لئے رہنمائی کے لئے مسہور ہے۔

نڈیا کے لئے رہنمائی کے لئے مسہور ہے۔

نڈیا کے لئے رہنمائی کے لئے مسہور ہے۔

نڈیا کے لئے رہنمائی کے لئے مسہور ہے۔

نڈیا کے لئے رہنمائی کے لئے مسہور ہے۔

نڈیا کے لئے رہنمائی کے لئے مسہور ہے۔

نڈیا کے لئے رہنمائی کے لئے مسہور ہے۔

نڈیا کے لئے رہنمائی کے لئے مسہور ہے۔

نڈیا کے لئے رہنمائی کے لئے مسہور ہے۔

نڈیا کے لئے رہنمائی کے لئے مسہور ہے۔

نڈیا کے لئے رہنمائی کے لئے مسہور ہے۔









١٤٢١ھ ١٢٧٠ھ ١٢٦٠ھ ١٢٥٠ھ ١٢٤٠ھ ١٢٣٠ھ ١٢٢٠ھ ١٢١٠ھ ١٢٠٠ھ ١١٩٠ھ ١١٨٠ھ ١١٧٠ھ ١١٦٠ھ ١١٥٠ھ ١١٤٠ھ ١١٣٠ھ ١١٢٠ھ ١١١٠ھ ١١٠٠ھ ١٠٩٠ھ ١٠٨٠ھ ١٠٧٠ھ ١٠٦٠ھ ١٠٥٠ھ ١٠٤٠ھ ١٠٣٠ھ ١٠٢٠ھ ١٠١٠ھ ١٠٠٠ھ ٩٩٠ھ ٩٨٠ھ ٩٧٠ھ ٩٦٠ھ ٩٥٠ھ ٩٤٠ھ ٩٣٠ھ ٩٢٠ھ ٩١٠ھ ٩٠٠ھ ٨٩٠ھ ٨٨٠ھ ٨٧٠ھ ٨٦٠ھ ٨٥٠ھ ٨٤٠ھ ٨٣٠ھ ٨٢٠ھ ٨١٠ھ ٨٠٠ھ ٧٩٠ھ ٧٨٠ھ ٧٧٠ھ ٧٦٠ھ ٧٥٠ھ ٧٤٠ھ ٧٣٠ھ ٧٢٠ھ ٧١٠ھ ٧٠٠ھ ٦٩٠ھ ٦٨٠ھ ٦٧٠ھ ٦٦٠ھ ٦٥٠ھ ٦٤٠ھ ٦٣٠ھ ٦٢٠ھ ٦١٠ھ ٦٠٠ھ ٥٩٠ھ ٥٨٠ھ ٥٧٠ھ ٥٦٠ھ ٥٥٠ھ ٥٤٠ھ ٥٣٠ھ ٥٢٠ھ ٥١٠ھ ٥٠٠ھ ٤٩٠ھ ٤٨٠ھ ٤٧٠ھ ٤٦٠ھ ٤٥٠ھ ٤٤٠ھ ٤٣٠ھ ٤٢٠ھ ٤١٠ھ ٤٠٠ھ ٣٩٠ھ ٣٨٠ھ ٣٧٠ھ ٣٦٠ھ ٣٥٠ھ ٣٤٠ھ ٣٣٠ھ ٣٢٠ھ ٣١٠ھ ٣٠٠ھ ٢٩٠ھ ٢٨٠ھ ٢٧٠ھ ٢٦٠ھ ٢٥٠ھ ٢٤٠ھ ٢٣٠ھ ٢٢٠ھ ٢١٠ھ ٢٠٠ھ ١٩٠ھ ١٨٠ھ ١٧٠ھ ١٦٠ھ ١٥٠ھ ١٤٠ھ ١٣٠ھ ١٢٠ھ ١١٠ھ ١٠٠ھ ٩٠ھ ٨٠ھ ٧٠ھ ٦٠ھ ٥٠ھ ٤٠ھ ٣٠ھ ٢٠ھ ١٠ھ ٠ھ

وحیدار حسین و خدیوہ کمال ، ۲۰۰۶ء کے لیے لکھے گئے ہیں۔ ان کے علاوہ دیگر بہت سے ماہرین نے ان کے بارے میں لکھا ہے۔ ان کے بارے میں لکھنے والے میں سے ایک ڈاکٹر عزیز گل ہیں جن کے بارے میں ان کے ایک کتابچے "عزت و احترام" میں لکھا ہے کہ وہ ایک ایسی شخصیت تھیں جن کی زندگی بھر ان کی عظمت اور شان کے ساتھ ساتھ ان کی سادگی اور عینیت بھی ایک خاص نمونہ بن چکی تھی۔ ان کے بارے میں لکھنے والے میں سے ایک اور شخصیت ڈاکٹر عزیز گل ہیں جن کے بارے میں ان کے ایک کتابچے "عزت و احترام" میں لکھا ہے کہ وہ ایک ایسی شخصیت تھیں جن کی زندگی بھر ان کی عظمت اور شان کے ساتھ ساتھ ان کی سادگی اور عینیت بھی ایک خاص نمونہ بن چکی تھی۔

2006ء کے لیے لکھے گئے ہیں۔ ان کے علاوہ دیگر بہت سے ماہرین نے ان کے بارے میں لکھا ہے۔ ان کے بارے میں لکھنے والے میں سے ایک ڈاکٹر عزیز گل ہیں جن کے بارے میں ان کے ایک کتابچے "عزت و احترام" میں لکھا ہے کہ وہ ایک ایسی شخصیت تھیں جن کی زندگی بھر ان کی عظمت اور شان کے ساتھ ساتھ ان کی سادگی اور عینیت بھی ایک خاص نمونہ بن چکی تھی۔

ان کے بارے میں لکھنے والے میں سے ایک ڈاکٹر عزیز گل ہیں جن کے بارے میں ان کے ایک کتابچے "عزت و احترام" میں لکھا ہے کہ وہ ایک ایسی شخصیت تھیں جن کی زندگی بھر ان کی عظمت اور شان کے ساتھ ساتھ ان کی سادگی اور عینیت بھی ایک خاص نمونہ بن چکی تھی۔ ان کے بارے میں لکھنے والے میں سے ایک اور شخصیت ڈاکٹر عزیز گل ہیں جن کے بارے میں ان کے ایک کتابچے "عزت و احترام" میں لکھا ہے کہ وہ ایک ایسی شخصیت تھیں جن کی زندگی بھر ان کی عظمت اور شان کے ساتھ ساتھ ان کی سادگی اور عینیت بھی ایک خاص نمونہ بن چکی تھی۔

ان کے بارے میں لکھنے والے میں سے ایک ڈاکٹر عزیز گل ہیں جن کے بارے میں ان کے ایک کتابچے "عزت و احترام" میں لکھا ہے کہ وہ ایک ایسی شخصیت تھیں جن کی زندگی بھر ان کی عظمت اور شان کے ساتھ ساتھ ان کی سادگی اور عینیت بھی ایک خاص نمونہ بن چکی تھی۔ ان کے بارے میں لکھنے والے میں سے ایک اور شخصیت ڈاکٹر عزیز گل ہیں جن کے بارے میں ان کے ایک کتابچے "عزت و احترام" میں لکھا ہے کہ وہ ایک ایسی شخصیت تھیں جن کی زندگی بھر ان کی عظمت اور شان کے ساتھ ساتھ ان کی سادگی اور عینیت بھی ایک خاص نمونہ بن چکی تھی۔























زمانن مایه‌های متنوعی که در آنجا یافت می‌شود، از جمله مایه‌های طبیعی و مایه‌های مصنوعی، در صنایع غذایی، دارویی، آرایشی، بهداشتی، نساجی، چاپ، و صنایع دیگر کاربرد دارند. این مایه‌ها در صنایع غذایی برای بهبود طعم، بافت و ماندگاری مواد غذایی استفاده می‌شوند. در صنایع دارویی، مایه‌ها برای تسهیل در جذب دارو و افزایش اثرگذاری آن استفاده می‌شوند. در صنایع آرایشی و بهداشتی، مایه‌ها برای ایجاد بافت نرم و لطیف به محصولات استفاده می‌شوند. در صنایع نساجی، مایه‌ها برای بهبود خواص پارچه‌ها و افزایش مقاومت آن‌ها استفاده می‌شوند. در صنایع چاپ، مایه‌ها برای بهبود کیفیت چاپ و جلوگیری از خش‌خوردگی استفاده می‌شوند. در صنایع دیگر، مایه‌ها برای ایجاد خواص خاص و بهبود کیفیت محصولات استفاده می‌شوند.

مایه‌ها در صنایع غذایی برای بهبود طعم، بافت و ماندگاری مواد غذایی استفاده می‌شوند. در صنایع دارویی، مایه‌ها برای تسهیل در جذب دارو و افزایش اثرگذاری آن استفاده می‌شوند. در صنایع آرایشی و بهداشتی، مایه‌ها برای ایجاد بافت نرم و لطیف به محصولات استفاده می‌شوند. در صنایع نساجی، مایه‌ها برای بهبود خواص پارچه‌ها و افزایش مقاومت آن‌ها استفاده می‌شوند. در صنایع چاپ، مایه‌ها برای بهبود کیفیت چاپ و جلوگیری از خش‌خوردگی استفاده می‌شوند. در صنایع دیگر، مایه‌ها برای ایجاد خواص خاص و بهبود کیفیت محصولات استفاده می‌شوند.

**ساختار و خواص مایه‌ها**

مایه‌ها در صنایع غذایی برای بهبود طعم، بافت و ماندگاری مواد غذایی استفاده می‌شوند. در صنایع دارویی، مایه‌ها برای تسهیل در جذب دارو و افزایش اثرگذاری آن استفاده می‌شوند. در صنایع آرایشی و بهداشتی، مایه‌ها برای ایجاد بافت نرم و لطیف به محصولات استفاده می‌شوند. در صنایع نساجی، مایه‌ها برای بهبود خواص پارچه‌ها و افزایش مقاومت آن‌ها استفاده می‌شوند. در صنایع چاپ، مایه‌ها برای بهبود کیفیت چاپ و جلوگیری از خش‌خوردگی استفاده می‌شوند. در صنایع دیگر، مایه‌ها برای ایجاد خواص خاص و بهبود کیفیت محصولات استفاده می‌شوند.







یخوهر زامغفمنش ،مقصرمستن وپ وینژا یلم وهر یسرتا من وهر زیجو یسلفمغف ولسسرم ولسسرم هیسمن یلمزهرمن یسرتا لدر کلسسرم **» یسفسسرم مسک یلمزهر مرم صوهر لدر و یخوهر **»** مرم ولسسرم یلمزهرن ن ،مقصرمق ولسرا ، وهر [ S نمرممن یلم لایسرم من کسک یلمک زامغفمن لدر کلسسرم **»** رن مرم یسفسسرتا **»** رسکا زامغفمژا لدر ،مقصرممنش رسکا ، لدرآ یلم وپ وهرآ یلم مغمنا رسکا من ملسوهر مقصرمقو زامغمن ملسوهر کلسو یلمزهر لکو هقمفسرم ولسرا ، **»****

یخوهر زامغفمغفمنش ،مقصرمستن زیسرم ملسوهر قو یسرنملمک زامراکلم قو زامغمن مرم یلمزهرن ن یسرم یلمزهرن لایسرم وکلمر یلمزهرن ولسسرم ، وپ وینژا ولسسرم قو یسرنملمک زامراکلم زامغفمغفمنش ،مقصرمستن زیسرم مرم مستلمک زان یلم زامک هق ولسسرن ، یلم زامک یلمزهرملمک یوسمن یلمغو ملسیلمک زامغفمنش ولسسرم زان قو یلمق وهرآ عنکسیررسرن ولسرا ، **»**

یخوهر ملسوهرمغنن ،مقصرمستن یهورا یلمزهر مغمنا رسکا من ملسوهر مقصرمقو زامغمن ملسوهر ولسسرم ، **»** یلمو یلم وپ وهرآ زامغمن یسرفم مغمنا رسکا من ملسوهر مقصرمقو زامغمن ملسوهر ولسرا ، **»** یلمزهرممن زامغفمن هقو یسرفم زامغفمن هیسرتا رسکو عنکسیرلسکو ولسرا ، **»**

**زامغفمنش سرفمستولم زاملمر یلمزهرن هیسرتا یسرفم یلمزهرن مرم یسرن مغلن هسرن هسرتا -**

لدرمغمنن ،مقصرمستن زامغمن مرم یلمزهرن هق زاملمر مرم یلمزهرن یسیر ولسسرم ، مرمم و مغمنا **» زامغوهر یلمزهر مرم یلمزهرن **»** **»** صوهر لدر مرم یلمزهرن **»** زاملمر یلمزهر هق زامغفمنش مرم من یسرفم یلمزهر ملسوهر مقصرمقو ولسرا زامغفمنش ولسرا **»** زاملمر **»** لدر مرم **»** کلسسرتا زاملمر ولسسرم ولسسرن **»** لدرآ لدر وهرآ یلمزهر مقصرمقو ولسرا ، **»****







پاکستان میں نیشنل ایجنسیوں کے قیام کے بارے میں ایک رپورٹ جاری کی ہے۔

اس بارے میں وفاقی کابینہ نے 26 اگست 2018ء کو فیصلہ کیا کہ ایجنسیوں کے قیام کے بارے میں ایک رپورٹ تیار کی جائے اور اسے 8 اگست 2019ء تک پیش کیا جائے۔ اس کے علاوہ ایجنسیوں کے قیام کے بارے میں ایک رپورٹ تیار کی جائے اور اسے 18 اگست 2019ء تک پیش کیا جائے۔

ایجنسیوں کے قیام کے بارے میں وفاقی کابینہ نے 26 اگست 2018ء کو فیصلہ کیا کہ ایجنسیوں کے قیام کے بارے میں ایک رپورٹ تیار کی جائے اور اسے 8 اگست 2019ء تک پیش کیا جائے۔ اس کے علاوہ ایجنسیوں کے قیام کے بارے میں ایک رپورٹ تیار کی جائے اور اسے 18 اگست 2019ء تک پیش کیا جائے۔

### ایجنسیوں کے قیام کے بارے میں وفاقی کابینہ نے فیصلہ کیا ہے

ایجنسیوں کے قیام کے بارے میں وفاقی کابینہ نے 26 اگست 2018ء کو فیصلہ کیا کہ ایجنسیوں کے قیام کے بارے میں ایک رپورٹ تیار کی جائے اور اسے 8 اگست 2019ء تک پیش کیا جائے۔ اس کے علاوہ ایجنسیوں کے قیام کے بارے میں ایک رپورٹ تیار کی جائے اور اسے 18 اگست 2019ء تک پیش کیا جائے۔





















للذئمة فتمتنع به كقولك استمسكت به . . .

يقع بغيره فيتمتنع به كقولك استمسكت به . . .

فتمتنع به كقولك استمسكت به . . .

فتمتنع به كقولك استمسكت به . . .

فتمتنع به كقولك استمسكت به . . .





























## 参考文献

### 日本語文献（発刊年順）

#### (1) 著書

- 國領釜四武郎・製図『大清楽譜』東京・川流齋梓、1880年
- 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典・第八卷』小学館、1967年
- 村上正二訳注『モンゴル秘史—チンギス・カン物語—』全3巻、平凡社、1970～76年
- 岩村忍・藤枝晃編『モンゴル研究文献目録』日本モンゴル学会、1973年
- 大島立子『モンゴルの征服王朝（大東名著選19）』大東出版社、1992年
- 蓮見治雄『チンギス・ハーン伝説—モンゴル口承文芸—』角川書店、1993年
- 吉田順一・賀希格陶克陶・柳澤明・石濱裕美子・井上治・永井匠・岡洋樹訳注『アラン・ハーン伝』風間書房、1998年
- 松村明・山口明穂・和田利政編『国語辞典（第九版）』旺文社、1998年
- 『日漢大辞書』（日本語と漢語双語版）、上海訳文出版社、2002年
- モンゴル研究所編『近現代内モンゴル東部の変容』雄山閣、2007年
- 七海ゆみ子『無形文化遺産とは何か』彩流社、2012年
- 娜仁格日勒『国立民族学博物館調査報告130・梅棹忠夫の内モンゴル調査を検証する』人間文化研究機構国立民族学博物館、2015年
- 岡田英弘『チンギス・ハーンとその子孫』ビジネス社、2016年
- 福田晃・荻原眞子編『英雄叙事詩—アイヌ・日本からユーラシアへ』三弥井書店、2018年

#### (2) 論文

- 田中克彦「リンチン博士のモンゴル伝承研究」、『民族学研究』第27巻3号、1963年
- 田中克彦「モンゴル英雄叙事詩のイデオロギー（特集・アジアの歌謡）」、『朝日アジアレビュー』7(2)、1976年
- ドジョーギーン・ツェデブ著、岡田和行訳「モンゴル口承文芸と書写文学における魔法と前兆について：モンゴル英雄叙事詩と『モンゴル秘史』の関係の問題について」、『東京外国語大学論集』（47）、1993年
- 藤井麻湖「アルタイ賛歌研究—モンゴル英雄叙事詩の語り手からの聞き取りを中心に—」、『言語文化学会論集』（18）、2002年

- 包金剛「内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究—ホールチとホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドー」、東京外国語大学、2003年
- 白利「モンゴル族におけるホーリン・ウリゲルの保護と伝承—阜新モンゴル族自治県を事例として—」、神奈川大学、2016年
- 包宝海「中国内モンゴルにおける集合的記憶—モンゴル民族の英雄ガーダー・メイレンを事例として—」、東京外国語大学、2016年
- 島村一平「ハンガリーにおけるモンゴル研究の始まり：セントカトルナのガーボル・バーリントのカルムイク人およびハルハ人に関するフィールド調査（1871年・1873年）」、『日本モンゴル学会紀要（Bulletin of JAMS）』第47号、2017年
- 巴特爾「東部モンゴル族の説唱芸術胡仁・烏力格爾の動態研究：「科尔沁」地域を中心に」、一橋大学、2017年
- 白利「ホーリン・ウリゲルの保護と伝承：阜新モンゴル族自治県を事例として（特集・民俗音楽の保存と継承）」、『比較民俗研究』第31期、2017年
- 蒙古貞夫（漢名：楊陽）「中国モンゴル族地域における就学前双語教育の研究—蒙古貞地域を事例として—」、創価大学、2017年
- 蒙古貞夫「モンゴル族のホーリンウリゲルの現状と課題」、研究代表者・石井正己『平成30年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書 越境するアジア—戦争・文学・女性—』東京学芸大学、2018年
- 楊陽（モンゴル名：蒙古貞夫）「ホーリンウリゲルの中興の祖と名著『興唐五伝』の作者—エンケテグス（恩赫特古斯）を中心に—」、『東京学芸大学大学院・連合学校教育学研究科・学校教育学研究論集』第40号、2019年
- 蒙古貞夫「ホーリンウリゲルの脚本・興唐五伝に関する一考察」、研究代表者：石井正己『令和元年度広域科学教科教育学研究経費成果報告書 北海道・東北および沖縄・九州を視野に入れた歴史認識の構築と教材開発に関する戦略的研究』東京学芸大学、2020年

## 中国語文献（発刊年順）

### (1) 著書

- 張穆・清代『蒙古遊牧記』蒙藏委員会印刷、1859年
- 段安節『楽府雜録』商務印書館、1936年

- 海西希『蒙古新好来宝芸術』羅馬、1972年
- 內蒙古語文歷史研究所「蒙古族史略」編集組（征求意见稿）『蒙古族史略』內蒙古人民出版社、1973年
- 佚名『欽定元史語解・官職門・第8卷』江蘇書局、1875年
- 宋濂等撰『元史・礼樂志』中華書局、1976年
- 宋濂等撰『元史・礼樂志・第68卷』中華書局、1976年
- 宋濂等撰『元史・礼樂志・第71卷』中華書局、1976年
- 謝・尤・涅克留道夫『蒙古民間叙事詩和民間口頭創作的關係』中国社会科学院少数民族文学研究所編、民族文学訊、1977年
- 志費尼著、何高濟訊、翁独建校正『世界征服者史』內蒙古人民出版社、1980年
- 內蒙古社会科学院文学研究所編『蒙古族文学資料編成集・第七卷・挨拶言葉（內部資料）』內蒙古社会科学院文学研究所、1980年
- 齊木道吉『蒙古族文学簡史』內蒙古人民出版社、1981年
- 楊蔭瀏『中国古代音樂史稿・上冊』人民音樂出版社、1981年
- 呼和浩特史蒙古語文歷史学会編『蒙古史論文撰集』呼和浩特史蒙古語文歷史学会編印、1983年
- 朱風・賈敬顏『漢訳蒙古黄金史綱』內蒙古人民出版社、1985年
- 中国人民政治協商会議・遼寧省阜新市委員会・文史資料研究委員会編『阜新文史資料・少数民族資料撰輯・第一輯（內部發行）』阜新蒙古族自治县機關印刷工場、1986年
- 参布拉諾日布主編・章虹翻訳『蒙古胡尔齐三百人』哲里木盟文学芸術研究所（內部資料）、1989年
- 参布拉諾日布・王欣共著『蒙古族説書芸人小伝』遼瀋書社、1990年
- 項福生主編『阜新蒙古族自治县民族誌』遼寧民族出版社、1991年
- 哲盟文化誌編纂委員会編『哲里木盟文化誌（內部資料）』哲盟文化誌編纂委員会哲盟文化誌編纂委員会、1992年
- 高文德編纂『中国少数民族史大辞典附属資料少数民族歷史上登場的 foreign 人物集』長春・吉林教育出版社、1995年
- 中国音樂文物大系編纂部『中国音樂文物大系・北京卷』大象出版社、1996年
- 拉施特著、余大均・周建奇訳『史集』商務印書館、1997年
- 宋木文・劉杲編纂『中国図書大辞典・第8冊：言語・文学（下部）』湖北人民出版社、

1997 年

土默特左旗「土默特誌」編集委員会編集『土默特誌』內蒙古人民出版社、1997 年

蘇立賢·朱宝珍主編『阜新蒙古族自治縣縣誌』遼寧民族出版社、1998 年

暴風雨主編『蒙古貞史』內蒙古人民出版社、1998 年

佟宝山·李品青主編『阜新蒙古史研究』遼寧民族出版社、1998 年

亨寧·哈士綸著、徐孝祥譯『蒙古人和神』新疆人民出版社、1999 年

李青松·著『胡尔沁說書』遼寧民族出版社、2000 年

仁欽道尔吉『蒙古英雄叙事詩源流』內蒙古大學出版社、2001 年

瀋括『夢溪筆談·第 5 卷』岳麓書社、2002 年

扎拉嘎『比較文学：文学平行本質的比較研究—清代蒙漢文学關係論稿』內蒙古出版社、2003 年

波特奇·高長勝·包文誠共著『科尔沁右翼中旗—享譽全國的烏力格尔之鄉—』遠方出版社、2004 年

常德福·陶志主編『阜新蒙古族自治縣蒙古族教育簡史』遼寧民族出版社、2007 年

楊玉成『胡尔齐：科尔沁地方傳統中的說唱艺人及其音樂』上海音樂學院出版社、2007 年

曉克主編『土默特史』內蒙古教育出版社、2008 年

包恩可·暴風雨·戴瑞山共著『蒙古貞地区言語文化保護發展研究（第一部）』東方財富出版社、2009 年

白音主編『佛寺鎮蒙古族村屯史』中國書籍出版社、2009 年

戴慶夏主編『中国少数民族言語使用現狀及其演變研究』民族出版社、2009 年

王文章主編『非物質文化遺產概論』教育科學出版社、2013 年

武国驥·暴慶五共著『蒙古族史綱』內蒙古教育出版社、2018 年

海春生·李青松共著『興唐五伝研究』遼寧民族出版社、2018 年

## (2) 論文

奎曾「蒙古族民間艺人琵傑的生平与創作」、『中国民族』第 21 期、1964 年

海西希「蒙古本子新故事」、『東方研究』、1972 年

巴雅納「論胡仁烏力格尔的革新趨勢」、『內蒙古日報』第 3 期、1978 年

亦隣真「蒙古族文学家哈斯宝和他的訳著」、『蒙古史論文選集』第 3 輯、1983 年

海龍宝「蒙古貞的〈尹湛納希〉恩赫特古斯」、『阜新文史資料·少数民族資料撰集』

第1輯（內部發刊）、1986年

清格尔泰「匈牙利的阿尔泰学和蒙古学研究」、『蒙古史料和情報』第3期、1986年  
貢布扎布編集、海日罕訳「美国蒙古学研究簡介」、『蒙古学資料和情報』第2期、1988年

道潤梯歩「蒙古族戲劇建設的幾個問題」、『北国影劇』第3—4期（合刊）、1988年  
扎木蘇「倒喇戲—元代蒙古歌舞劇形成—」、『北国影劇』第3—4期（合刊）、1988年  
張虹「現時期蒙古族戲劇的制高点」、『北国影劇』第3—4期（合刊）、1988年  
刑源「論〈科尔沁蒙古劇〉產生的歷史基礎」、『北国影劇』第3—4期（合刊）、1988年

李福清著、陳弘法翻訳「本森烏力格爾的研究」、『民族文学研究』第3期、1989年  
劉文祥「關於蒙古族名著〈興唐五伝〉及其作者的采訪調查（內部資料）」、阜新蒙古族  
自治縣・蒙古語文工作委員會、1990年

海西希「達瓦仁欽胡爾齊的說唱故事的研究」、『蒙古研究』第3期、1991年

納森巴雅爾「英国蒙古学研究簡介」、『蒙古学情報』第4期、1996年

鄂法欄編集、耿昇訳「法国蒙古学研究」、『蒙古学情報』第1期、1998年

秦塔娜・特塔日巴「關於旧蒙古說書的起源及其他」、『民族文学研究』第2期、1999年

柯沁夫「胡琴源流辨析」、『內蒙古大學學報』第31卷・第6期、1999年

南相互編集、瞿大風訳「近幾十年來韓國學者的蒙古学研究成果索引」、『蒙古学情  
報』第3期、2000年

崔起鎬編集、朴永光訳「韓國的蒙古学研究概要」、『蒙古学情報』第2期、2000年

成百仁編集、穆仁訳「韓國的蒙古語研究」、『蒙古学情報』第3期、2001年

朝克圖・趙玉華「国外學者對胡仁・烏力格爾的研究概況」、『中央民族大學學報（哲  
学社会科学版）』第30卷・第1期、2003年

朝克圖「国内學者對胡仁烏力格爾的研究狀況」、『黑龍江民族總刊』第5期、2003年

王志清「蒙古貞地區胡爾沁說書藝人生存現狀調查」、『民間文化論壇』第2期、2006年

劉新和「蒙古劇」、『中華藝術論叢』第9輯、2009年

白玉榮「〈羌胡伝〉与前〈四伝〉關係再論」、『內蒙古民族大學學報（社会科学  
版）』第37卷・第3期、2011年

蒙古貞夫（漢名：楊陽）「蒙古族幼稚園課程設置的研究—以蒙古族傳統文化的選取為  
中心—」、遼寧師範大學、2012年



- 齊艷艷「蒙古貞傳統音樂及其敘事民歌研究」、內蒙古師範大學、2012年
- 全福「胡仁烏力格爾研究述評」、《內蒙古大學學報（哲學社會科學版）》第45卷第4期、2013年
- 楊山丹「試述魯北說書館」、《大眾文芸》第16期、2014年
- 張勁盛「試論蒙古族潮爾類樂器的文化涵與特征—樂器樂視域下對蒙古族弓弦樂器分類的再思考—」、《內蒙古藝術》第1期、2014年
- 伊日貴·陳永春「蒙古族本子故事〈全家福〉的漢文化影響考述」、《民族論壇》第9期、2015年
- 雷沙其拉·陳永春「〈殤妖傳〉的歷史敘事藝術」、《藝術科學》第8期、2015年
- 陸雯「蒙郭勒津地區胡仁·烏力格爾研究」、瀋陽音樂學院、2015年
- 文風·陳永春「論〈苦喜傳〉敘事特點」、《內蒙古民族大學學報（社會科學版）》第41卷第1期、2015年
- 白玉榮「蒙古本子故事『五傳』寫作文化背景」、《內蒙古民族大學學報（社會科學版）》第43卷第2期、2017年
- 海日罕·陳永春「比較文學視域下的〈契僻傳〉與〈說唐全傳〉」、《藝術科學》第12期、2017年
- 蒙古貞夫「淺評胡爾沁說書藝術家丹森尼瑪」、《喜劇世界》2020年1月下（總第631期）、2020年
- 蒙古貞夫「淺論胡仁烏力格爾傳承方式演變」、《文化創新比較研究》第4卷第22期、2020年

### (3) 法律

- 中國非物質文化遺產網·中國非物質文化遺產數字博物館主頁
- 阜新蒙古族自治縣蒙古語文工作條例委員會·編纂「阜新蒙古族自治縣蒙古語文工作條例（內部資料）」、1989年
- 中國憲法「中華人民共和國憲法」、全國人民代表大會常務委員會公報、2004年
- 中國文化部「中國非物質文化遺產法」、2011年
- 阜新蒙古族人民代表大會委員會編纂「阜新蒙古族自治縣蒙古族教育條例（內部資料）」、2006年
- 習近平「在文芸工作座談會上的講話」、新華社、2014年
- 遼寧省人民代表大會常務委員會首頁「遼寧省非物質文化遺產條例」、遼寧省第12回人





1999 年

- 4. 58 • 1999-10-20 日蒙古国政府の「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年10月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年10月20日)
- 9. 9 • 99年10月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年10月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年10月20日)
- 10. 10 • 10月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年10月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年10月20日)
- 11. 11 • 11月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年11月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年11月20日)
- 12. 12 • 12月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年12月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年12月20日)
- 13. 13 • 13月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年13月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年13月20日)
- 14. 14 • 14月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年14月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年14月20日)
- 15. 15 • 15月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年15月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年15月20日)
- 16. 16 • 16月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年16月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年16月20日)
- 17. 17 • 17月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年17月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年17月20日)
- 18. 18 • 18月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年18月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年18月20日)
- 19. 19 • 19月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年19月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年19月20日)
- 20. 20 • 20月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年20月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年20月20日)
- 21. 21 • 21月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年21月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年21月20日)
- 22. 22 • 22月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年22月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年22月20日)
- 23. 23 • 23月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年23月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年23月20日)
- 24. 24 • 24月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年24月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年24月20日)
- 25. 25 • 25月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年25月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年25月20日)
- 26. 26 • 26月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年26月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年26月20日)
- 27. 27 • 27月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年27月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年27月20日)
- 28. 28 • 28月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年28月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年28月20日)
- 29. 29 • 29月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年29月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年29月20日)
- 30. 30 • 30月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年30月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年30月20日)
- 31. 31 • 31月20日「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年31月20日) による
- 「*蒙古国に於ける国家の統一と発展の道*」(蒙古国政府編、1999年31月20日)

### その他言語の文献

STUDIA MONGOLICA INSTITUTI LINGUAE ET LITTERARUM COMITETI SCIENTIARUM ET E-DUCATIONIS ALTAE  
REIPUBLICAE POPULI MONGOLI ЖАНП дeнгсeн-u-uliger в Мoнтoл бc oмфoл б к л o  
р e Ринчeн (у л aн б aт oр)